（財）八尾市文化財調査研究会報告124

高安古墳群　薗光寺跡

発掘調査報告書

－府営農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業（八尾地区）に伴う発掘調査－

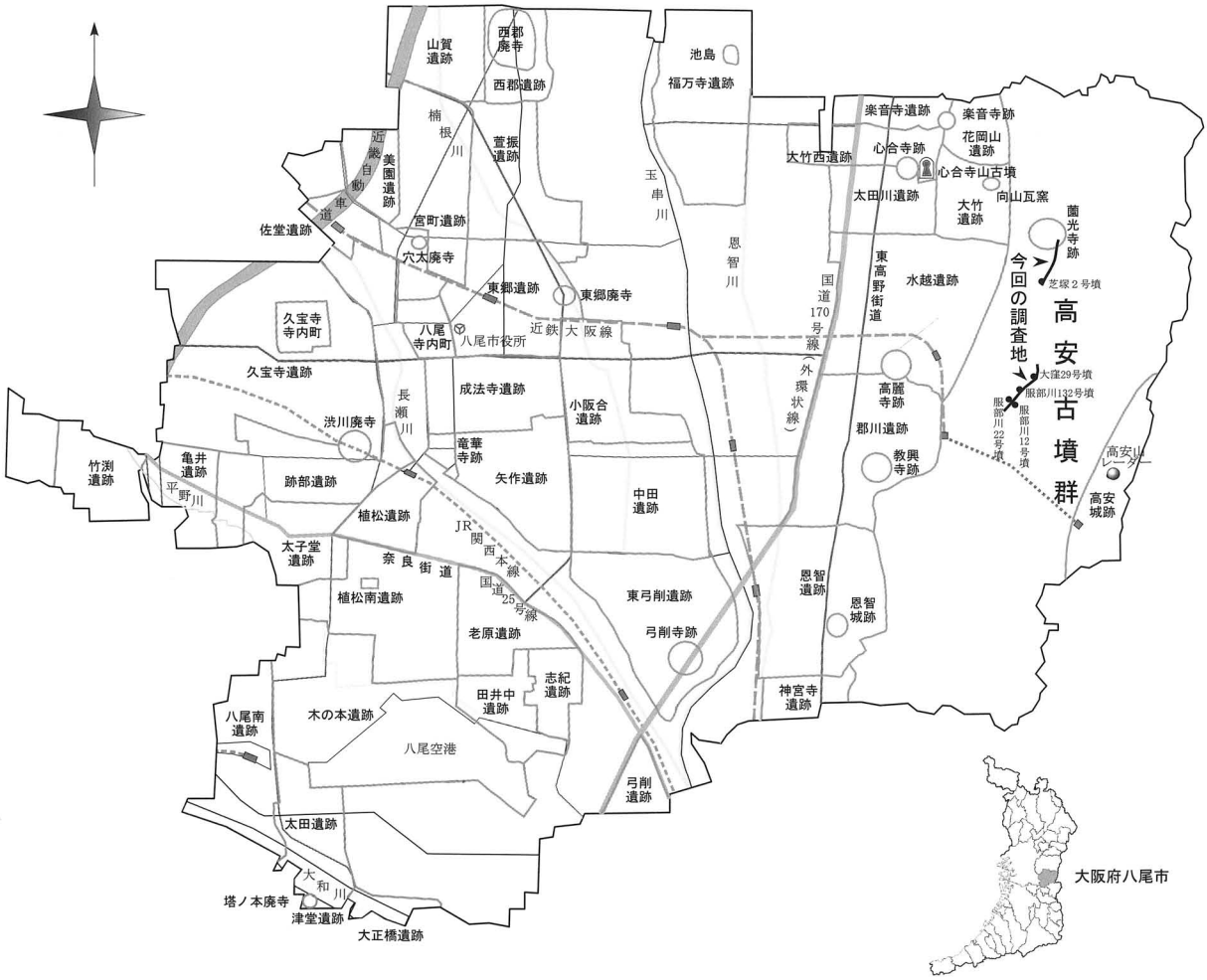
２００９年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

高安古墳群　菌光寺跡

発掘調査報告書

－府営農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業(八尾地区)に伴う発掘調査－



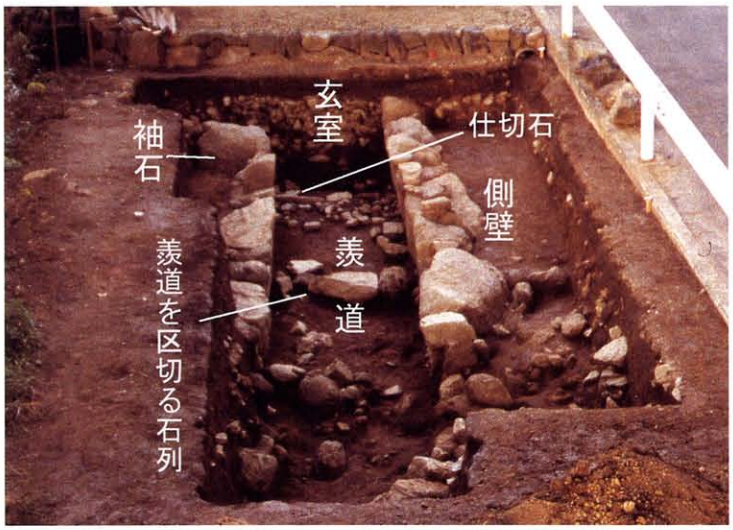
２００９年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

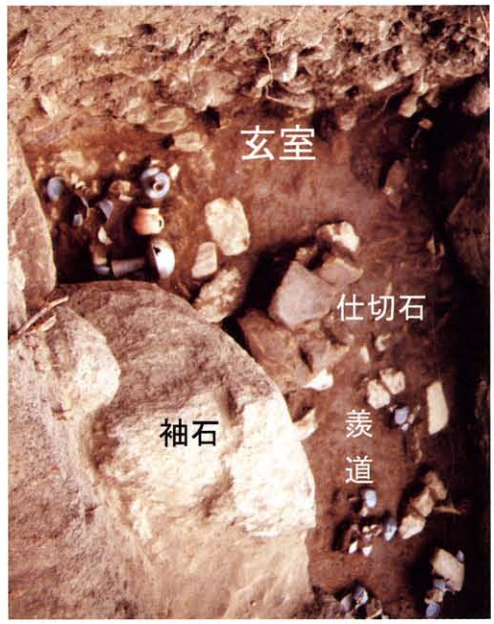
昭和23（1948）年頃の高安古墳群付近の航空写真と今回調査した主な古墳（赤丸）の位置

新発見の古墳　その１（芝塚２号墳）

―石列で区切られた羨道部（石室の通路）を確認。羨道部に追葬か？―



芝塚２号墳石室（南西から）



玄室の袖石付近から羨道部にかけての遺物出土状況（南から）

芝塚古墳（昭和63年度発掘）の南方約100mの地点で、今回新たに確認された横穴式石室（古墳）です。玄室（遺体を安置する部屋）の一部と羨道部（玄室への通路）を発掘しました。石室全体の規模は不明ですが、南西方向に入口があります。最初の埋葬は出土した土器などから６世紀後半頃と思われます。

なお、玄門（玄室と羨道の境）から1.5mほどのところに、羨道を区画するような石列があり、付近から耳環や大刀の鍔などが見つかりました。おそらく羨道部に追葬された棺があったと考えられます。高安古墳群の追葬方法を知る貴重な成果です。（本文35頁）

芝塚２号墳の主な遺物の出土地点

新発見の古墳　その２（服部川132号墳）

―６世紀後半頃の横穴式石室を新たに確認―

石室を確認している状況（西南から）

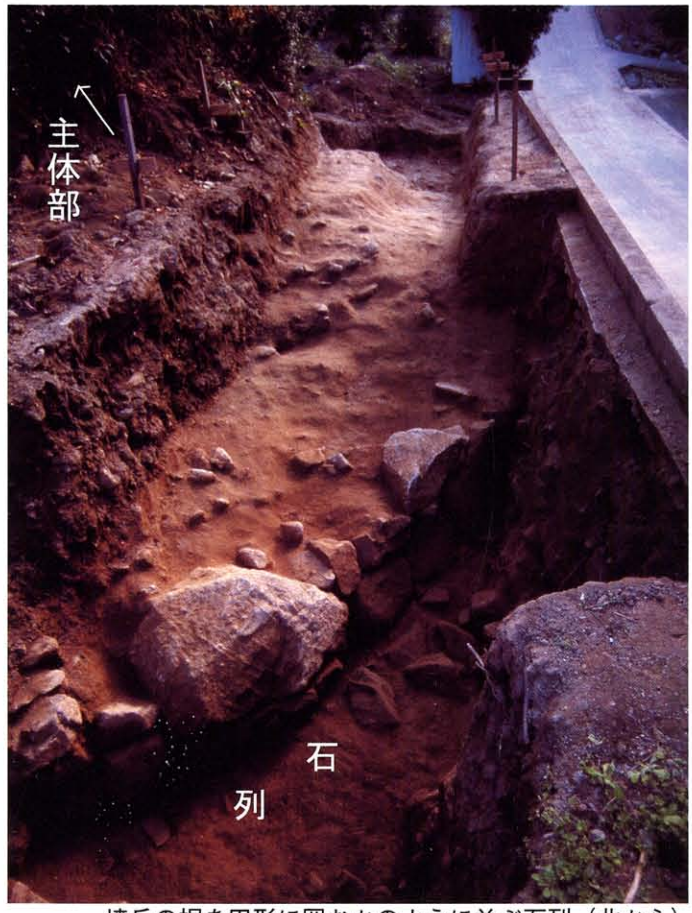
墳丘や石室の上部はすでに消滅していましたが、奥壁や側壁の最下段の石などを残す横穴式石室を確認しました。新たに発見された古墳で、服部川132号墳と名付けました。

石室の大きさは、玄室幅が約1.6m、玄室と羨道を合わせた全長が約９ｍです。西側に入口があるようですが、石室や古墳全体の規模は不明です。（本文75頁）

墳丘を廻るような石列を確認!!（服部川12号墳）

―墳丘外周の外護列石か？―

服部川12号墳の墳丘の裾部にあたる付近での調査で、ちょうど周囲を廻るかのような石列を確認しました。石室中央部から、10m程の位置です。墳丘の盛土の崩れるのを防ぐために据えられた列石と考えると、おそらく一番外側にあたる外護列石と思われます。高安古墳群の発掘調査で、このような墳丘部の構築方法の手がかりを得たのは、今回の調査が初めてとなります。（本文90頁）



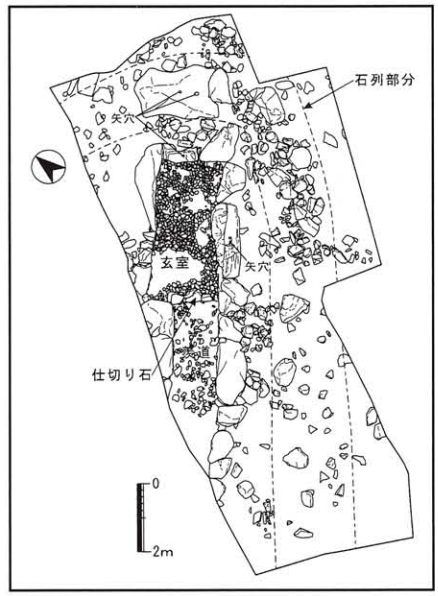
墳丘の裾を円形に囲むかのように並ぶ石列（北から）

大窪（おおくぼ）29号墳

―埋没していた横穴式石室を発掘。石室を取り囲むような石列も確認―

検出した横穴式石室（南西から）

石室を囲むような石列（南西から）



石室と石列の平面図

南西に入口を持つ横穴式石室です。玄室の長さは4.6m、幅2.3m、右片袖式で玄門付近には大きな仕切り石が設置されています。羨道は、発掘した部分で5.5m、幅は1.4mでした。高安古墳群の中では平均的な大きさといえます。玄室も羨道にも床面には小さな石が敷き詰められています。盗掘を受けていましたが、須恵器などの出土遺物から、６世紀後半頃の築造と考えられます。

なお東側と北側では、石室を取り囲むような石列（幅２m程）を確認しました。全体的に廻るかなど詳しくは不明ですが、高安古墳群の墳丘構築技法を考える上で、貴重な発掘事例となりました。（本文49頁）

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中央部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えてきた地域であり、現在でも先人の残した貴重な文化遺産が数多く残されています。

高安古墳群は市の東部、生駒山地の一角を形成する高安山の西麓に所在し、横穴式石室を持つ古墳が群集することで世界的にも知られている古墳群です(八尾市教育委員会2008年『高安古墳群の基礎的研究』では304基)。一部５世紀にさかのぼるものもありますが、主に６世紀から７世紀にかけて造られた後期古墳が中心で、その後、次第に墓としての機能を失い、すでに平安時代には盗掘を受け、安土桃山時代、豊臣秀吉の大坂城築城では、当地の石室の石材が採取されたことが記録に残っています。また江戸時代後期の『河内名所図会』には「大古の窟」(石室)から「神代よりの品物」を探す乱掘の様子が描かれているなど、時代を経て多くの古墳や遺物が消滅、あるいは改変したと思われます。

明治時代になると学術的な調査が始まり、ウィリアム・ゴーランド、エドワード・モースなどの外国人技師（研究者）が、「日本のドルメン」などと欧米の学会で紹介するとともに、国内でも1888年に当時の考古学会を代表する『東京人類学会雑誌』で取り上げられました。以後、日本の横穴式石室を持つ古墳の研究は、この古墳群を基礎に進められ、貴重な古墳群として位置づけられています。

今回の発掘調査は、高安古墳群の古墳が多く分布する丘陵中腹を南北に通過する農道の敷設に伴うものです。新たな古墳の検出（芝塚２号墳、服部川132号墳）をはじめ、周知の古墳においても羨道部に追葬したような痕跡や、石室や墳丘構築の際にかかわると思われる列石、石積を確認するなど、これまでの調査では得られていなかった貴重なデータや成果を上げることができました。

また、高安古墳群に含まれる薗光寺跡の調査では、中世から近世にかけての遺構を確認しました。薗光寺は玉祖神社の神宮寺として平安時代から江戸時代にかけて現境内付近に所在し、重要文化財に指定されている「北条時政制札」は、薗光寺に対して出されたものであり、中世には地域の有力な寺院でした。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成21年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　岩　﨑　健　二

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市神立・山畑・大窪・服部川地内で行った、府営農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業(八尾地区)に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する高安古墳群・薗光寺跡の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、大阪府中部農と緑の総合事務所から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成16年６月28日～平成19年２月28日の間、４期にわたって実施した。調査担当は成海佳子である。さらに現地調査終了後、２期にわたって遺物整理・報告書作成にかかる整理作業を行った。整理作業については、尾崎良史の協力を得た。各調査の詳細は以下のとおりである。

調査Ⅰ：高安古墳群・薗光寺跡第１次調査(略号　T2004－ＯN－1)

調査期間　平成16年６月28日～平成17年３月25日(実働131日間)

調査面積　約960㎡　　調査区名　１～10・14区

調査参加者　飯塚直世・市森千恵子・岩本順子・川上裕子・河南智美・國津れい子・古根川史代・鈴木裕治・曹　龍・張　益芬・都築聡子・徳谷尚子・細谷利美・横山妙子・實樹婦美子・村井厚三

調査Ⅱ：高安古墳群第２次調査(略号　T2005－２)

現地調査　平成17年７月25日～平成18年１月31日（実働75日間)

調査面積　約389㎡

調査区名　11～13区・14区

調査参加者　青山　洋・飯塚・市森・垣内洋平・河南・北原清子・岸本栄子・國津・黒田幸代・曹・芝崎和美・鈴木・徳谷・中澤聡司・西口佳奈・西森忠幸・實樹・村井(厚)・村井俊子・村田知子・若林久美子

調査Ⅲ：高安古墳群第５次調査(略号　T2005－５)

現地調査　平成17年12月27日～平成18年３月24日（実働56日間)

調査面積　約161㎡

調査区名　11～13区・14区

調査参加者　市森・垣内・河南・國津・芝崎・鈴木・曹・徳谷・村井(厚)・村田

調査Ⅳ：高安古墳群第６次調査(略号　T2006－６)

現地調査　平成18年７月11日～平成19年２月28日（実働77日間)

調査面積　約410㎡

調査区名　11～13区・14区

調査参加者　青山・飯塚・池田利明・池崎綾乃・市森・河南・國津・芝崎・鈴木・関野佑城・鷹羽侑太・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中尾優司・西口・橋本黄士・藤井孝則・細谷・村井(厚)

整理Ⅰ：平成19年８月１日～平成20年３月７日(実働140日)
作業内容　遺物整理・遺物実測・遺物保存処理等
整理Ⅱ：平成20年９月４日～平成21年３月25日(実働79日)
作業内容　図面レイアウト・トレース、遺物写真撮影・レイアウト等

1．本書作成にあたっては、遺物実測－飯塚・市森・岩沢玲子・加藤邦枝・北原・國津・鈴木・徳谷・中村百合・細谷・村井(厚)・村井(俊)・村田・若林・山内千恵子、トレース－成海・徳谷・山内、遺物写真撮影・レイアウト－尾崎・北原、本文執筆・全体の構成－成海がおこなった。
1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともにカラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。
1．調査中、地元の方々から多大なご協力を得た。ここに記して感謝の意に代えさせていただきます。

凡　　例

1．本書掲載の地図は大阪府八尾市発行の2500分の１地形図(平成８年７月発行)を使用した。
1．本書掲載の服部川12・22号墳石室平面図は『高安古墳群調査実測図』(1970　大阪府教育委員会発行)を元に作成した。
1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.値)である。
1．本書で用いた方位は国土座標第Ⅵ系(世界測地系)の座標北を示している。
1．土色については『新版標準土色帖』1966　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．遺物実測図の断面は、須恵器・陶磁器を黒、その他は白とした。

目　　次

巻頭図版Ⅰ
巻頭図版Ⅱ
巻頭図版Ⅲ
巻頭図版Ⅳ
はしがき
例言
凡例
第１章　はじめに……1
　第１節　位置と環境……1
　第２節　高安古墳群の研究史……2
第２章　調査概要……4
　第１節　調査経過……4
　第２節　各調査区の概要……8
第３章　まとめ……98
　第１節　薗光寺跡について……98
　第２節　高安古墳群について……99
　第３節　芝塚２号墳出土の石製鋿帯の石材　（奥田 尚）……103
　第４節　大窪29号墳の石材　（奥田 尚）……103

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図(神立地区)……5
第２図　調査地周辺図(大窪・山畑・服部川地区地区)……6
第３図　１区土坑0101・0102・0104・0105出土遺物実測図……8
第４図　１区土坑0110出土遺物実測図……9
第５図　１区土坑0111出土遺物実測図－１……10
第６図　１区土坑0111出土遺物実測図－２……11
第７図　１区土坑0112出土遺物実測図……12
第８図　１区井戸0101・土坑0113・落込み0103出土遺物実測図……14
第９図　１区瓦溜り出土遺物実測図－１……15
第10図　１区瓦溜り出土遺物実測図－２……16
第11図　１区方形盛土・溝0101出土遺物実測図……17
第12図　１区落込み0101出土遺物実測図……18
第13図　１区落込み0102出土遺物実測図……19
第14図　１区４・８層遺物実測図……19
第15図　１区平面図……21
第16図　１区断面図……22
第17図　２区遺構断面図……23
第18図　２区平断面図……24
第19図　２区出土遺物実測図……25
第20図　３区出土遺物実測図……26
第21図　４区出土遺物実測図……26
第22図　３区平断面図……27
第23図　２～５区位置図・４区平断面図……28
第24図　５区出土遺物実測図……28
第25図　５区平断面図……29
第26図　６・７区出土遺物実測図……30
第27図　６・７区平面図……31
第28図　６・７区断面図……32
第29図　芝塚古墳墳丘復元図……33
第30図　８・９区位置図・平断面図……34
第31図　10区位置図……35
第32図　10区断面図……36
第33図　10区芝塚２号墳石室床面平面図・立面図……37
第34図　10区平面図……38
第35図　10区出土遺物実測図－１……39

第36図　10区出土遺物実測図－２……40
第37図　10区出土遺物実測図－３……41
第38図　10区出土遺物実測図－４……42
第39図　10区出土遺物実測図－５……42
第40図　10区出土遺物実測図－６……42
第41図　11区出土遺物実測図……45
第42図　12・13区断面図……45
第43図　11～13区周辺地形測量図……46
第44図　11区平断面図……47
第45図　14区出土遺物実測図……48
第46図　14～16区周辺地形測量図……49
第47図　14～16区断面図……50
第48図　16区大窪29号墳遺物出土状況平断面図……51
第49図　16区出土遺物実測図－１……52
第50図　16区出土遺物実測図－２……53
第51図　16区出土遺物実測図－３……54
第52図　16区出土遺物実測図－４……55
第53図　16区出土遺物実測図－５……56
第54図　16区出土遺物実測図－６……57
第55図　16区出土遺物実測図－７……58
第56図　16区平断面図……59
第57図　16区大窪29号墳石室床面平面図・立面図……60
第58図　17区断面図……64
第59図　18区出土遺物実測図－１……64
第60図　17～19区周辺地形測量図……65
第61図　18・19区平断面図……66
第62図　18区遺物出土状況平断面図……67
第63図　18区出土遺物実測図－２……68
第64図　20区断面図……69
第65図　20区周辺地形測量図……69
第66図　21区出土遺物実測図……70
第67図　21・22区周辺地形測量図……70
第68図　21・22区平断面図……71
第69図　23～25区周辺地形測量図……72
第70図　23・24区断面図……73
第71図　23～25区平面図……74
第72図　23区出土遺物実測図……75
第73図　25区服部川132号墳平面図……76

第74図　25区服部川132号墳石室断面図……77
第75図　25区断面図(拡張前)……78
第76図　25区服部川132号墳石室床面平面図・立面図……78
第77図　25区出土遺物実測図-1……79
第78図　25区服部川132号墳遺物出土状況平断面図……79
第79図　25区出土遺物実測図-2……80
第80図　26区方形土坑平断面図……83
第81図　26・27区周辺地形測量図……83
第82図　26・27区断面図……84
第83図　26区出土遺物実測図……85
第84図　26・27区墳丘復元図……85
第85図　28～30区断面図……86
第86図　28区服部川22号墳墳丘平断面図・石室平面図……87
第87図　28～36区周辺地形測量図……88
第88図　32区出土遺物実測図……89
第89図　31～34区断面図……90
第90図　31～35区服部川12号墳列石平面図・立面図・石室平面図……91
第91図　36・37区断面図……93
第92図　38区出土遺物実測図……94
第93図　38・39区断面図……94
第94図　37～42区周辺地形測量図……95
第95図　40・41区断面図……96
第96図　42区断面図……97
第97図　『河内名所図会』に描かれた玉祖神社……98
第98図　16区大窪29号墳石棺材実測図……102
第99図　大窪29号墳に使用されている石材の石種……106

表　目　次

第１表　近年の発掘調査一覧表……2
第２表　調査区一覧表……4
第３表　１区検出遺構一覧表……20
第４表　10区芝塚２号墳出土遺物一覧表(土器)……43
第５表　10区芝塚２号墳出土遺物一覧表(金属製品ほか)……44
第６表　16区大窪29号墳出土遺物一覧表(土器)……61
第７表　16区大窪29号墳出土遺物一覧表(金属製品)……61

第８表　18区出土遺物一覧表(土器)……67
第９表　18区出土遺物一覧表(金属製品)……67
第10表　25区服部川132号墳出土遺物一覧表(土器)……82
第11表　25区服部川132号墳出土遺物一覧表(金属製品)……82
第12表　16区大窪29号墳出土石棺材一覧表……100
第13表　16区大窪29号墳の石材の石種と粒径……104
第14表　滑石製紡錘車出土地一覧表……107
第15表　銙帯出土地一覧表……108
第16表　列石検出古墳一覧表(弥生墳墓含む)……109

図　版　目　次

図版一　神立地区(１～10区)周辺上空写真
図版二　１区全景上空写真（上が北）
図版三　１区Ⅰ全景(南から)　１区Ⅰ全景(北から)　１区Ⅰ落込み0102周辺(北東から)
１区Ⅱ全景(北から)　１区Ⅱ南部(東から)　１区Ⅱ井戸0101周辺(西から)
１区Ⅲ全景(南から)　１区Ⅲ全景(東から)
図版四　２～４区全景上空写真（上が北）
図版五　２区Ⅰ全景(南から)　２区Ⅱ全景(南東から)　２区Ⅲ全景(北東から)
３区Ⅰ調査風景(南から)　３区Ⅱ全景(北から)　３区Ⅲ全景(南から)
３区Ⅳ全景(北から)　４区全景(南から)
図版六　６・７区全景上空写真（上が北）
図版七　５区１面溝5101(西から)　５区２面全景(南から)
６区全景(南から)　６区溝0601－芝塚古墳周溝？(北西から)
７区全景(南から)　７区北端石の集積(北から)
８区全景(南から)　９区全景(北東から)
図版八　10区上空写真１　芝塚２号墳遺物出土時(上が北)
図版九　10区上空写真２　芝塚２号墳床面検出時(上が北)
図版一〇　10区上空写真３　芝塚２号墳側石掘形検出時(上が北)
図版一一　芝塚２号墳石室(北から)　同床面(北から)　同完掘(北から)
同東側壁掘形検出状況(北から)
図版一二　羨道内遺物出土状況(東から)　同上耳環出土状況(東から)
玄室内遺物出土状況(北から)
図版一三　羨道南部床面(東から)　羨道中央部床面(東から)　羨道北部・玄室床面(東から)
図版一四　11～22区周辺上空写真(上が北)
図版一五　11区全景(南から)　12区全景(南から)　13区全景(北から)

図版一六　14区上空写真(上が北)
14区炭焼窯検出状況(上が北)　同(南東から)　同内部煙出し(南から)
図版一七　16区拡張前全景(南から)　同(北から)　同大窪29号墳全景(北から)
図版一八　16区大窪29号墳全景(南から)
図版一九　大窪29号墳羨道南部(西から)　同北部(西から)　同玄室(西から)
図版二〇　16区拡張前東側壁検出状況(南から)　16区拡張時西側壁検出状況(東から)
矢穴１(奥壁)　矢穴２(東側壁奥から１石め)　矢穴３(東側壁奥から２石め)　矢穴４(奥壁北側)　現地説明会１　現地説明会２
図版二一　18区全景(北から)　同全景(南から)　金属器検出時(南から)　同出土状況(西から)
図版二二　19区全景(南から)　同北東隅墳丘上の高まり(南西から)
17区全景(南から)　20区全景(北から)
図版二三　21区３層上面(北から)　同５層上面(南から)
22区３層上面(北から)　同５層上面(南から)
図版二四　23区～42区周辺上空写真(上が北)
図版二五　23区上空写真(左が北)　23区近現代の水溜め(西から)　同近世～現代の井戸・水溜め・落込み(北から)　24区全景(東から)　同全景(西から)
図版二六　23区東端 服部川132号墳東周溝・墳丘(東から)　同東部墳丘(西から)　同中央部西周溝(西から)
図版二七　25区服部川132号墳奥壁検出時(北から)　同平面プラン検出(東から)
同西周溝付近(南から)　同玄門付近盗掘坑掘削(西から)　同拡張前全景(西から)
図版二八　25区北部拡張後服部川132号墳北側壁検出時(西から)　同平面実測(西から)
同西部拡張後服部川132号墳西周溝検出状況(東から)　同西周溝(南から)
同拡張後全景(西から)
図版二九　26区調査前の状況(南から)　同北半調査風景(南から)　同南半方形土坑掘削(北から)
同南半方形土坑完掘(西から)　同北半全景(南から)　同南半全景(北から)
図版三〇　26区北半東壁　同南半東壁　27区西壁　同西壁２　27区全景(北東から)
図版三一　服部川12号・22号墳(28～38区)周辺(南から)　22号墳(南東から)
同上開口部(南から)　28区服部川22号墳墳丘内石列検出状況(東から)
図版三二　28区服部川22号墳墳丘細部石室外側(南から)　同墳丘斜面(南から)　同裾部(南から)
図版三三　28区人力掘削(東から)　同平面実測(西から)
29区人力掘削(南から)　29区全景(南から)
30区機械掘削(北から)　30区全景(北から)
図版三四　服部川12号墳(南から)　同開口部(南から)
31区人力掘削(北から)　同全景(南から)
32区全景 12号墳(墳頂－東から)　同左全景 12号墳(裾－西から)
図版三五　33区壁面実測(南から)　33区全景(南東から)
34区人力掘削(北から)　34区全景(南から)
35区北部人力掘削(南から)　同南部人力掘削(南から)　同北部石列検出時(北東から)

同石列精査(北西から)
図版三六　35区拡張前北部全景(北から)　同南部(南から)
図版三七　35区拡張後北部全景(北から)　同南部(南から)
図版三八　35区北部石列検出状況(南西から)　同(北から)　同南部石列(南から)
図版三九　36区人力掘削(南から)　同上全景(南から)
37区人力掘削(東から)　同上全景(南から)
38区全景(南から)　39区全景(東から)
図版四〇　39区人力掘削(東から)　39区平面実測(東から)
40区人力掘削(西から)　40区全景(南から)
41区面全景(東から)　42区全景(南から)
図版四一　１区土坑0111、瓦溜り出土遺物
図版四二　１区溝0101、方形盛土、整地層、10区芝塚２号墳出土遺物
図版四三　10区芝塚２号墳出土遺物
図版四四　10区芝塚２号墳出土遺物
図版四五　10区芝塚２号墳出土遺物
図版四六　10区芝塚２号墳出土遺物
図版四七　10区芝塚２号墳出土遺物
図版四八　10区芝塚２号墳出土遺物
図版四九　10区芝塚２号墳、11区、16区大窪29号墳出土遺物
図版五〇　16区大窪29号墳出土遺物
図版五一　16区大窪29号墳出土遺物
図版五二　16区大窪29号墳出土遺物
図版五三　16区大窪29号墳出土遺物
図版五四　18区出土遺物
図版五五　25区服部川132号墳出土遺物
図版五六　25区服部川132号墳、27区出土遺物
図版五七　16区大窪29号墳石棺材－１
図版五八　16区大窪29号墳石棺材－２

第１章　はじめに

第１節　位置と環境

高安古墳群(高安千塚)は、おもに古墳時代中期後半～末期にかけて、大阪府八尾市東部の生駒山地西麓一帯に造られた横穴式石室を主体部に持つ群集墳の総称である。同様の条件で、東大阪市や柏原市にも同時代の群集墳がある。高安古墳群の古墳の総数は、大正12(1923)年の調査では640基、昭和47(1972)～48(1973)年の調査ではでは324基、平成２(1990)年の調査では185基が確認されており、八尾市教育委員会(以下八尾市教委と略す)の平成16(2004)年度以降の分布調査によって、現在約300基程度が確認されている。

今回報告する調査地は、この高安古墳群のうち、北から神立・大窪・山畑・服部川地区に位置している。いずれの地区も東から西へ下がる斜面にあたり、何本もの尾根が東から西へとのび、その尾根に沿って古墳が造営されている。調査地は、北の神立地区と南の大窪・山畑・服部川地区に二分される。

北の神立地区には、玉祖神社周辺に『薗光寺跡』が位置している。薗光寺は、玉祖神社の神宮寺で、感応山竹之坊と号し、承和３(836)年の建立と伝えられ、本尊に千手観音をまつり、明治時代の廃仏毀釈までその一部が存在していたとされている。享和元(1801)年刊行の『河内名所図会』には、玉祖神社石段の南側の平坦地に江戸時代の寺の様子が描かれている。清原得巖氏の採集資料には、平安時代・鎌倉時代・江戸時代の瓦が見られる。神立地区の緩斜面は開墾が進んでおり、花畑や植木畑を主とした耕地(段畑)や溜池などが数多く見られ、山手の農地のところどころに古墳が点在している。昭和63(1988)年度には、神立二丁目の農道敷設工事に伴う発掘調査によって、芝塚古墳が発見されている。芝塚古墳付近の旧状は、巨石が露頭しており、東から西へ伸びる尾根状の痕跡が残っていた。今回の調査では、神立地区北部では薗光寺に関連する調査を、神立地区南部～服部川地区にかけては、古墳群に関連する調査を目的とした。そのため、神立地区南部～服部川地区では、尾根状の高まりが見られる地点に調査区を設定している。

一方、南の大窪・山畑・服部川地区は高安古墳群のなかでも古墳の最も密集する地域で、南へ下るにつれ、量を増すようである。生駒山地の地形は、北から南へ低くなるが、斜面は急峻となり、谷は狭くなる。そのため神立地区よりも開発が進まなかったのか、大窪・山畑・服部川地区の景観は、旧地形をよく残しており、東方からのびる尾根上に、古墳の墳丘が連続して遺存している。この地域には、植木畑・寺院・墓地などが多く、古墳が保存されている寺院や墓地も多い。

大窪・山畑地区では、来迎寺墓地内に『抜塚(大窪７号墳)』ほか大窪６・８号墳がある。その南部の尾根上にも古墳が連なっており、８基の古墳(大窪11～18号墳)が保存されている私有地もある。その南、山畑川(服部川)から松尾谷までが服部川地区となるが、何本もの尾根の上に、隙間なく古墳が連なり、『群集墳』という名称どおりである。古墳は、植木畑や寺院・墓地・山中にあり、服部川地区の最南端を占める神光寺境内や墓地にも、多くの古墳が保存されている。

第２節　高安古墳群の研究史

高安古墳群で初めて近代考古学による学術調査を行ったのは、明治12(1879)年、アメリカ人博物学者モースである。また、明治５(1872)～21(1888)年に日本に滞在したイギリス人化学技師ゴーランドも古墳に興味を持ち、帰国後論文を発表している。また、坪井正五郎博士によって紹介された「ドルメン」、明治後半から昭和初期にかけては、開墾に伴って発見された古墳などもあり、清原得巖氏による踏査・収集が行われている。その後、昭和36(1961)年には、八尾市教育委員会（以下八尾市教委）の『古文化財台帳』作成作業の一環として、沢井浩三氏による分布調査が行なわれ、昭和37(1962)年には白石太一郎氏、昭和40・41(1965・66)年には大阪府教育委員会(以下大阪府教委)、昭和52(1977)年には中田遺跡調査会学生有志による調査が行われている。以後、大阪府教委、八尾市教委、高安城を探る会、個人研究者などによって継続した調査研究が進められている。

高安古墳群の造営は、おおむね古墳時代中期後半から開始され、後期後半にピークを迎え、末期後半には終息する。追葬は７世紀代まで行われているのが一般的であるが、まれに８世紀ころまでの追葬も見られる。墳丘の規模は、径10～30m、高さ３～５m程度、石室の規模は、全長10～15m程度である。周辺では、郡川遺跡(黒谷地区)で高安古墳群の造営時期に一致する遺構・遺物が見られる。

高安古墳群での近年のおもな発掘調査は第１表のようになる。このうち、大石古墳・芝塚古墳・芝塚２号墳・大窪29号墳・黒谷10号墳・服部川132号墳は、(財)八尾市文化財調査研究会(以下当研究会)が実施した発掘調査によってあらたに発見されたもので、芝塚２号墳・大窪29号墳・服部川132号墳・服部川12号墳・服部川22号墳が今回報告する古墳である。

第１表　近年の発掘調査一覧表

調査年度	所在地	名称	築造時期	文献番号
昭和42(1967)	神立	愛宕塚古墳	６世紀中頃か	１・２
昭和55(1980)	高安山頂	高安山１・２号墳	７世紀中頃	３
昭和58(1983)	郡川〈法蔵寺境内〉	郡川２・３・３－Ｂ号墳	７世紀	４
昭和60(1985)	垣内	垣内１号墳 垣内２号墳 垣内３号墳	６世紀末 ７世紀後半 ７世紀前半	５
昭和63(1988)	神立	神立７号墳【芝塚古墳】	６世紀後半	６・７
平成２(1990)	楽音寺	大石古墳	６世紀後半	８
	大窪（日宝寺境内）	大窪１～４号墳	６世紀末～７世紀初頭	９
平成４(1992)	黒谷〈妙見寺境内〉	黒谷６・７号墳	６世紀後半	10
平成５(1993)	山畑	大窪・山畑18号墳	７世紀前半～中葉	11
平成８(1996)	垣内	垣内５号墳		12
	郡川	郡川28号墳		13
平成13(2001)	黒谷	黒谷３、４号墳		14
平成14(2002)	大窪・山畑	大窪・山畑39号墳（墳丘裾）		15
平成16(2004)	神立	神立８号墳【芝塚２号墳】	６世紀末～7世紀	16・本書

平成17(2005)	大窪	大窪29号墳	6世紀末　～7世紀	17・本書
	黒谷	黒谷10号墳	6世紀前半	18・19
		黒谷9号墳		19
平成18(2006)	服部川	服部川132号墳	6世紀末～7世紀	20・本書
	服部川	服部川12号墳（裾部）		21・本書
		服部川22号墳（裾部）		
	楽音寺	楽音寺8号墳（周溝？）	6世紀末～7世紀	22

＊古墳の分布確認調査や石室実測調査などは除く。古墳名は八尾市教育委員会2008『高安古墳群の基礎的研究』による名称（支群名称＋番号［例：服部川132号墳］）によった。但し以前の名称や通称については【　】で併記した。

文献（発掘調査分）

1　大阪府教育委員会 1966『大阪府文化財調査概要』
2　八尾市立歴史民俗資料館 1994『河内愛宕塚古墳の研究』
3　中田遺跡調査会学生有志　仏教大学考古学研究会 1977『陵』3・4合併号
4　八尾市教育委員会 1984『八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書』
5　八尾市教育委員会 1986『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』
6　八尾市教育委員会 1998『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ』
7　財団法人八尾市文化財調査研究会1993『高安古墳群　芝塚古墳』
8　財団法人八尾市文化財調査研究会 1995『高安古墳群　大石古墳』
9　八尾市教育委員会 1991『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』
10　八尾市教育委員会 1993『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』
11　八尾市教育委員会 1994『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』
12　八尾市教育委員会 1997『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』
13　八尾市教育委員会 1997『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』
14　八尾市教育委員会 2003『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書Ⅰ』
15　大阪府教育委員会 2004『大阪府教育委員会文化財事務所年報7』
16　財団法人八尾市文化財調査研究会　2005『平成16年度〈財〉八尾市文化財調査研究会事業報告』
17　財団法人八尾市文化財調査研究会　2006『平成17年度〈財〉八尾市文化財調査研究会事業報告』
18　八尾市教育委員会　2008『高安古墳群分布・測量調査報告書―郡川地区詳細分布調査―市史跡大窪・山畑7号・8号墳測量等調査他』
19　八尾市教育委員会　2006『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』
20　財団法人八尾市文化財調査研究会　2007『平成18年度〈財〉八尾市文化財調査研究会事業報告』
21　財団法人八尾市文化財調査研究会　2007『平成18年度〈財〉八尾市文化財調査研究会事業報告』
22　八尾市教育委員会　2007『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』

第２章　調査概要

第１節　調査経過

平成16(2004)年度には、11か所で調査を行なった。神立地区の１～10区・および大窪地区の14区である(調査Ⅰ)。薗光寺跡を想定した北部では、寺域の可能性を想定できる遺構・遺物が１・２区で検出されたが、決定的な遺構は認められなかった。芝塚古墳石室東側の６・７区では、古墳周溝の可能性のある溝が検出された。南端の10区では、埋没していた古墳石室(芝塚２号墳)が検出された。ここでは、当初検出された石室が羨道か玄室か決定できなかったため、調査区を拡張した結果、羨道と、玄室の一部を検出するに至った。一方、大窪地区の14区では、上層部の調査に留まったが、近年の炭焼き窯や墳丘状の隆起を検出した。

平成17(2005)年度には、前半期に調査Ⅱ、後半期に調査Ⅲを行なった。

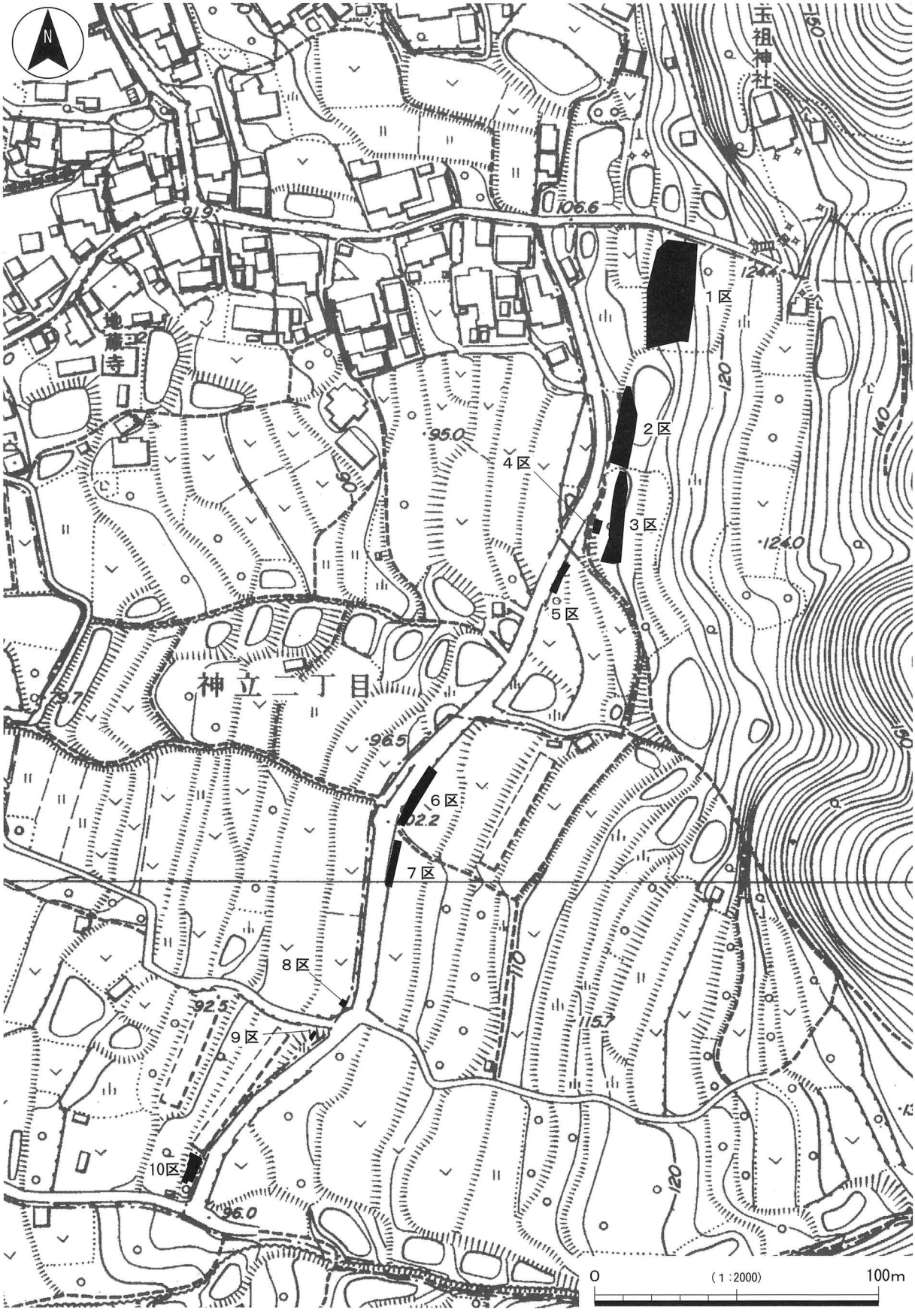
調査Ⅱは大窪地区の11～13・15～19区・服部川地区の21・22区の10か所である。この調査では、調査Ⅰ－14区の結果をもとに、15・16区を設定した。16区では、西部で古墳石室の東側壁を検出したことから、調査区を西側へ拡張した。その結果、墳丘内部に石列が取り巻く古墳石室(大窪29号墳)を検出した。また、11・18・19区では、破壊された古墳の可能性のある墳丘状の高まりや墓坑などを検出した。なお、大窪29号墳の石室・外部施設については、新聞発表し、平成10年11月23日に現地説明会を行い、広く一般に公開した。

調査Ⅲは大窪地区の20区・服部川地区の23・28・29・31～34・36～38・40・41区の13か所である。調査Ⅲでは、24区で谷状地形、28・29区で服部川22号墳の、31～34区で服部川12号墳の墳丘周囲の状況を確認した。

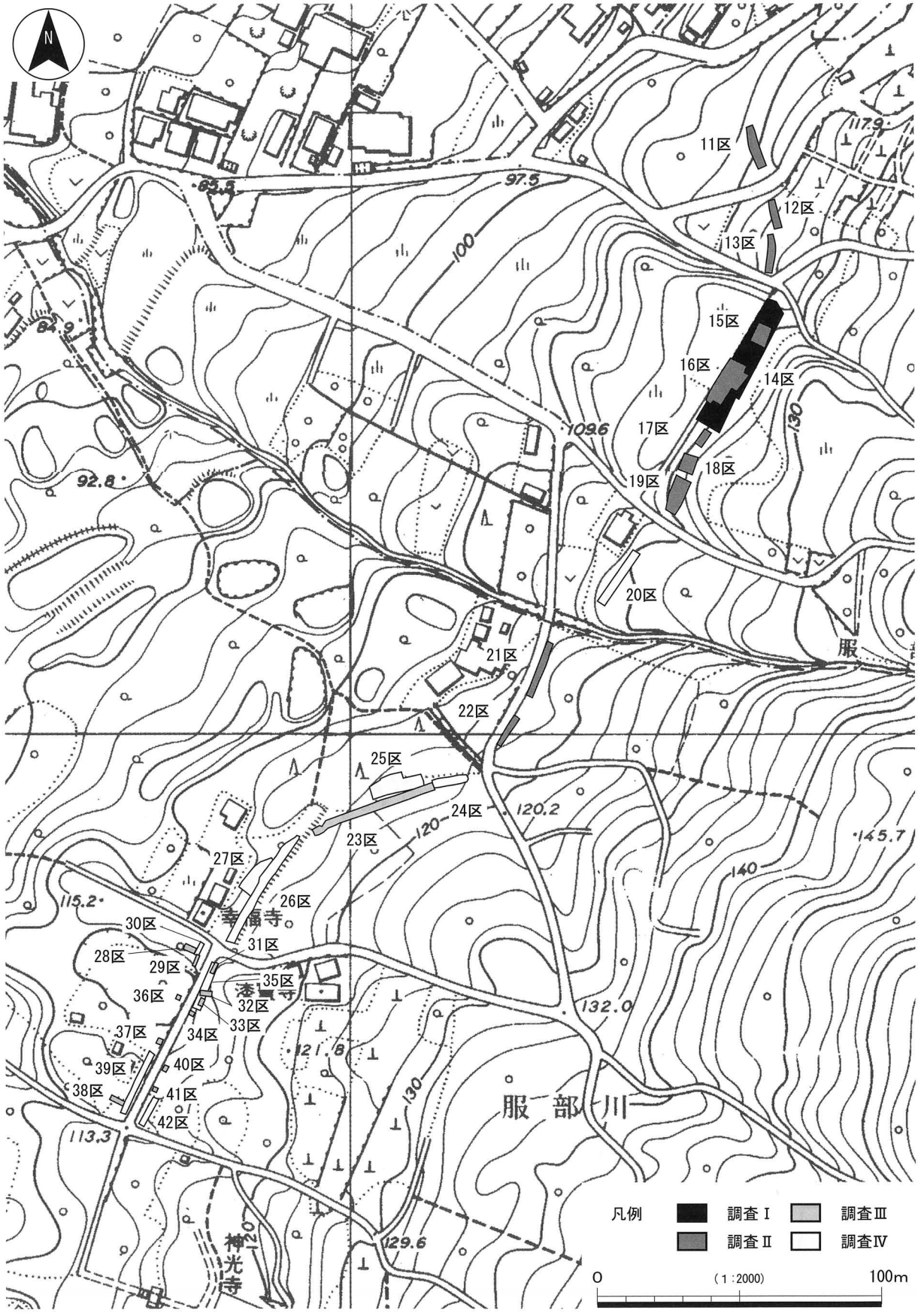
平成18(2006)年度には、大窪地区の20区、服部川地区の23・25～27・35・39・42区の９か所で調査を行った(調査Ⅳ)。調査Ⅳでは、25区で埋没した古墳石室・周溝(服部川132号墳)を検出し、調査Ⅲ－24区の谷間と落込みが、この周溝に対応することを確認した。26・27区では破壊された墳丘の痕跡などを確認した。30区では、調査Ⅲ－28・29区とともに服部川22号墳の墳丘裾部の状況が確認できた。さらに、調査Ⅲ－31～34区の調査成果を踏まえて設定した35区では、服部川12号墳の墳丘裾を取り巻く石列(外護列石)を検出した。

第２表　調査区一覧表

地区名	調査期間	面積(㎡)	主な検出遺構	地区名(調査時)
１区	平成16年７月５日～11月８日	548.18	井戸、方形盛土等	調査Ⅰ－１区
２区	平成16年６月30日～９月９日	103.96		調査Ⅰ－２区
３区	平成16年７月14日～10月25日	164.75		調査Ⅰ－３区
４区	平成16年９月15日～９月28日	8		調査Ⅰ－４区
５区	平成16年９月17日～10月４日	22		調査Ⅰ－５区
６区	平成17年１月14日～２月６日	66	芝塚古墳の周溝	調査Ⅰ－６区
７区	平成17年１月６日～１月31日	48		調査Ⅰ－７区
８区	平成16年６月28日～７月１日	4		調査Ⅰ－８区
９区	平成16年６月29日～７月１日	4		調査Ⅰ－９区
10区	平成16年６月28日～11月４日	37.9	芝塚２号墳	調査Ⅰ－10区



第1図　調査地周辺図（神立地区）



第２図　調査地周辺図（大窪・山畑・服部川地区）

11区	平成17年８月29日～10月６日	30	墳丘の可能性のある高まり	調査Ⅱ－１区
12区	平成17年７月25日～９月22日	20		調査Ⅱ－２区
13区	平成17年７月25日～９月22日	26		調査Ⅱ－３区
14区	平成17年１月14日～３月18日	608.89	墳丘状の高まり・近年の炭焼窯	調査Ⅰ－11区
15区	平成17年７月25日～８月26日	42		調査Ⅱ－４区
16区	平成17年７月25日～11月25日	112	大窪29号墳の石室・墳丘内部	調査Ⅱ－５区
17区	平成17年７月25日～９月３日	15		調査Ⅱ－６区
18区	平成17年８月９日～10月７日	30	墳丘の可能性のある高まり・墓坑？	調査Ⅱ－７区
19区	平成17年８月９日～10月７日	54		調査Ⅱ－８区
20区	平成18年７月11日～７月16日	44		調査Ⅳ－１区
21区	平成17年10月24日～11月９日	40		調査Ⅱ－９区
22区	平成17年10月24日～11月９日	20		調査Ⅱ－10区
23区	平成18年１月６日～２月13日	116	服部川132号墳・周溝	調査Ⅲ－１区
24区	平成18年７月６日～７月16日	20		調査Ⅳ－２区
25区	平成18年７月24日～10月13日	80.6		調査Ⅳ－３区
26区	平成18年７月13日～10月21日	112.5	破壊された墳丘の可能性のある高まり、墓坑？	調査Ⅳ－４区
27区	平成18年７月13日～10月21日	35		調査Ⅳ－５区
28区	平成18年１月25日～３月23日	6.8	服部川22号墳の墳丘内部・周溝	調査Ⅲ－５区
29区	平成18年１月25日～３月23日	5		調査Ⅲ－６区
30区	平成18年10月18日～10月19日	5		調査Ⅳ－７区
31区	平成18年１月25日～３月24日	5	服部川12号墳の墳丘裾部	調査Ⅲ－２区
32区	平成18年１月25日～３月24日	9.8		調査Ⅲ－３区-1
33区	平成18年３月４日～３月７日	5		調査Ⅲ－３区-2
34区	平成18年３月２日～３月４日	2.3		調査Ⅲ－４区
35区	平成18年10月18日～11月22日	49	服部川12号墳の「外護列石」	調査Ⅳ－６区
36区	平成18年３月３日～３月４日	2.3		調査Ⅲ－７区
37区	平成18年２月24日～３月８日	2.3		調査Ⅲ－９区
38区	平成18年２月24日～３月24日	7.5		調査Ⅲ－11区
39区	平成18年10月６日～11月10日	34.5		調査Ⅳ－９区
40区	平成18年２月17日～２月24日	2.3		調査Ⅲ－８区
41区	平成18年２月17日～２月24日	2.3		調査Ⅲ－10区
42区	平成18年10月６日～11月10日	16.5		調査Ⅳ－８区

第２節　各調査区の概要

１区の概要

調査期間：平成16年７月５日～11月８日

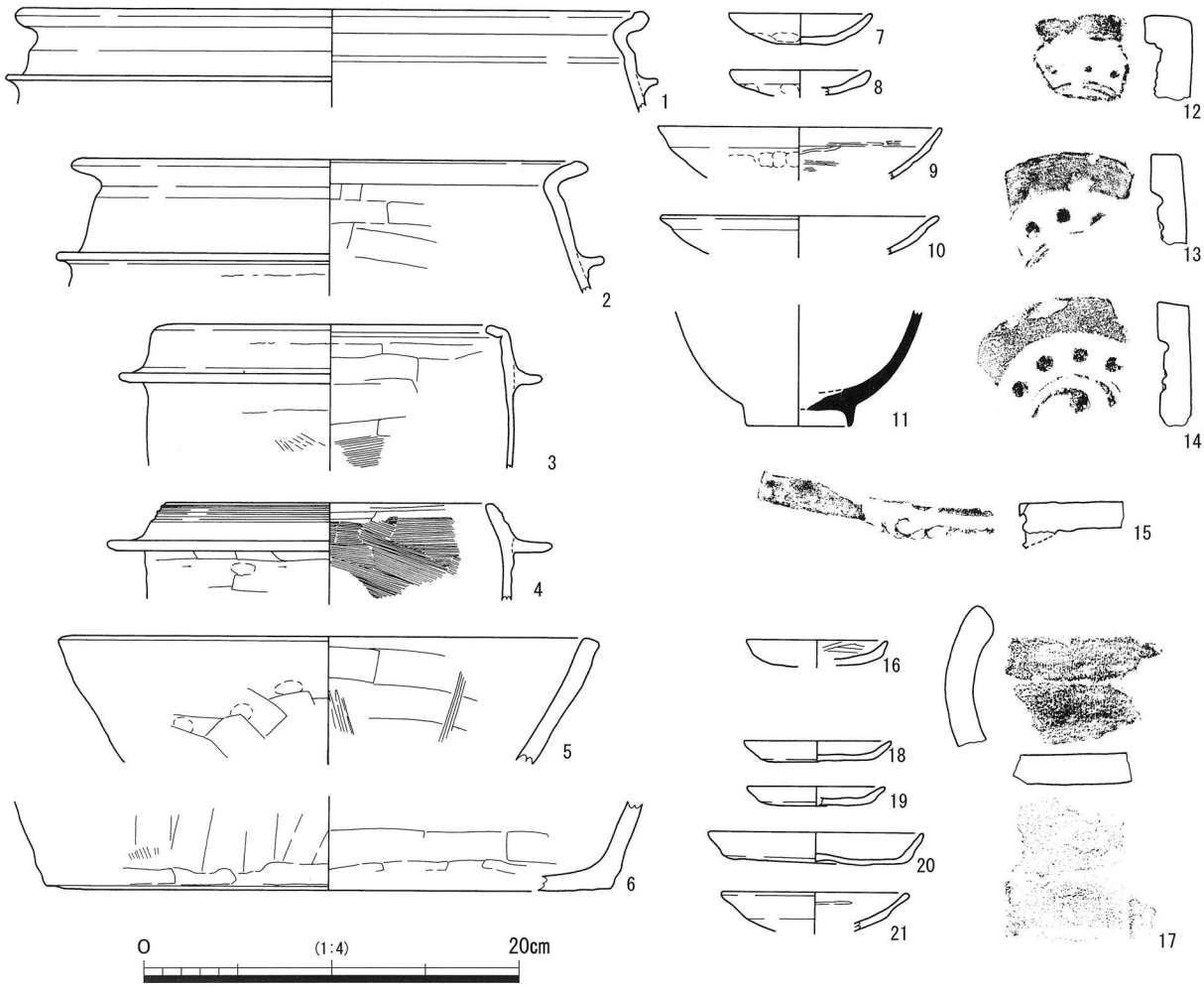
調査面積：548.18㎡

１区では、土置き場の関係から、３分割して調査を行なった（１区－Ⅰ～Ⅲ）。調査区の旧状は、北東から南西へ下がる３段からなる段畑で、現地表面の標高は、北東が高く119m前後、南西が低く111.7m前後である。２・３・13・14・16層が近世頃の作土で、４・９層および11・14層は整地層、８層が基盤層（いわゆる地山）である。検出遺構は**井戸0101**、**土坑0101～0113**、**方形盛土**、**溝0101・0102**、**瓦溜り**、**落込み0101～0103**である。中世以降近年までの開墾などで削平を受けた部分が多く、新旧雑多なものが同一遺構から出土している。

検出遺構と出土遺物（第３～16図、図版二～三・四一・四二）

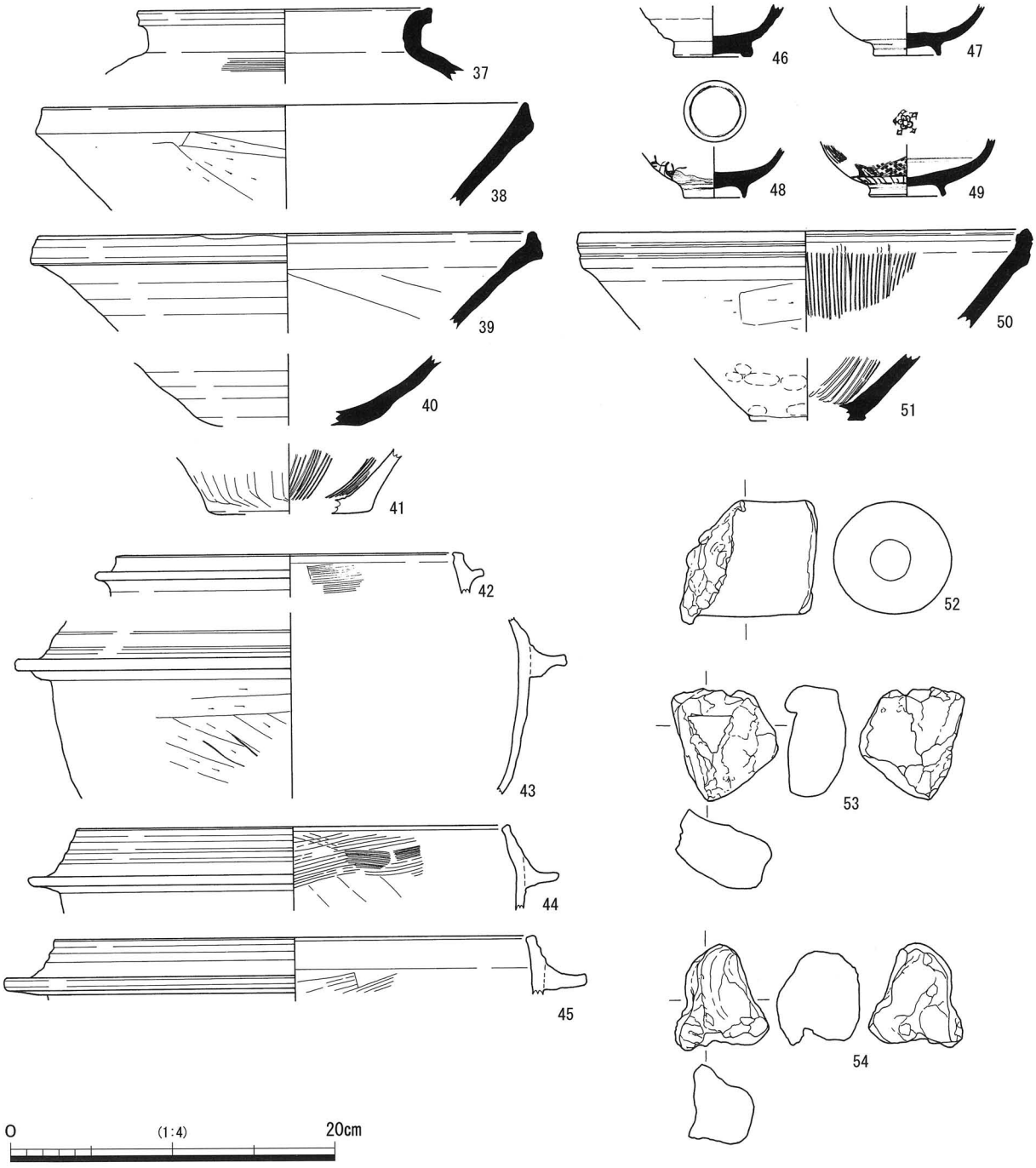
土坑0101：調査区北東端で検出した。遺構の範囲は、ほとんどが北側溝に一致している。内部からは14世紀頃の羽釜１が出土している。

土坑0102：調査区北部東端で検出した。**土坑0103**とともに**瓦溜り**を除去した時点で検出した。

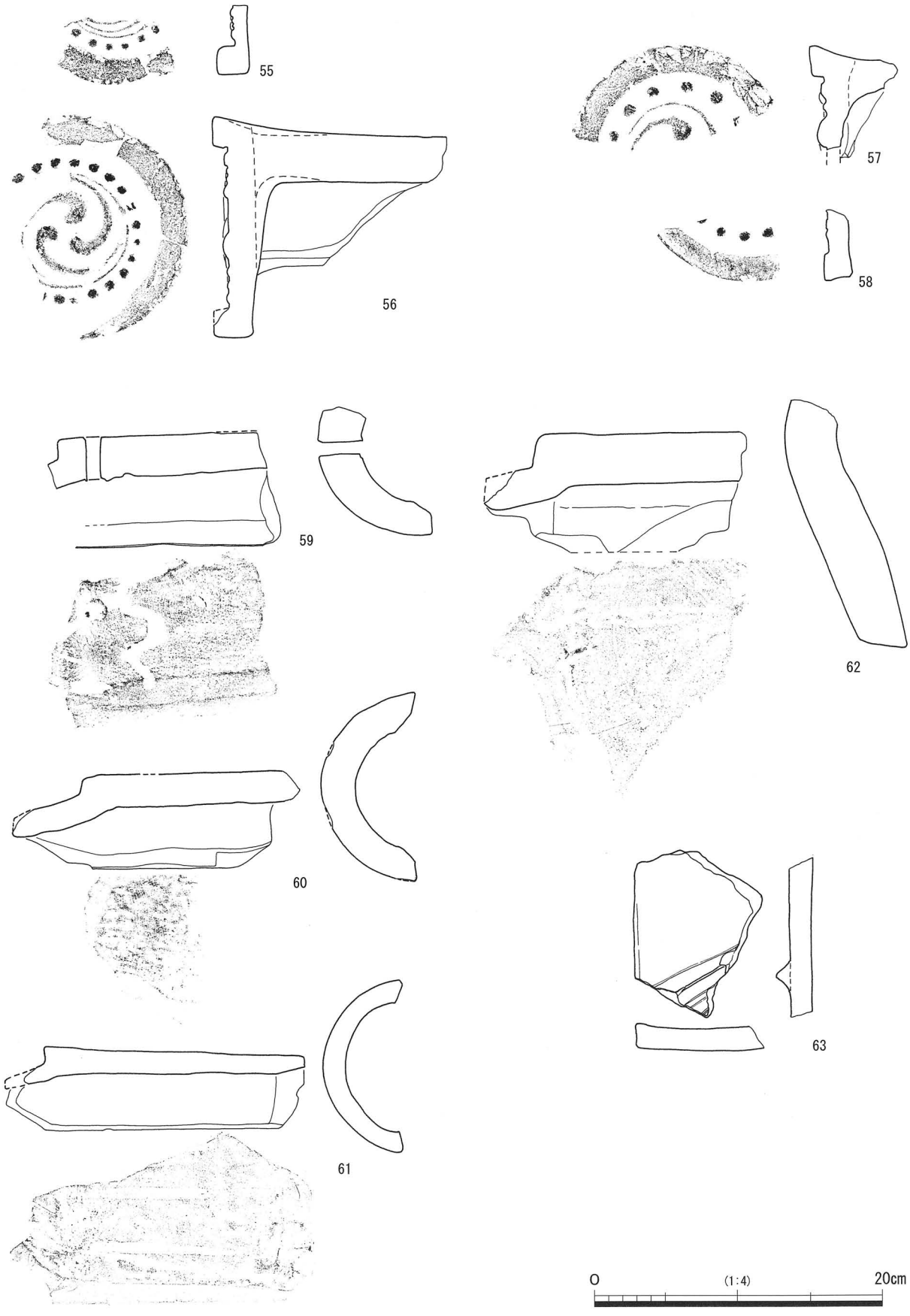


第３図　１区土坑0101（１）・0102（２～15）・0104（16・17）・0105（18～21）出土遺物実測図

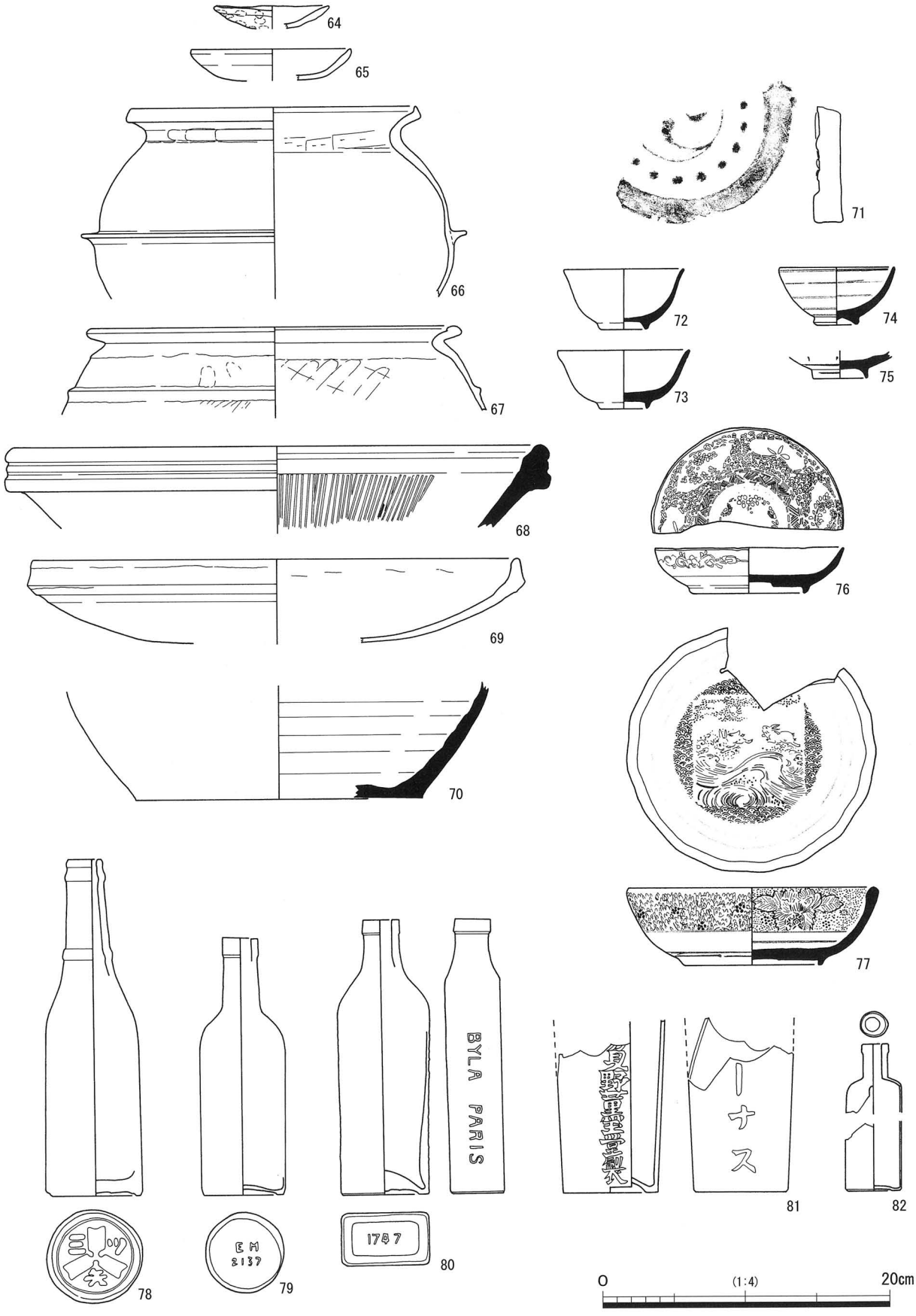
第４図　１区土坑0110出土遺物実測図



第５図　１区土坑0111出土遺物実測図－１



第６図　１区土坑0111出土遺物実測図－２



第７図　１区土坑0112出土遺物実測図

図示した遺物は13～15世期頃の羽釜(足釜)、瓦器擂鉢、風炉または火鉢、土師器小皿、瓦器椀、軒丸瓦(２～10・12)などであるが、17世紀末以降の磁器碗11や軒丸瓦13・14、軒平瓦15のほか内面に施釉された陶器燈明皿などの小片が出土している。

土坑0103：調査区北東部、**土坑0103**の南西部で検出した。**落込み0102**を切っている。埋土は褐色礫混粘土質シルト～砂質シルトである。土師器皿や羽釜、瓦器羽釜(足釜)等の小片が出土している。

土坑0104：**土坑0103**の南西に接して構築されている。**土坑0103**同様**落込み0102**を切っており、埋土も同じである。おおむね13世紀代の土師器小皿16や平瓦17のほか、磁器碗・皿等が出土している。

土坑0105：**土坑0104**のさらに南西で検出した。土師器小皿18・19、同中皿20、瓦器椀21ほか、須恵器捏鉢が出土している。いずれも13世紀以降のものであろう。

土坑0106：**土坑0104**の西で検出した。東西に溝状に伸びる。**土坑0104**と同一の遺構の可能性がある。器種不明の土師器片が出土している。

土坑0107～0109：**土坑0104**の南で検出した。いずれも２層を構築面とするもので、遺物の出土はなかった。

土坑0110：調査区北西部で検出した。近世～近代の遺物22～36が出土している。22は『るり羽』の陽刻のあるガラス瓶で、近代の化粧瓶である。26は外面に陸軍旗と兵隊が描かれた子ども茶碗で、戦時下のものである。

土坑0111：調査区中央北寄り西端で検出した。斜面に構築されており、南に開口部をもっている。ふいごの羽口と考えられる52のほか鋳型の可能性のある石製品53・54なども出土しており、小規模な金属製産に関する鍛冶炉の可能性が考えられるが、埋土に焼土などは含まれておらず、近世までの陶器壷37、須恵器捏鉢38～40、瓦器擂鉢41、同羽釜42～45、磁器碗46～49、陶器擂鉢50・51、瓦類55～63が出土している。軒丸瓦55～58はいずれも巴文であるが、55・56は14世紀頃まで、57・58は15世紀以降と、新旧に分かれそうである。丸瓦59は吊紐痕の形態から、60・61は外面の布目タタキを消していることから、14世紀頃に比定できる。62は雁振瓦、63は塼であろうか。

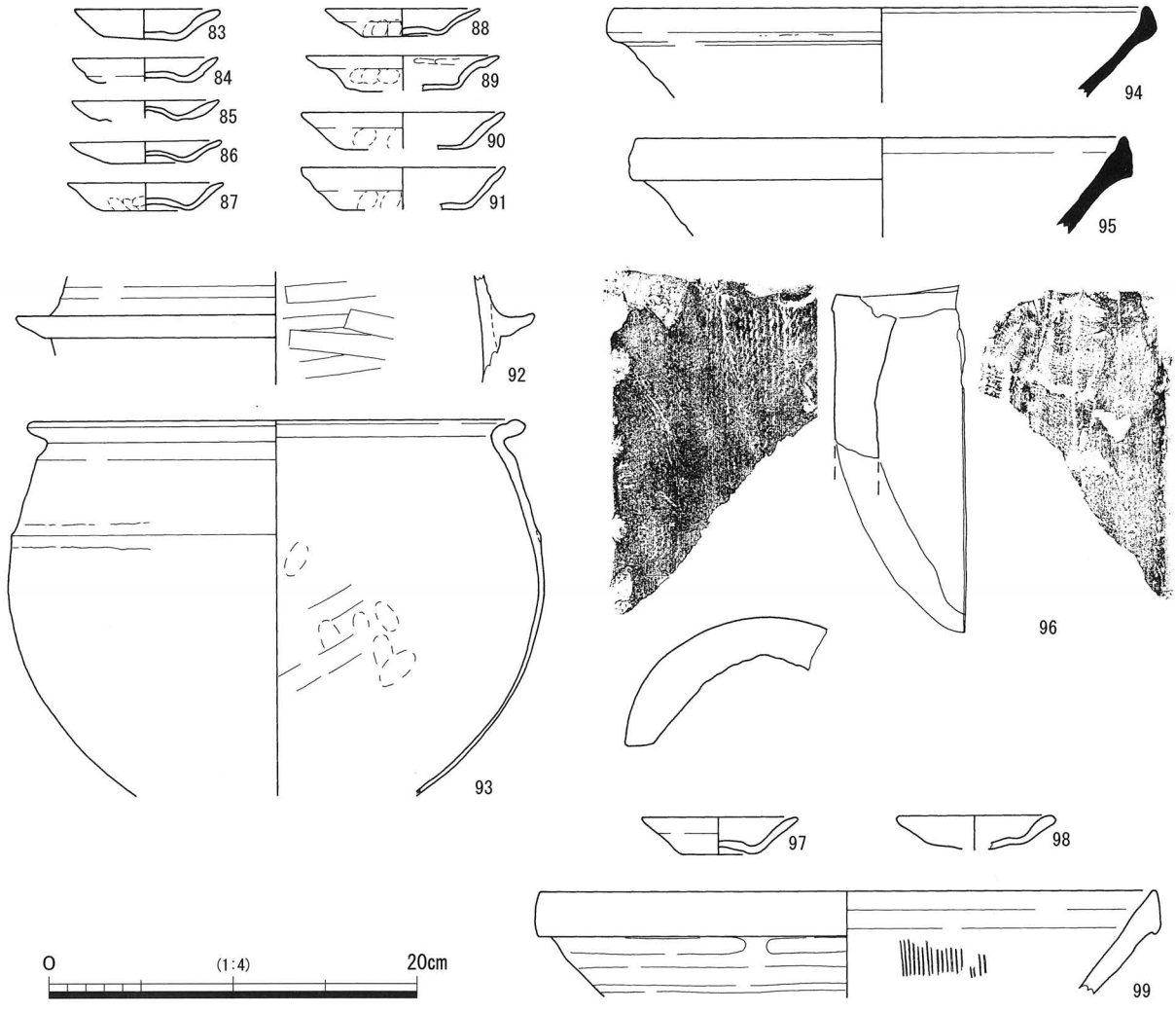
土坑0112：調査区中央南寄り西端で検出した。段畑の段構築の際に西部は破壊されている。内部からは中世～近代までの遺物が出土しているが、遺構が存続していたのではなく、破壊後近代の遺物が投棄されたものと考えられる。土師器小皿64、同中皿65、同羽釜66・67、軒丸瓦は14世紀頃のもの、陶器擂鉢68、土器焙烙69、陶器甕70は19世紀、磁器碗72～75、同皿76・77、ガラス瓶78～72は近代のものであろう。

土坑0113：調査区南西部、**井戸0101**・**落込み0103**とまとまった位置で検出した。土師器小皿97はいわゆる「へそ皿」で、14世紀以降に出現する器種である。

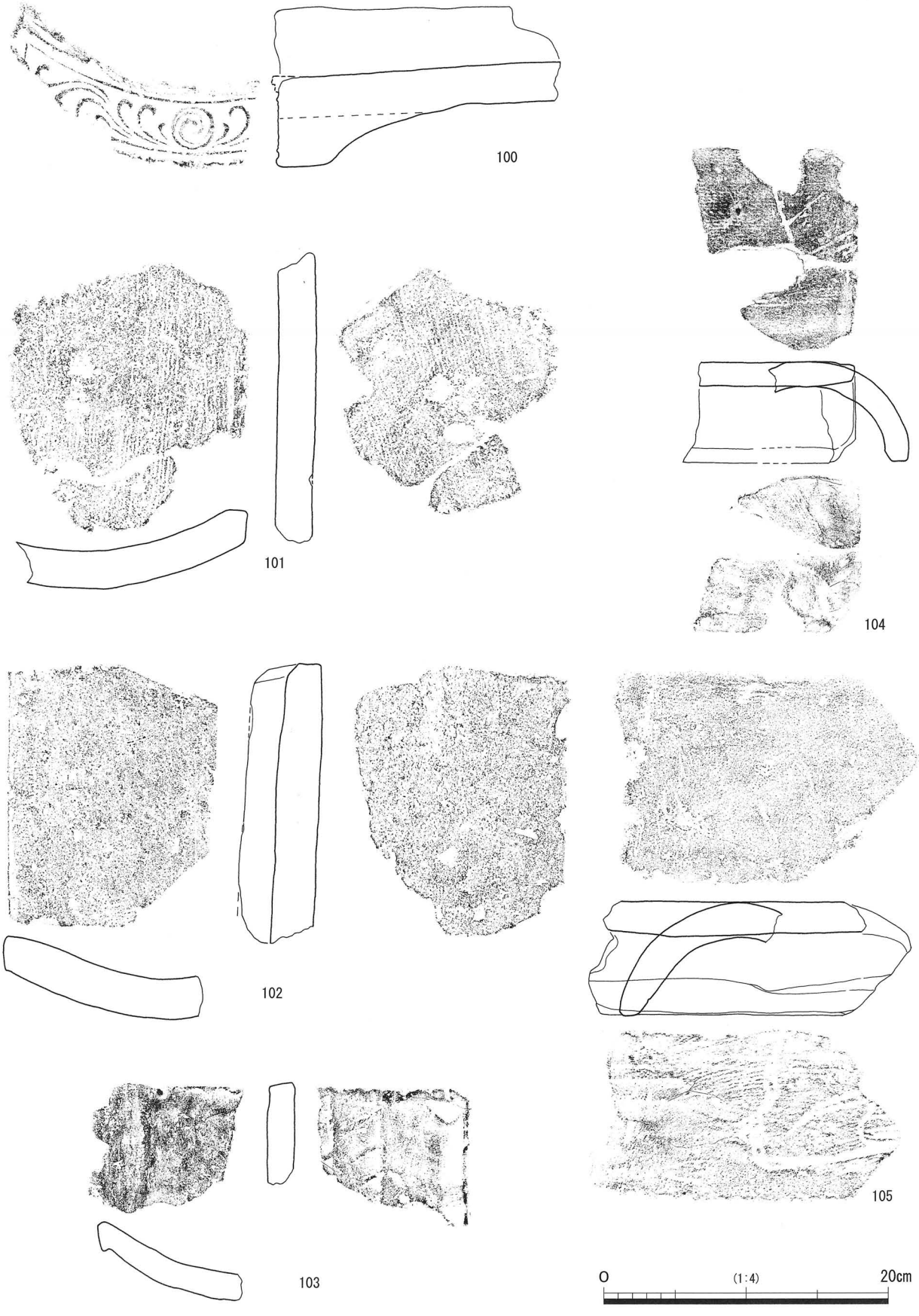
井戸0101：調査区南西部、**土坑0113**の東で検出した。**土坑0112**同様、段で西側が落ち込んでいるが、埋土の観察から、①・②層は遺構埋没後の堆積であることがわかる。遺物は、⑥・⑦層から出土している。土器小皿83～88、同中皿89～91、土師器羽釜92・93、須恵器捏鉢94・95はいずれも14世紀のもので、羽釜93はいわゆる「大和型」である。丸瓦96は13世紀代までにおさまるものと考えられる。**土坑0113**は**井戸0101**に付随した遺構とも考えられる。

落込み0103：**土坑0113**のさらに西、調査区南西端で検出した。調査区の南西側は、里道をはさんで溜池となっていることから、自然地形を反映したものかと考えられる。①層はブロックからなる埋め立てられた地層で、②・③層は流水堆積を示している。土師器小皿**98**、瓦器擂鉢**99**などは13世紀頃のものかと考えられ、**落込み0103**埋没後、**井戸0101**が掘削されていることがわかる。

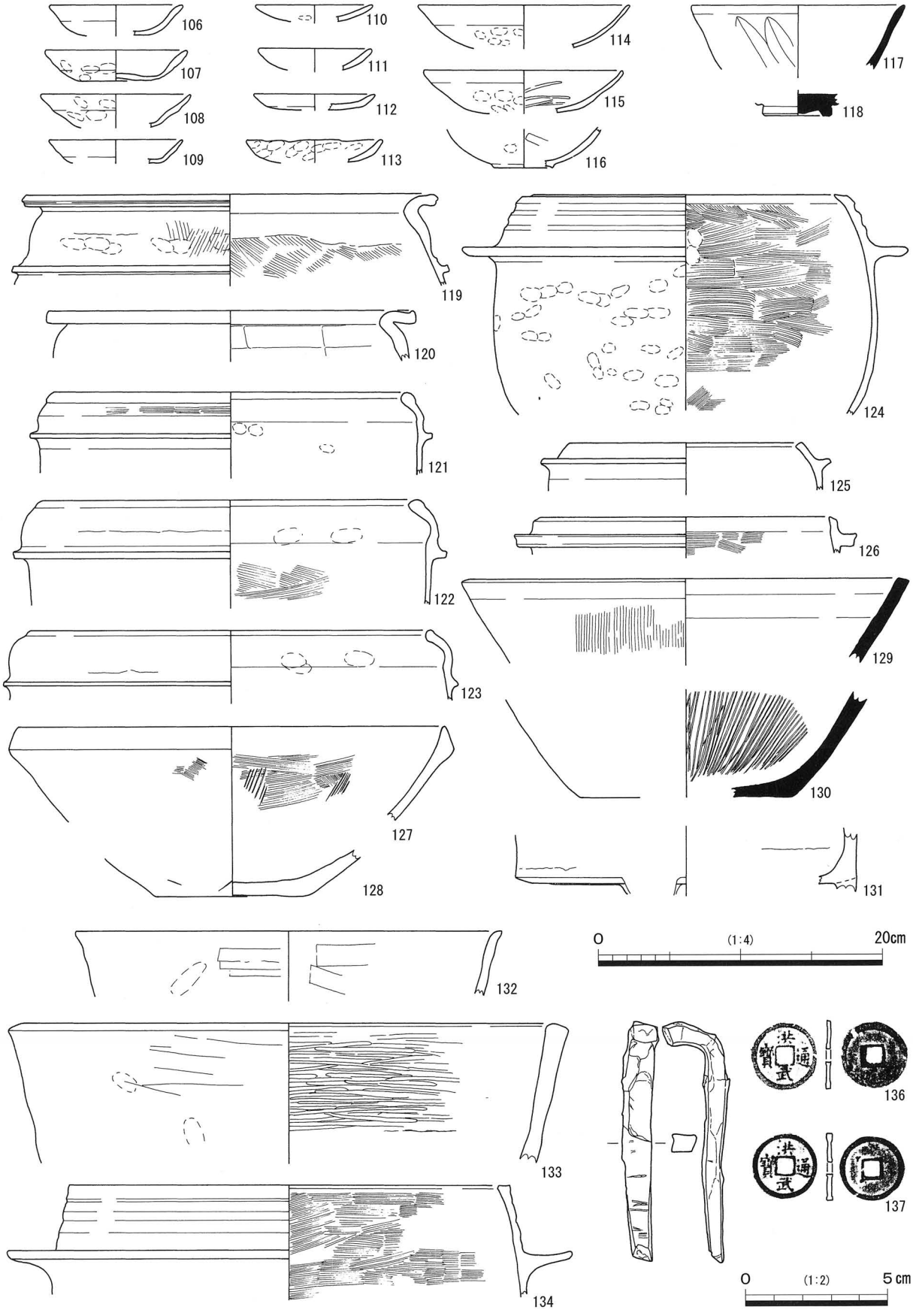
瓦溜り：調査区北部東端、**土坑0102**・**落込み0102**間で検出した。**瓦溜り**には掘形は認められず、**土坑0102**の南側肩口から**落込み0102**の北側斜面にかけて、径約２ｍの範囲にわたり、土器類・瓦の小片が礫とともに10cm程度の厚さで堆積していた。これらを除去すると**土坑0102**・**落込み0102**の輪郭があらわれた。軒平瓦**100**の文様は、中心飾りに巴文(二つ巴)を配する唐草文である。中心飾りに巴文を配するものは数少なく、日置荘遺跡出土の13世紀頃のものに類例がある。ただし、日置荘遺跡出土の瓦の中心飾りは三つ巴で、製作技法などからみると、今回出土の軒平瓦**100**は、12世紀頃に遡るものと考えられる。他の瓦には、12世紀頃までにおさまる平瓦**101**・丸瓦**104**、それ以降の平瓦**102**・**103**、丸瓦**104**などがある。土器類には、13～14世紀頃に比定できる土師器小皿**106**～**113**、13世紀頃の瓦器椀**114**～**116**、青磁碗**117**・**118**、土師器羽釜**119**・**120**はいわゆる「河内型」、**121**～**123**は「大和型」で、16世紀頃にまで下る。瓦器羽釜**124**～**126**・**134**は14世紀以降のも



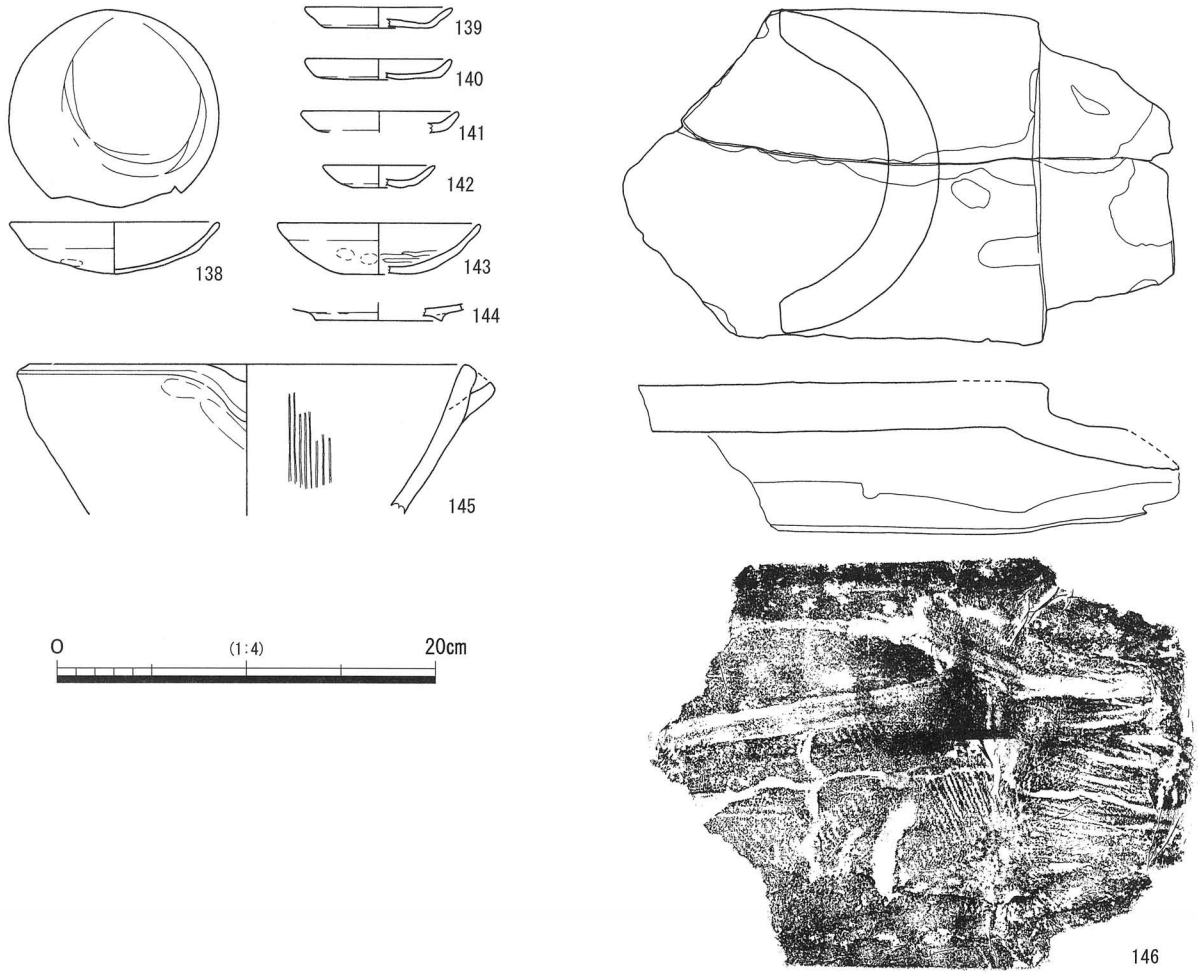
第８図　１区井戸0101（83～96）・土坑0103（97）・落込み0103（98・99）



第９図　１区瓦溜り出土遺物実測図－１



第10図　１区瓦留り出土物実測図－２



第11図　方形盛土（223～227）・溝0101（228～231）出土遺物実測図

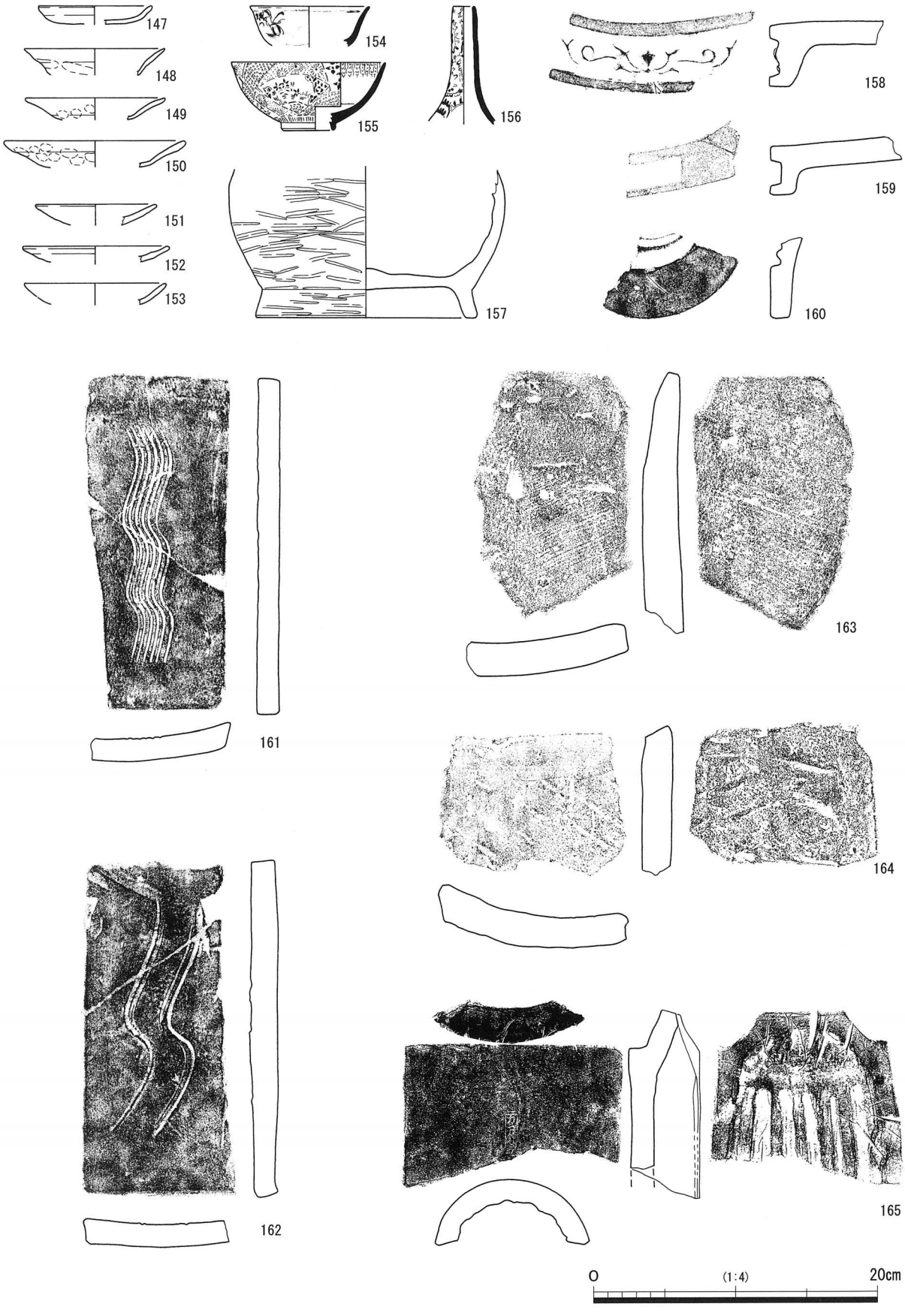
のか。瓦器捏鉢127・128、瓦器深鉢(火鉢)132・133は15～16世紀のものか。陶器擂鉢129・130は17世紀、土器火鉢131(または風炉・火消壷の類であろうか)は17～18世紀以降のものであろう。金属器135は釘と思われる。断面は方形で頭は長く折り曲げられる。古墳時代のものではなさそうである。銭136・167は『洪武通寶』で「コ頭通・単点通・無背」、初鋳は1368年である。

方形盛土：調査区南東部で検出した。周囲に**溝0101**が廻る。礫を多量に含む砂質シルト①～⑤で盛られており、非常に硬く締まる。盛土内部からは終末期(14世紀)の瓦器椀143をはじめとし、土師器小皿142や瓦器擂鉢145・丸瓦146などが出土している。

溝0101：上記のように、**方形盛土**の周囲をＬ字形に取り巻く溝である。内部から、**方形盛土**同様14世紀の瓦器椀138ほか、土師器小皿139～141が出土した。

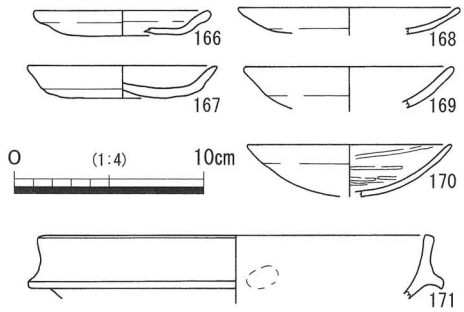
溝0102：調査区南東端、**溝0101**の西側で検出した。**溝0101**と逆方向のＬ字形に曲がる。埋土は**溝0101**と同一で、この溝も**方形盛土**に付随するものかもしれない。

落込み0101：調査区北西部で検出した。自然地形を反映したものか、明確なラインは検出できず、西端は、段畑構築の際に破壊されている。遺物の出土状況は散発的で、まとまりを欠いている。土師器小皿147～150には、14世紀以降のいわゆる「へそ皿」を含んでいる。内面に施釉された陶器燈明皿151～153、磁器碗154・155、同油壷156などは18～19世紀頃、土器台付鉢120は火鉢・



第12図　1区落込み0101出土遺物実測図

風炉等と考えられ、軒平瓦(軒桟瓦か)158・159、軒丸瓦160、平瓦161・162などもまた江戸時代末期の所産であろう。平瓦163は12世紀頃まで、同164は14世紀頃まで、丸瓦165は18世紀頃までを下限とする。



第13図　落込み0102出土遺物

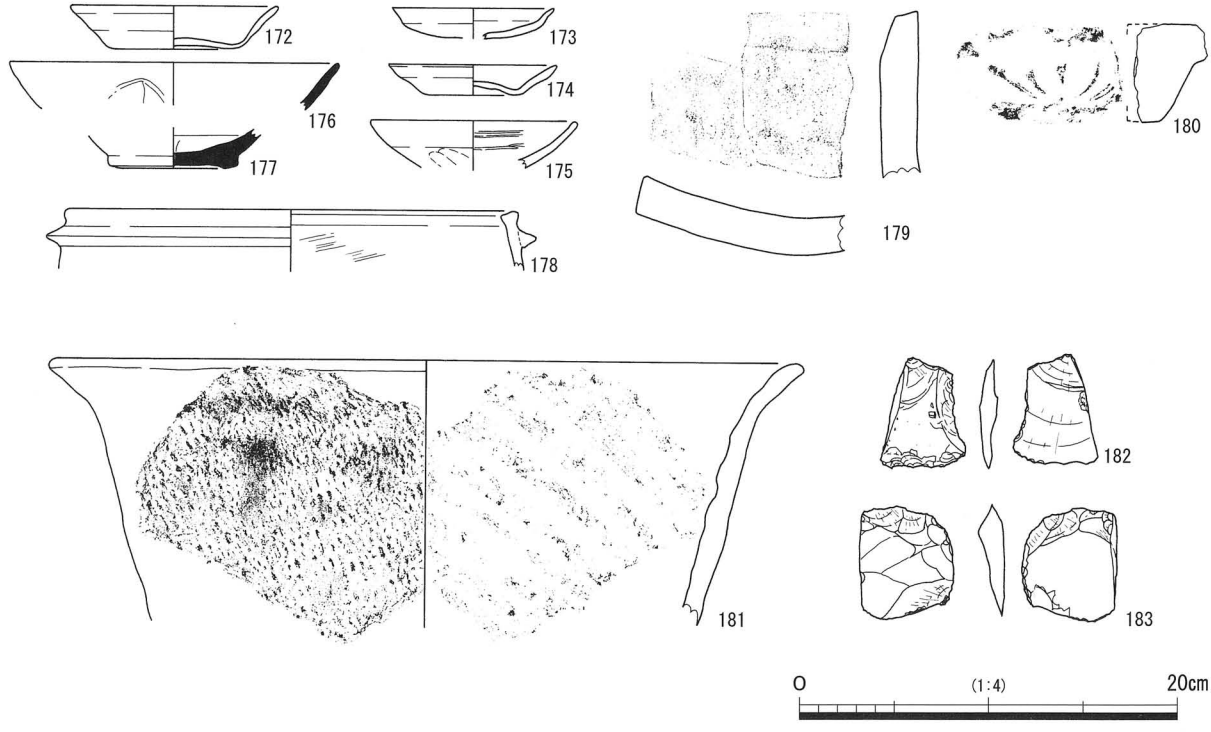
落込み0102：調査区中央北寄り、東部で検出した。南北10m・東西２m以上の規模をもつ長方形で、北端は８層が崖状に南へ落込む部分に一致しており、底は30cmほどの比高をもち、南へ下がる。内部に溝状の落込みや小穴Ｐ１～３を伴い、北部には**土坑0103・0104**がある。内部からは14世紀頃の土師器小皿166・167、瓦器椀168～170、瓦器羽釜171が出土した。

４層出土遺物：土師器小皿172～174にはへそ皿が含まれており、瓦器椀175、青磁碗176、白磁碗177、瓦器羽釜178、平瓦179も14世紀ごろに下るものである。軒丸瓦180は顎の形態や文様から、13世紀頃に比定できる。174～177は１区Ⅱ北東部(**方形盛土**北側)、178は１区Ⅱ南西下段（**落込み0103**北側)、178・179は１区Ⅱ北西隅(**土坑0112**北西部)出土である。

８層出土遺物:縄文土器181は高山寺式土器深鉢で、縄文早期押型文土器終末期の型式のなかで、古段階に属する。サヌカイト片182は一辺に刃部を持ち、使用痕がみられる。同183は上辺に打撃痕があり、楔形石器の可能性がある。いずれも１区Ⅱ北東隅８層内から出土した。

小結

１区では多くの遺構が検出された。遺構の変遷を簡単にまとめたものが次の第３表である。12世紀頃(平安後期～鎌倉時代)の瓦が**落込み0101・瓦溜り**から出土しているが、前者には19世紀(江



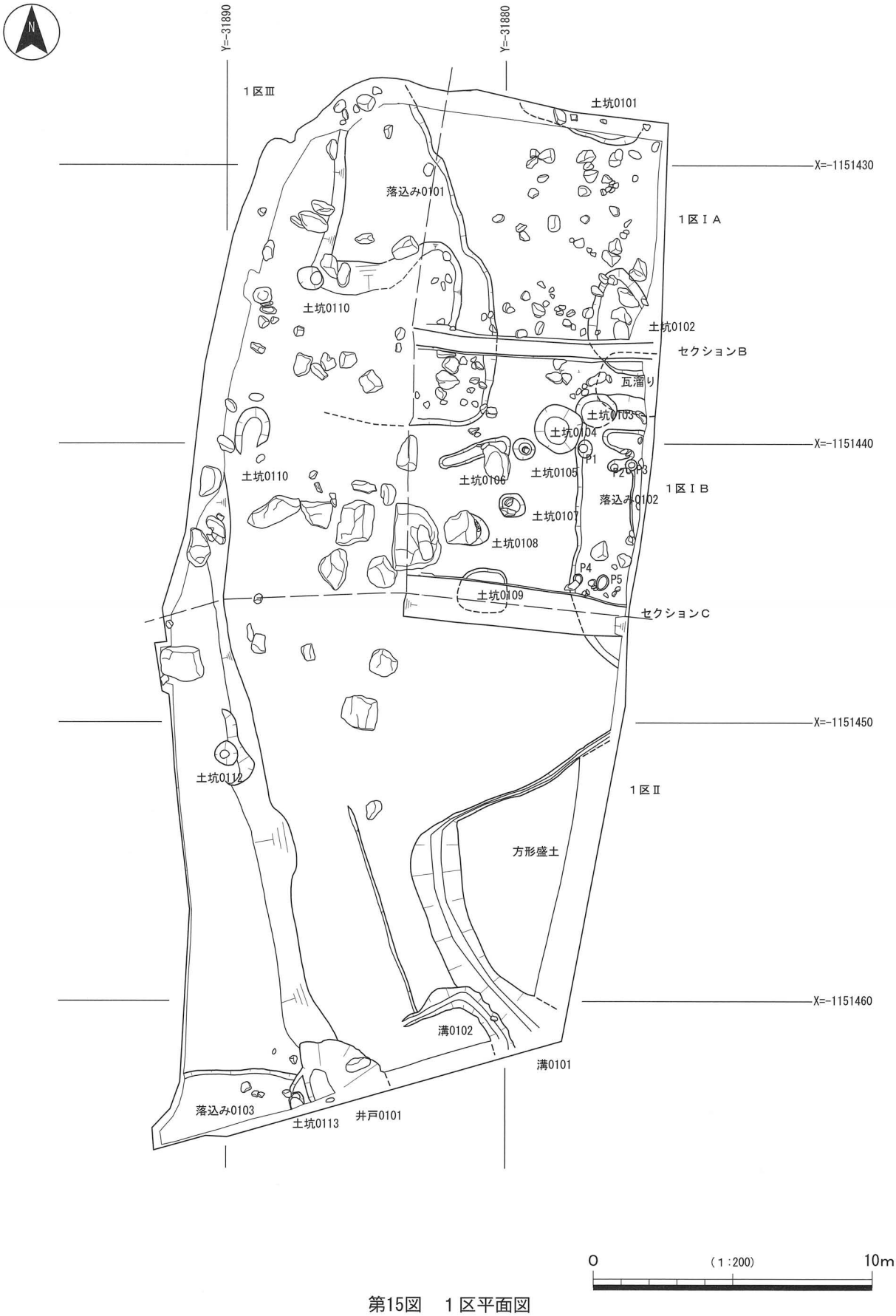
第14図　１区４・８層出土遺物実測図

戸時代後期)にまで下る国産磁器、後者には18世紀(江戸時代中期)の陶器などが含まれている。構築面から見れば、８層(13世紀～14世紀－鎌倉後半～室町前半)・６層(14世紀～17世紀－室町後半～江戸前半)・３層(18世紀－江戸中頃)・２層(19世紀－江戸後半以降)に大別できる。最古の遺構は**落込み0103**で、13世紀に遡ると考えられ、**土坑0103・井戸0101**がそれに次ぐ。次いで**溝0101・0202・方形盛土**からなるグループと**落込み0102**が14世紀にはいってから構築される。さらに、**土坑0102・0103**が作られ、その上に**瓦溜り**ができるのが18世紀頃になると考えられる。それ以降は、19世紀にはいってから、**土坑0101・落込み0101**などが構築される。

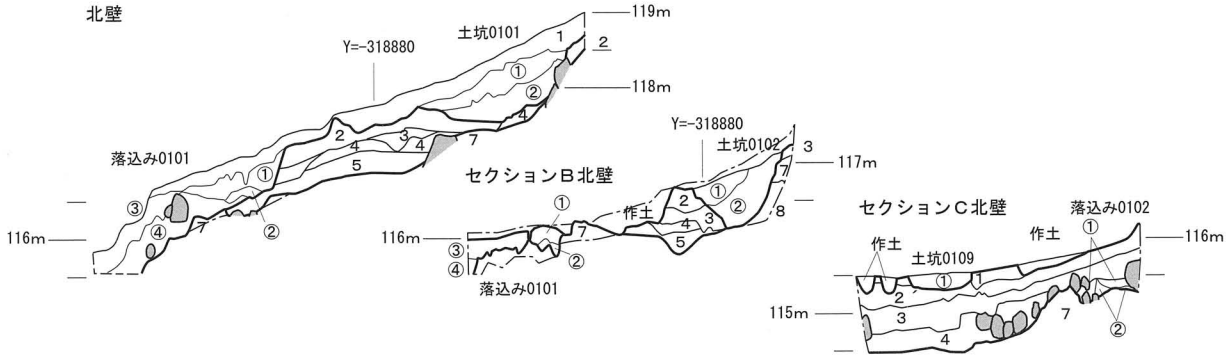
以上のように、当初の調査目的であった薗光寺の建立時である承和３(836)年に直接関係する遺構・遺物は検出できなかった。しかし、中でも古い時代に属する**落込み0103・土坑0103・井戸0101**のグループと、**溝0101・0202・方形盛土**からなるグループは、寺院に関係の深い遺構と考えることができる。また､明治時代の廃仏毀釈までその一部が存在していたとされていることから、近世末期以降に作られた遺構は、薗光寺廃絶に伴う遺構の可能性がある。**落込み0102**は、溝を排水溝・**土坑0103・0104**を石の抜取り痕と仮定すれば、**方形盛土**構築の際に破壊された古墳の石室とも考えることができる。また、**土坑0111**から出土したふいご羽口についても、時期は不明ながらも、近隣に鍛冶工房の存在を示唆しており、今後の調査成果の増加に期待したい。さらに、基盤層である８層中から出土した高山寺式土器深鉢181も近隣では出土例の少ないもので、当該時期の生活痕跡を想定しうる資料の一助となろう。

第３表　１区検出遺構一覧表

遺構名	出土遺物	構築面	先後関係
落込み0103	13世紀頃	８層	井戸0101より古
土坑0113	14世紀	８層	井戸0101より古
井戸0101	13世紀～14世紀	８層	
溝0101	14世紀	８層	
溝0102	—	８層	溝0101と同じ埋土
方形盛土	14世紀	８層	
土坑0106	—	８層	土坑0105と同一？
土坑0105	13世紀以降	８層	
落込み0102	14世紀	６～８層	
土坑0102	13～15世紀～17世紀末	６～７層	
土坑0103	14世紀以降	６～７層	落込み0102より新
瓦溜り	土器：13・14・16世紀　陶器：17～18世紀 瓦：12世紀以降	２層中 (３層上面)	土坑0102・0103より新
土坑0111	14世紀以降～近世	２～３層	
土坑0101	14世紀	２層	
土坑0108	近世か	２層	
土坑0107	近世か	２層	
落込み0101	土師器：14世紀以降　国産磁器：19世紀	２層	
	瓦：12世紀頃まで・14～18世紀		
土坑0104	13世紀～19世紀	２～３層	
土坑0112	14世紀～近代		
土坑0110	近世～近代		
土坑0109	—	１層	


N
Y=-31890
Y=-31880
X=-1151430
X=-1151440
X=-1151450
X=-1151460
１区Ⅲ
１区ＩＡ
１区ＩＢ
１区Ⅱ
土坑0101
落込み0101
土坑0110
土坑0102
セクションＢ
瓦溜り
土坑0103
土坑0104
P1
P2
P3
土坑0110
土坑0106
土坑0105
落込み0102
土坑0107
土坑0108
P4
P5
土坑0109
セクションＣ
土坑0112
方形盛土
溝0102
溝0101
落込み0103
土坑0113
井戸0101
0
(１:200)
10m

第15図　１区平面図



1　10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
2　10YR5/4にぶい黄褐色礫混砂質シルトのブロック
3　10YR6/6明黄褐色粗粒砂～大礫混砂質シルト
4　10YR6/6明黄褐色粗粒砂に粘土質シルトのブロック
5　10YR4/6褐色礫混極細粒砂
6　10YR5/6黄褐色粗粒砂～大礫
7　10YR6/4にぶい黄橙色大～巨礫混極細粒砂
8　10YR6/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルト～砂質シルト
9　10YR5/4にぶい黄褐色中～大礫混砂質シルトに10YR7/6明黄褐色中礫混粘土質シルトのブロック
10　10YR5/3にぶい黄褐色中～大礫混粘土質～砂質シルト
11　10YR5/3にぶい黄褐色中礫混粘土質シルトに7.5Y5/1灰色砂質シルトのブロック
12　7.5Y5/1灰色砂質シルトに10YR5/3にぶい黄褐色礫混粘土質シルトの互層
13　10YR5/4にぶい黄褐色礫混砂質シルト
14　10YR5/4にぶい黄褐色礫混砂質シルトに10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト・
　10YR3/2黒褐色砂質シルトのブロック
15　10YR3/2黒褐色中礫多量混砂質シルト
16　10YR5/6黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
17　10YR3/4暗褐色中礫多量混極細粒砂

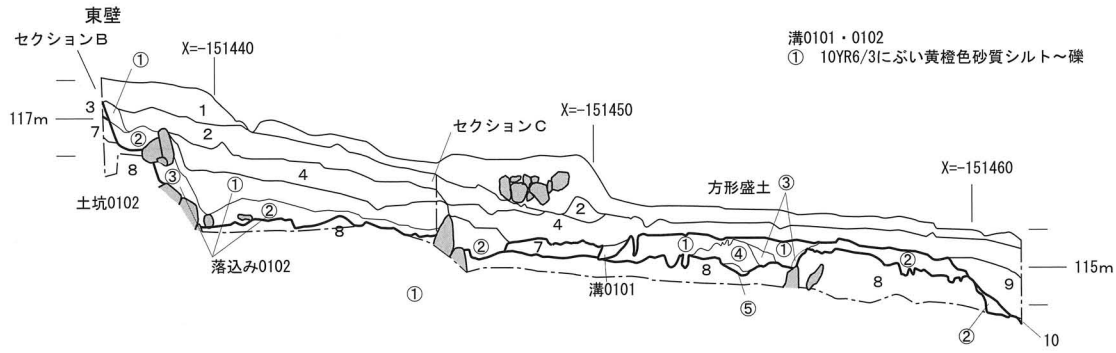
土坑0101
①　10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
②　10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～大礫多量混砂質シルト

土坑0102
①　10YR4/2灰黄褐色粗粒砂(炭含む)
②　10YR5/6黄褐色粗粒砂

土坑0109
①10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト

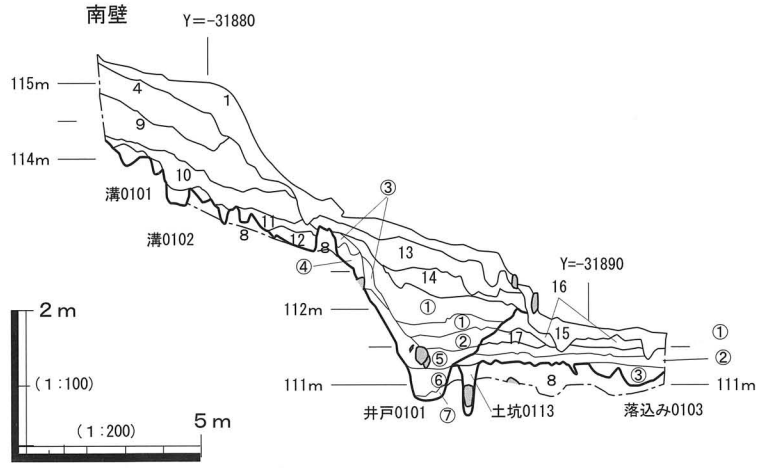
落込み0101
①　10YR6/4にぶい黄橙色巨礫混粗粒砂(瓦含む)
②　10YR6/6明黄褐色粗粒砂
③　10YR6/6明黄褐色巨礫混粗粒砂・砂質シルトのブロック
④　10YR6/6明黄褐色巨礫多量混粗粒砂

落込み0102
①　10YR4/4褐色細礫～礫混砂質シルト～粗粒砂
②　10YR4/4褐色大～巨礫混粗粒砂
③　10YR4/4褐色粘土質シルト混粗粒砂



溝0101・0102
①　10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト～礫

方形盛土
①　10YR6/4にぶい黄橙色礫多量混砂質シルト
②　10YR6/4にぶい黄橙色巨礫多量混砂質シルト
③　10YR4/4褐色礫混砂質シルト
④　10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト混大礫
⑤　10YR6/4にぶい黄橙色大礫



井戸0101
①　10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂混粘土質シルト
②　10YR4/4褐色極細粒～粗粒砂混粘土質シルト
③　10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂混粘土質～砂質シルト
④1　0YR5/3にぶい黄褐色粘土質～砂質シルトに
　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト・
　10YR6/1灰色粘土質シルトのブロック
⑤　7.5Y3/2オリーブ黒色粗粒砂混粘土質シルト
⑥　7.5Y5/1灰色粗粒砂混粘土質シルトに
　10YR6/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルトのブロック
⑦　7.5Y5/1灰色粘土質シルト混粗粒砂

土坑0113
①　7.5Y3/2オリーブ黒粘土質シルトに
　10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック

落込み0103
①　10YR4/4褐色砂質シルト～極細粒砂に
　10YR6/6砂質シルトのブロック
②　10YR3/2黒褐色中礫多量混極細粒砂
③　7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルトと
　10YR6/6明黄褐色粗粒砂の互層

第16図　1区断面図

２区の概要

調査期間：平成16年６月30日～９月９日

調査面積：103.96㎡

２区は１区の南西30m地点に位置し、東～北は溜池に接し、西は道路でともに急斜面となってさがっており、南には里道が東西に伸びている。ここでも、掘削土の搬出や大木の伐採が困難であったため、３分割して調査を行なった(２区Ⅰ～Ⅲ)。２区の旧状は放棄された畑で、草木の茂るに任せてあったようである。地表面の標高は、111.5m前後でほぼ水平、西側道路からは１m以上高くなっている。１～３層が近年までの作土で、以下には**落込み0211**(④・⑤層)、**土坑0211～0215**、**溝0211**が検出された(１面)。下層にはいわゆる地山である４層を基盤とする落込み**0221**(⑥～⑧層)、**土坑0221～0228**、**溝0221～0226**のほか、溜池の岸や堤なども検出された(２面)。１面の基盤層は２面落込み**0221**上面である。

検出遺構と出土遺物（第17～19・23図、図版四・五）

１面

土坑0211：調査区北端(２－Ⅰ区)で検出した。内部からは、17世紀の瓦質土管**184**のほか、土師器・瓦器や青磁碗の小片が少量出土している。

土坑0212～0215：調査区南部(２－Ⅲ区)で検出した。４基の土坑は、0.5～0.6m程度のほぼ等間隔で北北東－南南西に並んでいる。遺物は出土していない。

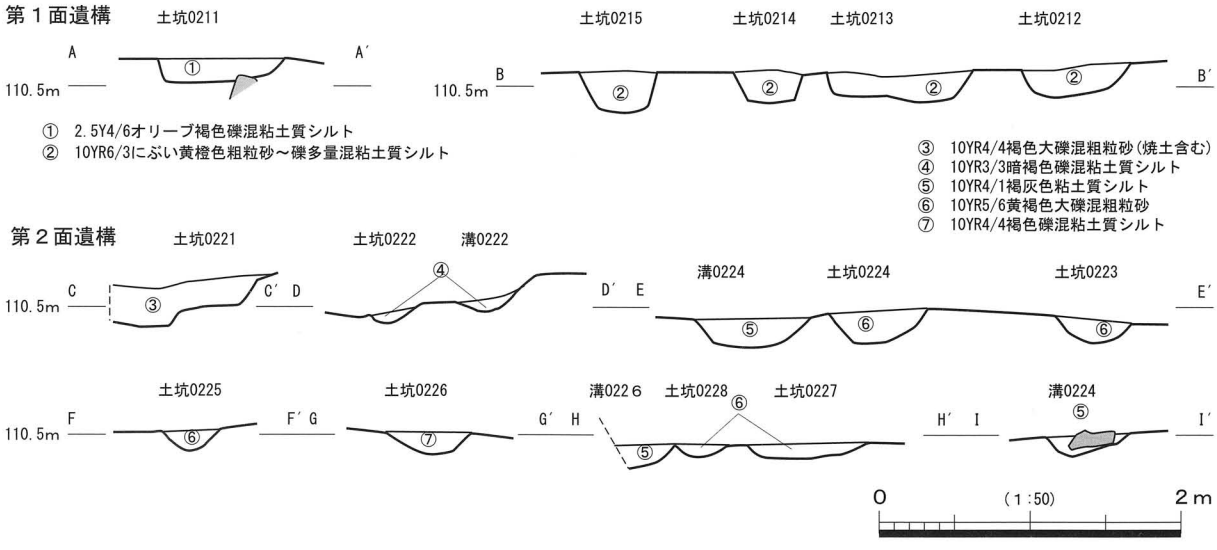
溝0211：調査区中央部(２－Ⅱ区)で検出した。方向は**土坑0212～0215**と同方向である。

落込み2011：調査区中央部で検出したが、明確なラインは検出できなかった。最終的に検討した結果、調査区中央部が高く北・東・南へ下がっているようである。

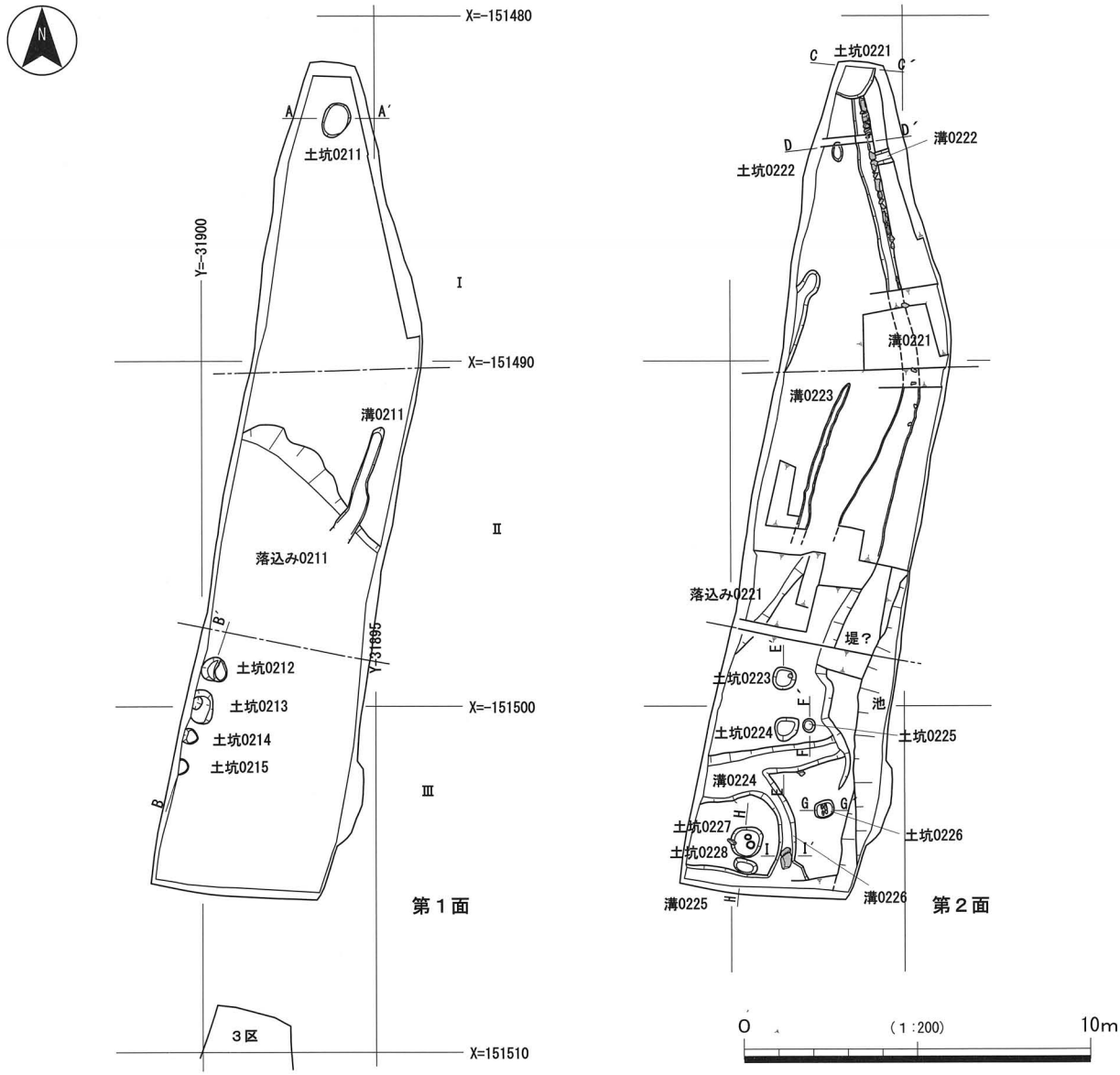
２面

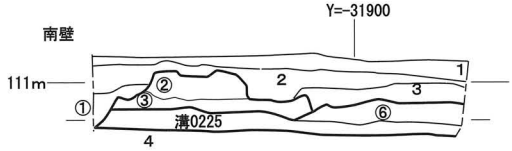
土坑0221：調査区北部で検出した。底には焼土が堆積しており、土師器・瓦器の小破片を少量含んでいる。

土坑0222：**土坑0221**から南２m地点で検出した小土坑で、柱根等の痕跡はなく、遺物の出土もなかった。



第17図　２区遺構断面図





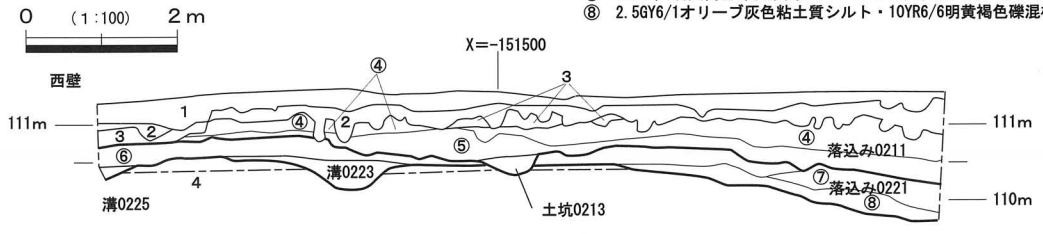
1　10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
2　10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～礫混極細粒砂
3　10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～礫混極細粒砂に粘土質シルトのブロック
4　10YR6/6明黄褐色礫混砂質シルト

池？
①　2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂混粘土質シルト

堤・道
②　10YR6/6明黄褐色大礫多量混粗粒砂と2.5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロック
③　10YR6/1灰褐色粘土質シルト

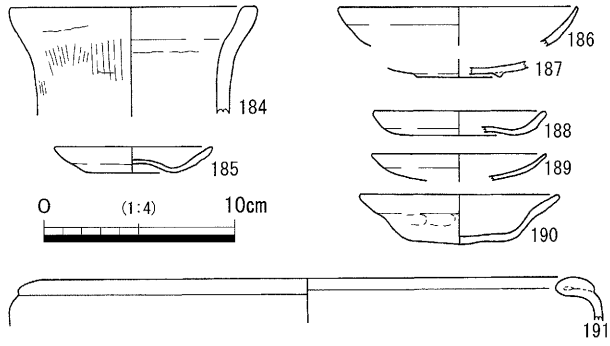
落込み0211
④　10YR6/3にぶい黄橙色粗粒砂～礫混砂質シルト(炭含む)
⑤　10YR6/6明黄褐色礫混砂質シルト～極細粒砂

落込み0221
⑥　10YR4/1褐灰色礫混極細粒砂・10YR6/1灰褐色極細粒砂のブロック
⑦　10YR6/6明黄褐色礫混砂質シルト・10YR4/1褐灰色礫混砂質シルトのブロック
⑧　2.5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト・10YR6/6明黄褐色礫混極細粒砂のブロック



第18図　２区平断面図

土坑0223～0228：調査区南部で検出した。土坑は径0.3～1.0m程度、深さ0.2m前後で、まとまりを欠いている。**土坑0223・土坑0226**の底には石があり、**土坑0227**には柱根状の窪みがみられる。



第19図　２区出土遺物実測図

溝0221：調査区北～中央部にかけて検出した。北端近くに**溝0222**が取り付く。北部では東岸に沿って石が並んでいるが、中央部では途切れている。池の土留めの石垣・または塀の基礎等の施設が考えられる。

溝0222：調査区北部で検出した。**溝0221**から東へ伸び、**溝0221**の排水施設と考えられる。

溝0223：調査区中央部で検出した。方向は第１面遺構と同様、北北東－南南西である。

溝0224：調査区南部で検出した。ほぼ東西に伸び、調査区中央部で南へ分岐し、南端は調査区南端で**溝0225**と合流する。合流点には石があった。**溝0224**の北側に**土坑0223～0225**が、分岐点の南～西に**土坑0227・0228**が位置する。内部から、土師器小皿(へそ皿)**185**ほか、土師器・瓦器・陶器等の小片が出土している。

溝0225：調査区南端で検出した。東西に伸び、**溝0224**との合流点の西部北側に**土坑0227・0228**が位置する。内部から瓦器小皿**188**、土師器小皿**189・190**、同羽釜**191**など14世紀頃の遺物が出土している。

溝0226：調査区南西端で検出した。北北東－南南西に伸び、東岸は池の岸に切られており、**溝0225**を切っている。

落込み0221：１面の**落込み0211**同様、明確には検出できなかった。北西下がりの様相を示す。埋土は３層のブロックからなり、埋め立てによる整地がなされたことがわかる。内部からは13世紀頃の瓦器椀**186・187**が出土している。

堤・池：調査区中央以南の東端で検出した。堤は礫混粗粒砂や粘土質シルトなどのブロックで盛られているようである。なお、この堤は１面まで盛り上がっていたようである。

小結

土坑0211出土遺物から、１面は近世の遺構面であることがわかる。２面の**溝0221**の石垣が塀の基礎であれば、溝部分は「雨落溝」と考えることもでき、薗光寺の施設と一部と考えることができる。南部で検出した土坑・溝から、調査区付近が比較的生活に密着した場であったようである。また、青磁の小破片なども若干出土していることから、富裕層(寺院・神社)の生活の場であったとも考えられる。

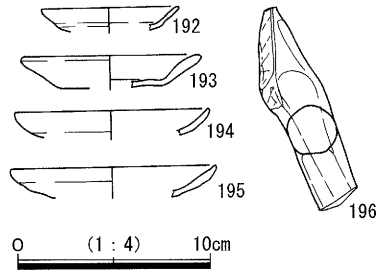
３区の概要

調査期間：平成16年7月14日～10月25日

調査面積：164.75㎡

３区は２区から里道をはさんだ南に位置する。ここでも、掘削土の搬出が困難であったため、４分割して調査を行った(３区Ⅰ～Ⅳ)。３区の旧状は畑で、地表面の標高は110.3～110.7mで、

北東から南西へ緩やかに下がっている。１～３層が近年までの作土で、北東部では現地表下0.4～0.6m程度で基盤層である５層に到達する。調査区中央～南では３層上面に近現代のブロックがあり、広範囲に整地されていたことがわかる。ここでは**小穴0301～0304**、**落込み0301**を検出した。



第20図　３区出土遺物実測図

検出遺構と出土遺物（第20・22～23図、図版四・五）

小穴0301～0304：調査区南西部で検出した。検出面は４層上面である。約４m間隔でほぼ南北に並ぶ。**小穴0301・0302**間は、排水溝を掘削したため、検出できなかったが、この位置にも小穴はあったものと推定される。小穴は径0.4m・深さ0.4m、底は平らである。

落込み0301：調査区南部で５層が南西へ下がるのを確認した。自然地形の落込みである。②層ブロック層に焼土・炭・土器の極小片、③層にも焼土を含み、上層部は埋め立てられたものと考えられる。最深部は検出面より１m程度下がり、標高109m程度である。

３層出土遺物：遺物はおもに調査区南部（３区－Ⅳ）の３層から、土師器小皿**192～195**、瓦器羽釜**196**など13～14世紀の土器類が出土している。

小結

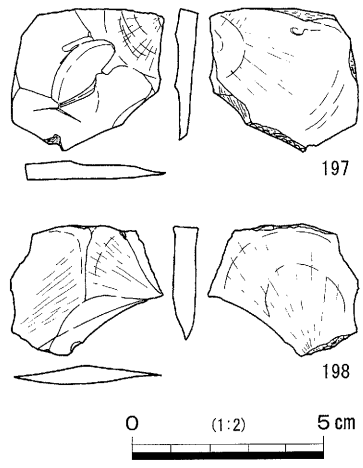
落込み0301上部が人為的に埋められていること、４層上面で遺構が構築されていること、３層上面で整地が行なわれていること、３層中に13世紀以降の遺物が含まれていることなどから、開墾されたのは13世紀前後と考えられる。それ以後、近世～近代に整地されて現代の耕地の景観になったものと考えられる。

４区の概要

調査期間：平成16年９月15日～９月28日

調査面積：８㎡

４区は３区と同じ畑地、３区から西10m程度に位置する。地表面の標高は109.2～109.8mで、南東が高く北西が低い。３区同様の堆積状況で、３区で基盤層とした５層以下の地層６層も確認した。５層上面では**落込み0401**を検出した。



第21図　４区出土遺物実測図

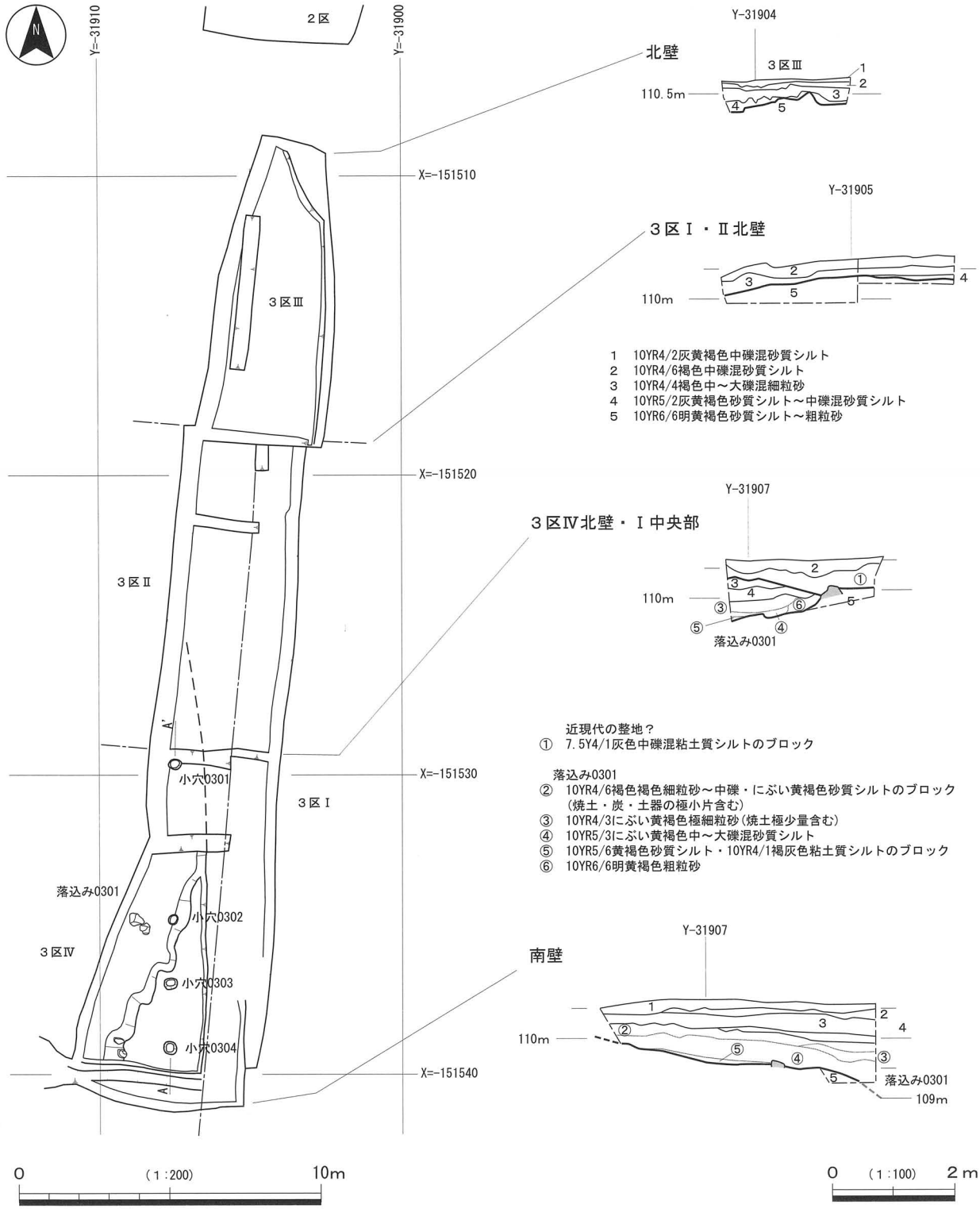
検出遺構と出土遺物（第21・23図、図版四・五）

落込み0401：３区で検出した**落込み0301**の北西の延長である。最深部は検出面から1m程度低く、標高108.6mを測る。最下で確認した６層も南西へ下がっている。

５層直上出土遺物：５層直上からは、サヌカイト剥片**197・198**が出土している。時期は不明であるが、縄文時代～弥生時代のものかと考えられる。

小結

３区から連続した落ち込みを検出することができ、旧地形を復元することができた。また、サヌカイト剥片の出土は、近隣に縄文時代～弥生時代の生活痕があることを示唆している。

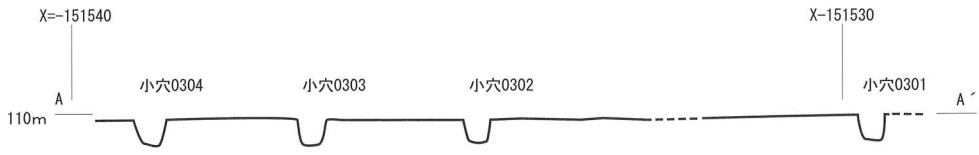


1 10YR4/2灰黄褐色中礫混砂質シルト
2 10YR4/6褐色中礫混砂質シルト
3 10YR4/4褐色中～大礫混細粒砂
4 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト～中礫混砂質シルト
5 10YR6/6明黄褐色砂質シルト～粗粒砂

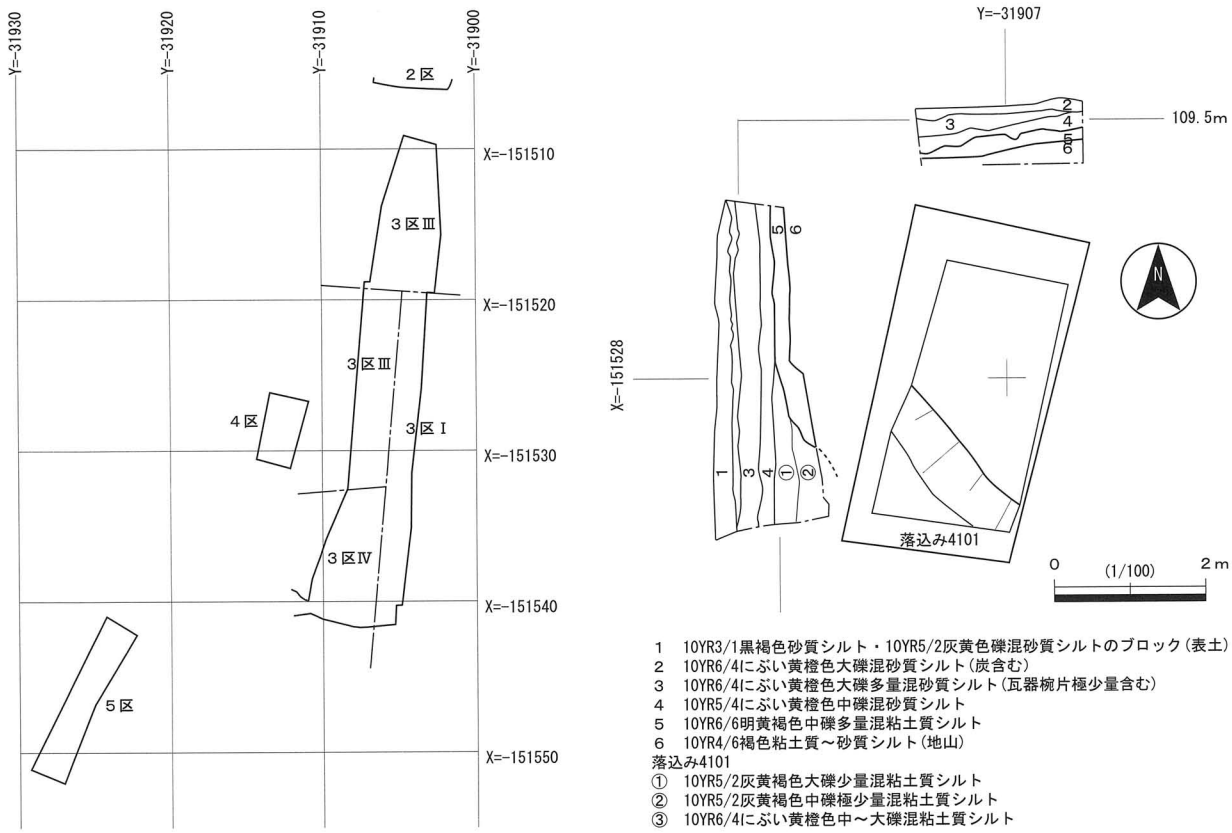
近現代の整地？
① 7.5Y4/1灰色中礫混粘土質シルトのブロック

落込み0301
② 10YR4/6褐色褐色細粒砂～中礫・にぶい黄褐色砂質シルトのブロック
（焼土・炭・土器の極小片含む）
③ 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂（焼土極少量含む）
④ 10YR5/3にぶい黄褐色中～大礫混砂質シルト
⑤ 10YR5/6黄褐色砂質シルト・10YR4/1褐灰色粘土質シルトのブロック
⑥ 10YR6/6明黄褐色粗粒砂

小穴0301～0304断面図
（3層下面）



第22図　3区平断面図



第23図　２～５区位置図・４区平断面図

５区の概要

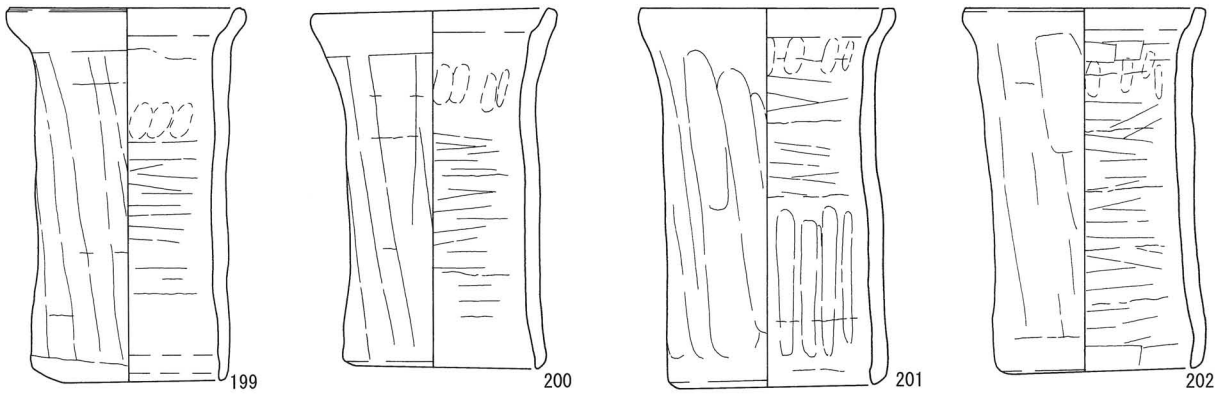
調査期間：平成16年9月17日～10月4日

調査面積：22㎡

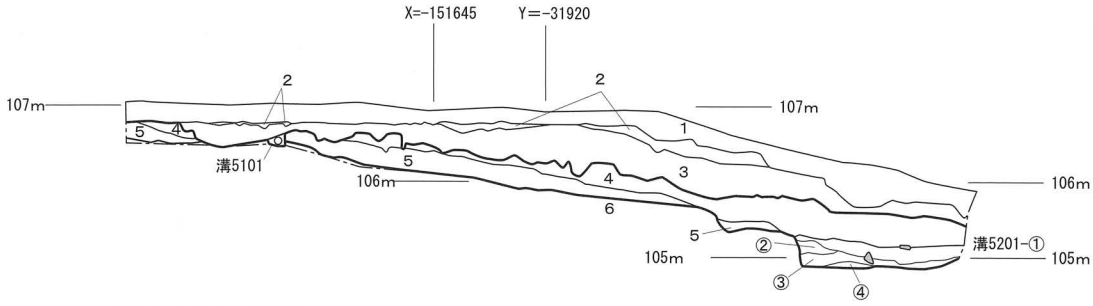
５区は３・４区のある畑地から、里道を挟んで20m程度南西に位置する。調査地の旧状は花畑で、地表面の標高は106～107m前後で南西下がり、西端は道路に接している。１～３層までが作土で、４層上面で**溝5101**、６層上面で南北の**溝5201**(河川・谷)を検出した。

検出遺構と出土遺物（第23～25図、図版七）

溝5101：調査区北部で検出した。３層によって削られている部分がある。内部には17世紀の瓦質土管**199～202**が組み込まれ、東から西への排水溝となっている。



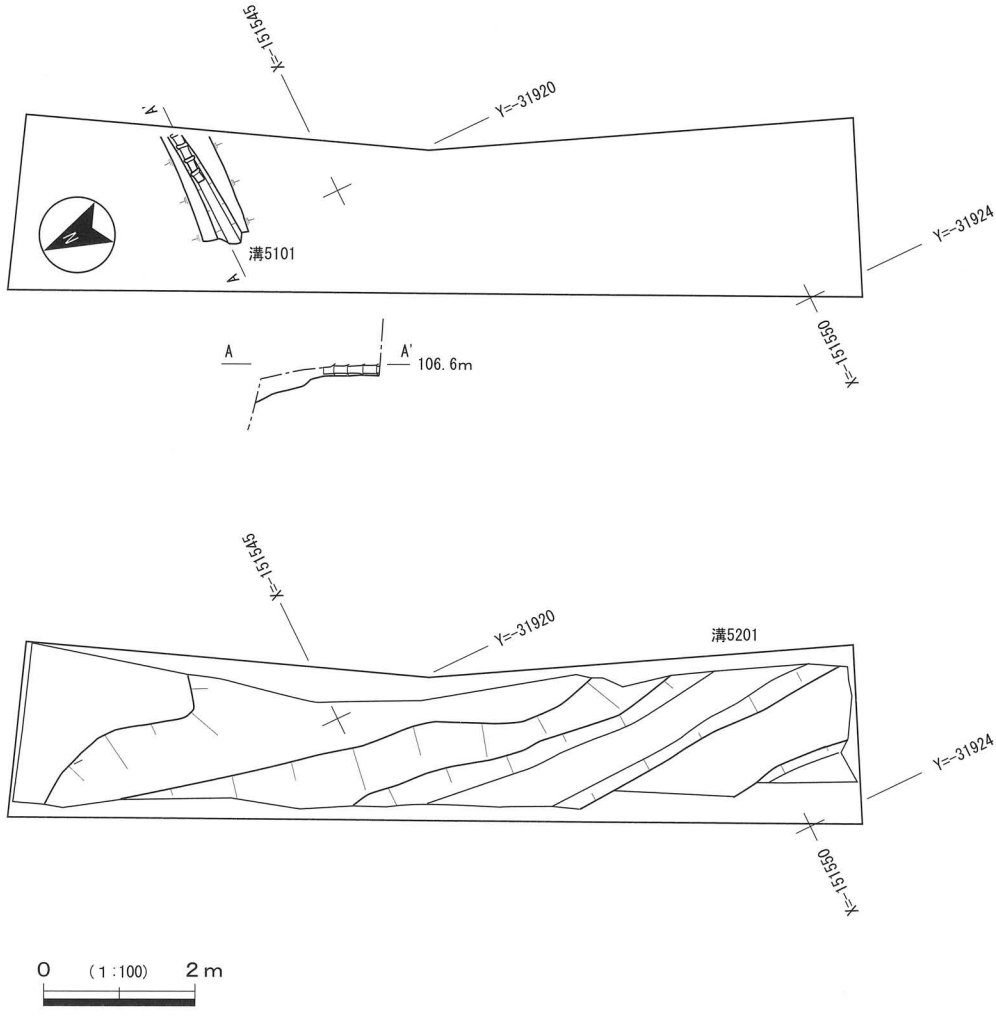
第24図　５区出土遺物実測図



1　10YR5/1褐灰色粗粒砂～礫混砂質シルト(作土)
2　10YR4/6黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
3　10YR5/1褐灰色～10YR3/4暗褐色粗粒砂～礫混砂質シルトのブロック(作土)
4　10YR3/4暗褐色～10YR5/2灰黄褐色礫混砂質シルトのブロック
5　10YR3/4暗褐色～10YR5/2灰黄褐色大礫混砂質シルト
6　10YR3/4暗褐色粘土質シルト・2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトのブロック

溝5101
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト～極細粒砂の互層

溝5201
①10YR5/2暗灰黄色粘土質シルトと極細粒砂の互層
②10YR6/6明黄色極細粒砂と2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトのブロック
③10YR5/1灰褐色極細粒砂と10YR7/1灰色粘土質シルトの互層に大礫
④10YR6/6明黄色極細粒砂



第25図　5区平断面図

溝5201：北東端を頂点として、調査区全体が西へ階段状に下がっている。南西端で流水堆積を検出した。階段状の落ちは緩やかで自然地形と考えられるが、南端の落ちは直線的であるため、人為的にカットしたものと考えられる。

小結

溝5101は、畑地を設営する際に排水溝として開削されたもので、内部の瓦質土管から、その時期が決定できた。前述の２～４区の整地の時期も、おおむね同時期であろう。**溝5201**は河川・谷・崖などの自然地形に手を加えたもので、大規模な開墾が近世以前に行なわれたことがわかる。

６・７区の概要

調査期間：６区　平成17年１月14日～２月６日　**調査面積**：66㎡

７区　平成17年１月６日～１月31日　48㎡

６・７区は５区から約100m南西、芝塚古墳石室位置の道路東際である。調査区間は里道を挟んで１m程度の段差がある。６区の旧状は植木畑で地表面の標高は102.5～103.5mで北西下がり、７区は花畑で地表面の標高は102m前後でほぼ平坦である。両調査区とも１～４層までが作土で、５～８層にはブロック層や互層がある。また、６区全域と７区北端・南端には夥しい量の大石が集積していた。６区では９層上面で**溝0601**を、７区では８層上面で**溝0701**、９層上面で**溝0701**を検出した。

検出遺構と出土遺物（第26～28図、図版六）

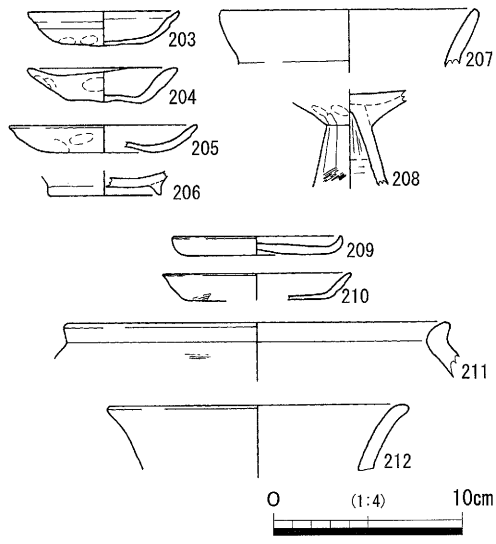
溝0601：調査区北部で検出した。ゆるい弧を描いて南東－北西方向に伸びる。埋土はブロック層の①・②層からなる。９層上面レベルは、101.5～101.8mで、溝の南西側が高い。

溝0701：調査区西部で検出した。ほぼ南北に伸びる。

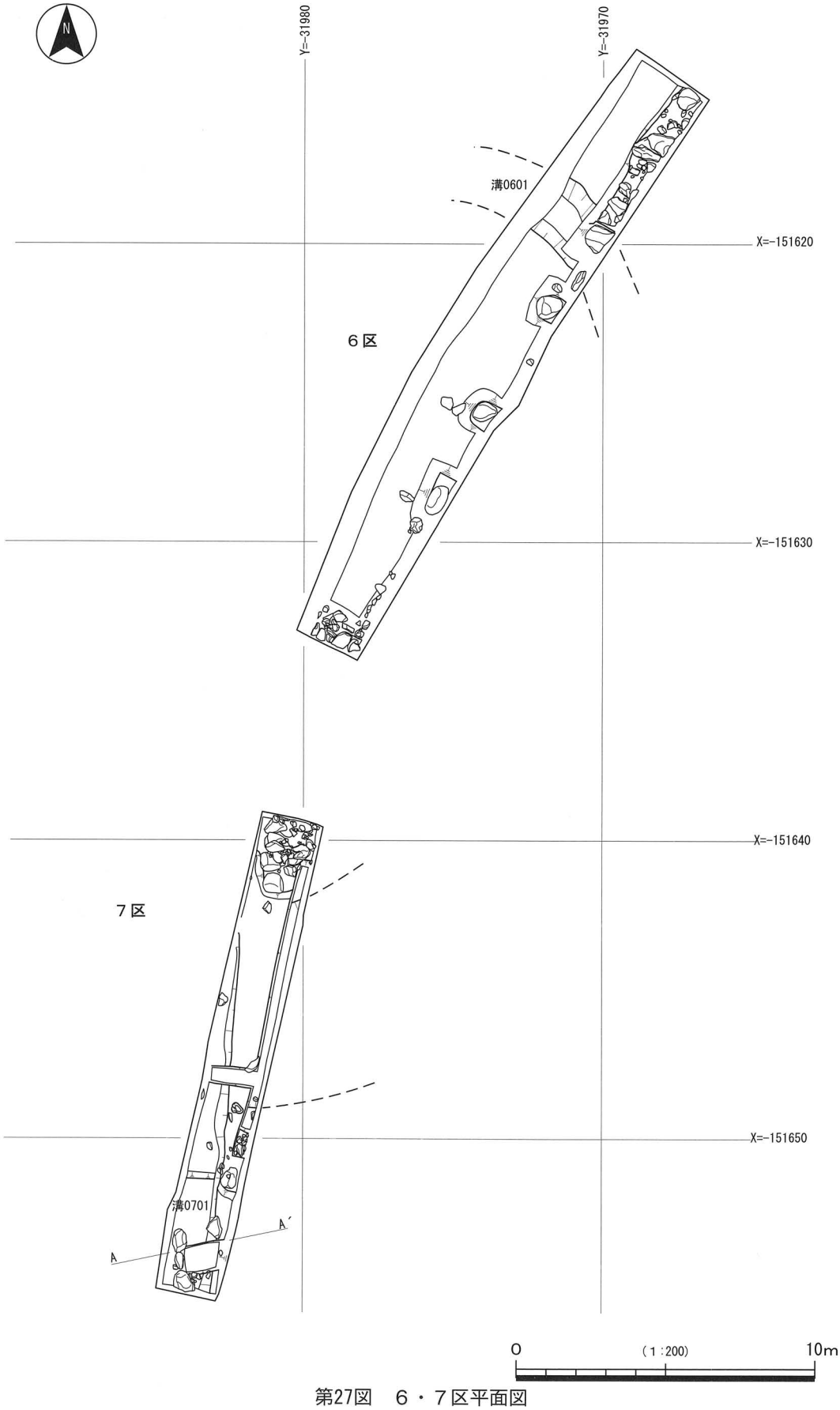
溝0702：調査区中央部、側溝内で検出した。東西からやや北寄りに伸びる。最上層の埋土は④層互層で、下部にはブロック層⑤～⑦層が堆積する。９層上面レベルは101.2～101.3mで、北西側が若干高い。

６区出土遺物：北部の石の集積中から土師器小皿**203**、瓦器椀**206**、南部の石の集積中から土師器小皿**204**・**205**のほか、青磁や瓦の小片が出土した。いずれも13世紀代のものである。また、中央部の石の集積からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の壷**207**も出土している。石の集積は、６層に対応するものと考えられる。一方、９層直上からは、土師器高杯**208**が出土している。高杯**208**は、柱状部内面にケズリが見られることから、５世紀代のものと考えられる。

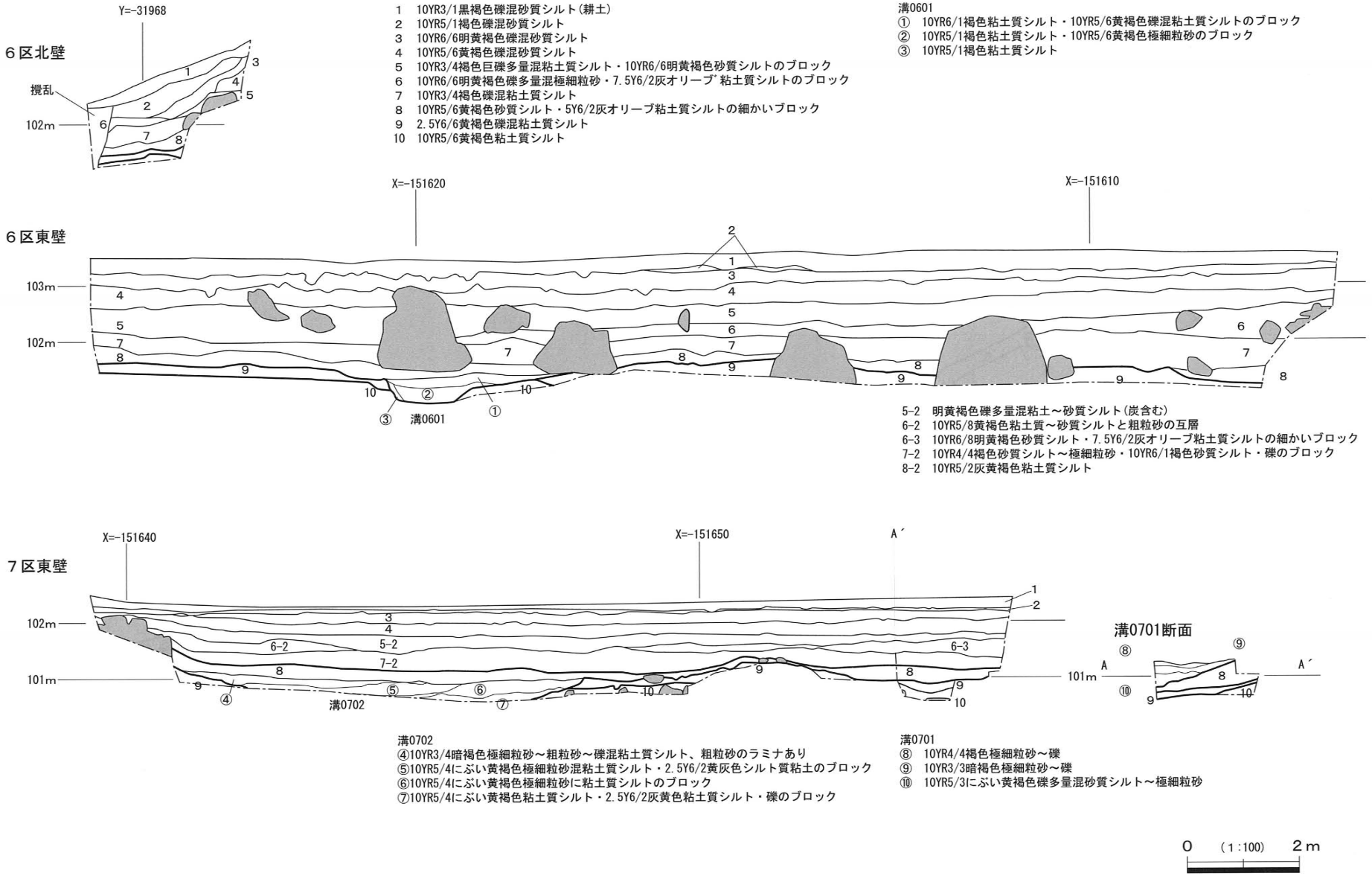
７区出土遺物：北部の石の集積から6－2層中にかけて、13世紀の土師器小皿**209**・**210**、同羽釜**211**、瓦器椀、弥生時代後期～古墳時代前期の壷**212**などが出土している。



第26図　６・７区出土遺物実測図


N
Y=-31980
Y=-31970
溝0601
X=-151620
6区
X=-151630
X=-151640
7区
X=-151650
溝0701
A
A´
0
(1:200)
10m

第27図　6・7区平面図



1 10YR3/1黒褐色礫混砂質シルト(耕土)
2 10YR5/1褐色礫混砂質シルト
3 10YR6/6明黄褐色礫混砂質シルト
4 10YR5/6黄褐色礫混砂質シルト
5 10YR3/4褐色巨礫多量混粘土質シルト・10YR6/6明黄褐色砂質シルトのブロック
6 10YR6/6明黄褐色礫多量混極細粒砂・7.5Y6/2灰オリーブ粘土質シルトのブロック
7 10YR3/4褐色礫混粘土質シルト
8 10YR5/6黄褐色砂質シルト・5Y6/2灰オリーブ粘土質シルトの細かいブロック
9 2.5Y6/6黄褐色礫混粘土質シルト
10 10YR5/6黄褐色粘土質シルト

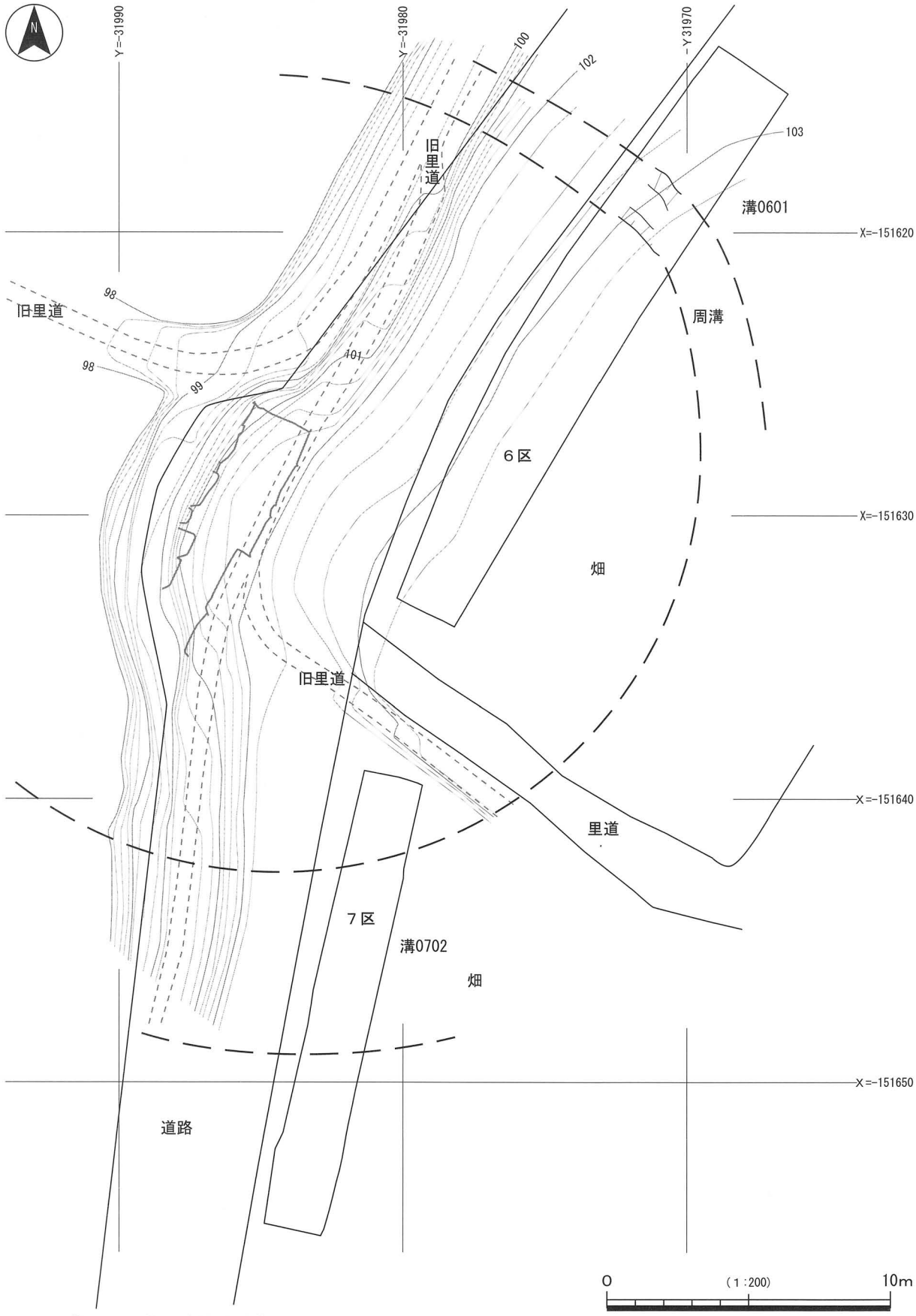
溝0601
① 10YR6/1褐色粘土質シルト・10YR5/6黄褐色礫混粘土質シルトのブロック
② 10YR5/1褐色粘土質シルト・10YR5/6黄褐色極細粒砂のブロック
③ 10YR5/1褐色粘土質シルト

5-2 明黄褐色礫多量混粘土～砂質シルト(炭含む)
6-2 10YR5/8黄褐色粘土質～砂質シルトと粗粒砂の互層
6-3 10YR6/8明黄褐色砂質シルト・7.5Y6/2灰オリーブ粘土質シルトの細かいブロック
7-2 10YR4/4褐色砂質シルト～極細粒砂・10YR6/1褐色砂質シルト・礫のブロック
8-2 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト

溝0702
④10YR3/4暗褐色極細粒砂～粗粒砂～礫混粘土質シルト、粗粒砂のラミナあり
⑤10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂混粘土質シルト・2.5Y6/2黄灰色シルト質粘土のブロック
⑥10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂に粘土質シルトのブロック
⑦10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト・礫のブロック

溝0701
⑧ 10YR4/4褐色極細粒砂～礫
⑨ 10YR3/3暗褐色極細粒砂～礫
⑩ 10YR5/3にぶい黄褐色礫多量混砂質シルト～極細粒砂

第28図　6・7区断面図



第29図　芝塚古墳墳丘復元図（『高安古墳群　芝塚古墳　（財）八尾市文化財調査研究会報告』より抜粋・加筆）

小結

溝0601・0702は芝塚古墳の周溝の可能性が高く、復元すると墳丘の径は28mにも達する。周溝幅は溝0601では2.5m、溝0702では6.5mと北～東が狭く、南～西が広くなるが、これは北東が高く南西か低い旧地形に由来するものと考えられる。多量の石の集積は、古墳破壊時のものと考えられ、おおむね13世紀頃に開墾による大規模な破壊があったものと考えられる。

８区の概要

調査期間：平成16年６月28日～７月１日

調査面積：４㎡

８区は７区から約50m南、道路から１段下がった畑に位置する。地表面の標高は98.1m前後である。１・２層が作土で３層が基盤層にあたる。３層上面で溝0801を検出した。

検出遺構と出土遺物（第30図、図版七）

溝0801：東西－南北にＬ字型に曲がる。２層中から須恵器片、３層中から土師器片が出土した。

小結

溝0801は方位に則って開削されていることから、地区割りなどのために開削された可能性が高い。

９区の概要

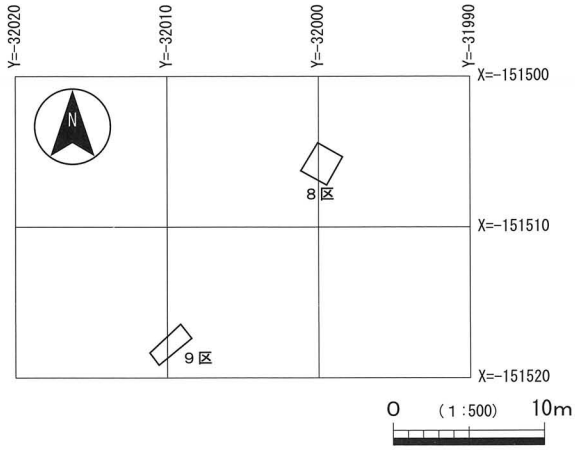
調査期間：平成16年６月29日～７月１日

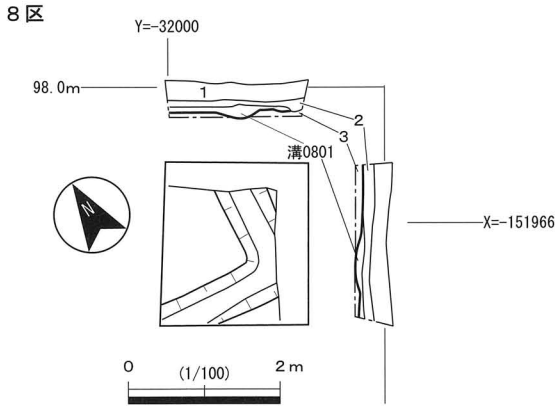
調査面積：４㎡

９区は８区から南西20m地点に位置する既存農道の北西側の高まりである。調査地の現状は荒地で、現地表面の標高は99.9m前後である。１層は近年のゴミ混じりの地層で、２層はブロック層、３・４層が自然堆積土、５層が基盤層にあたる。ここでは、５層上面で落込み0901を検出した。

検出遺構と出土遺物（第30図、図版七）

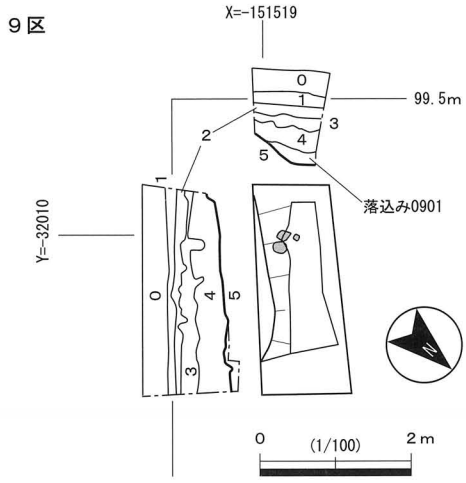
落込み0901：５層上面が北西方向へ下がるの





1　2.5Y4/2暗灰黄色中礫混砂質シルト（表土・旧耕土）
2　2.5Y5/2暗灰黄色巨礫混砂質シルト～粗粒砂
3　2.5Y5/6黄褐色巨礫混粗粒砂

溝0801
2.5Y5/1黄灰色巨礫混粗粒砂



1　2.5Y4/3オリーブ褐色礫混砂質シルト
（ビニール・大礫混粘土質～砂質シルトプラスティック等含む）
2　2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂～大礫混粘土質シルト～砂質シルトのブロック
3　2.5Y4/4オリーブ褐色粗粒砂～大礫混砂質シルト
4　2.5Y4/6オリーブ褐色粗粒砂～巨礫混砂質シルト～極細粒砂
（土器片極少量含む）
5　2.5Y6/6明黄褐色中～巨礫混粘土質～砂質シルト

落込み0901
2.5Y5/1黄灰色極細粒砂（炭含む）

第30図　８・９区位置図・平断面図

を確認した。埋土には炭を含む。また、２層から内面に施釉された陶器燈明皿・４層から土師器の極小片が出土している。

小結

３層以下が落込み埋土になる可能性がある。

10区の概要

調査期間：平成16年６月28日～11月４日

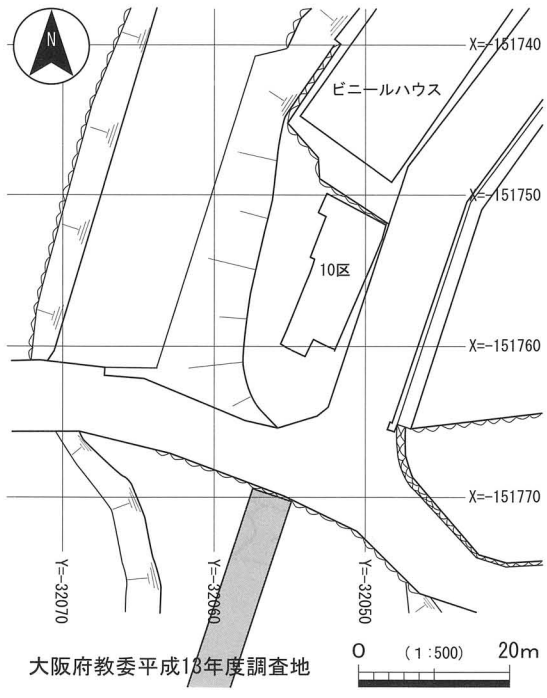
調査面積：37.9㎡

10区は９区から約70m南西、神立地区の既存農道終点の三叉路北西側に位置する。東西道路を挟んだ南には、大阪府教委平成13(2001)年度調査地が位置する。調査地の現状は植木畑で、西へは崖状に落ちている。現地表面の標高は96.5m前後である。ここでは、当初幅２m・長さ８mの調査区を設定して調査を実施したところ、現地表より0.3mほど下の４層上面で、近世の遺構面が検出された。調査区の北東端では、巨石が数個認められたため、下層の状況を確認するためにさらに掘り進めたところ、調査区東壁に沿って巨石が南北に一線に並んでいるのが認められた。さらに巨石の間には、多量の土砂や礫、12～13世紀(平安時代末期～鎌倉時代)の土器類があり、その下部に古墳の石棺材である凝灰岩が確認できたため、古墳石室の可能性が高まった。ところが、調査区が狭く、古墳石室であるとしても、玄室か羨道かの判断もできなかったことから、北側へ３×1.5m拡張した。その結果、袖部分が現われ、玄門部分の仕切り石なども検出でき、右片袖式の横穴式石室の羨道と玄室の一部を検出するに至った。古墳名称は小字名から「芝塚２号墳」(八尾市教委では「神立８号墳」)とした。さらに、羨門部分の状況や側石の設置状況などを確認するために北西は0.5×３m・南は１×２m・東は1.5×９mを拡張した。その結果、東側壁の裏込めの状況などが確認できた。

１～３層が盛土、４・５層作土、６層は墳丘盛土の、７層は側壁抜取痕の可能性があり、８層が基盤層である。玄室には礫を多量に含む⑨層、羨道北部北半～玄室にかけては、礫・大石・石棺材を極めて多量に含む⑩層があり、石棺痕跡と思われる⑪層を玄室・羨道北部で確認した。

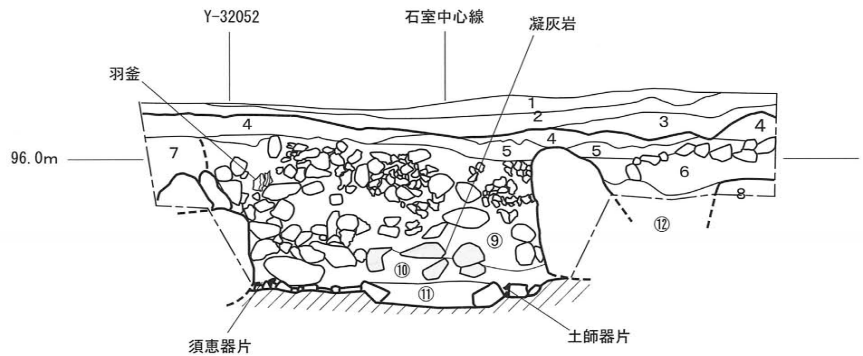
検出遺構と出土遺物(第31～40図、図版八～一三、四二～四九)

石室：石室は右片袖式の横穴式石室で、南側に開口している。石室の主軸方向は、北から21°東へ振っている。側壁は１段のみ遺存していた。検出長約６m、玄室長0.7m以上・玄室幅1.9m、羨道長4.7～5.2m以上・幅1.4～1.6mで、側壁の高さは0.6～１m程度、幅0.7～1.2m程度である。玄門には仕切り石４つが水平に据えられている。仕切り石の大きさは幅0.3～0.6m・長さ0.2m前



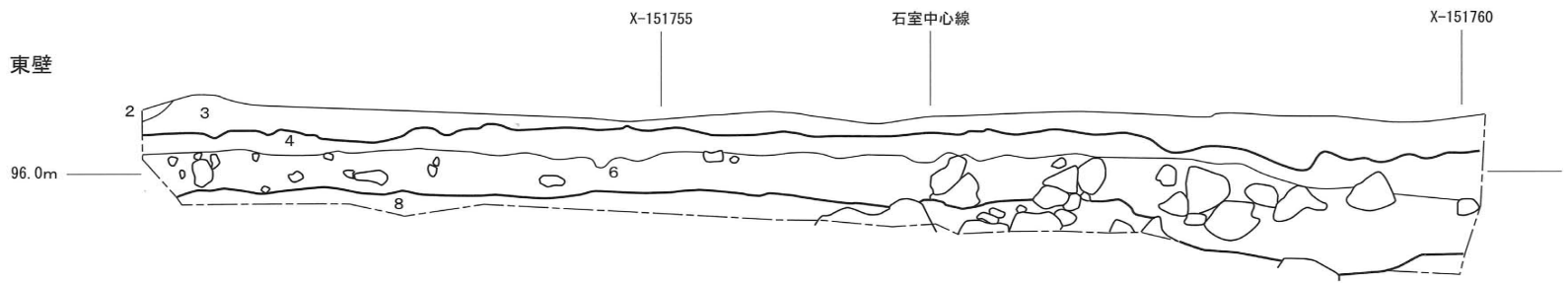
第31図　10区位置図

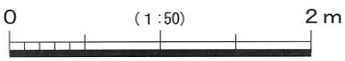
北壁



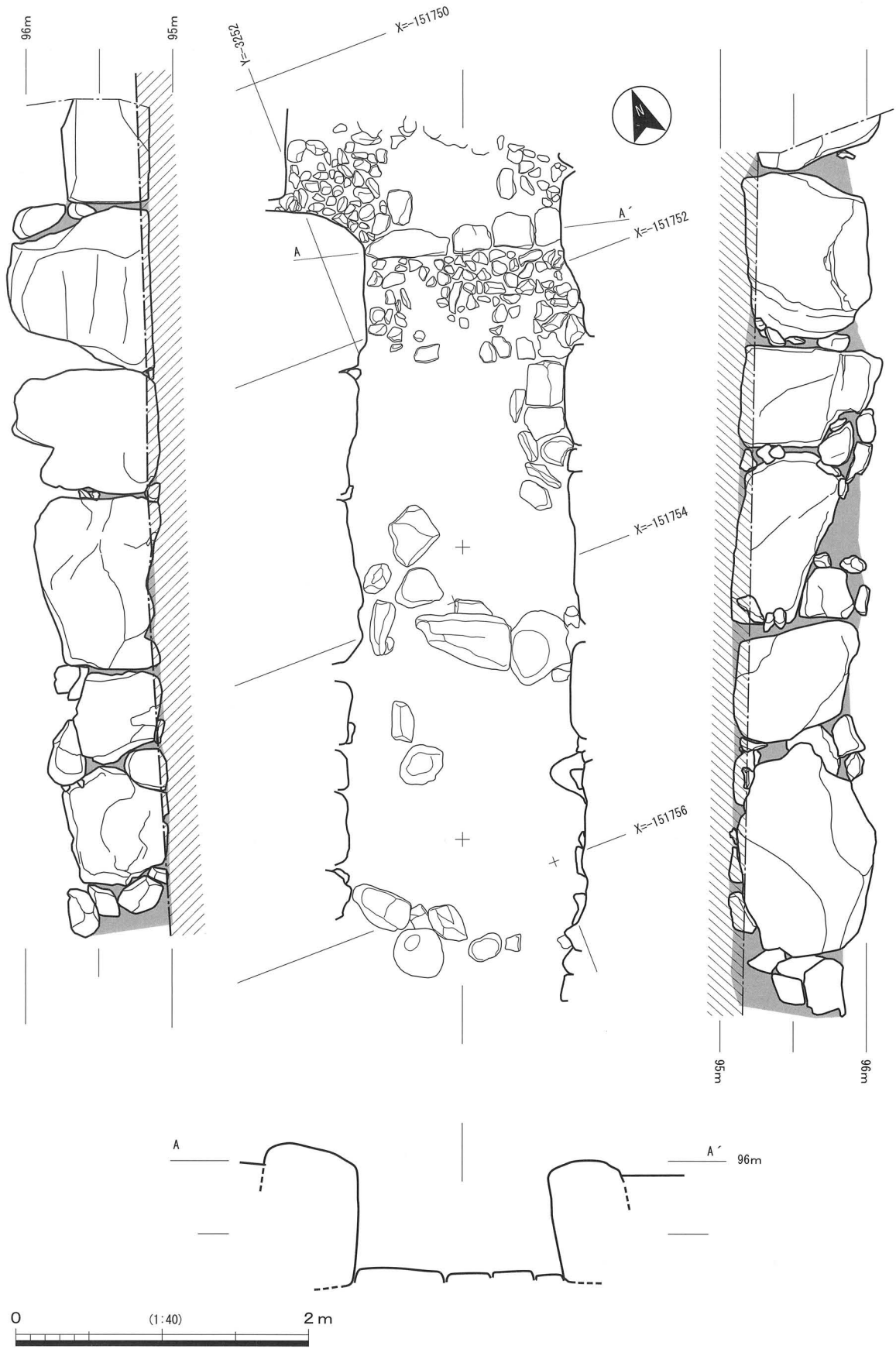
1　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト・中礫のブロック(盛土)
2　10YR3/2黒褐色礫混砂質シルト
3　10YR6/4にぶい黄橙色礫混極細粒砂
4　10YR4/1褐灰色礫混砂質シルト(作土)
5　10YR5/4にぶい黄褐色礫混砂質シルト(床土)
6　10YR6/3にぶい黄橙色大～巨礫・10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルトのブロック(墳丘盛土？)
7　10YR6/3にぶい黄橙色粘土質シルト・砂質シルト礫・のブロック(側石抜痕？)
8　10YR5/6黄褐色大礫多量混極細粒砂
⑨　10YR5/3にぶい黄褐色礫多量混砂質シルト
⑩　10YR6/3にぶい黄橙色礫混砂質シルト
⑪　10YR6/1灰褐色砂質シルト(石棺痕跡？)
⑫　10YR5/6黄褐色極細粒砂～中粒砂(側石裏込め？)

東壁





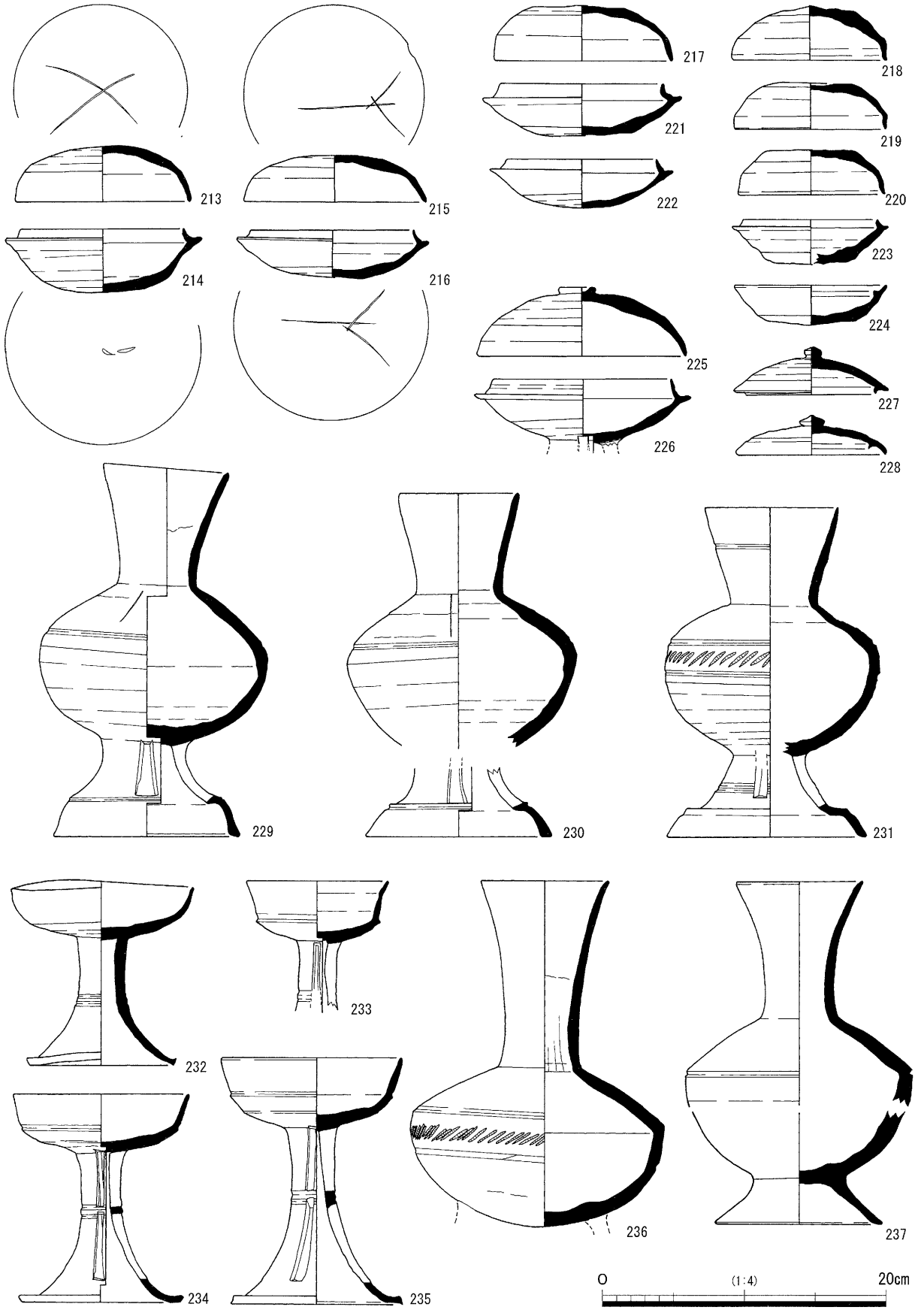
第32図　10区断面図



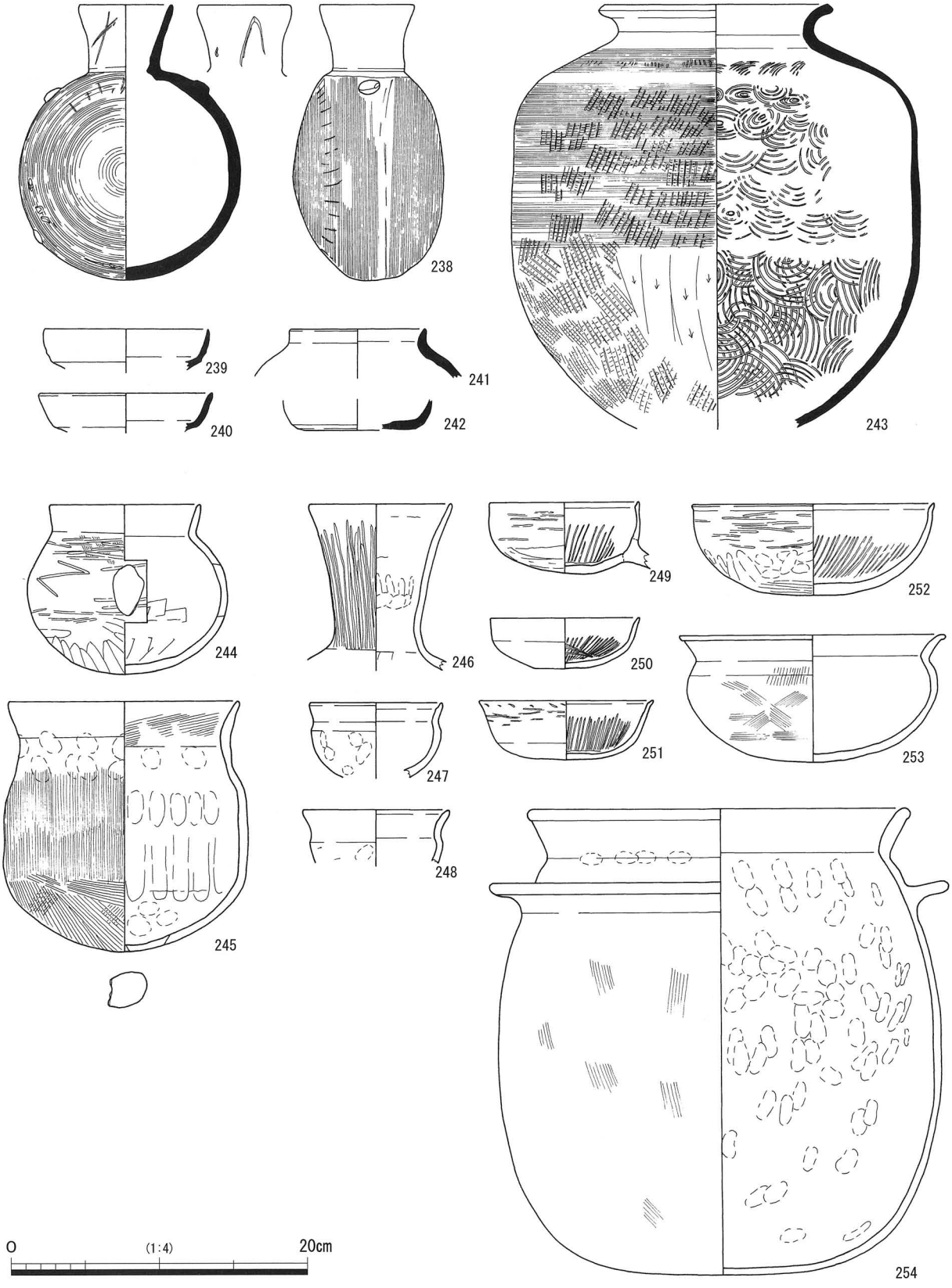
第33図　10区芝塚２号墳石室平面図・立面図

Y=32054
Y=32052
X=151752
Y=32050
X=151752
X=151754
X=151756
Y=32056
X=151758
X=151760
N
0
(1:50)
2m

第34図　10区平面図



第35図　10区出土遺物実測図－１

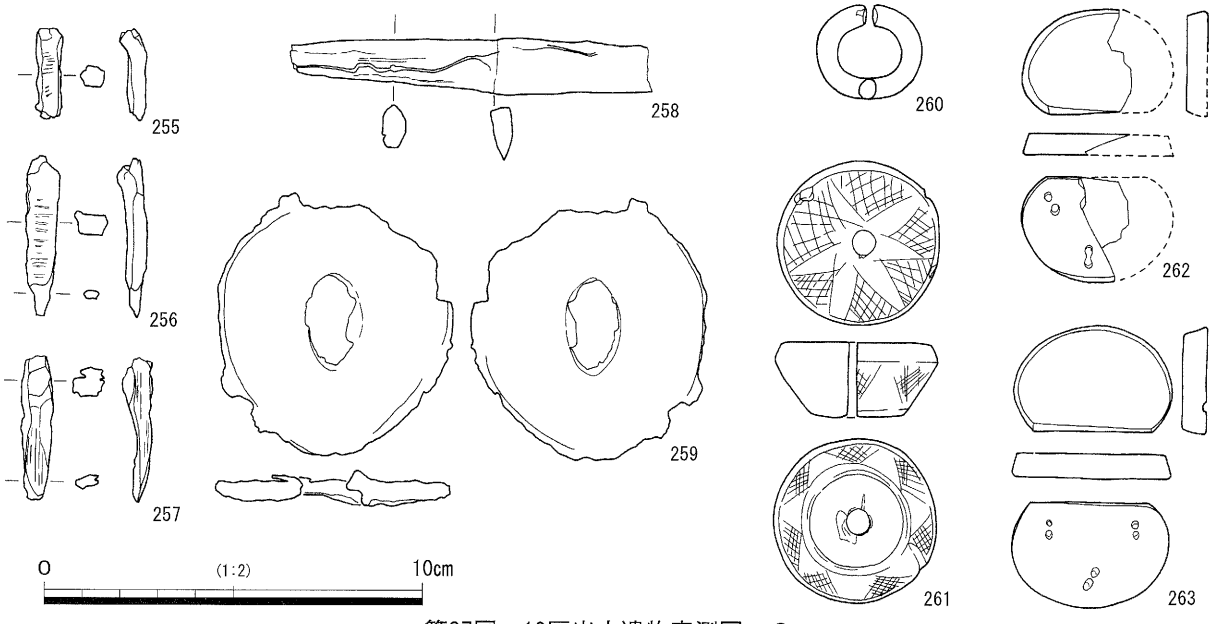


第36図　10区出土遺物実測図－２

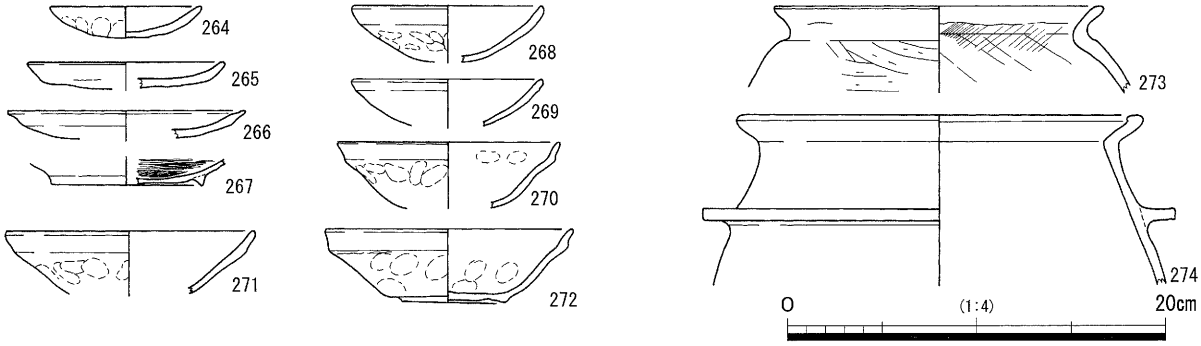
後、厚さ0.07～0.1mである。床面には、５～10cm程度の敷石が遺存しており、仕切り石の北側にはやや大ぶりの石が置かれ、その付近の空間が石棺の痕跡と考えられる。玄門から南約2.8mにも仕切り石または閉塞石が置かれている。大きさは幅0.2～0.6m・長さ0.2～0.5m・厚さ0.2m程度である。敷石は玄門から南0.6m程度の範囲にしか遺存していなかった。敷石南端から東側壁にかけて、玄室同様大ぶりの石がＬ字型に据えられており、ここにも石棺が位置していたものと考えられる。また、この部分からは釘・鏃が出土していることから、木棺が存在していたことも考えられる。そこからさらに南へ約２m地点にも径0.2～0.3m前後の石の列が見られ、側壁の南端と一致していることから閉塞石の可能性が高い。

側壁掘形：東拡張部で、側壁の外側0.4～0.7mを基盤層である８層を垂直近くに切り込むラインを検出した。深さは10cm程度しか確認できていないが、内部は⑫層極細粒砂～中粒砂で充填されている。８層上面の標高は95.3～95.9mで、側壁の途切れる部分から南へ１段下がっており、掘形もなくなる。それ以南は礫の集積となる。

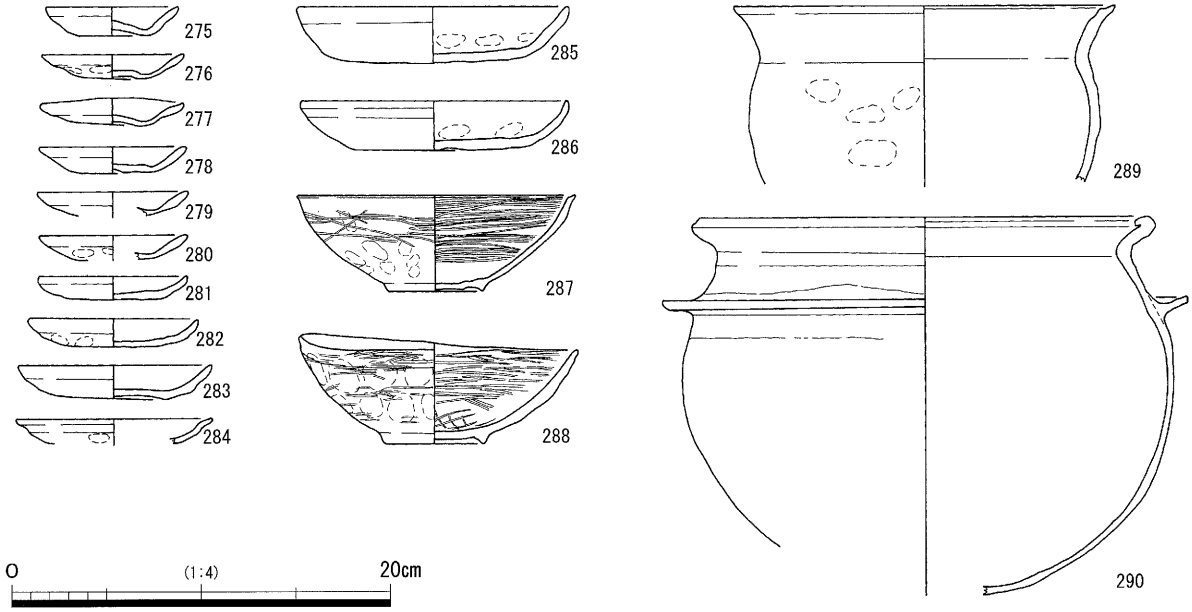
出土遺物：床面近くからの出土遺物には古墳時代後期中葉～飛鳥時代中葉まで(６世紀中葉～７世紀後半)の須恵器213～243・土師器244～245のほか、釘(鏃)255～257・刀子258・大刀の鐔259・耳環260などがある。出土状況の明らかなものは、玄室袖部分・羨門部の東西側壁際・石棺痕跡の周囲にまとまりがある。袖からまとまって出土したものは、須恵器杯蓋227・同台付長頸壷232・同無蓋高杯234～236・土師器小型壷244で、玄室東側壁際からは須恵器無蓋高杯237が単独で出土している。羨道北部の床面では、西側壁際から、セットになると思われる須恵器杯蓋215・同杯身216が出土している。また、石棺痕跡周辺からは、須恵器杯蓋213・同杯身214のセットのほか、同杯蓋220・同杯身221・同有蓋高杯226・同台付長頸壷231・刀子258・釘(鏃)255・257、耳環260、東壁際からは太刀の鐔259が出土している。羨道南部の区画からは、須恵器杯蓋217・218・同高杯蓋225・土師器甕245・同把手付小型杯249・同鉢252・253が出土している。須恵器杯身224、同台付長頸壷229～231・233、土師器羽釜254などは、石室全域の玄室～羨道にかけて、散乱した状態で検出されている。その他、滑石製の紡錘車261が羨道南部の上層から出土



第37図　10区出土遺物実測図－３



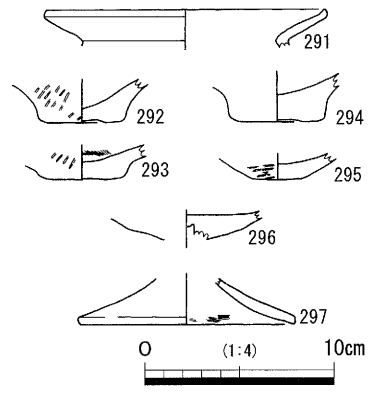
第38図　10区出土遺物実測図－４



第39図　10区出土遺物実測図－５

している。

平安時代以降の出土遺物：⑨・⑩層からは、平安時代以降の遺物が出土しており、おおむね平安時代前期（９～10世紀）・平安時代末期～鎌倉時代(12～13世紀)頃に分かれる。平安時代前期の遺物には石製銙帯(丸鞆)262・263、土師器皿264～266、黒色土器椀(Ａ類)267、土師器杯268～272、同甕273、同羽釜274のほか、があり、これらは、玄室から羨道北部にかけての上層部から出土している。平安時代末期～鎌倉時代の遺物には、土師器小皿(へそ皿含む)275～284、同中皿285・286、瓦器椀287・288、土師器甕289、同羽釜290などがあり、いずれも羨道北部の石室内で、散乱した石棺材を取り上げた時点でまとまって出土した。



第40図　10区出土遺物実測図－６

弥生時代後期～古墳時代前期初頭の遺物：庄内甕291・295や、弥生時代後期の甕292、同壷293・294、同高杯296・297なども、石室内外の上層部から出土している。

小結

玄室が未検出のため、築造時期は明確にはできないが、出土遺物から見れば古墳時代後期後半には築造されていたと考えられる。古墳築造後、飛鳥時代中葉までに数回の追葬が行われており、追葬の際にはやや大ぶりの石材によって区画されている。羨道北部東側には、石棺の痕跡が見られたが、釘・鋲等の金具もわずかに出土していることから、木棺の存在も比定できない。石製銙帯の出土から、平安時代前半期にも何らかの人為的な接触があったものと考えられる。古墳の破壊は、最新の遺物から、鎌倉時代前半期である。

第４表　10区芝塚２号墳出土遺物一覧表(土器)

番号	器種	法　量(cm)			出土地点	備考
		口径	高さ	底径		
213	須恵器杯身	12.2	4		床面　羨道北部石棺痕跡周囲	天井部にヘラ描きと赤色顔料で「×」印、214とセット
214	須恵器杯身	11.4	4.55		床面　羨道北部石棺痕跡周囲	底部裏面に赤色顔料で「×」印か?
215	須恵器杯蓋	12.8	3.3		床面　羨道北部西側壁際	天井部にヘラ描き「←」印セット、216とセット
216	須恵器杯身	11.5	3.55		床面　羨道北部西側壁際	底部裏面にヘラ描き「←」印
217	須恵器杯蓋	12.4	3.9		羨道～羨門	
218	須恵器杯蓋	10.8	3.8		羨道南部～羨門　⑨層中	
219	須恵器杯蓋	10.65	3.3		羨道内　⑨層中	
220	須恵器杯蓋	10.35	3.15		床面　羨道北部石棺痕跡周囲	
221	須恵器杯身	11.4	3.6		床面　羨道北部石棺痕跡周囲	
222	須恵器杯身	10.4	3.5		羨門以南	
223	須恵器杯身	9.5			玄室～羨道南部　⑨層中	
224	須恵器杯身	10.7	2.8		袖～羨道	
225	須恵器有蓋高杯蓋	14.6	4.9		閉塞付近	
226	須恵器有蓋高杯	12.5			床面　羨道北部仕切石北	
227	須恵器杯蓋	9.1	3.35		床面　袖	
228	須恵器杯蓋	10.3	2.8		羨道北部	
229	須恵器台付長頸壷	8.7	26.4	13	床面　袖・羨道北部石棺痕跡周囲ほか　羨道北部　⑨層中	
230	須恵器台付長頸壷	8.2	13		床面　羨道北部石棺痕跡周囲ほか　羨道全域	
230	須恵器台付長頸壷	9.3	23.3	14.1	床面　袖・羨道北部石棺痕跡周囲ほか	
232	須恵器台付長頸壷	12.7	13.1	10.2	床面　袖	
233	須恵器台付長頸壷	9.9			床面　袖・羨道北部石棺痕跡周囲ほか　羨道全域	
234	須恵器無蓋高杯	12.2	14.7	11.2	床面　袖	
235	須恵器無蓋高杯	12.6	17.45	12.05	床面　袖	

236	須恵器無蓋高杯	8.8	24.4		床面　袖	
237	須恵器無蓋高杯	8.8	11.6		床面　玄室東側壁際	
238	須恵器提瓶	6.2	18.7		羨道南部～羨門	
239	須恵器杯身	11			羨道南部～羨門	
240	須恵器杯身	11.6			羨道南部～羨門	
241	須恵器短頸壷	9.1			羨道南部～羨門	
242	須恵器杯身又は壷	15		7.8	羨門～羨門以南	
243	須恵器甕	10			羨同全域～羨門以南	
244	土師器小型壷	15.45	11.5		床面　袖	腹部に穿孔
245	土師器甕	9.5	16.9		羨門	底部に穿孔
246	土師器長頸壷	8.8			羨道南部～羨門	
247	土師器小型鉢	9.8			玄室～羨道北端	
248	土師器小型鉢	9.9			羨道北端、⑨層中	
249	土師器把手付杯	9.9	4.8		羨門	
250	土師器杯	11.6	3.4		羨道南	
251	土師器杯	16.2	3.95		羨道北	
252	土師器杯	16.9	6.2		羨門	
253	土師器鉢	25	8.5		羨道全域～羨門以南	
254	土師器羽釜	25	31.6		床面　羨道北部石棺痕跡周囲ほか、玄室・羨道全域	

第５表　10区芝塚２号墳出土遺物一覧表(金属製品ほか)

番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
255	釘・鎹	長さ　2.4	幅　0.7	厚さ　0.7	床面　羨道北部石棺痕跡周囲	
256	釘・鎹	長さ　4.25	幅　0.4～0.9	厚さ　0.25～0.5	羨道南部上層	
257	釘・鎹	長さ　3.85	幅　0.4～0.85	厚さ　0.3～0.7	床面　羨道北部石棺痕跡周囲	
258	刀子	長さ　9.6	柄の幅　0.8 刃の幅　1.6	厚さ　0.2～0.6 厚さ　0～0.55	床面　羨道北部石棺痕跡周囲	
259	大刀の鐔	7	孔の長径　2.4 孔の短径　1.5	厚さ　0.5	床面　羨道北部石棺痕跡周囲・東側壁際	
260	耳環	外径(長)　2.5 外径(短)　2.8	内径(長)　1.3 内径(短)　1.7	厚さ 0.45～0.55	床面　羨道北部石棺痕跡周囲	銅製金張
261	滑石製紡錘車	上部径　4 下部径　2.5 最大径　4.4	孔径　0.2～0.25	厚さ　2	羨道南部上層	沈線文様内に赤色顔料塗布
262	石製鋳帯(丸鞆)	最大高　2.7	残存幅　2.8	厚さ　5.5	玄室上層⑨層	潜り孔２孔一対３か(２組残存)石材は石英安山岩質溶結凝灰岩
263	石製鋳帯(丸鞆)	最大高　2.8	幅　3.1～4.15	厚さ　6	羨道北部上層⑨層	潜り孔２孔一対３石材は石英安山岩質溶結凝灰岩

11区の概要

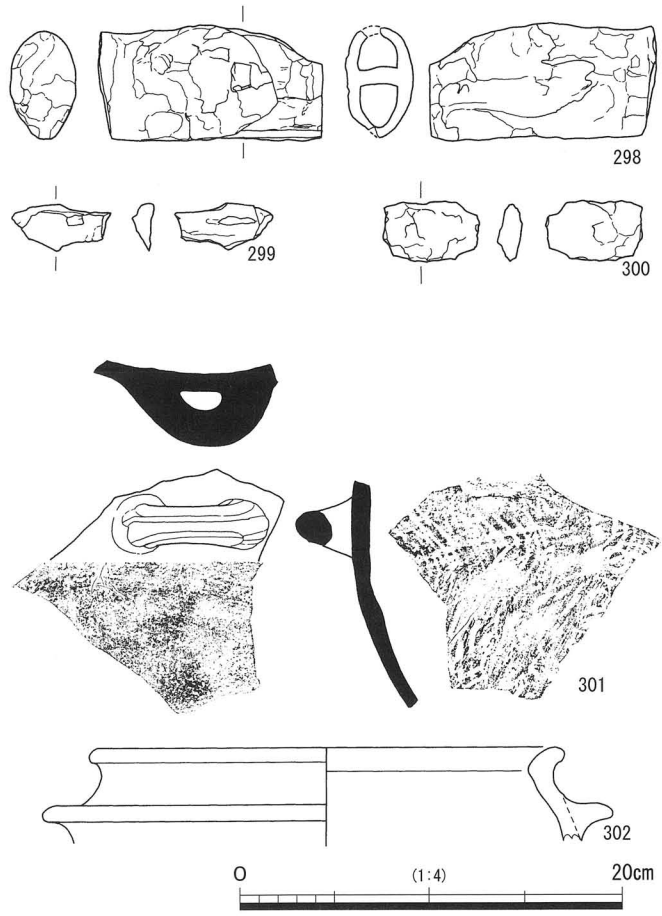
調査期間：平成17年８月29日～10月６日

調査面積：30㎡

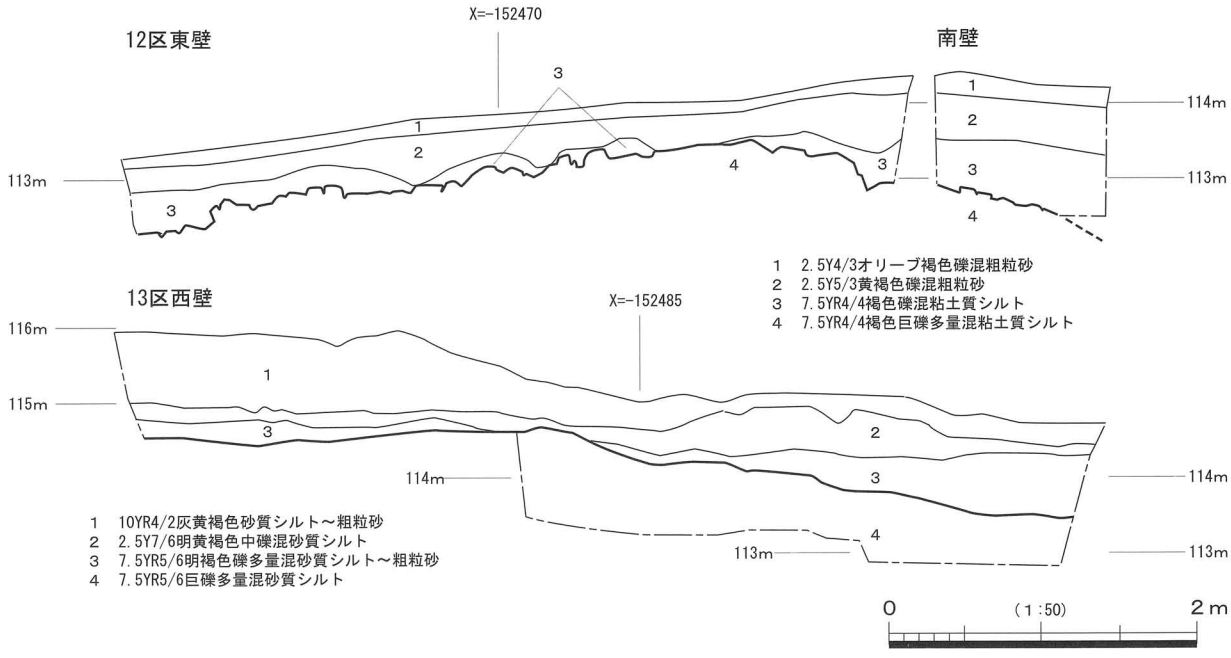
11～13区は、平成17年度の調査(調査Ⅱ)で、大窪地区に設定した調査区である。調査区の北東150mには、大阪府教委平成13年度調査地がある。調査地付近の東側の尾根には、来迎寺境内に、「抜塚」などの古墳が数基遺存している。調査地は山林で、南東からに北西に下がる地形を呈し、中央部には墳丘状の隆起が見られる。上面の標高は109～110.5mで、南が高く北が低い。１層表土以下に５層上面として近世～近代の遺構が形成されている。７層は凝灰岩の破片を多量に含むブロック層で、８層が基盤層である。

検出遺構と出土遺物(第41・43～44図、図版一四・一五・四九)

調査区中央部の８層上面で、墳丘の可能性のある高まり①～③層を検出した。南側は７層によって削られており、北側の斜面には２層シルト混粗粒砂～礫などの互層が堆積している。①～③層からな



第41図　11区出土遺物実測図



第42図　12・13区断面図

る高まりは、１～1.2mの高さがあり、墳頂は平坦である。④層から、鞘尻・柄頭と思われる鉄製品298のほか、８層から鉄製品299・300および須恵器301、８層上面の墳丘裾際から土師器羽釜302ほか瓦器などの破片、石棺材の可能性のある凝灰岩が少量出土している。301は把手付の大型の器種で、器台かもしれない。302は13世紀頃の羽釜であろう。

小結

現在の地形に一致して、破壊された古墳墳丘の痕跡が検出された。墳丘南側の底の窪みには、炭を含む④層があり、墓坑の可能性もある。墳丘が破壊されたのは、羽釜302の出土から、13世紀代であろうと考えられる。

12・13区の概要

調査期間：平成17年７月25日～９月22日

調査面積：12区　20㎡

13区　26㎡

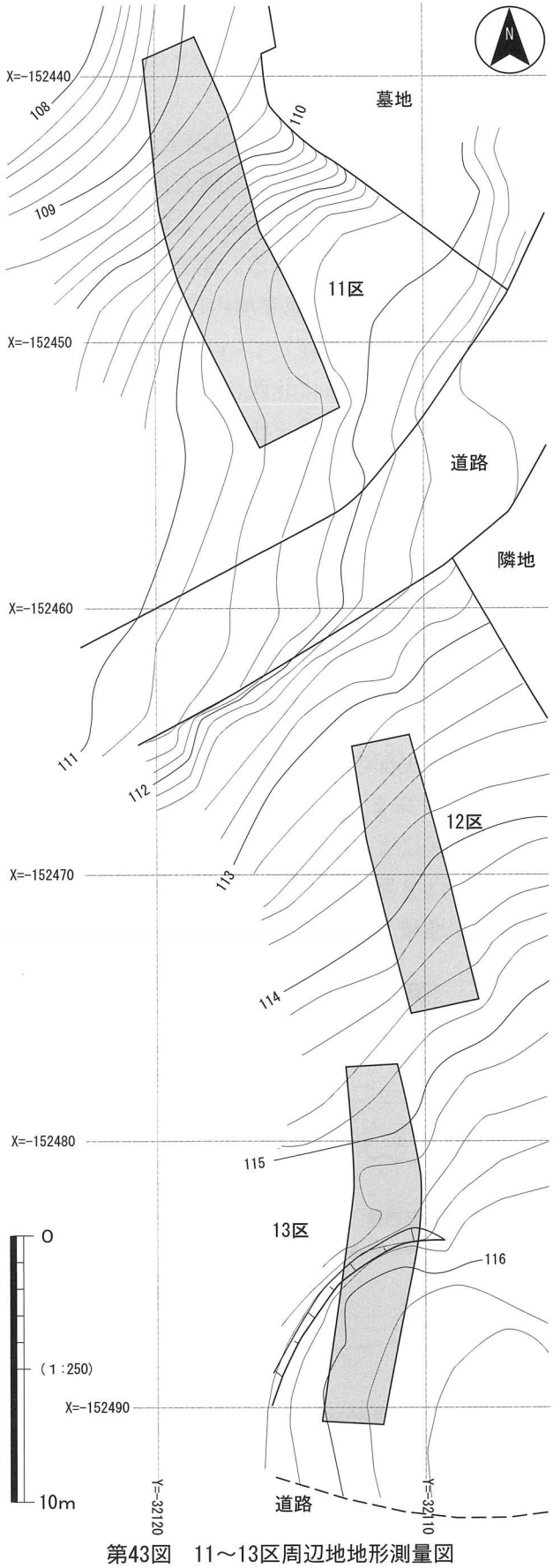
12・13区は、11区から道路を挟んで南20mほどの位置にある。調査区の旧状は山林(竹林)で、南東から北西に下がる地形を呈している。、上面の標高は113.2～116.2mで、南が高く北が低い。11・12区両地区とも１層表土以下には２・３層があり、現地表下１～２mで基盤層である４層巨礫混じりの粘土質シルト・砂質シルトに至る。

検出遺構と出土遺物(第42・43図、図版一四・一五)

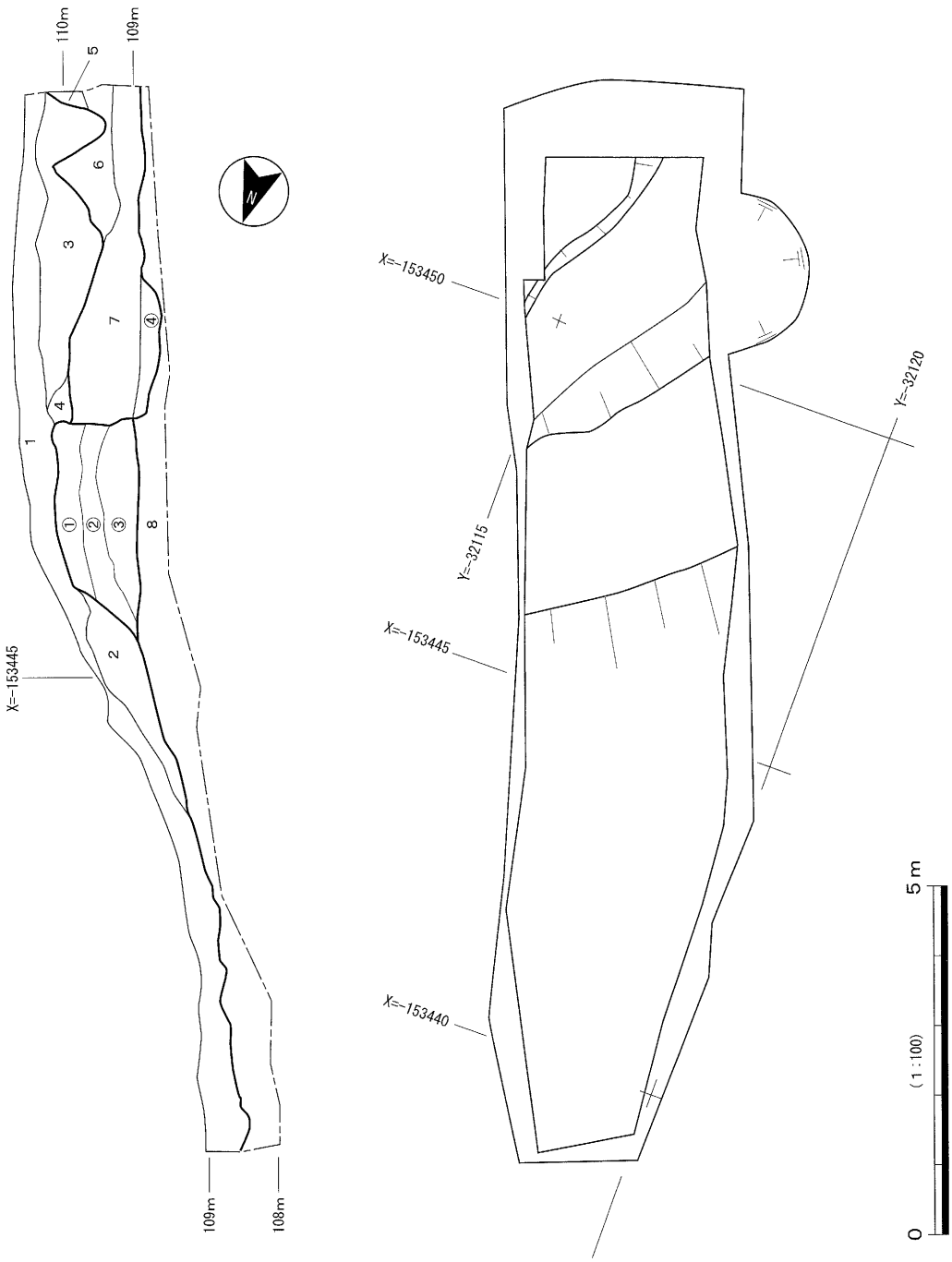
12区からは須恵器片、13区からは磁器片がともに１層表土から出土した。

小結

13区の南東には墳丘状の隆起などが見られたが、近年のゴミの埋め立てによる高まりであることがわかった。



第43図　11～13区周辺地地形測量図



1　10YR4/3にぶい黄褐色礫混粗粒砂(表土)
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト混粗粒砂・粗粒砂･礫の互層
3　10YR5/6黄褐色礫多量混粗粒砂
4　10YR5/3にぶい黄褐色礫混粘土質シルト
5　10YR5/6にぶい黄褐色礫混砂質シルト
6　10YR4/6褐色褐色礫混砂質シルト
7　10YR6/6明黄褐色粗粒砂・10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト・7.5Y7/2灰色砂質シルトのブロック(凝灰岩の破片多量に含む)
8　10YR7/5明黄褐色粗粒砂～礫多量混粘土質シルト

　墳丘盛土？
①　10YR5/8黄褐色粘土質シルト・10YR7/1灰白色極細粒砂のブロック
②　10YR6/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルト・10YR7/1灰白色極細粒砂のブロック
③　10YR5/8黄褐色粗粒砂～礫(炭含む)

　墳丘崩落土？
④　10YR5/6黄褐色礫混粘土質シルト(底に炭たまる)

第44図　11区平断面図

14区の概要

調査期間：平成17年１月14日～３月18日

調査面積：608.89㎡

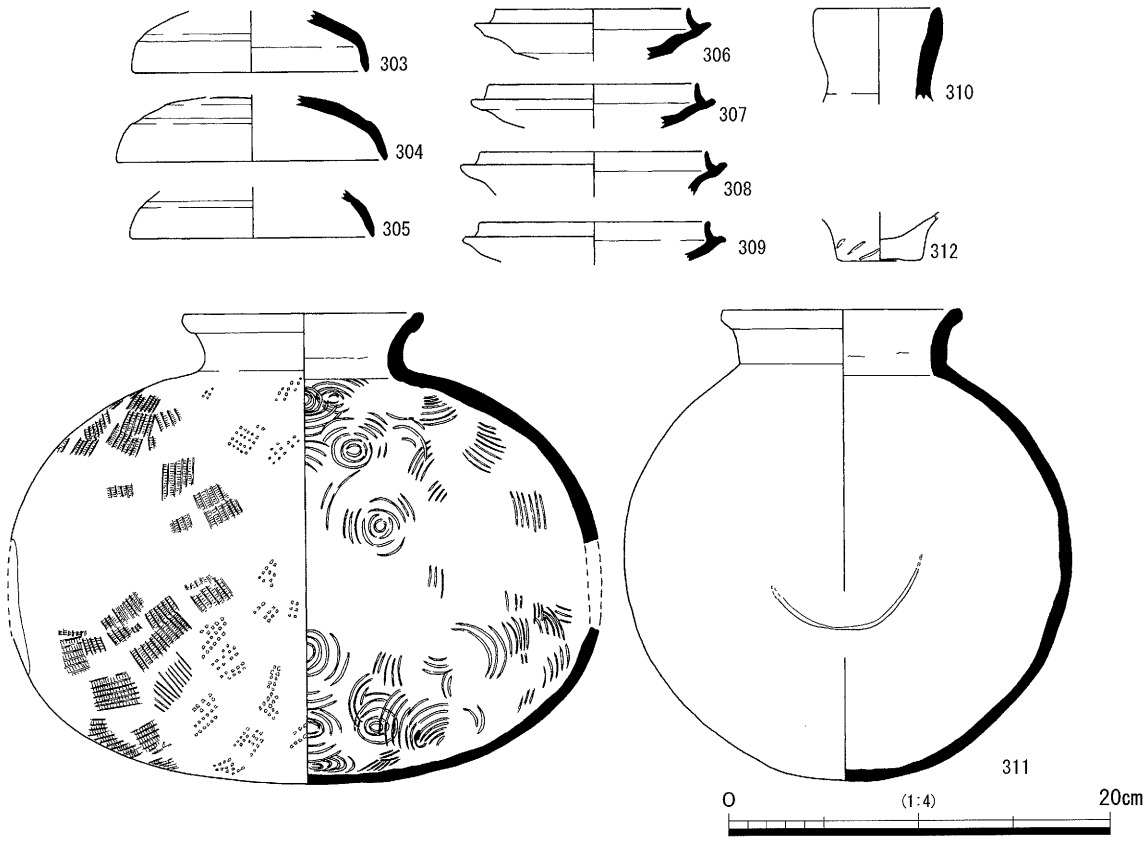
14区は、平成16年度に実施した調査(調査Ⅰ)で、13区からさらに道を挟んで南20mほどの位置にある。14～19区のある区画の旧状は山林・放棄された植木畑で、南北に２本の尾根状の高まりが東から西へ伸びている。14区は中央東が高く、北へは崖状に急角度で落ち、西～南へは緩やかに落ちる。調査対象地の西側には、北東－南西に里道が伸びている。上面の標高は119.4～121.8mで、東が高く、南西が低い。ここでは、土量の問題から、東側のトレンチ部分でしか掘削ができなかったため、おもに断面のみの調査となった。１層表土以下２層作土があり、それ以下には近世～近代の遺構面を構成する３層があり、基盤層は８層・10層である。

検出遺構と出土遺物(第45～47図、図版一四・一六)

３層上面では、炭を含むブロック層などを埋土とする**土坑**(①～④層)や、炭焼窯(⑤～⑫層)、礫を多量に含む**土坑**(⑬～⑯層)などが検出された。それ以下では、８層が中央部から南北へ落込むのを確認し、南部の炭焼窯周辺では須恵器杯身･杯蓋303～309や須恵器提瓶？ 310がまとまって出土し、北の下がりでは須恵器横瓶311が出土した。

小結

現地形と基盤層や出土遺物から、調査区北部中央と南部中央の高まり部分に埋没古墳の存在を想定し、翌平成17年度(調査Ⅱ)にピンポイントで調査区(15・16区)を設定することになった。



第45図　14区出土遺物実測図

15区の概要

調査期間：平成17年７月25日～８月26日

調査面積：42㎡

15～19区は、平成17年度に実施した調査(調査Ⅱ)で、15区は14区の北部中央西よりに位置する。14区で検出した基盤層は15－4層に対応する。

検出遺構と出土遺物(第46～47図、図版一四・一六)

15－3・15－4層は、ともに巨礫を極めて多量に含む砂質シルト～粘土質シルトで、、西へ落ちることが判明した。

小結

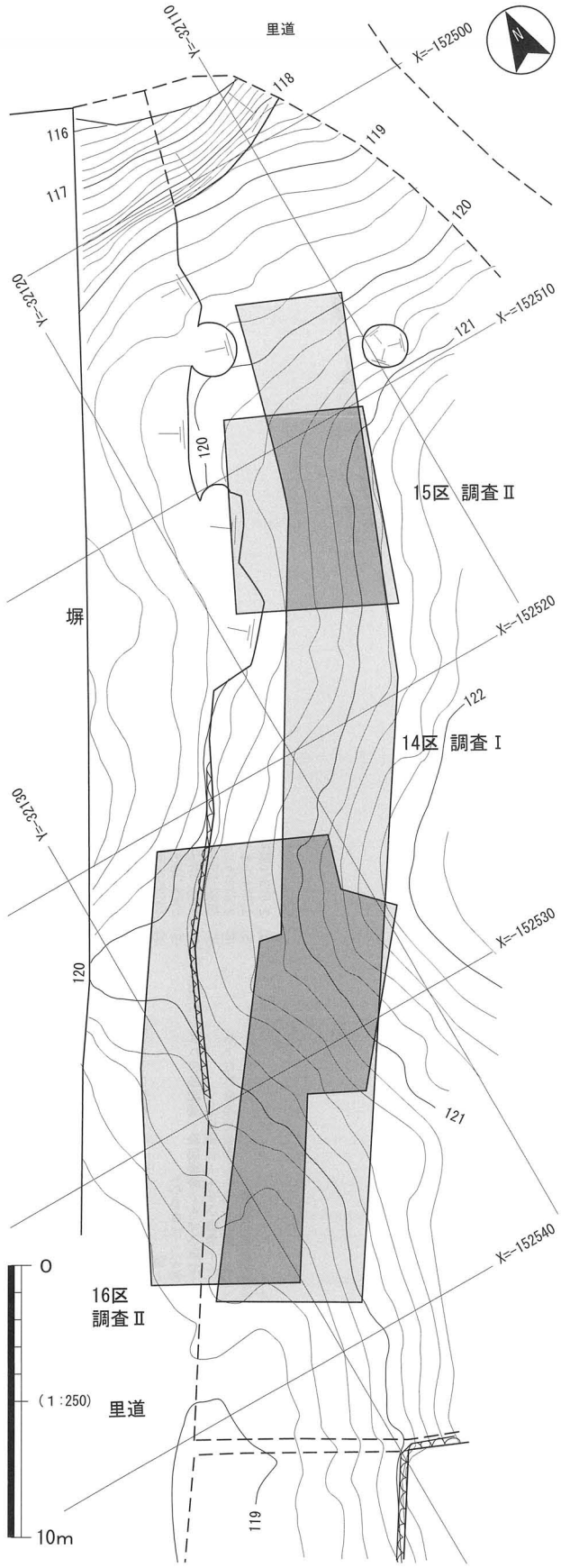
当初予想した古墳に関連する遺構・遺物は検出されなかった。

16区の概要

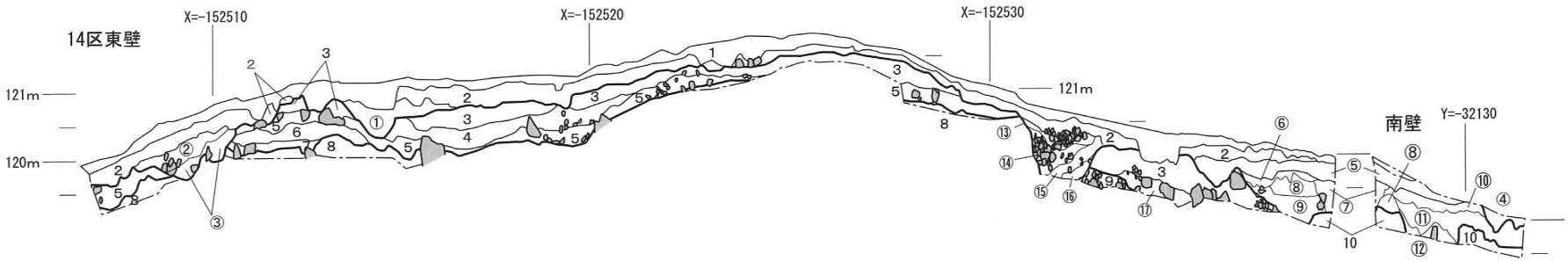
調査期間：平成17年７月25日～11月25日

調査面積：112㎡

15区同様、14区南寄りに設定した調査区である。当初、15区と同規模の面積で調査を行なったが、現地表下0.5～0.6m(標高119m前後)で、調査区西端に巨石が並ぶのを確認したことから、西側に古墳石室の存在する可能性が高まった。そこで、調査区の西側を４×６m拡張して調査を続けた結果、古墳玄室を検出した。次に、羨道部分を確認する目的で南側を５×８m、奥壁のさらに北側を確認する目的で北側は６×2.5m拡張して調査を続けた。その結果、玄室・羨道を検出することができたのみならず、石室外側を取り巻く石列が検出されたことにより、墳丘の内部構造を明らかにすることができた。古墳名称は「大窪29号墳」である。なお、第46図14～16区地形測量図によると、玄室部分の西側に120mの等高線が西に張り出していることがわかる。また、平成17年11月23日に現地説明会を行ったところ、一般・研究者約350名の見学者があった。



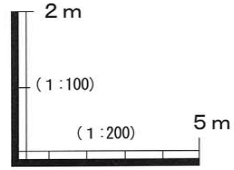
第46図　14～16区周辺地地形測量図

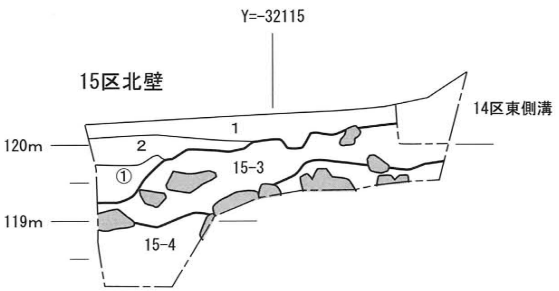


1　10YR3/3黒褐色粗粒砂～中礫混砂質シルト
2　2.5Y4/6オリーブ褐色中～大礫多量混極細粒砂炭少量混
3　2.5Y5/6黄褐色中～大礫多量混粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂のブロック
4　10YR5/6黄褐色中～大礫多量混粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂
5　10YR5/6黄褐色中礫多量混粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂～粗粒砂のブロック(硬い)
6　10YR5/6黄褐色粘土質シルト混粗粒砂(炭含む、ブロック)
7　5YR5/4にぶい赤褐色砂質シルト～粗粒砂～礫
8　10YR5/6黄褐色極細粒砂～粗粒砂に5YR5/4にぶい赤褐色砂質シルトのブロック(盛土?)
9　10YR5/6黄褐色中礫多量混砂質シルト～極細粒砂～巨礫
10　2.5Y7/6明黄褐色粘土質シルト混粗粒砂　炭少量含む

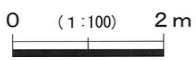
①　2.5Y4/4オリーブ褐色粘土質シルトと中礫混極細粒砂のブロック炭多量混
②　10YR6/6明黄褐色粗粒砂に粘土質シルトのブロック
③　10YR5/6黄褐色～5YR5/4にぶい赤褐色粘土質シルト～粗粒砂～礫・炭含むブロック

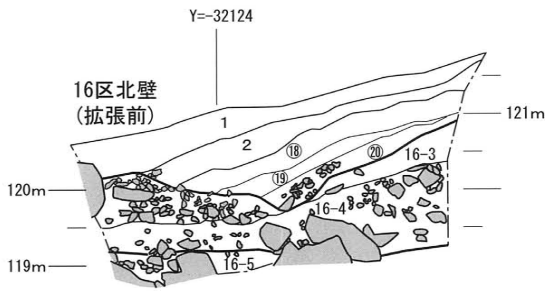
④　2.5Y3/1黒褐色粗粒砂
⑤　2.5Y4/6オリーブ褐色粗粒砂～礫　炭含む
⑥　2.5Y6/4にぶい黄色粘土質シルト混粗粒砂～礫のブロック
⑦　5YR4/8赤褐色粘土質シルト～極細粒砂・5YR3/1黒褐色粘土質シルト～極細粒砂のブロックに礫(焼土?)
⑧　5YR6/1灰褐色～5YR4/8赤褐色大礫混粗粒砂(灰混じり)
⑨　5YR6/1灰褐色～2.5Y6/4にぶい黄色礫混粗粒砂
⑩　10YR5/2灰黄褐色礫混粗粒砂(炭混じり)
⑪　5YR4/1褐灰色粗粒砂～礫混粘土質シルト(焼土)
⑫　5YR6/1～5YR5/2褐灰色礫混粗粒砂(粘性あり)
⑬　2.5Y7/6明黄褐色粗粒砂に大礫
⑭　2.5Y6/4にぶい黄色粗粒砂混粘土質シルトに大礫
⑮　2.5Y6/6明黄褐色砂質シルト～粗粒砂に粘土質シルトのブロック
⑯　10YR5/6黄褐色粗粒砂・2.5Y7/2灰黄色砂質シルト・中礫のブロック
⑰　2.5Y4/6オリーブ褐色粘土質シルト～極細粒砂のブロック　中礫・炭含む





15-3　10YR6/6明黄褐色中礫多量混砂質シルト
15-4　10YR5/8黄褐色巨礫多量混粘土質シルトのブロック





16-3　10YR6/4にぶい黄橙色粗粒砂～礫・粘土質シルトのブロック
16-4　10YR6/8明黄褐色粘土質シルト・礫極多量混粗粒砂
16-5　2.5Y6/4にぶい黄色粘土質シルト少量混砂質シルト～粗粒砂

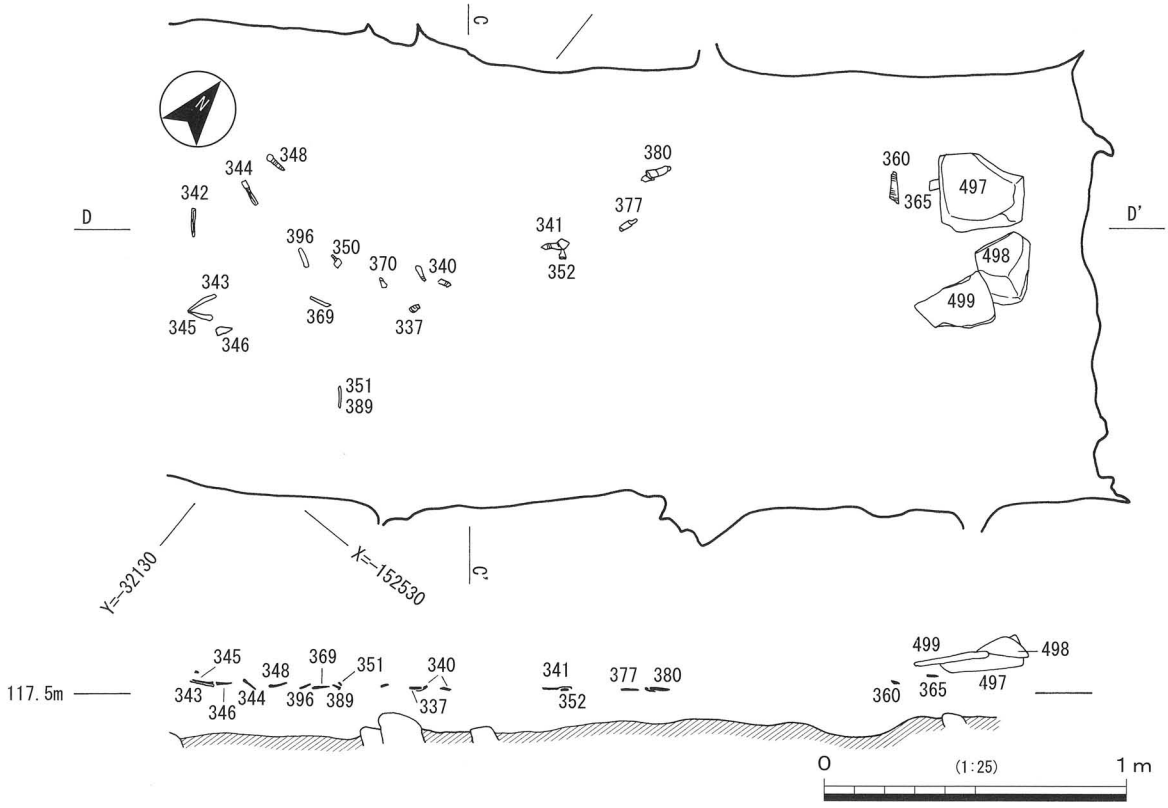
⑱　10YR6/6明黄褐色礫極多量混粗粒砂・5YR5/4にぶい赤褐色粘土質シルトのブロック
⑲　2.5Y6/4にぶい黄色粗粒砂に粘土質シルトのブロック
⑳　2.5Y6/4にぶい黄色～10YR5/6黄褐色礫極多量混粗粒砂

第47図　14～16区断面図

検出遺構と出土遺物(第46～57図、図版一四・一七～二〇・五〇～五三・五七・五八)

石室：石室は右片袖式の横穴式石室で、南西側に開口している。石室の主軸方向は、北から51°東へ振っている。側壁は１～２段が遺存していた。検出約9.75m、玄室長4.2m・玄室幅1.9～2.3m、羨道長5.7m以上・幅1.4～1.6mで、奥壁の高さ1.35m・幅1.8m、側壁の高さは0.6～1.8m程度、幅0.2～0.6m程度である。玄門には仕切り石３つが水平に据えられている。仕切り石の大きさは幅0.3～0.7m・長さ0.2～0.3m、厚さ0.07～0.1mである。玄室内には、５～10cm程度の炭層が堆積しており、それをと取除くと床面に至る。床面には10cm前後の敷石が遺存しており、玄門すぐ北側には1.5×1.2m程度の、その奥にも径１m未満の空間が数か所に見られ、その付近が棺の位置と考えられる。羨道部分の敷石はまばらで、玄門より南２mほどの位置にはやや大振りの石が東西に並んでいるように見え、ここにも仕切り石があった可能性が高い。さらに玄門から３～４m南には、巨石が落ち込んでいたが、調査区西壁際に一致していたため、取り上げることはできなかった。後世に落ち込んだものか、仕切り石、または閉塞石かは不明である。東側壁は、そこからさらに南へ２mほど伸びている。床面レベルは117.55～117.8mで、玄室北端から羨道南部までの比高は0.25m前後を測る。出土遺物は、おもに玄室から羨道北部にかけて、18世紀頃の日常雑器に入り混じって須恵器や鉄製品が出土している。床面近くの遺物には、多量の鉄製品があり、羨道からは石棺材が出土している。

石列：奥壁の北１m付近に約3.8×1.6m・高さ1.0m程度の巨石が据えられていた。そこから東～南へ、無数の石が東側壁を取り巻くように置かれている。石の大きさは0.2m～0.8m程度、

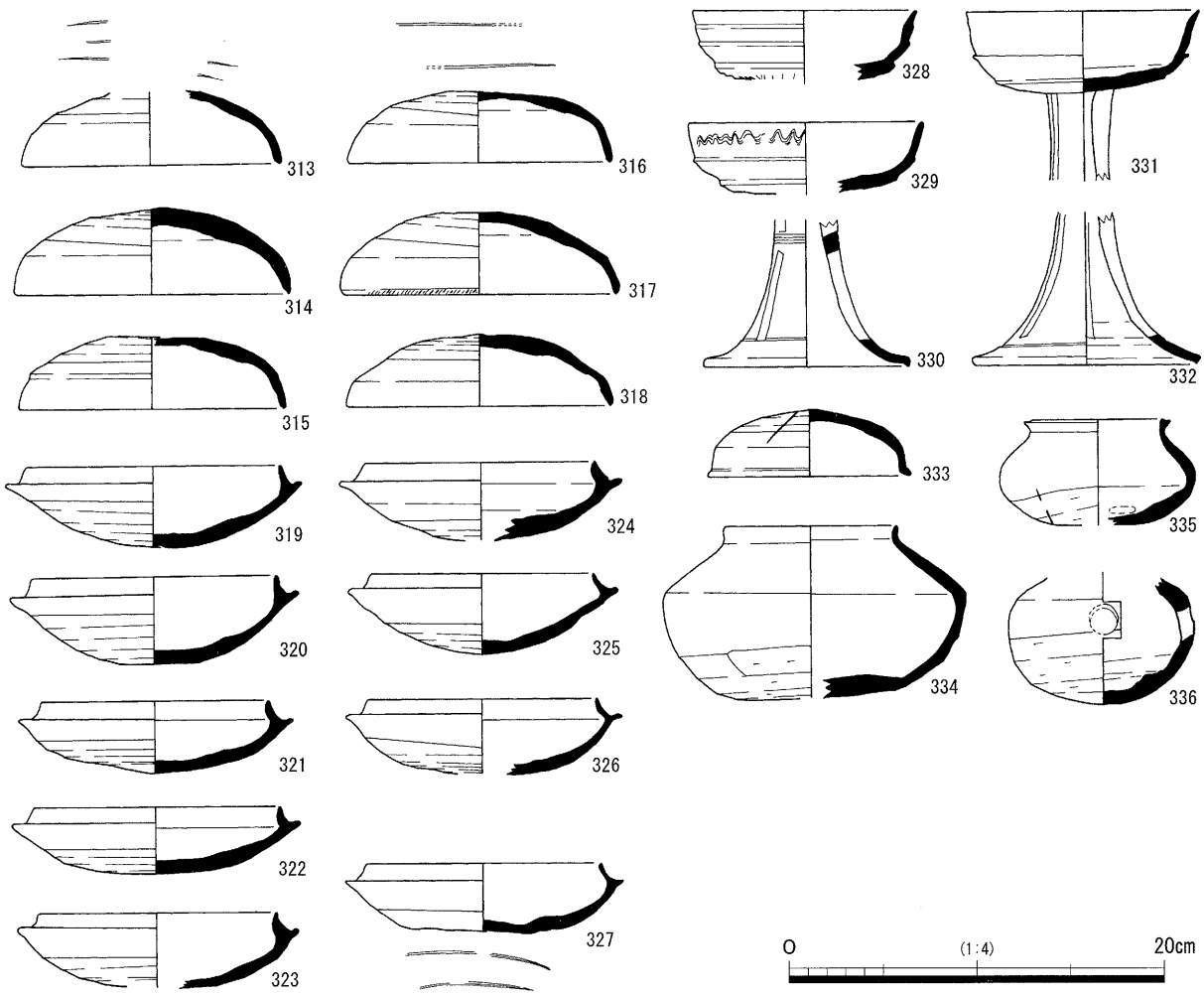


第48図　16区大窪29号墳遺物出土状況平断面図

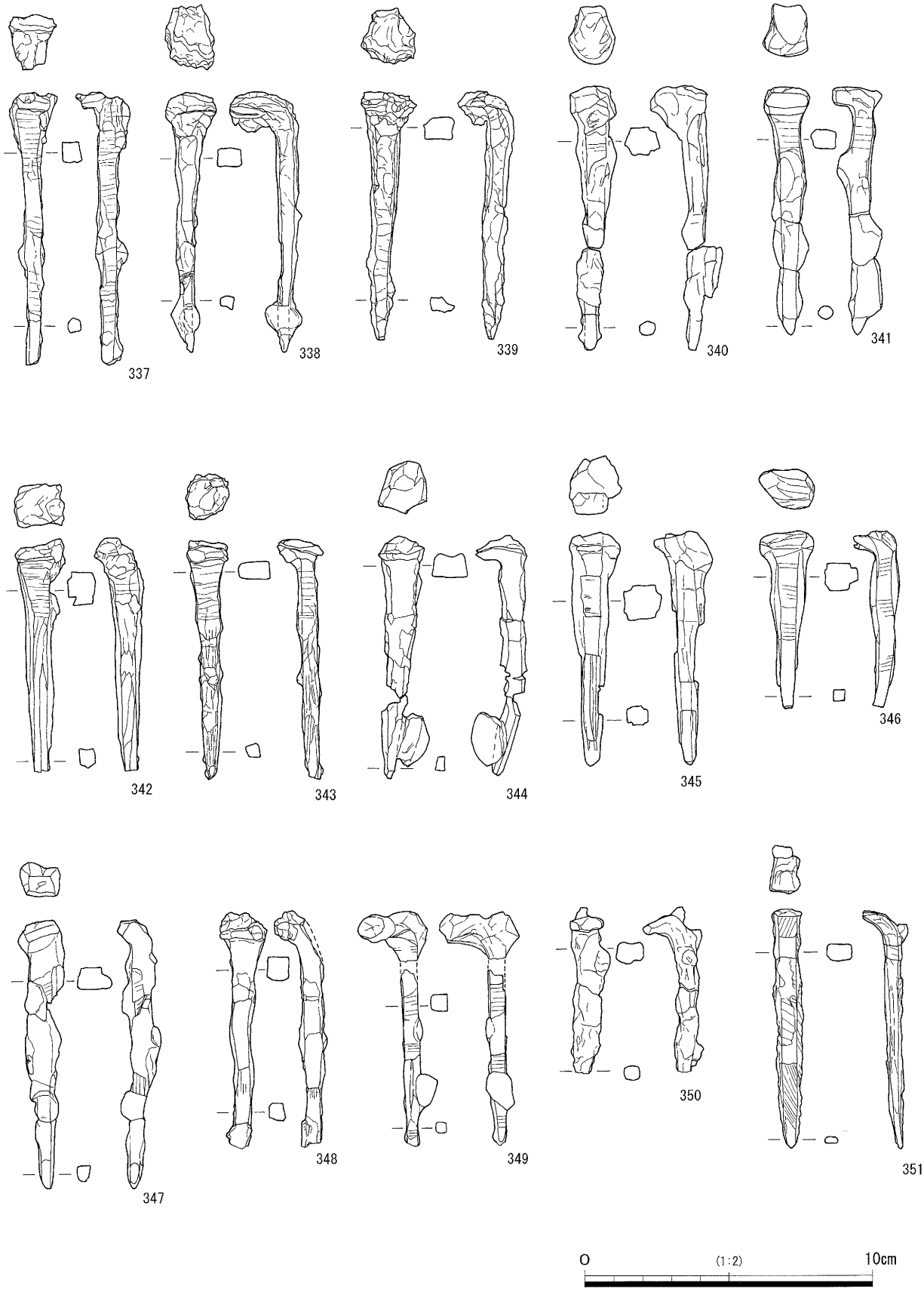
東側壁からの距離は１～２ｍ程度で、側壁との間には、やや小振りの石・礫が詰められている。石列は、奥壁北から玄門付近で顕著に見られ、羨道南部ではまばらとなる。

矢穴：奥壁・東側壁北部・奥壁北の巨石には、江戸時代後期と思われる矢穴が数個見られ(矢穴１～４)、割りとられている部分もある。これらは玄室出土遺物の時期に一致しており、古墳石室が当該時期に破壊されていることがわかる。

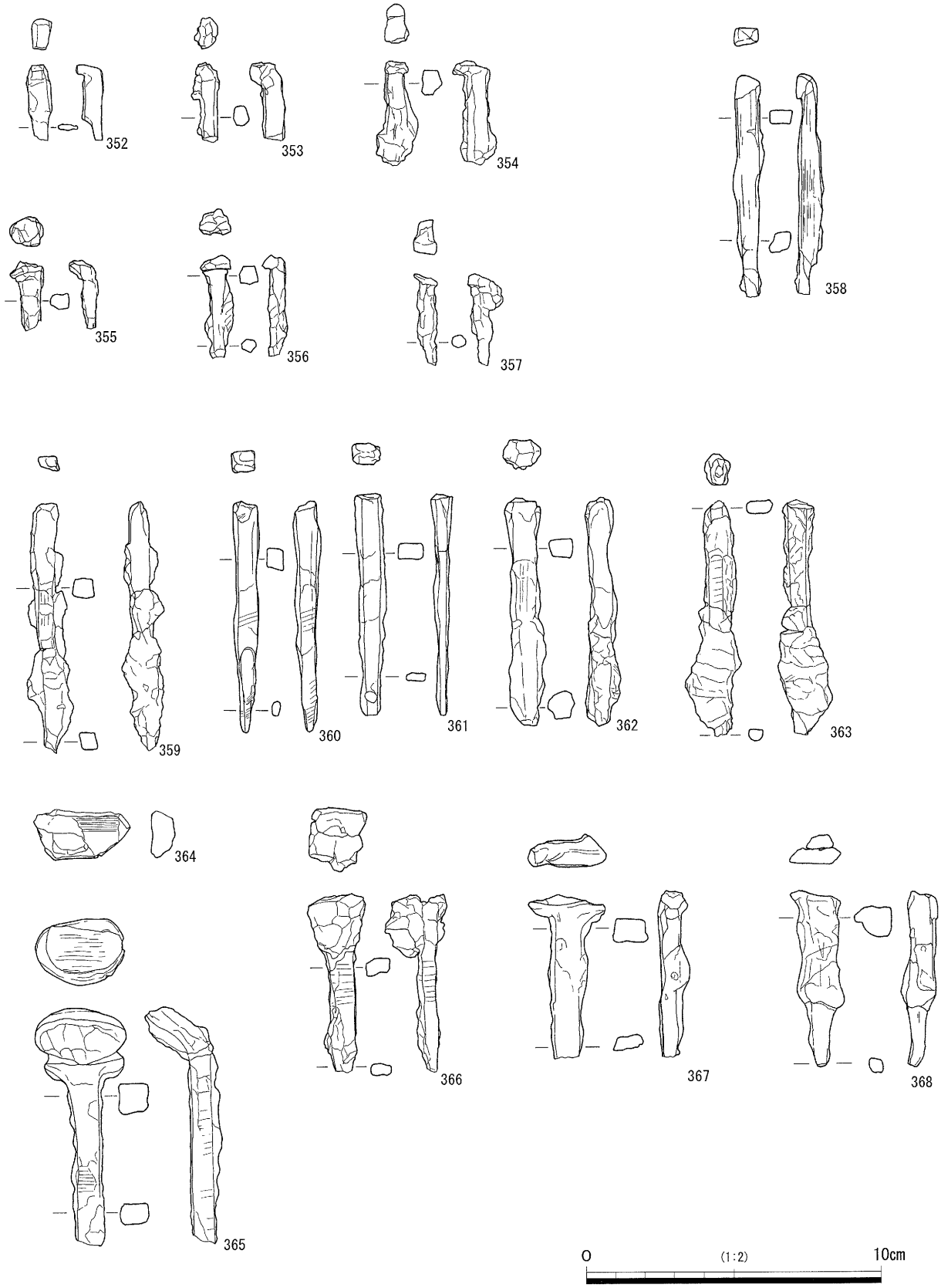
出土遺物：出土遺物には古墳時代後期中葉～飛鳥時代前期(６世紀中葉～７世紀前半)の須恵器杯蓋313～318、同杯身319～327、同無蓋高杯328～332、同蓋333、同短頸壷334・335、同瑞336のほか、釘337～368、鏃369～381・鏃ほか382～396・鎌397・刀子398・399・その他刃物400～403、柄金具404・405、飾金具等405～409の金属製品がある。これらは、玄室北部から羨道北部にかけて出土しており、釘・鏃の出土量は多く、石棺のみならず、玄室・羨道内に数基の木棺があったものと考えられる。古墳時代の火打金は、岡山県落合町戸坂１号墳・千葉県我孫子市日秀西遺跡竪穴住居からの出土が報ぜられている。410は「山型」に分類されるもので、前者と同じタイプである。戸坂１号墳も当古墳同様６世紀末～７世紀初頭の時期が与えられている。その他の鉄製品には、鉄銭？411・鉄製容器(碗)？412・413などがあるが、いずれも時期は不明である。



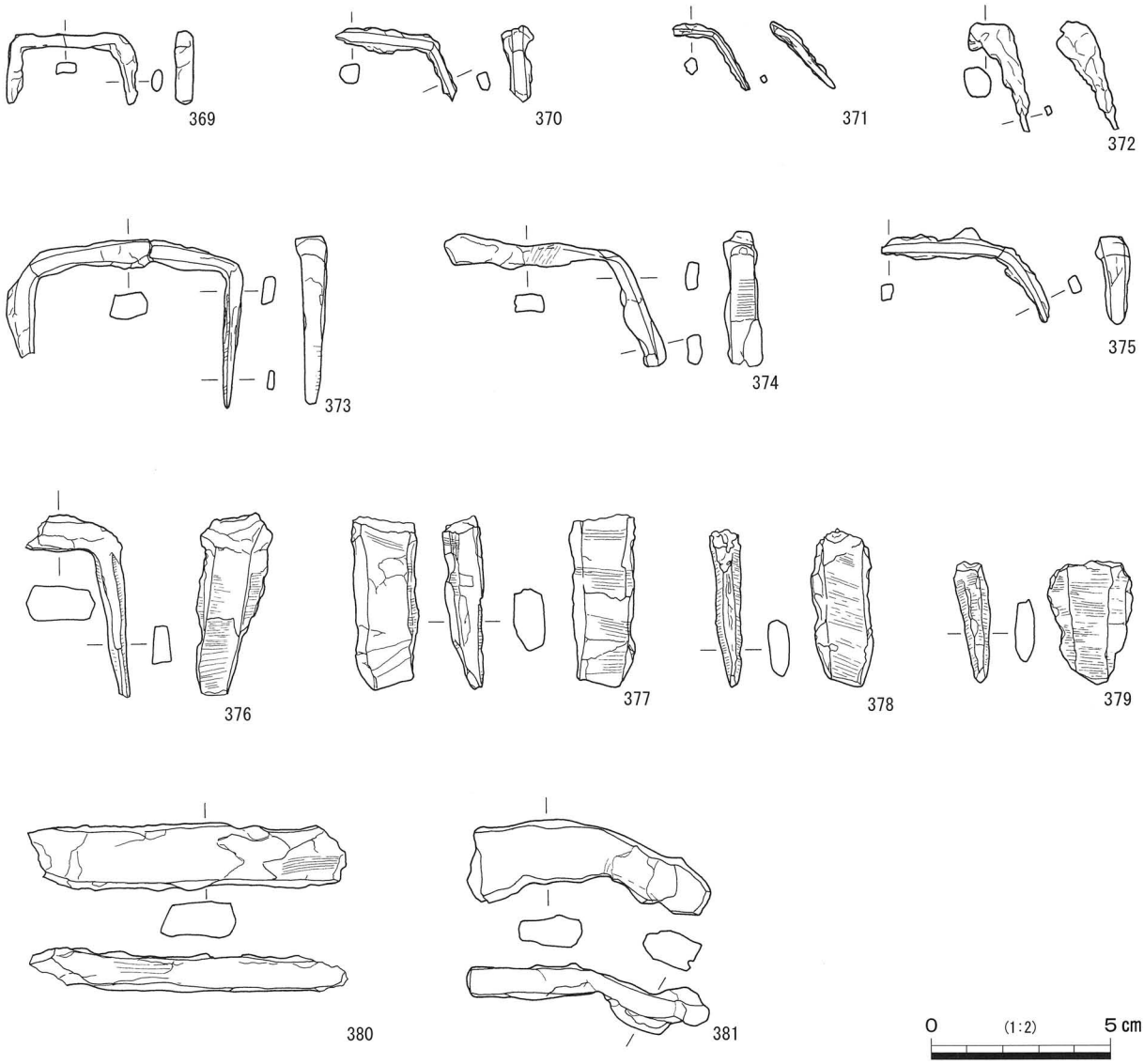
第49図　16区出土遺物実測図－１



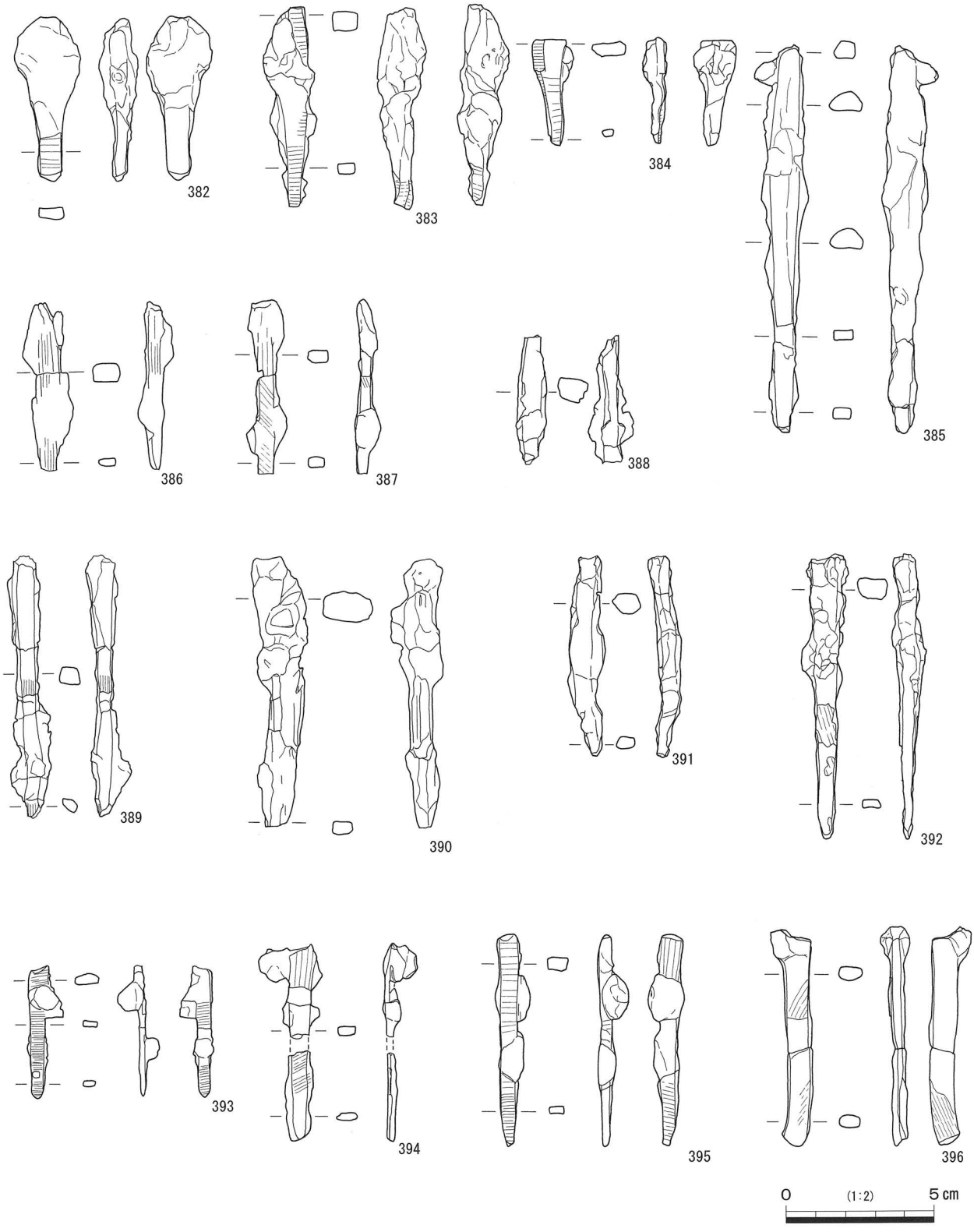
第50図　16区出土遺物実測図－２



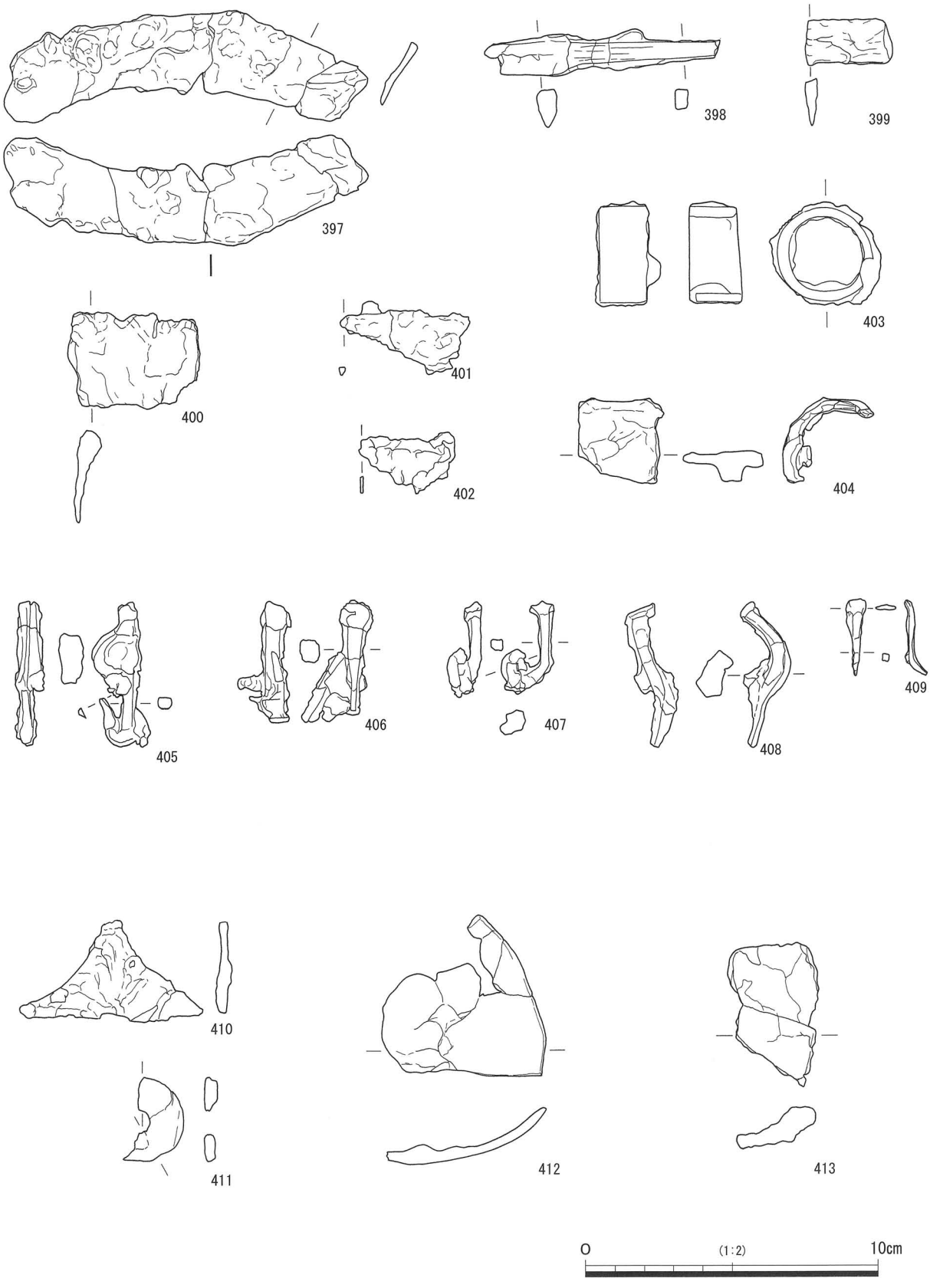
第51図　16区出土遺物実測図－３



第52図　16区出土遺物実測図－４



第53図　16区出土遺物実測図－５

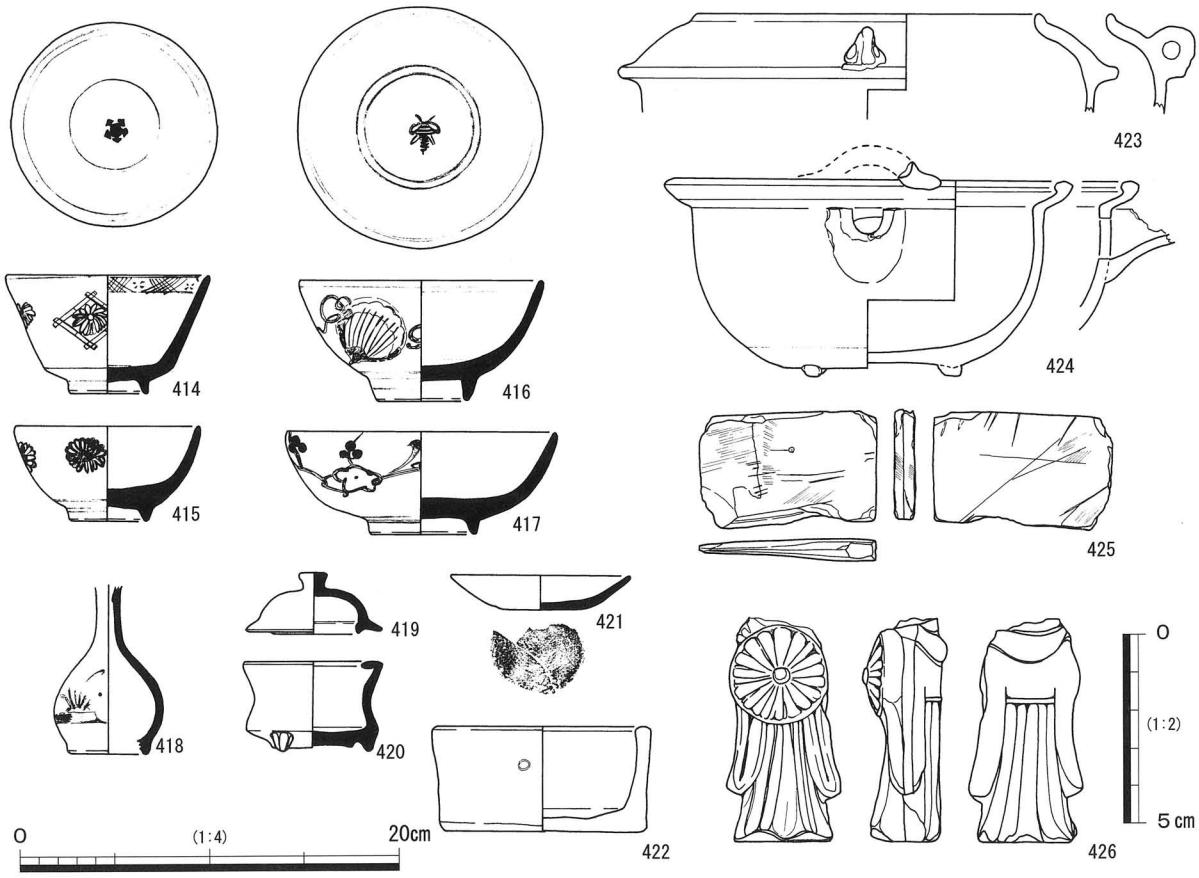


第54図　16区出土遺物実測図－６

江戸時代以降の出土遺物：磁器碗414～417、同油壺418、同蓋419、香炉420、陶器燈明皿421、土器風炉または火鉢422・同羽釜(茶釜)423・同行平424、砥石425、土人形426のほか、巴文軒丸瓦等がある。17～18世紀頃のものである。

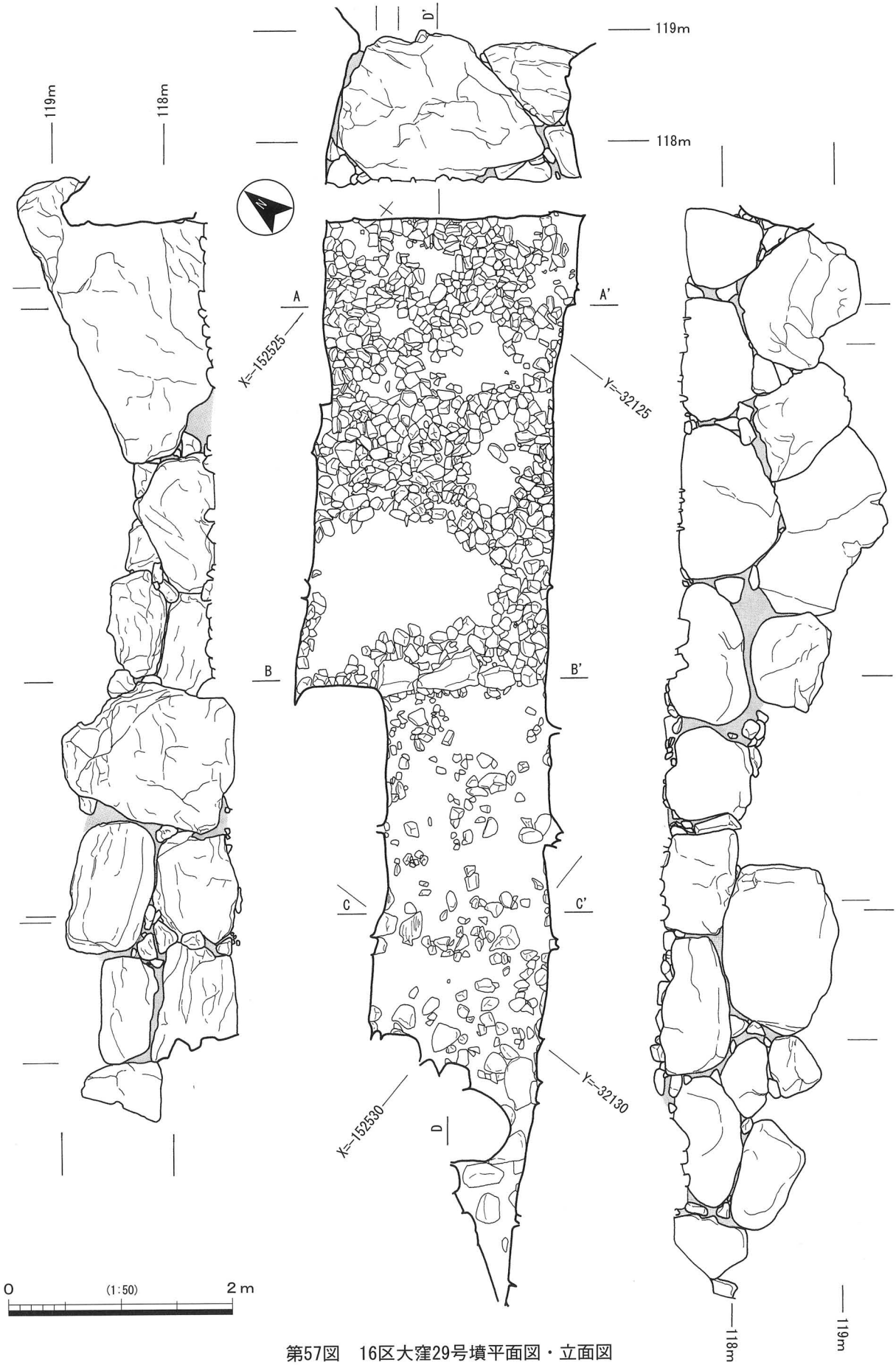
小結

16区では、古墳石室の外側を取り巻く石列を検出することができ、墳丘内部の施設を明らかにするという多大な成果が得られたといえる。石列は、奥壁北側に巨大な石を据え、そこから東側壁に沿って楕円形に取り巻いている。石列と石室側壁・奥壁の間には礫が充填されているようである。石は、奥壁部分が大型で高く密に配され、羨道部分にかけては小型で低く疎らに配されているようで、調査区内では、羨道南部にかけての石列は終息しそうである。この石列を「内護列石」と呼ぶかは検討の余地があると思われるが、「内護列石」の検出例は、山口県阿武郡穴観音古墳(6世紀末～7世紀の方墳)、福岡県甘木市柿原古墳群(7～8世紀)などにあり、前者では4段の墳丘築成工程ごとに「内護列石」を囲繞させていることから、大窪29号墳の石列の用途も墳丘築成に関係するものと考えられる。土器から見た大窪29号墳は、芝塚2号墳と同時期に築造され、存続期間は短いようであるが、釘・鎹等の金属器の石棺・木棺による追葬の回数は多いようである。高安古墳群では一般的に、平安時代末期～鎌倉時代頃から古墳の破壊が始まることが多いが、大窪29号墳では、江戸時代に入ってから、破壊が始まっているようである。



第55図　16区出土遺物実測図－7

第56図　16区平断面図



第57図　16区大窪29号墳平面図・立面図

第６表　16区大窪29号墳出土遺物一覧表(土器)

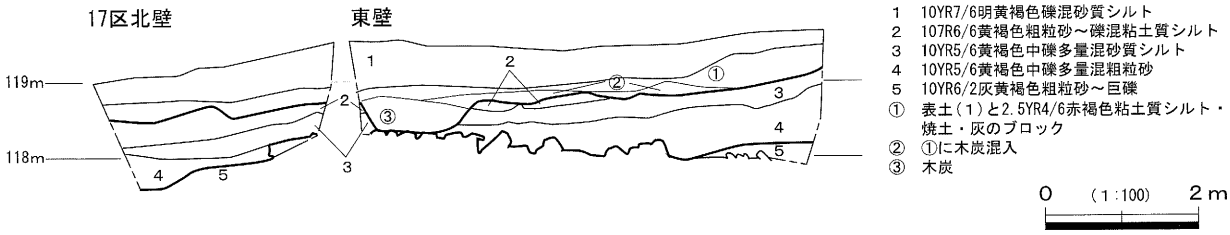
番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
		口径	高さ	底径		
313	須恵器杯蓋	13.7			玄室北半	天井部にヘラ描き「＝」印
314	須恵器杯蓋	14.5	4.65		玄室北半	
315	須恵器杯蓋	14			羨門？北部	
316	須恵器杯蓋	14	3.8		玄室北半	天井部にヘラ描き「＝」印
317	須恵器杯蓋	14.5	4.4		羨門？北部	
318	須恵器杯蓋	14	3.9		羨門？北部	
319	須恵器杯身	13.5	4.4		羨門？北部	
320	須恵器杯身	12.95	4.7		羨道南木棺痕跡付近	
321	須恵器杯身	12.1	3.8		玄室北半	
322	須恵器杯身	13	3.55		羨道北西部	
323	須恵器杯身	12.6			羨道北西部	
324	須恵器杯身	12.2			玄室北半	
325	須恵器杯身	11.8	4.35		羨門？北部	
326	須恵器杯身	12.2			羨門？北部	
327	須恵器杯身	12.4	3.75		羨道南木棺痕跡付近	底部にヘラ描き「＝」印
328	須恵器高杯	11.8			羨道北西部	
329	須恵器高杯	12.4			袖	
330	須恵器高杯			10.8	羨道北西部	
331	須恵器高杯	12.3			玄室北半	
332	須恵器高杯			11.75	玄室北半	
333	須恵器蓋	10.7	3.6		羨道北西部	
334	短頸壺（大）	9.1			玄室北半	
335	短頸壺（小）	6.9			玄室北半	
336	甕				羨道南木棺痕跡付近	

第７表　16区大窪29号墳出土遺物一覧表(金属製品)

番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
337	釘	長さ 9.6	幅 0.65～1.6	厚さ 0.4～1.8	羨道　北部	折頭釘
338	釘	長さ 9.2	幅 0.2～1.8	厚さ 0.2～2.2	羨道　北部	
339	釘	長さ 8.7	幅 0.2～1.8	厚さ 0.3～1.9	羨道　南部	
340	釘	長さ 9.3	幅 0.2～1.6	厚さ 0.3～2.0	羨道　北部	折頭釘
341	釘	長さ 8.8	幅 0.3～1.7	厚さ 0.3～1.6	羨道　北部	折頭釘
342	釘	長さ 8.2	幅 0.4～1.4	厚さ 0.7～1.2	羨道　北部	折頭釘
343	釘	長さ 8.4	幅 0.4～1.5	厚さ 0.3～1.4	羨道　北部	折頭釘
344	釘	長さ 8.4	幅 0.4～1.8	厚さ 0.2～1.5	羨道　北部	折頭釘
345	釘	長さ 8.2	幅 0.3～1.8	厚さ 0.7～1.2	羨道　北部	折頭釘
346	釘	長さ 6.2	幅 0.4～1.8	厚さ 0.4～1.9	羨道内	折頭釘
347	釘	長さ 9.4	幅 0.4～1.5	厚さ 0.6～1.1	羨道内	
348	釘	長さ 8.3	幅 0.75～1	厚さ 0.6～1.6	羨道　北部	折頭釘？
349	釘	長さ 8.2	幅 0.3～2.7	厚さ 0.4～0.6	羨道　北部	
350	釘	長さ 5.85	幅 0.4～1.6	厚さ 0.4～1.2	羨道内	折頭釘？
351	釘	長さ 8.4	幅 0.2～0.9	厚さ 0.4～1	羨道　北部	折頭釘？
352	釘	高さ 2.6	現存幅 0.9	厚さ 0.3～0.8	羨道　北部	

353	釘	長さ 2.6	幅 0.8～1.1	厚さ 0.5～0.9	玄室 北部	折頭釘
354	釘	長さ 3.6	幅 0.6～1.2	厚さ 0.6～1.3	玄室 中央部	折頭釘
355	釘	長さ 2.4	幅 0.3～0.85	厚さ 0.2～1.2		角頭釘（小）
356	釘	長さ 3.5	幅 0.35～0.8	厚さ 0.4～1	玄室 中央部	折頭釘？
357	釘	長さ 3.7	幅 0.2～1.1	厚さ 0.3～0.7	玄室 中央部	折頭釘？
358	釘	長さ 7.6	幅 0.4～0.7	厚さ 0.4～0.9	玄室 北部	折頭釘
359	釘	長さ 8.6	幅 0.3～1	厚さ 0.4～1.3	玄室 北部	角頭釘？
360	釘	長さ 7.9	幅 0.2～0.9	厚さ 0.2～0.8	羨道 北部	角頭釘？
361	釘	長さ 7.8	幅 0.3～0.8	厚さ 0.6～1	玄室 北部	角頭釘
362	釘	長さ 7.8	幅 0.4～1.1	厚さ 0.4～1.2	玄室 中央部	角頭釘？
363	釘	長さ 8.1	幅 0.3～1.6	厚さ0.7～1.75	玄室 北部	
364	釘	長さ 1.6	幅 3.2	厚さ 0.4		鋲頭釘
365	釘	長さ 8.1	幅 0.5～3	厚さ 0.5～2.2	羨道 北部	鋲頭釘
366	釘	長さ 6.1	幅 0.3～2.7	厚さ 0.5～1.9	玄室 北部	折頭釘
367	釘	長さ 5.7	幅 0.6～1.2	厚さ 0.9～2.6	玄室 中央部	平頭釘
368	釘	長さ 6.1	幅 0.4～1.2	厚さ 0.3～1.6	玄室 中央部	平頭釘
369	鎹	高さ 2.1	最大幅 3.7	厚さ 0.5	羨道 北部	
370	鎹	高さ 2.1	現存幅 3.5	厚さ0.5～0.95	羨道 北部	
371	鎹	高さ 1.9	現存幅 2	厚さ 0.2～0.6	羨道 南部	
372	鎹	高さ 3.1	現存幅 1.2	厚さ 0.1～1.1	玄室 中央部	
373	鎹	高さ 4.8	現存幅 6.5	厚さ 0.3～0.9	玄室 中央部	
374	鎹	高さ 3.9	現存幅 5.8	厚さ 1	玄室 中央部	
375	鎹	高さ 2.8	現存幅 4.6	厚さ 0.3～0.9	羨道 南部	
376	鎹	高さ 5.2	現存幅 3	厚さ 0.7～2	玄室 中央部	
377	鎹	高さ 4.9	足幅 0.3～1.1	厚さ 1.8	羨道 北部	
378	鎹	高さ 4.5	足幅 0.8	厚さ 1.7		
379	鎹	高さ 3.4	足幅 0.6	厚さ 0.5～2.3	玄門炭層	
380	鎹	長さ 8.6	幅 0.3～1.1	厚さ 1.8	羨道 北部	
381	鎹？	長さ 6.8	幅 1.1	厚さ 2.2	羨道内	
382	鏃	身の長さ 3.85 茎の長さ 1.7	最大幅 1.3 最大幅 0.6	厚さ 2.2 厚さ 0.8	玄室 北部	
383	鏃	身の長さ 3.6 茎の長さ 3.2	最大幅 1.7 最大幅 0.5	厚さ 1.5 厚さ 0.8	奥壁西隅 床	
384	鏃	茎の長さ 3.7	幅 0.3～1.2	厚さ 0.2～0.8		
385	鏃	身の長さ 6.5 茎の長さ 6.65	最大幅 1.6 最大幅 0.8	最大厚 1.6 最大厚 0.6	羨道内	
386	鏃	身の長さ 4.6 茎の長さ 1.1	最大幅 1 最大幅 0.5	最大厚 1.3 厚さ 0.6～1.1	玄室 中央部	
387	鏃	身の長さ 2.6 茎の長さ 3.4	最大幅 1.2 最大幅 0.5	最大厚 0.6 最大厚 0.4	羨道 木棺	
388	鏃？	長さ 4.4	幅 0.5～1.4	厚さ 0.4～1.5	玄室 北	
389	鏃？	長さ 8.9	幅 0.3～1.4	厚さ 0.4～1.2	羨道 北部	
390	鏃？	長さ 9.2	幅 0.5～1.5	厚さ 0.7～1.7		
391	鏃？	長さ 6.8	幅 0.3～0.8	厚さ 0.2～1.2	玄室 中央部	
392	鏃？	長さ 9.7	幅 0.2～1.3	厚さ 0.3～1.4	玄室 北部	
393	鏃？	長さ 4.5	幅 0.4～1.05	最大厚 0.3	玄室 北部	
394	鏃？	長さ 6.6	幅 0.3～1.1	厚さ 0.4～1.9	羨道 北部	

395	鏃？	長さ 7.2	幅 0.3～0.7	厚さ 0.2～0.6		
396	鏃？	長さ 7.3	最大幅 0.8	最大厚 0.3	羨道 北部	
397	鎌	長さ 12.4	幅 2.2～2.6	厚さ 0.1～0.3	玄室内	
398	刀子	長さ 8.0	幅 0.6～1.4	厚さ 0.1～0.7	玄室 中央部	
399	刀子？	長さ 3.1	幅 1.6～1.8	厚さ 0.1～0.4	玄室 北部	
400	鎌等刃物	長さ 7.4	幅 1.4～3.35	厚さ 0.1～0.8	玄室 北部	
401	鎌等刃物	長さ 4.5	幅 0.7～1.9	厚さ 0.1～0.2	玄室 南部	
402	鎌等刃物	長さ 3.3	幅 0.6～1.95	最大厚 0.1	玄室 南部	
403	柄の金具	長さ 3.6	外径 3.2～3.4 内径 2.6～2.6	厚さ 0.3～0.4	羨道内	
404	柄の金具？	長さ 1.9	幅 2.1～2.9	厚さ 0.3～1.1	玄室 南部	
405	飾り金具？	長さ 5.0	幅 0.7～1.7	最大厚 0.8	玄室 南部	
406	飾り金具？	高さ 4.2	幅 0.8～1.8	厚さ 0.3～0.7	羨道内	
407	？	高さ 3.3	幅 0.45～1.6	厚さ 0.4～1.0	玄室 南部	
408	？	長さ 5.0	幅 0.4～1.3	厚さ 0.7～1.0	玄室 南部	
409	？	長さ 2.6	幅 0.1～0.75	厚さ0.1～0.25	玄室 南部	
410	火打金	長さ 6.2	高さ 3.55	厚さ 0.2～0.5	玄室 南部	
411	鉄銭？	外径 2.9	内径 0.8	厚さ0.3～0.45	羨道内	平安時代以降か
412	鉄碗？	長さ 5.5	高さ 2.0	厚さ 0.2～0.7	羨道内	〃
413	鉄碗？	長さ 2.7	高さ 1.4	厚さ0.5～0.85	羨道内	〃



第58図　17区断面図

17区の概要

調査期間：平成17年７月25日～９月３日

調査面積：15㎡

16区から南西10m地点の調査区で、14～19区の位置する区画の中で、最も低いところにあたる。地表面の標高は119～119.5m程度で南西が高い。１層表土以下、２層上面で近世・近代の遺構面にあたり、基盤層は５層粗粒砂～巨礫である。

検出遺構と出土遺物（第58・60図、図版一四・二二）

北東隅の２層上面で落込み状遺構を検出したが、平面的には明らかにできなかった。内部には①～③層焼土・炭・灰などを含んでいる。

小結

①～③層からなる落込み状遺構は、14区で検出した炭焼窯に連続するものと考えられ、層位から、近現代のものと考えられる。

18・19区の概要

調査期間：18区　平成17年８月９日～10月７日　**調査面積**：30㎡

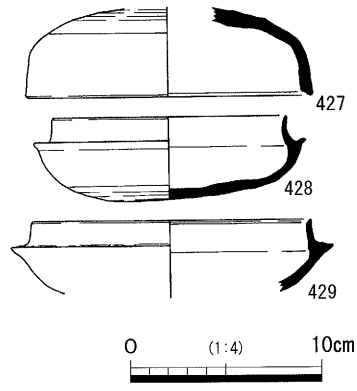
19区　平成17年８月９日～10月19日　54㎡

17区からさらに南西10m付近の調査区である。18・19区は、この区画の南側の尾根上の高まりに一致する。現地表面の標高は120～122m程度で、東から西へ下がっている。ここでも、１層以下に近現代の土坑①層が検出されている。基盤層は９層粗粒砂～礫である。

検出遺構と出土遺物（第59～63図・図版二一・二二）

９層上面で18区南東から19区北端にかけて、墳丘状の高まりを検出した。また、18区南東では、墳丘状の盛土上面で墓坑の可能性のある落込みが検出された。

墳丘：18区全体が墳丘状の高まりに一致しており、19区北端で高まりの南西端が検出されていることから、南北７m・東西４m以上の規模をもつと考えられ、高さは１m程度を測る。墳丘南側にあたる19区は、基盤層である９層が緩やかに下がり、墳頂との比高は２m程度を測る。墳丘状の高まりは⑦～⑨層からなり、それを切り込む形で墓坑？埋土②～⑥層があるが、かなり掘下げた段階で墓坑の輪郭が確認できたことから、これらは壁面観察による復元である。



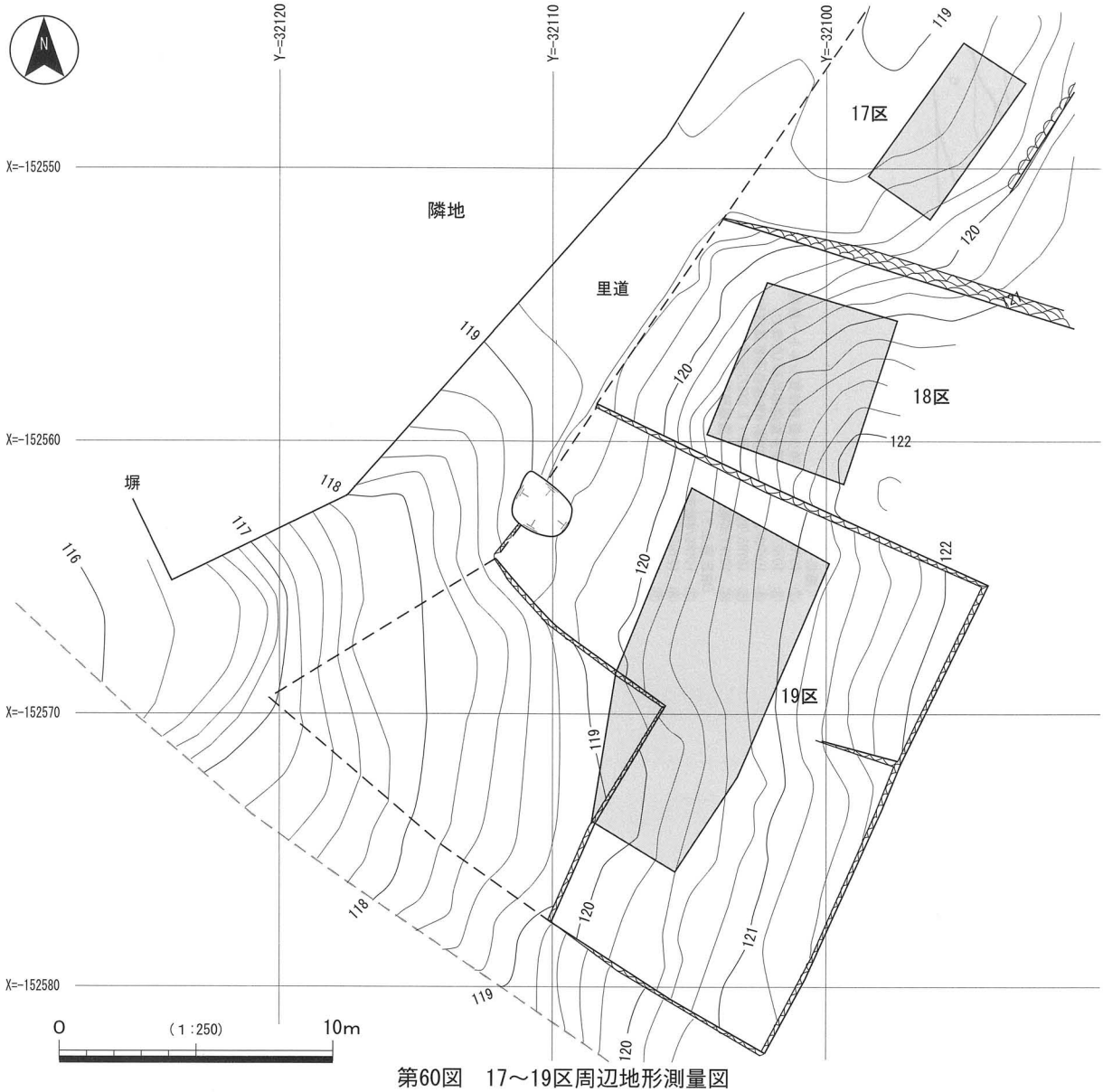
第59図　18区出土遺物実測図－１

墓坑：墓坑は東西３×2.5m程度の隅丸方形で、19区では検出されていないことから、南北の規模は５m以内におさまるであろう。底のレベルは120.5m程度の平坦面をなし、掘形から約１m東で20cm程度落込んでおり、そこから須恵器、釘、鏃などが出土していることから、この落込んだ部分が木棺痕跡と考えられる。

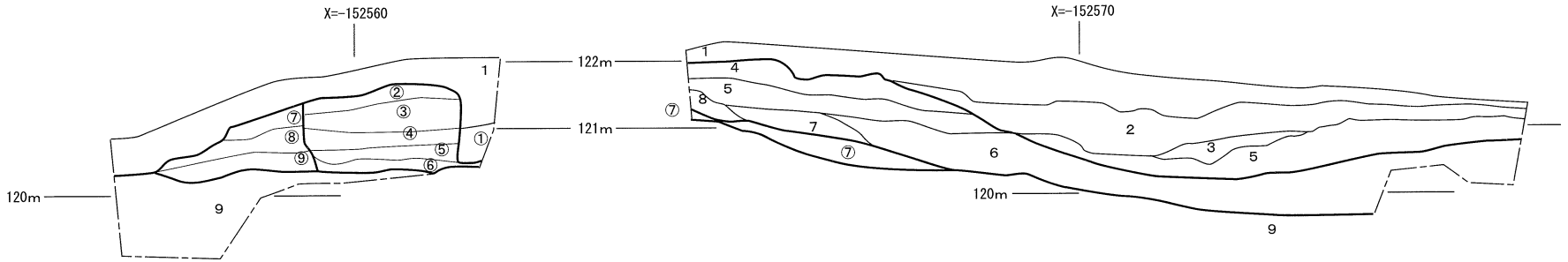
出土遺物：前述のように、木棺痕跡の可能性のある落込みから、６世紀代の須恵器杯蓋427、同杯身428・429、釘430～437、鏃438～443等が出土している。芝塚２号墳・大窪29号墳出土遺物と比べると、明らかに古い様相を持つ。

小結

前述のように、墳丘および墓坑は、かなり掘下げた時点で検出したものである。これらの地層のうち、墳丘内の⑦層・墓坑内の②・③層は、後世の堆積かもしれない。墓坑が墳丘内の中央部に位置していたとすれば、墳丘規模は８m程度に復元できる。石室がないこと、出土遺物が古いことなどから、この古墳は高安古墳群内で最古級のものといえる。



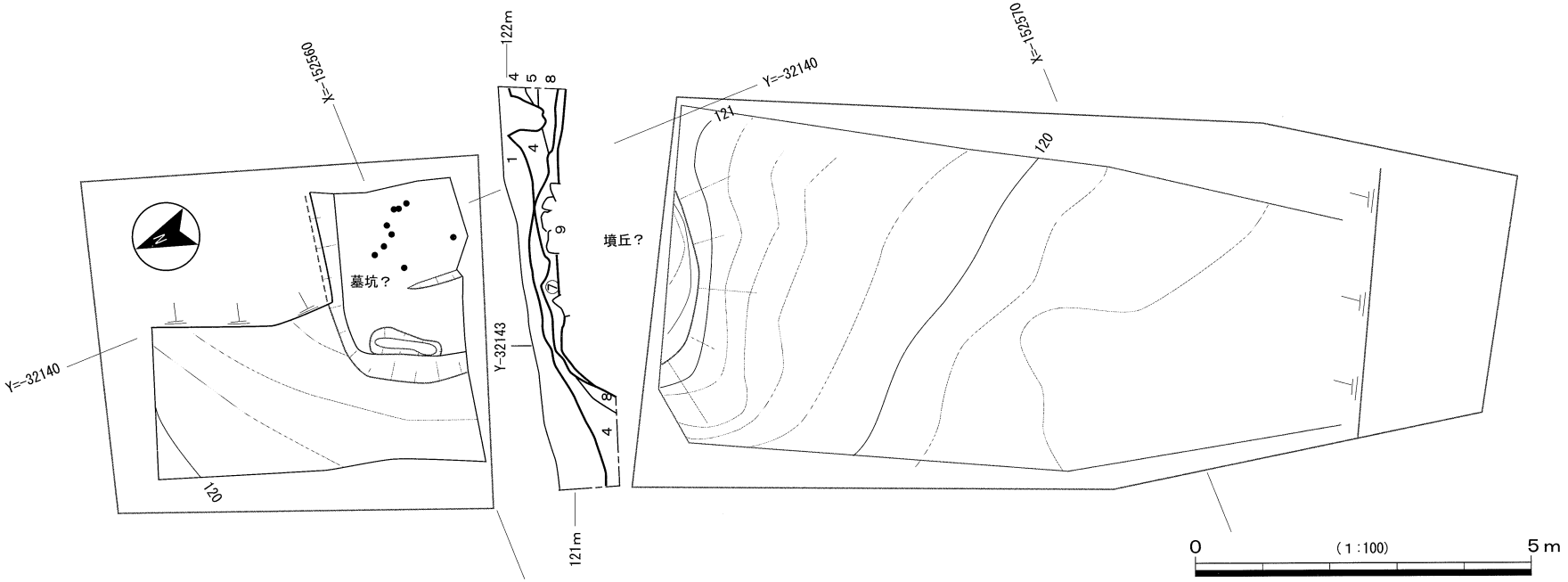
第60図　17～19区周辺地形測量図



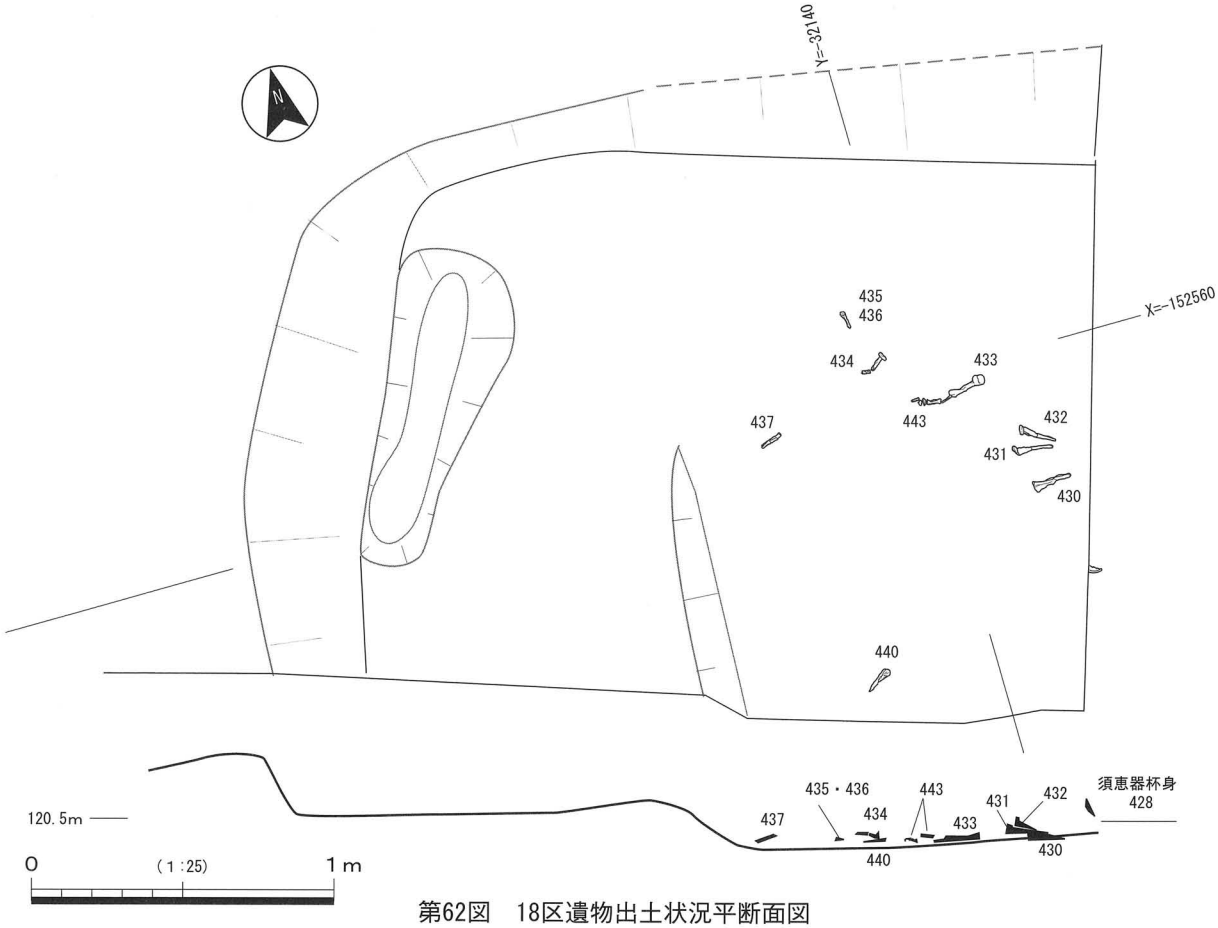
（礫充填土坑）
① 10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト混粗粒砂・礫

（墓坑？）
② 10YR6/6明黄褐色礫少量混砂質シルト～粗粒砂
③ 10YR7/6明黄褐色礫多量混粗粒砂(炭含む)
④ 10YR8/2灰白色～10YR8/8黄橙色礫多量混砂質シルト～粗粒砂（炭含む）
⑤ 10YR5/6黄褐色粗粒砂・7.5Y6/2灰オリーブ粗粒砂のブロック
⑥ 10YR7/6明黄褐色礫多量混粗粒砂・灰オリーブ粗粒砂
（墳丘盛土？）
⑦ 10YR6/8明黄褐色礫多量混粗粒砂・5Y6/2灰オリーブ粘土質シルト～極細粒砂のブロック
⑧ 10YR5/6黄褐色粗粒砂/10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト混粗粒砂
⑨ 10YR6/4にぶい黄橙色礫少量混粗粒砂

1 10YR6/6明黄褐色礫混粗粒砂
2 10YR5/6黄褐色礫混粗粒砂・10YR4/4褐色粘土質シルト混粗粒砂の互層
3 10YR5/6黄褐色礫混極細粒砂～砂質シルト
4 10YR5/6黄褐色砂質シルト～粗粒砂・10YR4/4褐色粘土質シルトのブロック
5 10YR5/8黄褐色極細粒～粗粒砂・10YR4/4褐色粘土質シルトのブロック
6 10YR5/3にぶい黄褐色礫極多量混砂質シルト
7 7.5YR5/8明褐色粗粒砂～礫
8 10YR5/6黄褐色礫混粗粒
9 10YR4/4褐色～10YR4/6赤褐色粗粒砂～礫



第61図　18・19区平断面図



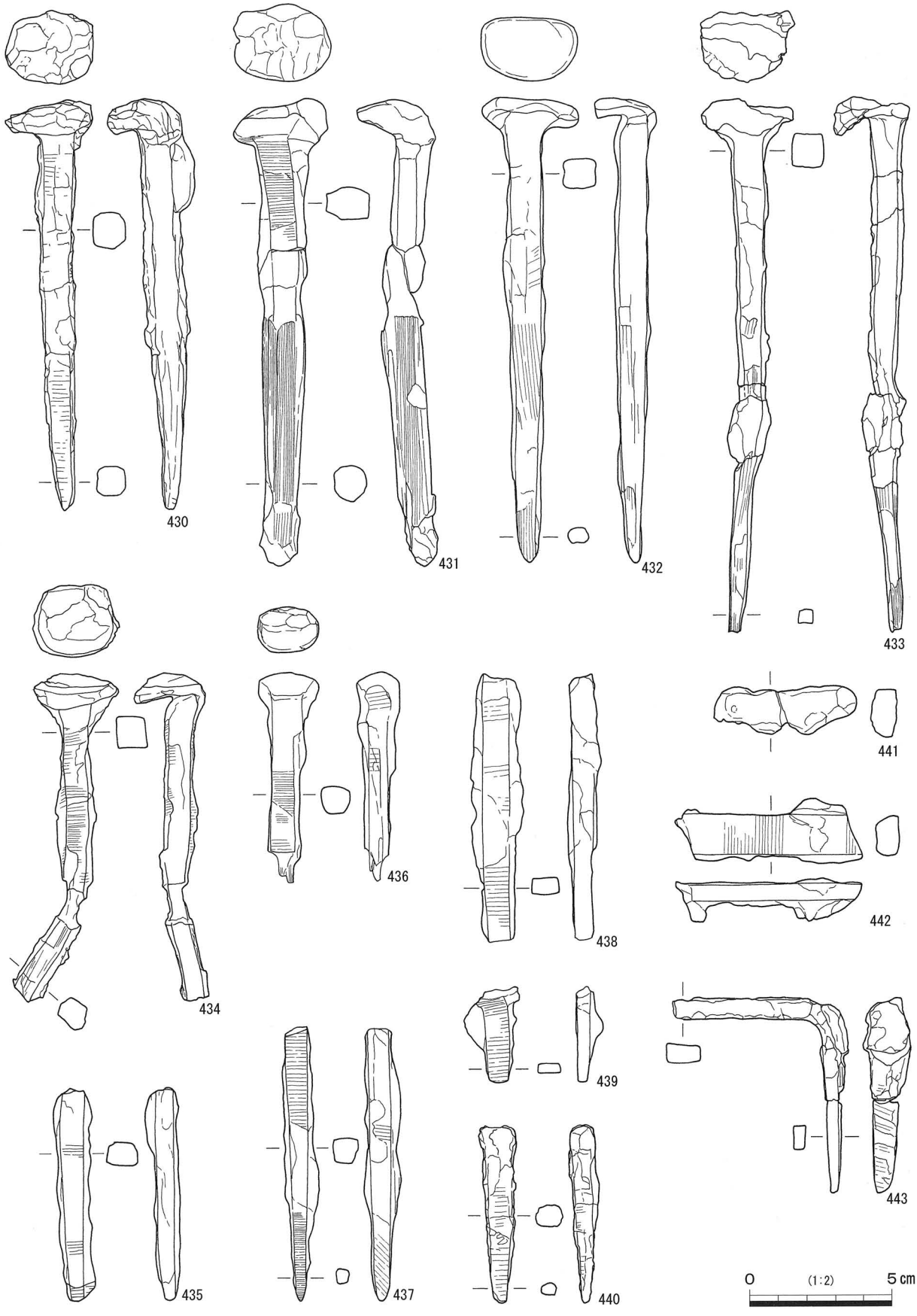
第62図　18区遺物出土状況平断面図

第８表　18区出土遺物一覧表(土器)

番号	器種	口径	高さ	底径	出土地点	備考
427	須恵器杯蓋	15.0				
428	須恵器杯身	12.2	4.5		墓坑内	
429	須恵器杯身	14.6				

第９表　18区出土遺物一覧表(金属製品)

番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
430	釘	長さ 14.6	幅 0.2～1.6	厚さ 0.4～1.5	墓坑内	鋲頭釘
431	釘	長さ 16.6	幅 0.5～2	厚さ 0.4～1.5	墓坑内	鋲頭釘
432	釘	長さ 16.5	幅 0.4～1.4	厚さ 0.4～1.2	墓坑内	鋲頭釘
433	釘	長さ 19	幅 0.5～1.8	厚さ 0.4～1.3	墓坑内	鋲頭釘
434	釘	長さ 11.6	幅 0.7～1.7	厚さ 0.4～1.2	墓坑内	鋲頭釘
435	釘	長さ 7.6	幅 0.5～1.4	厚さ 0.4～1.2	墓坑内	
436	釘	長さ 7.5	幅 0.5～1.1	厚さ 0.2～1.5	墓坑内	折頭釘
437	釘	長さ 9.7	幅 0.3～1.2	厚さ 0.3～1.3	墓坑内	
438	釘	長さ 9.3	幅 0.9	厚さ 0.7～1.1		
439	鏃？	長さ 3.3	幅 0.9	厚さ 0.3～1		
440	釘	長さ 6.3	幅 0.3～1.3	厚さ 0.2～0.9	墓坑内	
441	鏃？	長さ 5	幅 1～1.7	厚さ 0.9		
442	鏃？	長さ 6.6	幅 1.4	厚さ 0.6		
443	鏃	高さ 7	最大幅 5.8	厚さ 0.4～1.7	墓坑内	



第63図　18区出土遺物実測図－２

20区の概要

調査期間：平成18年７月11日～７月16日

調査面積：44㎡

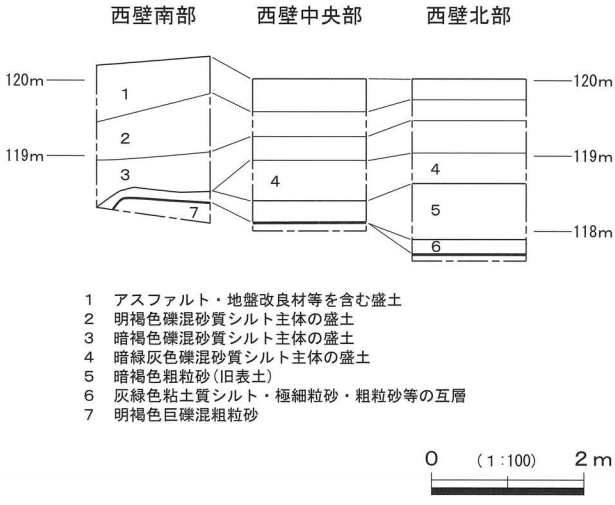
20区は平成18年度の調査区(調査Ⅳ)で、19区から道路を挟んで南西20～30m地点に位置する。調査地の旧状は山林および荒地で、多量のゴミが投棄されていた。現地表面の標高は119～120.5m程度、北部東西方向の尾根状の高まりが伸びている。南西には水路、南には河川(服部川)があり、南西側は１m以上の落差で落込んでいる。

検出遺構と出土遺物(第64～65図、図版一四・二二)

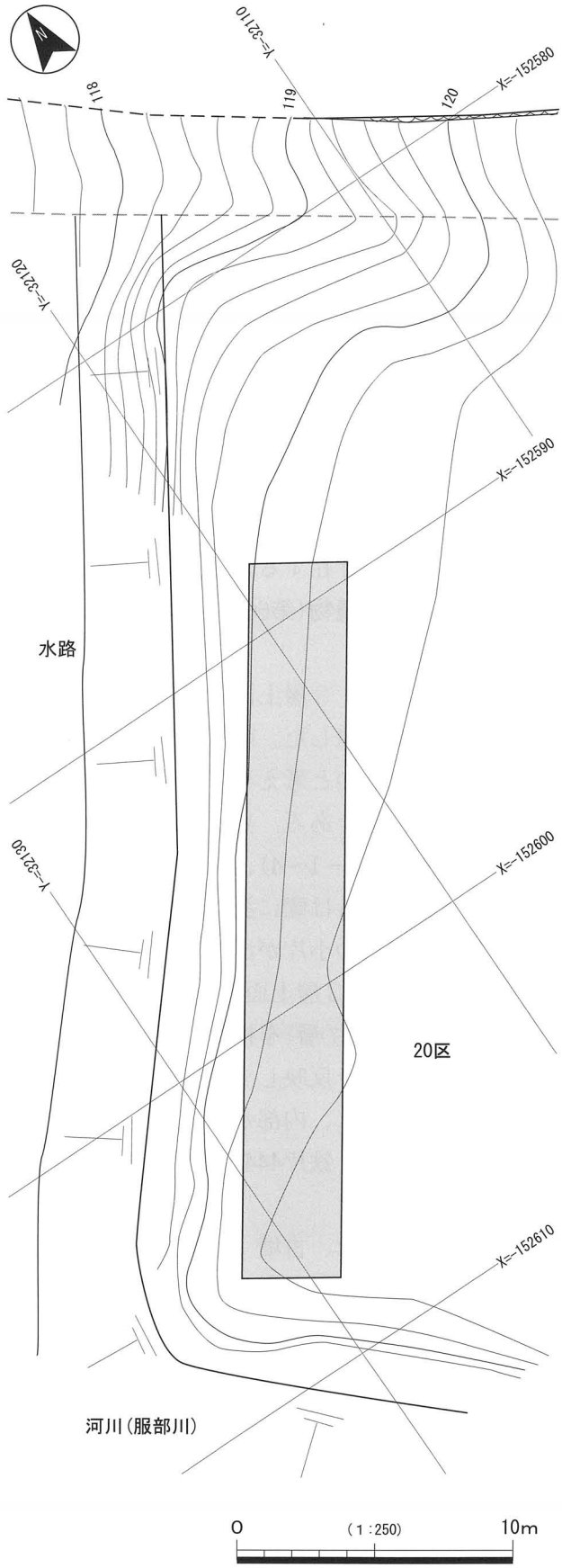
ここでは、表土以下の１～４層までがゴミ・産業廃棄物等によって埋め立てられていた。旧表土は現地表下1.5～２m程度の５層で、以下に６層の互層があり、基盤層である７層に至る。基盤層は南西部で土手状の高まりとなり、南へ急に落込むのを確認した。

小結

当地は埋め立てによって旧地形が改変されていることが判明した。南西部の落込みは、南の服部川につながるものであろう。



第64図　20区断面図



第65図　20区周辺地形測量図

21・22区の概要

調査期間：平成17年10月24日～11月９日

調査面積：21区　40㎡

22区　20㎡

21・22区は平成17年度の調査区（調査Ⅱ）で、20区から河川「服部川」を挟んで南西50m地点に位置し、既設南北道路の東に接しており、里道を挟んで南北に位置する。調査地の旧状は耕地で、現地表面の標高は116.2～118.4mで、東西方向の尾根状の高まりが伸びており、南東が高く、北西が低い。１・２層作土直下で遺構が構築されている。基盤層は５層であるが、礫や粗粒砂からなるブロック層のため、さらに下部にいわゆる地山が存在するものと考えられる。

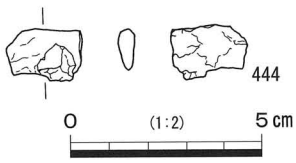
検出遺構と出土遺物（第66～68図、図版一四二三）

21区：21区では、３層上面で**土坑2101～2104**および**落込み**を検出した。南端の落込みは、旧地形を反映するものと考えられ、調査地全体が下がっているようである。表土直下からも大きな掘込みがあり（①－1～4）、底に巨石が位置していた。落込みからは礫に混じって、弥生土器～土師器や須恵器の小片が出土している。

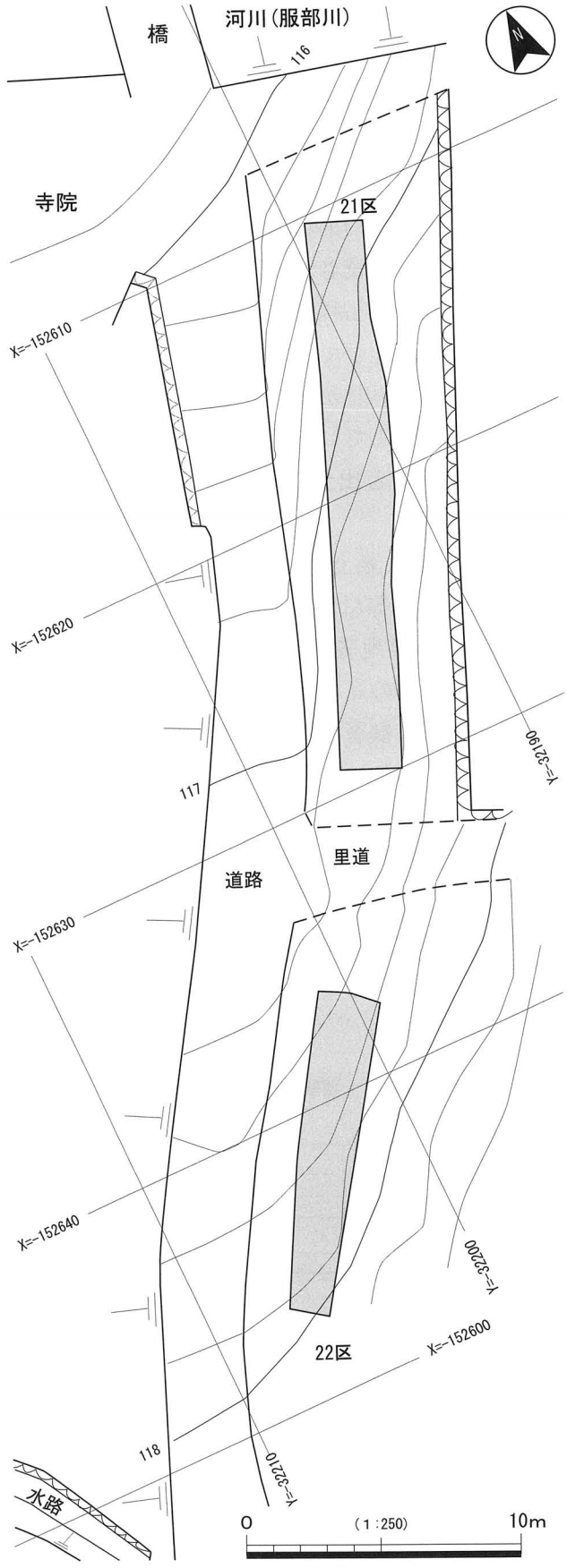
22区：22区では、３層上面で**土坑**（④～⑥層）、５層上面で**落込み**（⑦層）を検出した。ここでも、５層上面は旧地形を反映して、谷状に落込んでいくものと考えられ、内部から弥生土器～土師器や須恵器の小片、鉄片**444**が出土している。

小結

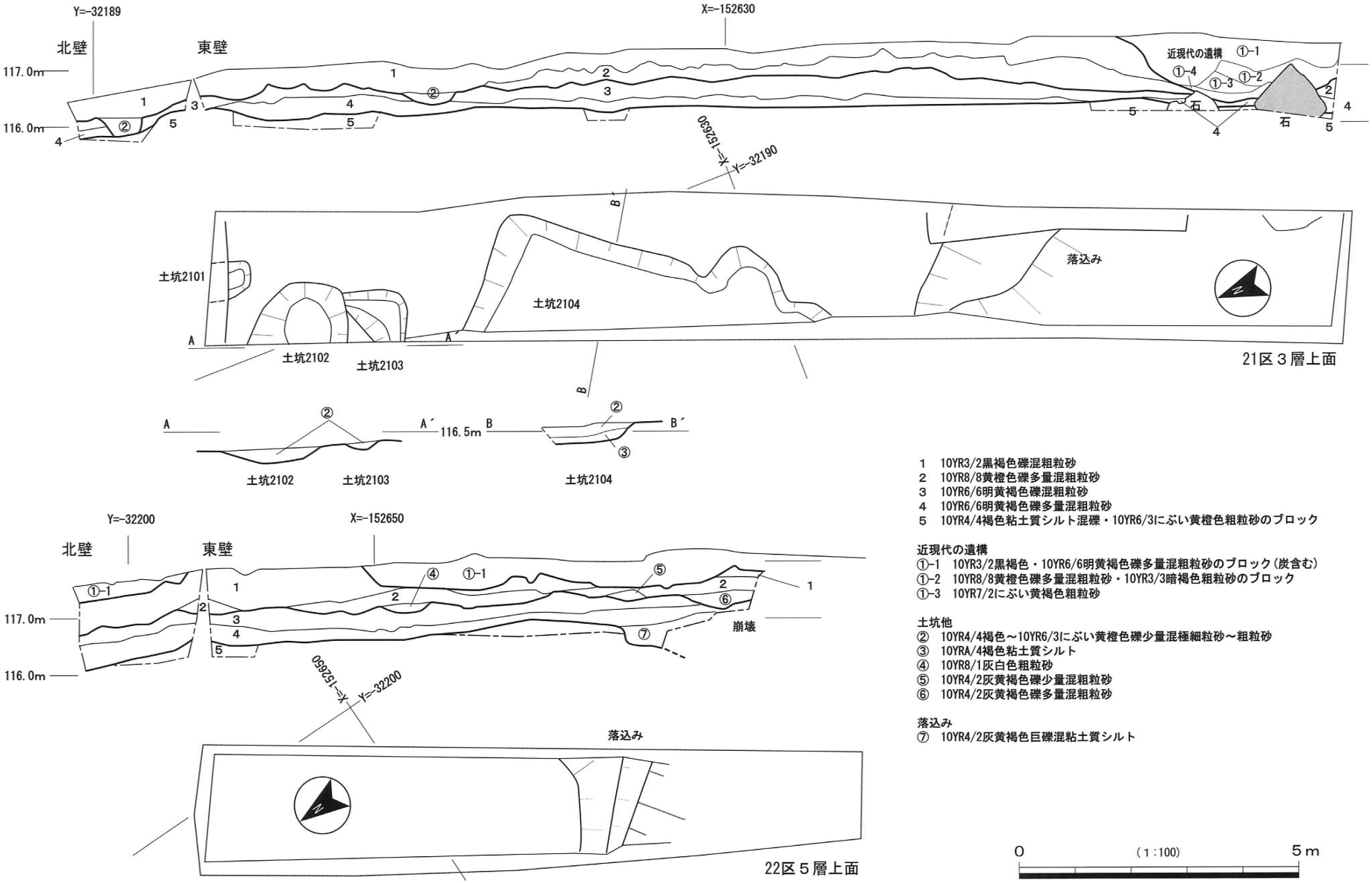
当調査地の東には、古墳「服部川58号墳」が位置している。土地所有者から「つい近年までこの付近に古墳があった」という話を聞いた。22区南端で検出した近現代の遺構や巨石などは、破壊された古墳の残存かもしれない。



第66図　21区出土遺物実測図



第67図　21・22区周辺地形測量図



1　10YR3/2黒褐色礫混粗粒砂
2　10YR8/8黄橙色礫多量混粗粒砂
3　10YR6/6明黄褐色礫混粗粒砂
4　10YR6/6明黄褐色礫多量混粗粒砂
5　10YR4/4褐色粘土質シルト混礫・10YR6/3にぶい黄橙色粗粒砂のブロック

近現代の遺構
①-1　10YR3/2黒褐色・10YR6/6明黄褐色礫多量混粗粒砂のブロック(炭含む)
①-2　10YR8/8黄橙色礫多量混粗粒砂・10YR3/3暗褐色粗粒砂のブロック
①-3　10YR7/2にぶい黄褐色粗粒砂

土坑他
②　10YR4/4褐色～10YR6/3にぶい黄橙色礫少量混極細粒砂～粗粒砂
③　10YRA/4褐色粘土質シルト
④　10YR8/1灰白色粗粒砂
⑤　10YR4/2灰黄褐色礫少量混粗粒砂
⑥　10YR4/2灰黄褐色礫多量混粗粒砂

落込み
⑦　10YR4/2灰黄褐色巨礫混粘土質シルト

0　(1:100)　5m

第68図　21・22区平断面図

23区の概要

調査期間：平成18年１月６日～２月13日

調査面積：116㎡

23区は平成17年度(調査Ⅲ)の調査区である。22区から南西50m付近、既設南北道路の西側に位置している。調査地周辺の旧状は放棄された耕地で、ところどころに石垣が残る段畑の痕跡を残す。全体的には、南東から北西にかけて下がる地形で、現地表面の標高は112～117.4mで、南東から北西へ伸びる尾根状の高まりから谷間に向かっている。また、北東部には墳丘状の隆起が見られ、南東20m付近には、服部川39～41号墳などが位置している。

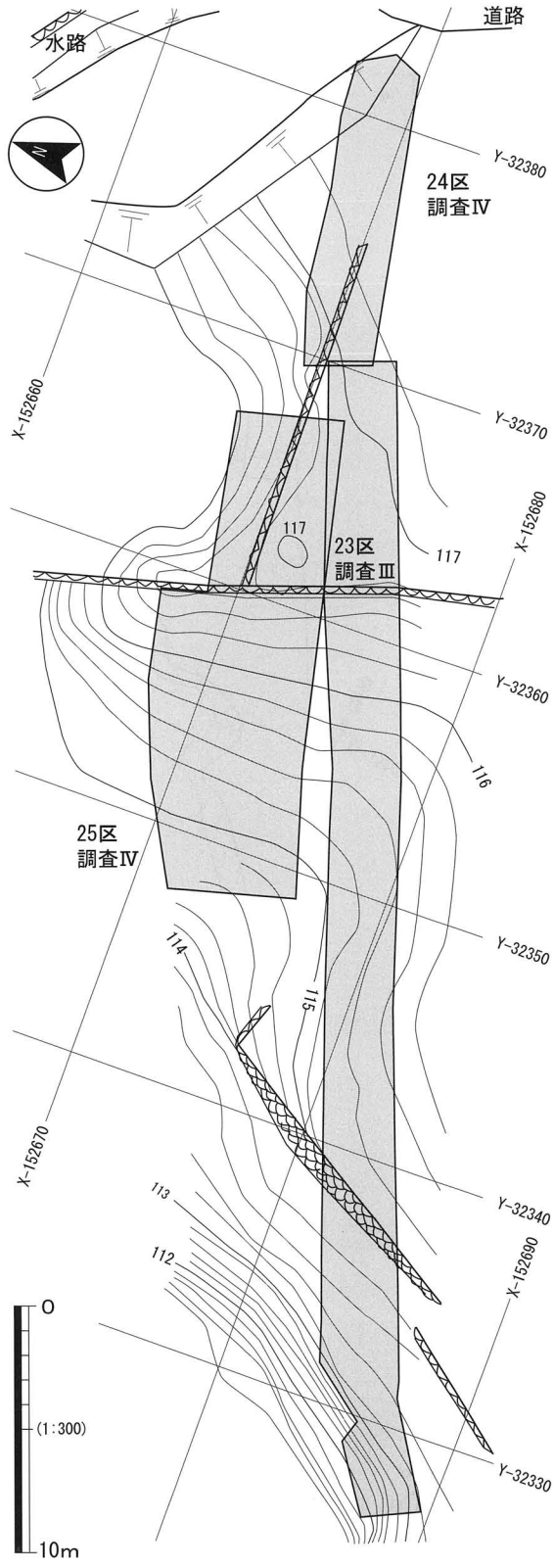
検出遺構と出土遺物(第69～72図、図版二四、二六)

表土から構築されている近現代の井戸(①～③層)、以下３・12層上面で近世～近代の**土坑・落込み・河川**等(④～⑬層)を検出したほか、基盤層である21層上面は北東部で高まりをなし、そこから北東・南西に下がること、中央部に谷状の落込み(６～11層)があり、さらに南西側へ下がることを確認した。４層からは礫～巨石に混じって、須恵器杯蓋**445・446**他、６世紀末～７世紀頃の須恵器・７世紀以降の土師器小型壷・杯等が出土している。また、⑧・⑨層からは、瓦器椀や国産陶磁器・銅銭「寛永通宝」**447**などの中近世の遺物が出土している。

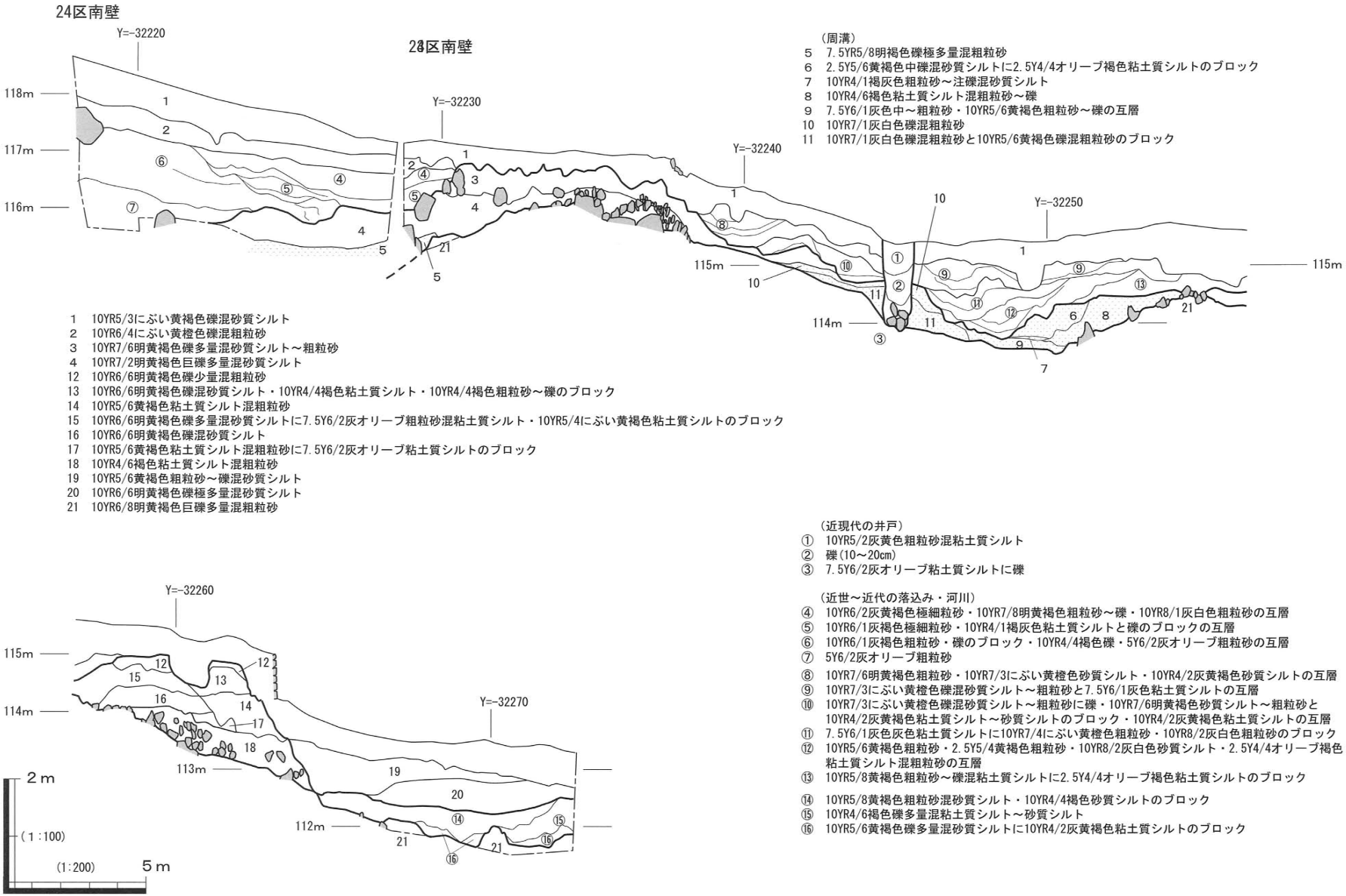
高まり：21層上面には多量の巨石があり、上面の標高は116m前後で中央部が最も高く、東側へ急角度で下がり、落込みに至る。南端は段畑の境界線である石垣に一致しており、巨石が一線に並んでいる。そこより西へは緩やかに下り、谷間へと続く。

落込み：調査区東端でわずかに検出した。南東から北西に伸びる。検出幅２m・深さ0.5m程度を測る。内部には５層が堆積している。

谷間：南東から北西に伸びる。幅７m・深さ1.5m程度を測る。内部からはサヌカイト剥片**448**や弥生土器の小片が出土している。



第69図　23～25区周辺地形測両図



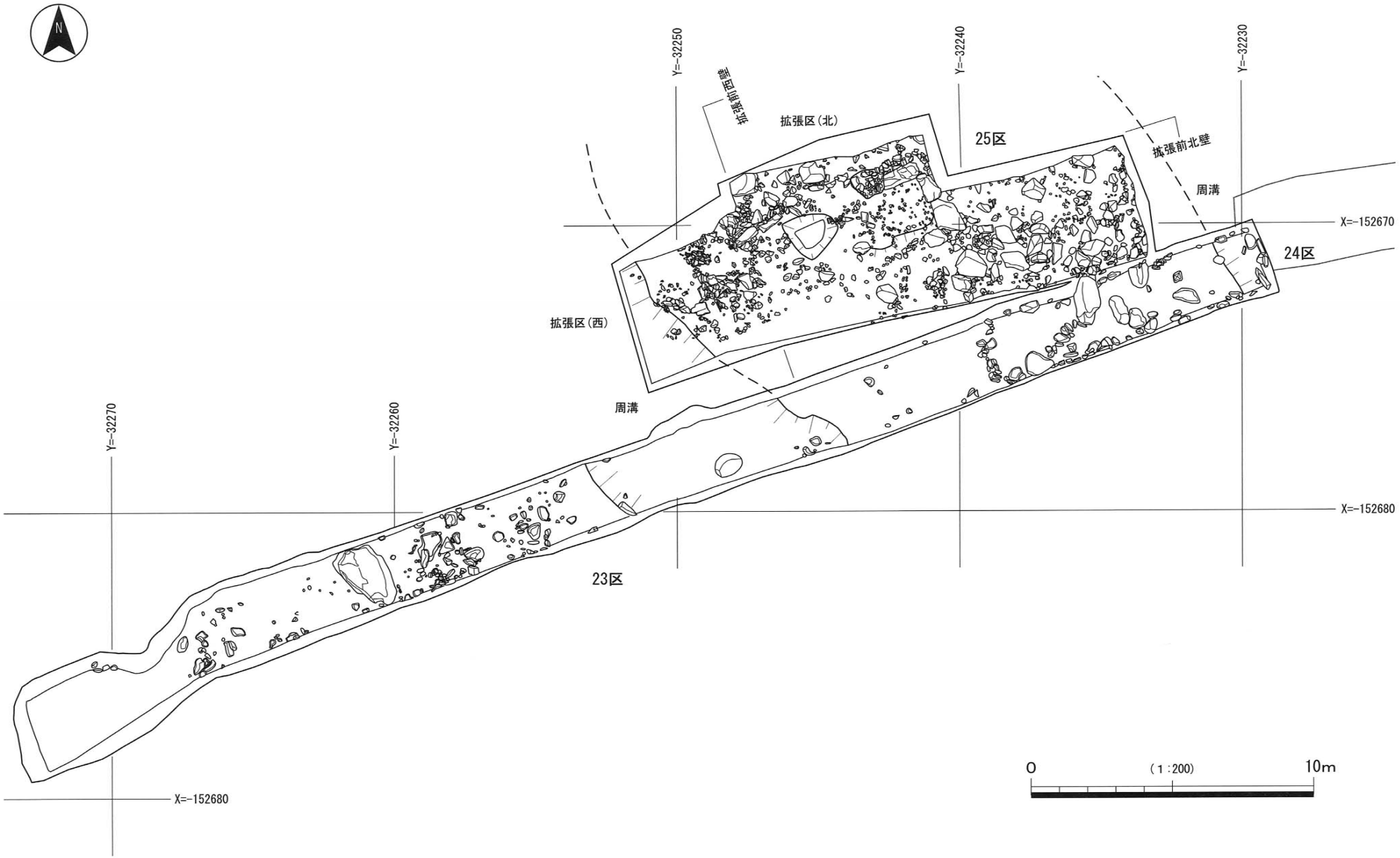
1　10YR5/3にぶい黄褐色礫混砂質シルト
2　10YR6/4にぶい黄橙色礫混粗粒砂
3　10YR7/6明黄褐色礫多量混砂質シルト～粗粒砂
4　10YR7/2明黄褐色巨礫多量混砂質シルト
12　10YR6/6明黄褐色礫少量混粗粒砂
13　10YR6/6明黄褐色礫混砂質シルト・10YR4/4褐色粘土質シルト・10YR4/4褐色粗粒砂～礫のブロック
14　10YR5/6黄褐色粘土質シルト混粗粒砂
15　10YR6/6明黄褐色礫多量混砂質シルトに7.5Y6/2灰オリーブ粗粒砂混粘土質シルト・10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック
16　10YR6/6明黄褐色礫混砂質シルト
17　10YR5/6黄褐色粘土質シルト混粗粒砂に7.5Y6/2灰オリーブ粘土質シルトのブロック
18　10YR4/6褐色粘土質シルト混粗粒砂
19　10YR5/6黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
20　10YR6/6明黄褐色礫極多量混砂質シルト
21　10YR6/8明黄褐色巨礫多量混粗粒砂

（周溝）
5　7.5YR5/8明褐色礫極多量混粗粒砂
6　2.5Y5/6黄褐色中礫混砂質シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色粘土質シルトのブロック
7　10YR4/1褐灰色粗粒砂～注礫混砂質シルト
8　10YR4/6褐色粘土質シルト混粗粒砂～礫
9　7.5Y6/1灰色中～粗粒砂・10YR5/6黄褐色粗粒砂～礫の互層
10　10YR7/1灰白色礫混粗粒砂
11　10YR7/1灰白色礫混粗粒砂と10YR5/6黄褐色礫混粗粒砂のブロック

（近現代の井戸）
①　10YR5/2灰黄色粗粒砂混粘土質シルト
②　礫(10～20cm)
③　7.5Y6/2灰オリーブ粘土質シルトに礫

（近世～近代の落込み・河川）
④　10YR6/2灰黄褐色極細粒砂・10YR7/8明黄褐色粗粒砂～礫・10YR8/1灰白色粗粒砂の互層
⑤　10YR6/1灰褐色極細粒砂・10YR4/1褐灰色粘土質シルトと礫のブロックの互層
⑥　10YR6/1灰褐色粗粒砂・礫のブロック・10YR4/4褐色礫・5Y6/2灰オリーブ粗粒砂の互層
⑦　5Y6/2灰オリーブ粗粒砂
⑧　10YR7/6明黄褐色粗粒砂・10YR7/3にぶい黄橙色砂質シルト・10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの互層
⑨　10YR7/3にぶい黄橙色礫混砂質シルト～粗粒砂と7.5Y6/1灰色粘土質シルトの互層
⑩　10YR7/3にぶい黄橙色礫混砂質シルト～粗粒砂に礫・10YR7/6明黄褐色砂質シルト～粗粒砂と10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト～砂質シルトのブロック・10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトの互層
⑪　7.5Y6/1灰色灰色粘土質シルトに10YR7/4にぶい黄橙色粗粒砂・10YR8/2灰白色粗粒砂のブロック
⑫　10YR5/6黄褐色粗粒砂・2.5Y5/4黄褐色粗粒砂・10YR8/2灰白色砂質シルト・2.5Y4/4オリーブ褐色粘土質シルト混粗粒砂の互層
⑬　10YR5/8黄褐色粗粒砂～礫混粘土質シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色粘土質シルトのブロック
⑭　10YR5/8黄褐色粗粒砂混砂質シルト・10YR4/4褐色砂質シルトのブロック
⑮　10YR4/6褐色礫多量混粘土質シルト～砂質シルト
⑯　10YR5/6黄褐色礫多量混砂質シルトに10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトのブロック

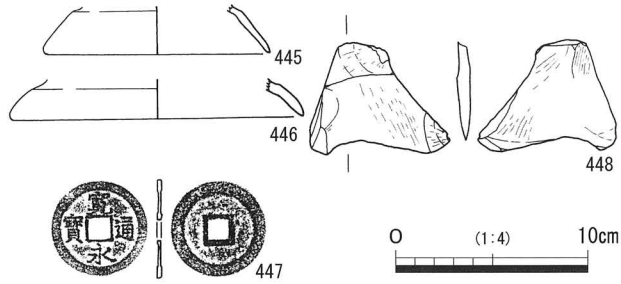
第70図　23・24区断面図



第71図　23～25区平面図

小結

西下がりの地形を検出したが、北東部の高まり部分は段畑と一致しており、谷状地形も数回の流水・滞水を繰り返し、近年までその地形は踏襲されていたものと考えられる。また、近現代の井戸もその谷間に掘られていることから、この部分の水量は豊富だったことがわかる。さらに、調査区北東側には、墳丘状の隆起があることから、ここで検出した巨石は、大窪29号墳で検出した石室の外側を巡る石列・または墳丘内部の裏込めの可能性があると考えられた。これらのことから、翌年度の調査では、高まり部分と、東端の落込みの・現地表の墳丘状の隆起高まりとの関係を明確にするため、当調査区の東側・中央北側に調査区を設定することとなった。



第72図　23区出土遺物実測図（447のみ1：2）

24区の概要

調査期間：平成18年７月６日～７月16日

調査面積：20㎡

24区は平成18年度(調査Ⅳ)の調査区で、23区の東隣に位置する。現地表面の標高は116.8～117.4mで、南東が高い。ここでは、２層以下に近世～近代の河川(④～⑥層)を検出した。最終的に確認した５層は23区で検出した落込み内の埋土である。

検出遺構と出土遺物(第69図～71図、図版二四・二五)

河川：河川の切込み面は、23区で検出した３層上面で、23区でも東端でその一部を検出している。調査区全体がこの河川に一致していたため、不明な点が多いが、23区の結果と合わせれば、検出幅７m・深さは２m以上に達する。

落込み：４層の下で落込み埋土を検出した。湧水が多く、掘削はできなかった。23区の調査結果から、21層を切り込む落込み埋土であると判断した。検出幅は５m程度である。

小結

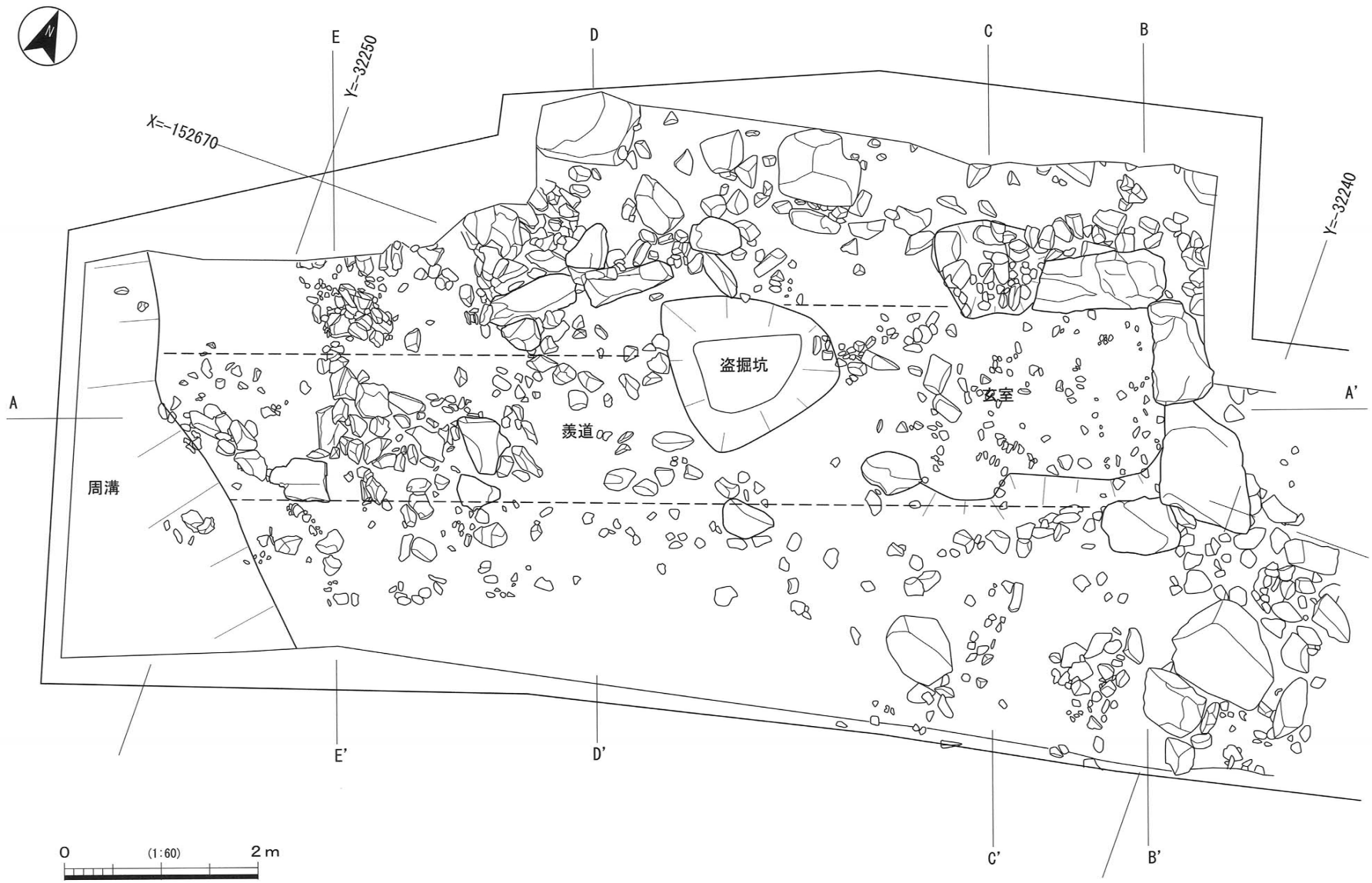
21層を切る落込み(５層)は大規模なもので、旧地形に即したものと考えられ、近世まではその地形は踏襲され、現在は水路が構築されている22区との間の谷間に一致するものであろう。

25区の概要

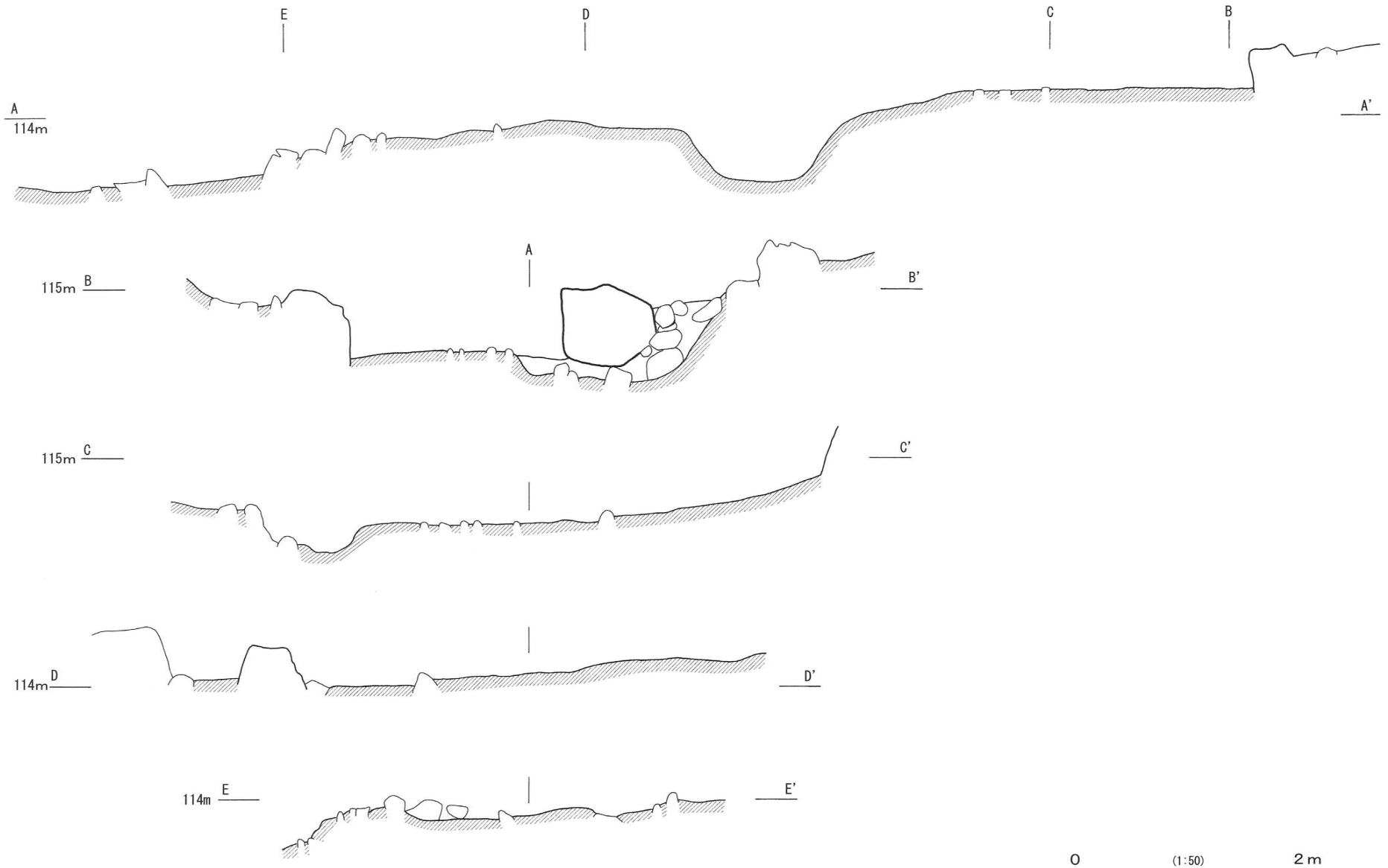
調査期間：平成18年７月24日～10月13日

調査面積：80.6㎡

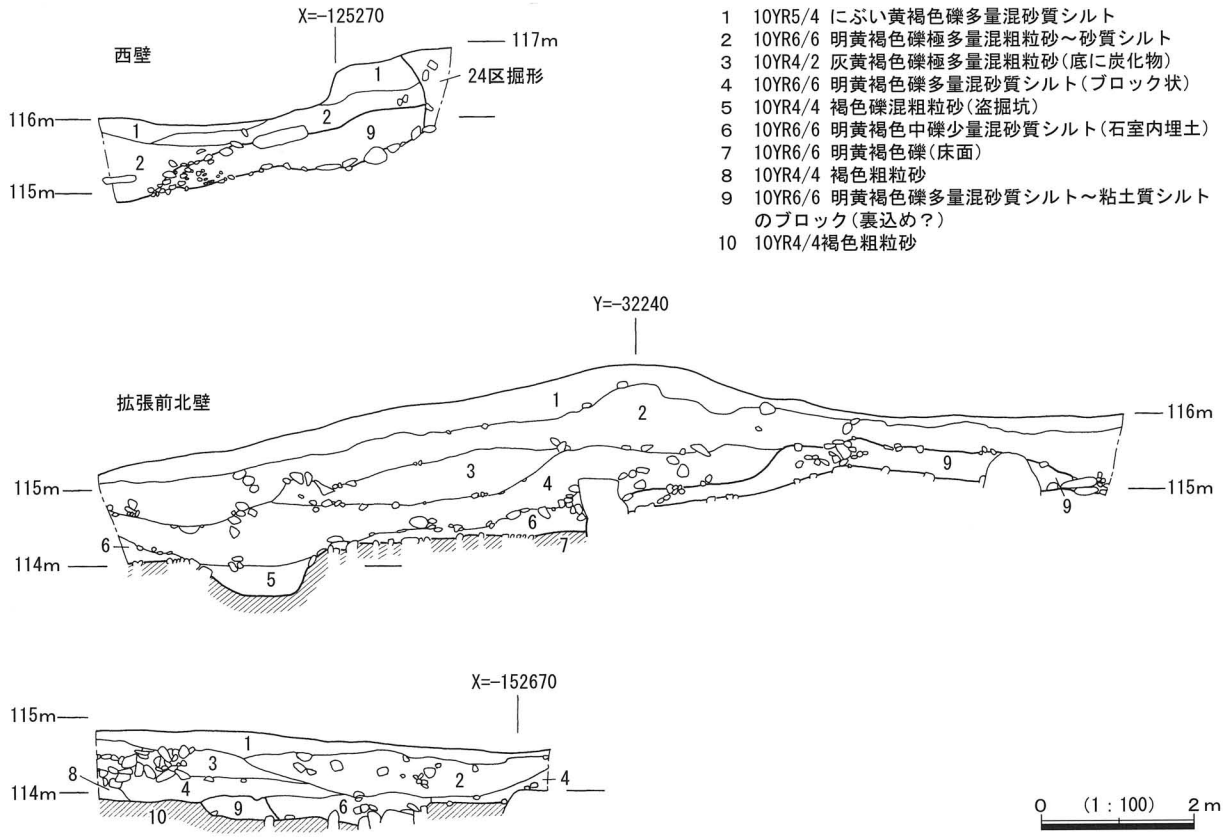
25区も平成18年度(調査Ⅳ)の調査区で、23区の北、24区の西に接する調査区である。現地表面の標高は115～117mで、調査区中央部には墳丘状の隆起が遺存しており、隆起はそこから北へ伸びている。ここでは、当初、４×13mの規模で調査を開始したが、調査区中央北端で、巨石がL字形に並ぶのを確認したことから、まず北側へ３×８m拡張し、調査を継続した。その結果、４個の巨石がコの字形に配置されていることがわかり、古墳石室の奥壁であることが確認できた。古墳名称は『服部川132号墳』とした。さらに、23区で検出した谷間がこの古墳の周溝になる可



第73図　25区服部川132号墳平面図



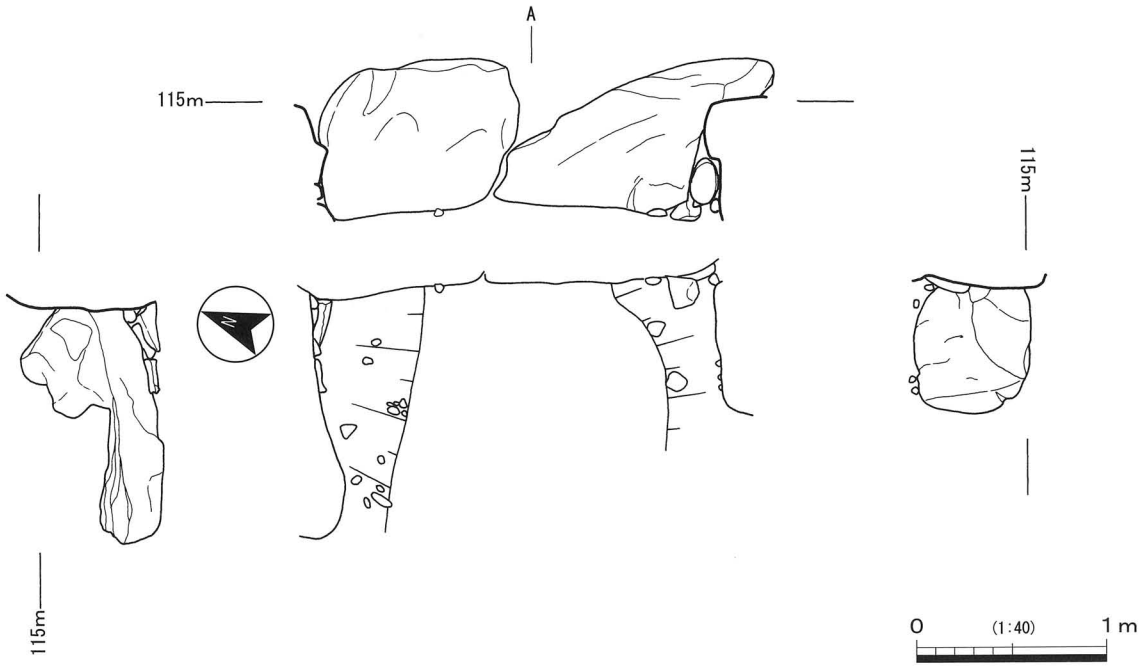
第74図　25区服部川132号墳縦断面・横断面図



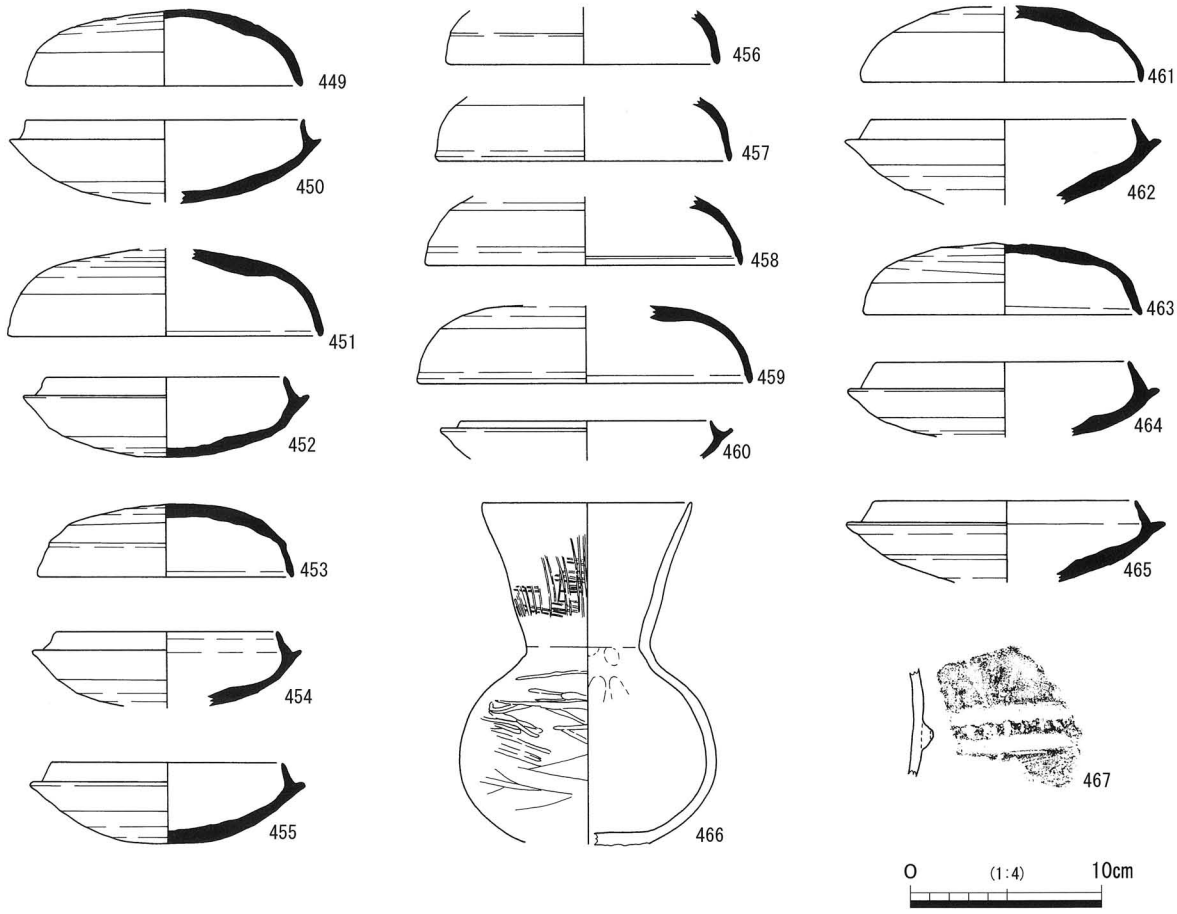
1 10YR5/4 にぶい黄褐色礫多量混砂質シルト
2 10YR6/6 明黄褐色礫極多量混粗粒砂～砂質シルト
3 10YR4/2 灰黄褐色礫極多量混粗粒砂(底に炭化物)
4 10YR6/6 明黄褐色礫多量混砂質シルト(ブロック状)
5 10YR4/4 褐色礫混粗粒砂(盗掘坑)
6 10YR6/6 明黄褐色中礫少量混砂質シルト(石室内埋土)
7 10YR6/6 明黄褐色礫(床面)
8 10YR4/4 褐色粗粒砂
9 10YR6/6 明黄褐色礫多量混砂質シルト～粘土質シルトのブロック(裏込め？)
10 10YR4/4褐色粗粒砂

0 (1 : 100) 2 m

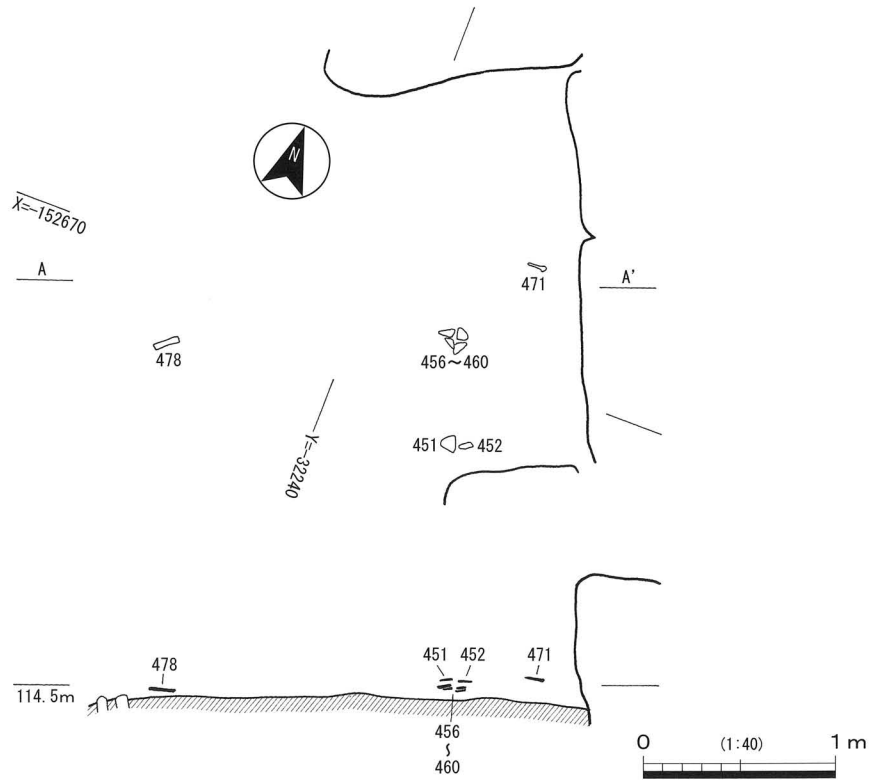
第75図　25区断面図



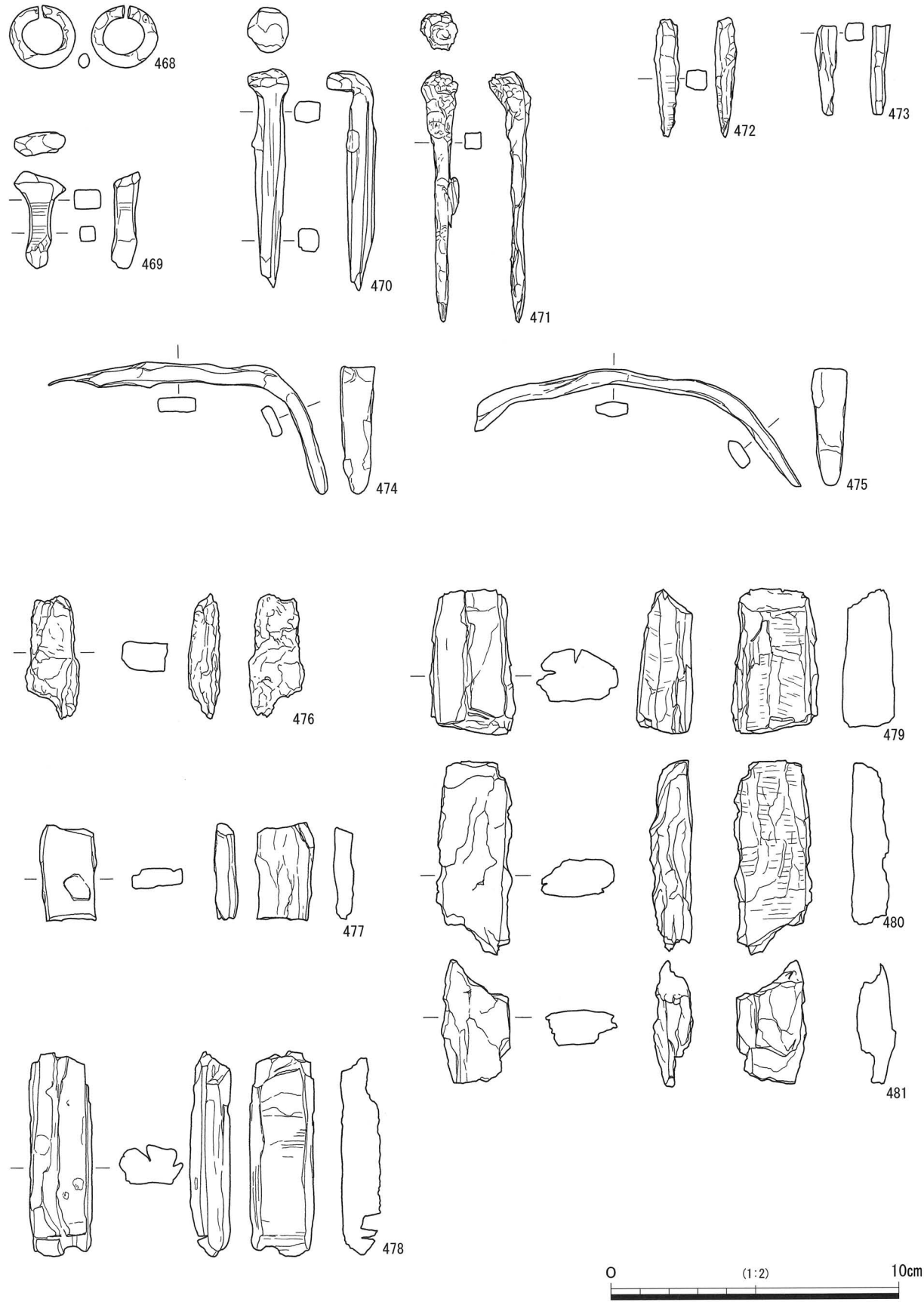
第76図　25区服部川132号墳立面図・床面平面図



第77図　25区出土遺物実測図－１



第78図　25区服部川132号墳遺物出土状況平断面図



第79図　25区出土遺物実測図－２

能性が高いと考えられたことから、西へも５×５m拡張したところ、23区の谷間に続く基盤層の下がりを検出することができ、これを周溝と考えた。さらに、北東端部にも基盤層の若干の下がりが認められたことから、23区の落込み・24区を含めて周溝と考えた。当調査区でも、16区同様、石室外側には巨石が多量に認められた。玄室内外、盗掘坑周辺および内部から、６世紀末の須恵器・土師器、金属製品などが出土した。側壁裏込めからは縄文土器が出土している。

検出遺構と出土遺物(第73～79図、図版二四・二七～二八・五五～五六)

石室：石室は横穴式石室で、奥から１～２石分しか遺存していないため、詳細は不明であるが西側に開口している。石室の主軸方向は、北から70°東へ振っている。奥壁２石・南側壁１石・北側壁１石、各１段ずつが遺存しており、その部分の床面には、径10cm前後の敷石が少量遺存していた。中央部には盗掘坑が見られる。玄室の検出長1.6～1.96m・玄室幅1.6m前後を測り、奥壁は高さ0.3～0.8m・幅１～1.4m、北側壁の高さは0.3～0.6m・幅1.3m前後で、西半分は割取られている。南側壁の高さは0.6m前後、幅0.7m程度である。床面の標高は113.8～114.2mで、西下がりである。奥壁から周溝東肩までは約10m程度の規模があり、石材の並びや抜取り痕、床面レベル等から、盗掘坑付近が玄門、Ｅ－Ｅ´で表した付近が羨門である可能性が高く、玄室・羨道ともに長さ５m前後の規模に復元できる。

周溝：前述のように、23・24区で検出した東部の落込み、および24区で検出した中央部の谷間を当古墳の周溝と考えた。両調査区の調査結果から、周溝の幅は東部で約５m以上、西部では幅７m・深さ1.5mを測る。東西の周溝間は15m程度あり、地形を反映したものか、東西に長い楕円形に近い。

側石掘形：南側壁に沿ってトレンチを設定して下層の状況を確認したところ、側壁より南0.6m・北0.4mの範囲で、側壁の掘形を確認した。深さは南がベースから0.7m・北が床面から0.2mで、底はほぼ水平である。掘形内は、礫を多量に含む粘土質シルト～砂質シルトで充填されている。また、この層は、拡張前西壁で確認した９層と同一であると考えられる。掘形は、床面でも、平面的に検出することができ、北側壁内側で同様の状況を確認した。

出土遺物：玄室内から６世紀末～7世紀初頭の須恵器449～460、耳環468・釘469～473・鎹？476・477、用途不明鉄製品478～481などが、羨道付近からは鎹474・475が出土している。これらのうち、床面近くから出土したものには、須恵器杯蓋・杯身451・452、456～460、釘471、用途不明鉄製品478がある。このうち、須恵器杯蓋451・同杯身452は南側壁際でまとまって検出されたことから、セットになるものと考えられる。須恵器杯蓋456～459・同杯蓋460も奥壁・南側壁間でまとまって出土していることから、セットも含まれている可能性がある。釘471は奥壁際で、鎹？478は奥壁から2.5m付近で検出されたことから、この付近に木棺の存在が想定できる。用途不明鉄製品478～481は同一個体の可能性がある。平坦面に横方向の木目が遺存しており、木棺等大型木製容器の飾金具・留金具などの用途が考えられる。石室外では、奥壁外側から杯身461、北側壁外(北)側から杯蓋462～464、盗掘坑周辺および内部から須恵器杯身465、土師器長頸壷466、北側壁裏込め付近から縄文土器鉢467が出土している。

小結

当調査区では、２年にわたる分割された調査区で、服部川132号墳を検出することができた。服部川132号墳は、墳丘状の高まりは確認されていたが、23～25区の調査によって、石室のみな

らず、周溝の存在を確認できたことは多大な成果であるといえる。ここでも石室外側(とくに奥壁東側)に巨石が散乱していることから、大窪29号墳のような外部施設があった可能性もある。石室内部は破壊が進んでいたが、段畑の境界である石垣の下に奥壁が遺存していたことは、開墾時に最下段の奥壁のみ残して区画とし、抜き取った石材を石垣のベースとした可能性もある。

第10表　25区服部川132号墳出土遺物一覧表(土器)

番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
		口径	高さ	底径		
449	須恵器杯蓋	14.4				
450	須恵器杯身	14.6				
451	須恵器杯蓋	16.2			玄室	
452	須恵器杯身	12.6	4.2		玄室	
453	須恵器杯蓋	13.3	3.9			
454	須恵器杯身	11.7				
455	須恵器杯身	12.2	4.3			
456	須恵器杯蓋	14.1			玄室	
457	須恵器杯蓋	15.3			玄室	
458	須恵器杯蓋	16.4			玄室	
459	須恵器杯蓋	15.3			玄室	
460	須恵器杯身	13.2			玄室	
461	須恵器杯蓋	14.6				
462	須恵器杯身	13.6				
463	須恵器杯蓋	14.4	4			
464	須恵器杯身	13.2				
465	須恵器杯身	13.6				
466	土師器長頸壺	10.9				

第11表　25区服部川132号墳出土遺物一覧表(金属製品)

番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
468	耳環	外径 2.3×2.2	内径1.4×1.35	厚さ 0.4～0.5	羨道付近	
469	釘	長さ 3.4		厚さ 0.4～1.7		
470	釘	長さ 7.7	幅 0.2～1.4	厚さ 0.2～0.7		折頭釘
471	釘	長さ 8.8	幅 0.4～0.7	厚さ 0.3～0.8	玄室奥壁近く	折頭釘
472	釘	長さ 4.2	幅 0.2～0.85	厚さ 0.25～0.8		
473	釘	長さ 3.2	幅 0.4～0.7	厚さ 0.3～0.8		
474	鏃	高さ 4.7	最大幅 9.6	厚さ 0.4～1.2		
475	鏃	高さ 4.1	最大幅 11.3	厚さ 0.4～1.2	羨道付近	
476	鏃?	高さ 4.3	最大幅 1.9	厚さ 0.2～1.05		
477	鏃?	高さ 3.4	最大幅 1.8	厚さ 0.3～0.8		
478	留金具?	長さ 7.1	幅 2.2	厚さ 0.4～1.3	玄室	同一個体の可能性あり
479	留金具?	長さ 5.9	幅 2.6	厚さ 0.4～1.85		
480	留金具?	長さ 6.8	幅 2.6	厚さ 0.4～1.4		
481	留金具?	長さ 4.4	幅 2.3	厚さ 0.4～1.1		

26・27区の概要

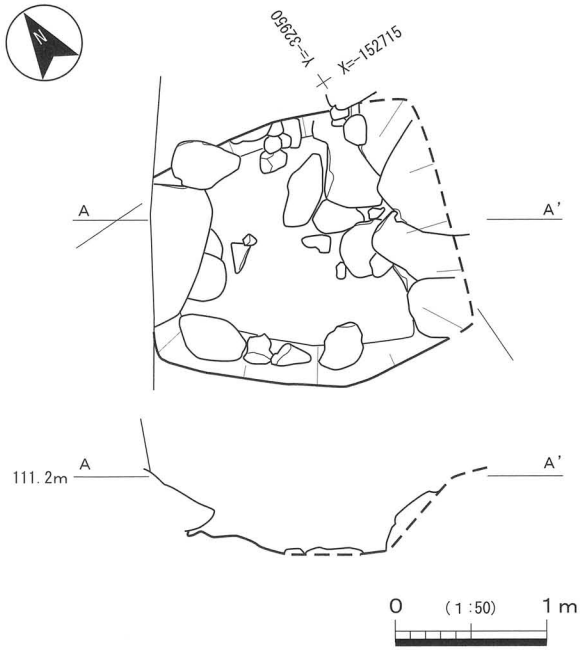
調査期間：平成18年７月13日～10月21日

調査面積：26区　112.5㎡

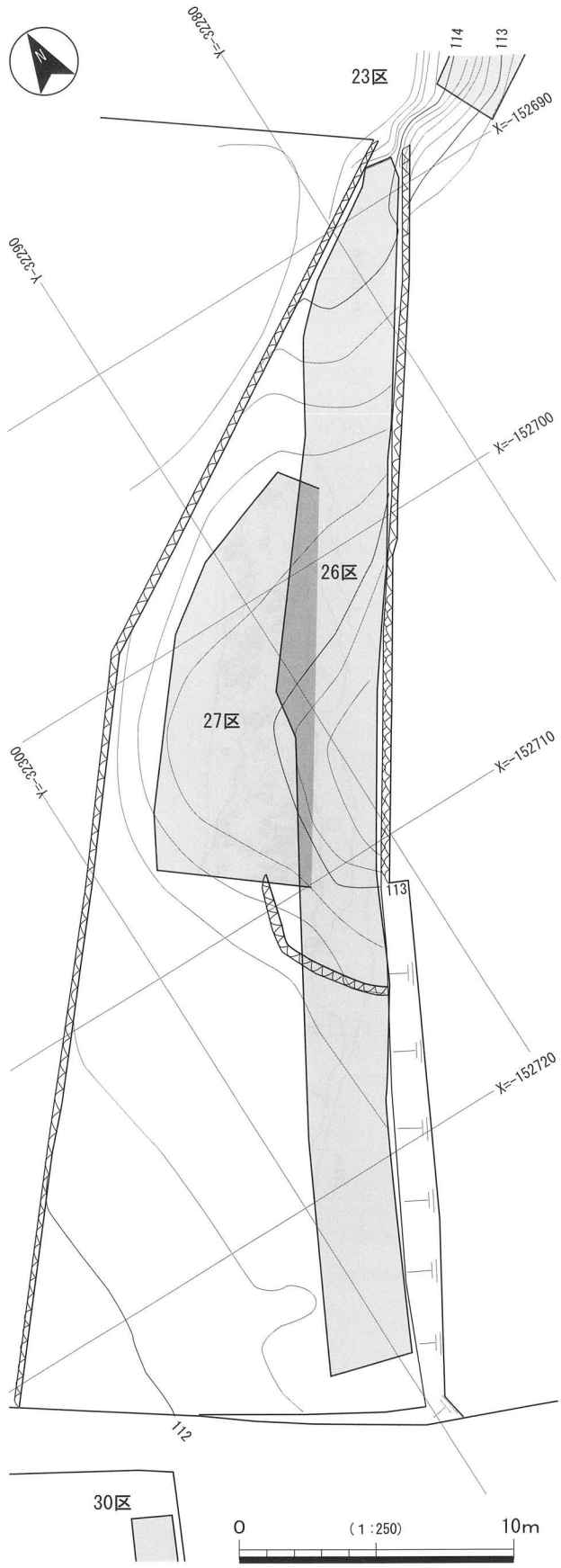
27区　35㎡

26・27区も平成18年度(調査Ⅳ)の調査区で、25区の南西に続く区画に位置している。調査地の旧状は放棄された耕地で、段畑の痕跡が残っていた。現地表面の標高は112～114mで、北東から南西へ下がる。区画中央部には墳丘状の高まりが東から西へ伸びている。周辺の地形を見ると、南東から北西にのびる尾根上に、調査地から東50m付近には服部川33～36号墳、西50m付近には同81～83号墳が位置しており、古墳の密集したなかにあって、空閑地となっている。ここでは、東側に26区、西側に27区を設定した。調査対象地のほぼ全面に調査区を設定したため、土置き場の余地がなく、26区は南北２つに分割し、26区北半部から調査を開始した。26区北半部の調査終了後埋め戻し、26区南半部の調査を行った。26区南半部の調査終了後埋め戻し、27区の調査を行った。

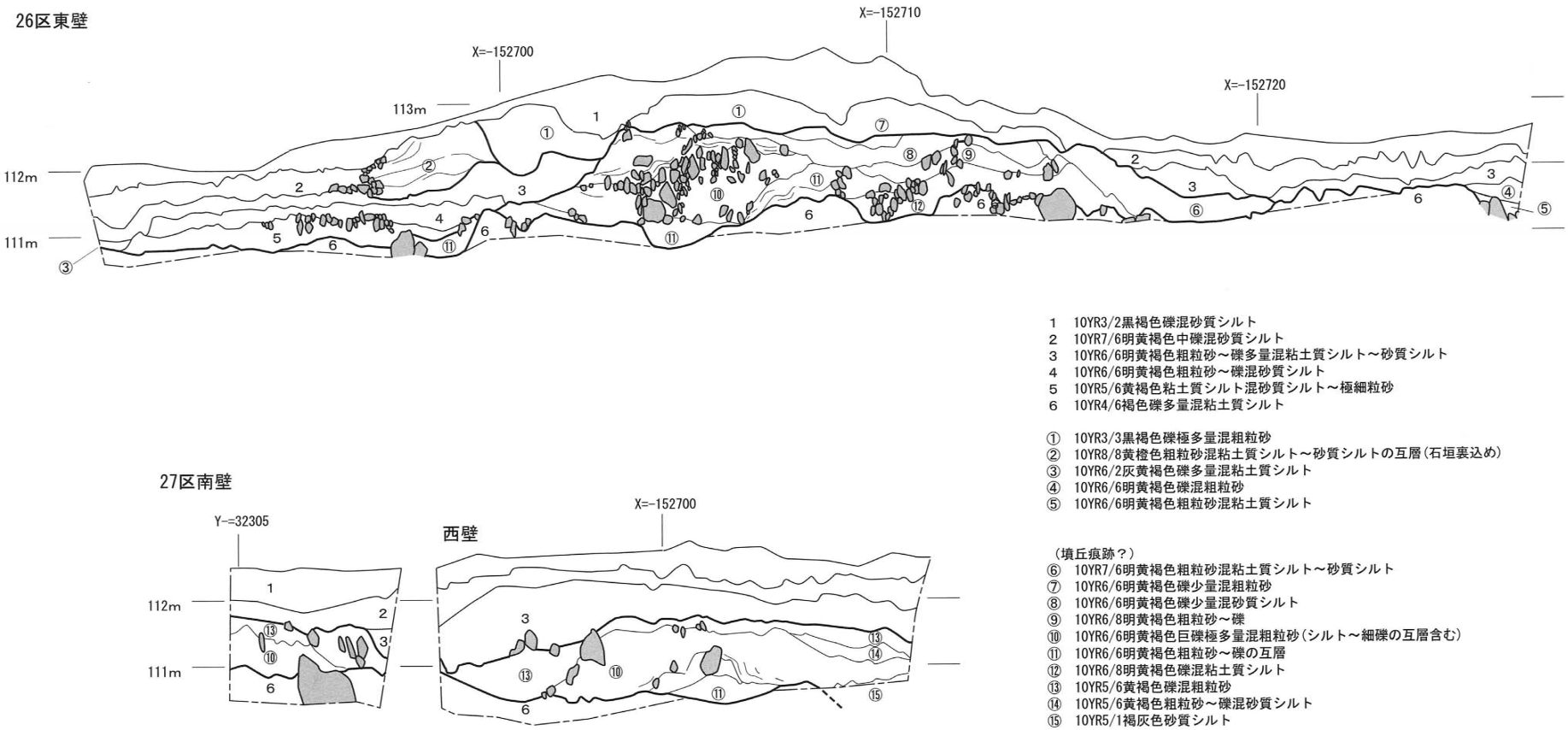
26区では、１層表土以下で近現代の土坑(①層)や石垣石垣裏込め(②層)などを検出した。



第80図　26区方形土坑平断面図



第81図　26・27区周辺地形測量図



1　10YR3/2黒褐色礫混砂質シルト
2　10YR7/6明黄褐色中礫混砂質シルト
3　10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫多量混粘土質シルト～砂質シルト
4　10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
5　10YR5/6黄褐色粘土質シルト混砂質シルト～極細粒砂
6　10YR4/6褐色礫多量混粘土質シルト

①　10YR3/3黒褐色礫極多量混粗粒砂
②　10YR8/8黄橙色粗粒砂混粘土質シルト～砂質シルトの互層(石垣裏込め)
③　10YR6/2灰黄褐色礫多量混粘土質シルト
④　10YR6/6明黄褐色礫混粗粒砂
⑤　10YR6/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルト

(墳丘痕跡？)
⑥　10YR7/6明黄褐色粗粒砂混粘土質シルト～砂質シルト
⑦　10YR6/6明黄褐色礫少量混粗粒砂
⑧　10YR6/6明黄褐色礫少量混砂質シルト
⑨　10YR6/8明黄褐色粗粒砂～礫
⑩　10YR6/6明黄褐色巨礫極多量混粗粒砂(シルト～細礫の互層含む)
⑪　10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫の互層
⑫　10YR6/8明黄褐色礫混粘土質シルト
⑬　10YR5/6黄褐色礫混粗粒砂
⑭　10YR5/6黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
⑮　10YR5/1褐灰色砂質シルト

第82図　26・27区断面図

両調査区の中央部では、その下部には古墳墳丘の痕跡の可能性のある多量の礫や巨石の混じる高まり(⑥～⑫層)がみられた。基盤層は６層で、26区南端(④・⑤層)・北部(⑪層)、27区北端(⑪・⑮層)では急激に落込んでいる。26区の６層上面では、南部で**方形土坑**を１基検出した。一方、26区の東西では１層以下に、作土・床土と考えられる２～５層がほぼ水平に堆積していた。

検出遺構と出土遺物(第80～84図、図版二四・二九・三〇)

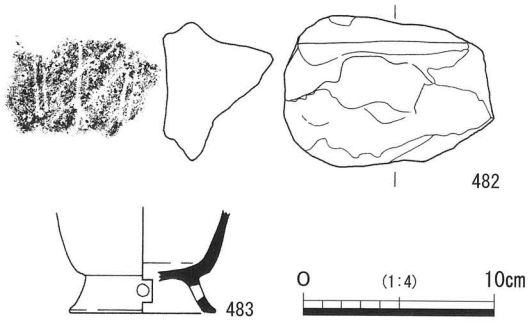
古墳墳丘痕跡：墳丘痕跡と思われる高まりは、両調査区中央部で確認した。南裾にあたる部分は石垣痕跡に一致し、北裾は26区北端から10～13地点・27区北端で、現地表面の標高113mの等高線に一致し、西裾にあたる部分は調査区外に至る。高まりを構成する地層は巨石・礫・粗粒砂・粘土質シルト・砂質シルトなどからなり、高さは1.5m程度を測る。

方形土坑：・調査区南端から12～13m付近で検出した。南北1.8×東西2.2mの方形の土坑で、深さ0.55mを測る。埋土は粗粒砂混砂質シルトである。内部からの出土遺物はなかったが、周辺から器種不明土製品が出土した。

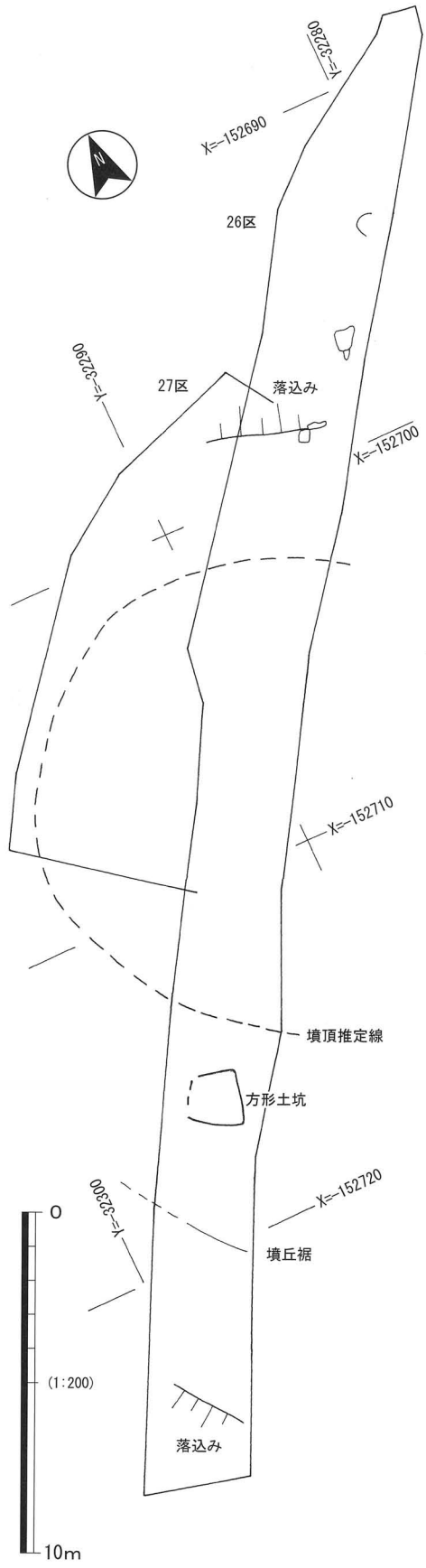
出土遺物：器種不明土製品**482**は、現存の幅5.5cm・高さ4.5cm・厚さ1.5cmを測る。一面にはヘラ描きの線刻があり、もう一面には幅３cm・高さ1.8cmの断面三角形の鍔状の突起を持つ。陶棺などの可能性もある。

小結

26・27区では、墳丘痕跡の可能性のある高まりを検出。周辺の状況から、ここにも古墳があった可能性は高いが、石室等古墳の施設を積極的に肯定できる材料は得られなかった。しかし**方形土坑**や陶棺の可能性のある土製品の出土などから６世紀以前の埋葬施設の存在も想定できる。



第83図　26区出土遺物実測図



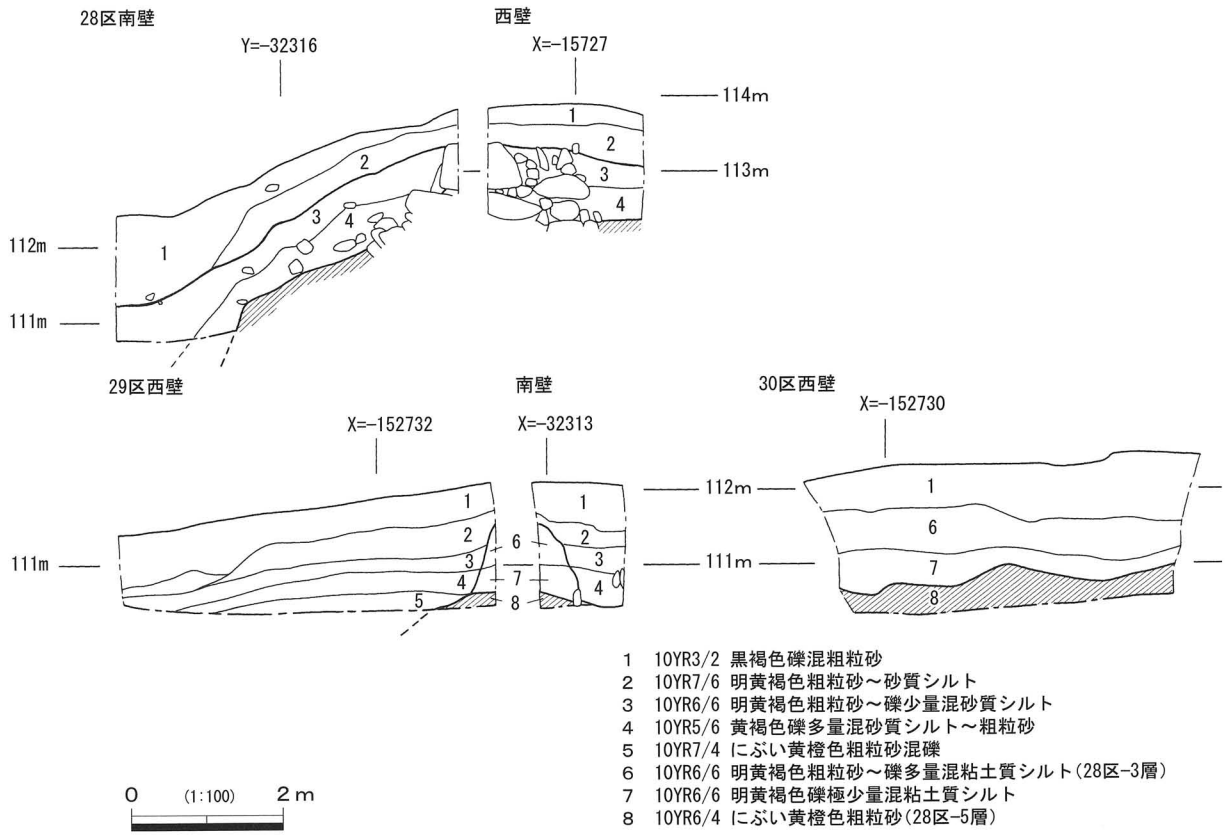
第84図　26・27区墳丘復元図

28～42区周辺の概要

28～42区の調査対象地は、南東から北西へ向かって下がる緩斜面にあたり、南東から北西に伸びる２本の尾根とそれに挟まれた谷の一部が含まれ、北側の尾根に沿った南東－北西方向の道路とそれを切る北東－南西方向の道路が交わる三叉路から南西に伸び、神光寺に至る道路の周辺に位置する。調査地付近の標高は、東西道路が110～115mと東上がりで、北東端の三叉路では、中央部の34・36・37区付近では110.5m程度と最も低く、南西端の神光寺付近では再び112.5mに達し、北部が北側の尾根、中央部が谷間、南部が南側の尾根に対応することがわかる。28～30区は服部川22号墳の、31～35区は服部川12号墳のすぐそばの調査区で、北側の尾根に位置する。この付近も古墳が密集する地区で、尾根上150m東方の『二室塚(服部川25号墳)』を核として、数十基の古墳が連なって構築されている。調査地近辺では服部川22号墳の北西側には、同19～21号墳が連続して構築されており、服部川12号墳のすぐ南東には同13号墳が接し、南東へ同９～11号墳が、東へは同23・24・130号墳が、北側道路に沿って位置している。38区・39区南部・42区は南側の尾根に位置している。尾根上には、神光寺境内の服部川３～６号墳をはじめとして、42区のすぐ東には同７号墳、38区の北西10mには同15号墳があり、さらに北西に同14号墳、同16～18号墳が構築されている。

28～30区の概要

調査期間：28区　平成18年１月25日～３月23日　　**調査面積**：6.8㎡
29区　平成18年１月25日～３月23日　5.0㎡
30区　平成18年10月18日～10月19日　5.0㎡



第85図　28～30区断面図

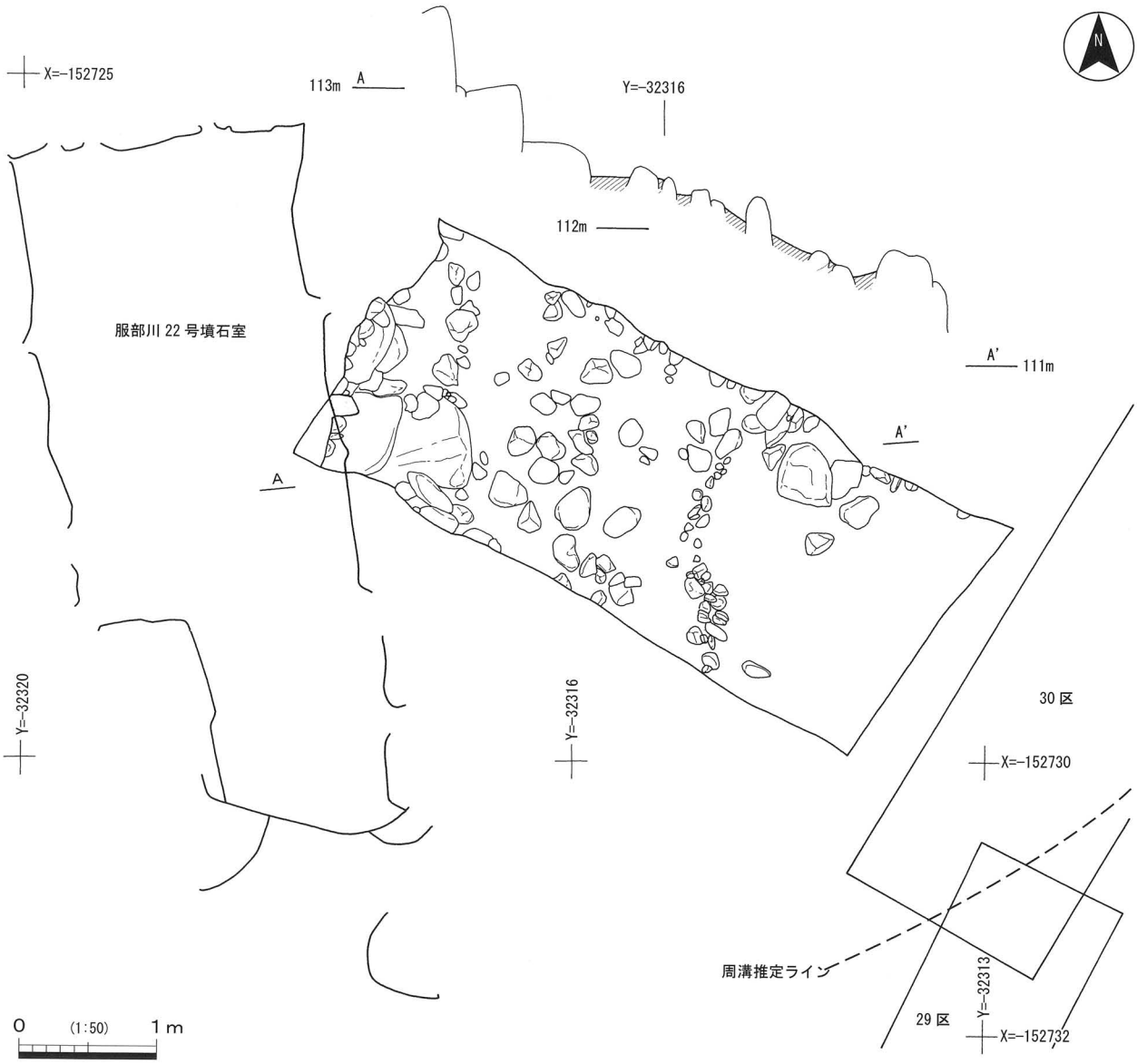
28～30区は、27区から道路を挟んだ南西側、『服部川22号墳』周辺に設定した調査区である。周辺の地形は前記のとおりであるが、周辺道路の標高は111～112.5mを測り、22号墳の南西側は崖状に２m程落ちている。28区は墳丘上、29・30区は墳丘裾部、南北道路に接している。このうち、28・29区は平成17年度(調査Ⅲ)、30区は平成18年度の調査(調査Ⅳ)である。現地表面の標高は、墳頂部が113.9m、裾部111.3～112.5mで北が高い。１・２層以下に墳丘盛土・覆土である６・７層があり、基盤層は８層である。

検出遺構と出土遺物(第85～87図、図版二四・三一～三三)

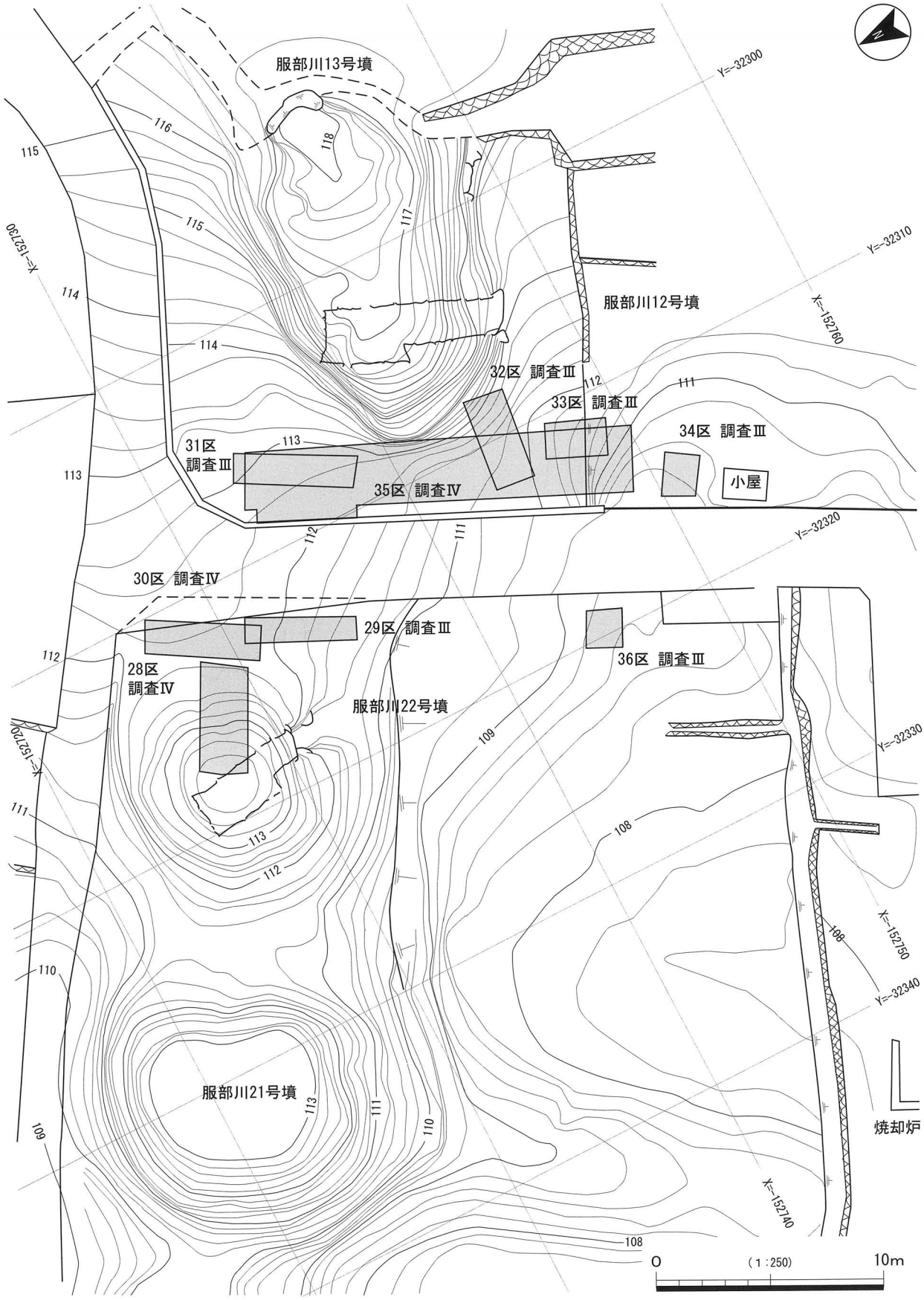
28区：28区では、石室外側を平行に列している小規模な石列を確認した。石室石材から１m程度の間隔で、３列認められる。６層から、須恵器体部片が１点出土している。

29区：29区では、調査区北端で、６～８層が１m程度落込み、３～５層が堆積している。底はさらに落ちるようで、深さは1.2m以上を測る。堆積状況から、周溝内埋土の可能性がある。

30区：30区では、そのほとんどで６～８層が占めていることから、29区と30区の境界付近が墳丘裾にあたるものと考えられる。



第86図　28区服部川22号墳平断面図・石室平面図



第87図　28～36区周辺地形測量図

小結

28区では、墳丘内部の施設、および周溝の存在を確認することができた。墳丘内部の小規模な石列は、墳丘・石室の設計段階の区画や石材の運搬・積上げなどに利用され、また、石室の強度を高めるため裏込め、流失を防ぐための土留めになりうるものと考えられる。

31～34区の概要

調査期間：31区　平成18年１月25日～３月24日　　**調査面積**：5.0㎡
32区　平成18年１月25日～３月24日　9.8㎡
33区　平成18年３月４日～３月７日　5.0㎡
34区　平成18年３月２日～３月４日　2.3㎡

31～34区は26・27区から里道を隔てた南西側、28～30区から道路を隔てた東側、『服部川12号墳』の裾部と道路との間に設定した調査区で、墳丘周囲の平坦面は、近年まで植木畑として利用されていた。西側道路は北端が高く南西下がりで、上面の標高は110.4～113m前後である。調査地付近も同様に南西下がりで、34区周辺では110.4m前後で道路と同じくらい、31区北端では113mを超え、道路から0.3～0.4m程度高い。そのため、この区画には、西から北にかけて、土留めの擁壁が廻っている。

検出遺構と出土遺物（第87～90図、図版二四・三四・三五）

31区：表土以下に作土があり、以下３層上面で近現代の遺構面に至る。墳丘周囲の平坦面は植木畑となっていたため、木の根等の痕跡が4層にまで及んでいた。基盤層は５層である。５層上面は表土下１m前後、標高112m前後で、西へ緩く弧を描いて0.5mほど落込む。

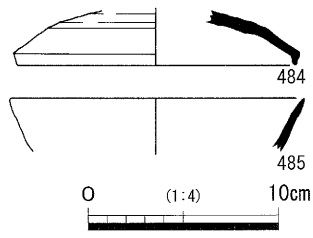
32区：表土以下には、ブロック層の２・３層が厚く堆積している。以下には、４～７層が薄く互層状に堆積しており、次いで礫を多量に含むブロック層の８・９層に至る。10層には巨石を含む粗粒砂があり、巨石を境に１段下がり、基盤層の11層に至る。基盤層上面は表土下１m前後、標高111～111.3m、西が低い。巨石は調査区のほぼ中央部に位置しており、幅80cm・長さ50cm・厚さ0.4m程度の平らな三角形を呈している。一方、そこから約２m東の調査区東端にも同規模の巨石が数個並ぶのを確認した。ここでは、２層中から、８世紀代の須恵器杯蓋**484**・同身**485**や12世紀代の土師器羽釜が出土した。

33区：表土以下には２・３層が薄く堆積し、墳丘盛土は確認できなかった。現地表下0.8～1.2mで、基盤層である４層に至る。４層上面の標高は110.5～111mで、南西に落込む。比較的大ぶりの石が南西の落込みに散乱した状態で検出された。

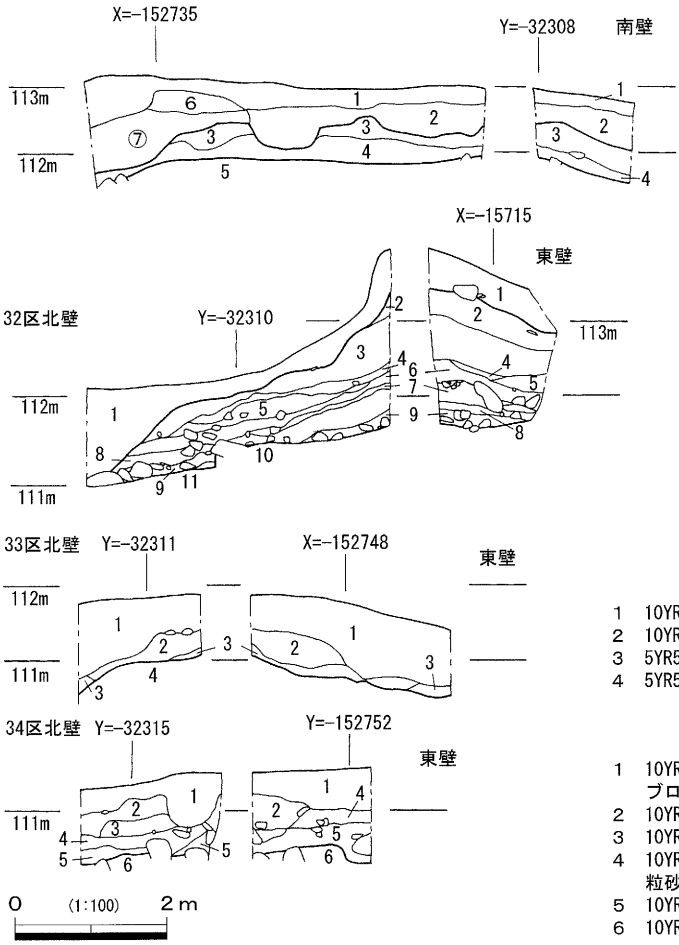
34区：表土以下２～４層は作土・床土と考えられる。５層は含水層でグライ化しており、基盤層は６層である。６層上面は表土下１～1.2m、標高109.4前後で西が低い。

小結

31～33区で墳丘裾部に対応すると考えられる落込みを確認した。32区では巨石を境に落ちるラインを検出しており、33区では落込み内に散乱する石がみられた。これらの成果から、翌平成18年度には墳丘裾部を広範囲に調査することになった。



第88図　32区出土遺物実測図



1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
2 10YR5/6 黄褐色礫多量混粗粒砂
3 10YR6/8 明黄褐色礫少量混砂質シルト
4 10YR4/4 褐色礫多量混粗粒砂
5 7.5Y5/8 明褐色巨礫多量混粗粒砂
6 10YR5/6 黄褐色粗粒砂・粘土質シルトのブロック
7 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土質シルト混粗粒砂

1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
2 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト・礫混砂質シルト・粗粒砂のブロック
3 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粗粒砂のブロック
4 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト混粗粒砂
5 10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
6 10YR4/6 褐色粗粒砂混粘土質シルト
7 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～礫混粘土質シルト
8 10YR4/2 灰黄褐色礫混載砂質シルト・粗粒砂のブロック
9 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂～礫混粘土質シルトに10YR5/8 黄褐色粘土のブロック
10 10YR5/6 黄褐色粗粒砂～礫
11 10YR6/6 明黄褐色粗粒砂混粘土質シルト

1 10YR3/2 黒褐色・10YR6/8 明黄褐色礫混粗粒砂のブロック
2 10YR6/8 明黄褐色礫混砂質シルト
3 5YR5/4 にぶい赤褐色礫混粘土質シルト
4 5YR5/4 にぶい赤褐色礫混砂質シルト～粗粒砂

1 10YR4/6 褐色礫混砂質シルトと10YR6/6明黄褐色粘土質シルトのブロック
2 10YR4/4 褐色粘土質シルト・中礫混砂質シルトのブロック
3 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～礫多量混粘土質シルト
4 10YR6/4 にぶい黄橙色粗粒砂混粘土質シルトと10YR5/8 黄褐色粗粒砂～礫のブロック
5 10YR5/3 にぶい黄褐色～ 7.5Y5/3灰オリーブ粘土質シルト混粗粒砂
6 10YR5/6 黄褐色巨礫混砂質シルト

第89図　31～34区断面図

35区の概要

調査期間：平成18年10月18日～11月22日

調査面積：49㎡

前述のように、35区は31～33区までを覆う調査区である。掘削し始めたところ、31区の調査は、墳丘斜面上層部でとどまっており、５層は墳丘覆土または流失土の可能性が高いと考えられたことから、さらに下層部分も調査対象とした。その結果、服部川12号墳の墳丘裾部を取巻く石列を検出することができた。また、前年度32・33区で検出した小規模な石列も連続することが確認できた。ここでは、石列検出に際し調査区北西側を0.5×4.5m拡張した。

検出遺構と出土遺物（第87・90図、図版二四・三五～三八）

墳丘：墳丘は調査区中央部で最も高く、標高112.2mに達し、北端は111.5m、南端は110.0mである。32区の巨石を伴う段は深さ0.2～0.3m、緩く弧を描いて北へのびる。この段の外側1.2～1.6m付近に33区で検出した２段目の段も深さ0.2～0.3m程度であるが、１段目よりは不明瞭である。この２段目の段の北の延長が、北端の石列につながるものと考えられる。１段目の段よりさらに内側２m付近にも巨石を伴う段の存在が想定できる。

石列：石列は、調査区北隅で約４m程度を検出した。墳丘裾に北東－南西に並んでいる。最大

第90図　31～35区服部川12号墳列石平面図・立面図・石室平面図

の石は幅1.2～1.3m・長さ0.8m前後・高さ0.8m前後を測る。検出した範囲では同規模の巨石が２個あり、その間には0.3～0.5m程度の石が組まれている。巨石の下には0.2～0.3m程度の小ぶりの石が据えられ、巨石の安定を保っているようである。石列上面から基盤層までは0.9m前後あり、北東が高く、石列上面は地表下1.1～1.6m、上面の標高は111.4～111.8mを測る。墳丘裾外側にも0.3～0.5m程度の石が落込んでいることから、さらに上部にも石が列をなして並んでいた可能性は高い。

小結

当調査区でも、古墳の墳丘の施設を検出することができた。北端で検出した石列(外護列石)は高安古墳群内の発掘調査では初の検出例である。石材が豊富な高安にあっては、土留めや区割りに用いることは容易であったと思われる。中央から南部にかけては、32区でさらに墳丘内側を取巻く石のあることが確認できており、墳丘が階段状を呈し、大きめの石が境界をなすように並んでいることが確認できた。28区の墳丘(服部川22号墳)内部でも同様に、階段状に積み上げられた墳丘内に設けられた小規模な石列が検出されていることから、高安古墳群内では一般的な手法であったかもしれない。

列石を持つ古墳(弥生時代の墳墓を含めて)は、全国で40例ほど検出されているが、６～７世紀代のものでは、20例ほどがある。近隣では、大阪府大東市堂山古墳群５号墳(６世紀)・同東大阪市箸尾古墳群３号墳(７世紀前半)などで「外護列石」が検出されている。また、山口県阿武郡穴観音古墳(６世紀末～７世紀の方墳)では、４段の墳丘築成工程ごとに「内護列石」を囲繞させている。三重県阿山郡波敷野古墳群１号墳(６世紀末～７世紀初頭の方墳)では、４辺の裾に２段積みの外護列石をめぐらせ、石室開口部にとりつくなどの例が見られる。福岡県甘木市、柿原古墳群(７～８世紀)では羨道側壁両端より左右に石列が延び、石室後方を囲って墳丘内を一巡する石積みの「内護列石」の存在が、この地域の古墳の特徴であるとされている（第16表参照)。

このように、６世紀末～８世紀まで、全国的に見られる「列石を伴う古墳」と、今回の調査成果である「石材を多用する墳丘」との比較検討が必要であろう。

36区の概要

調査期間：平成18年３月３日～３月４日

調査面積：2.3㎡

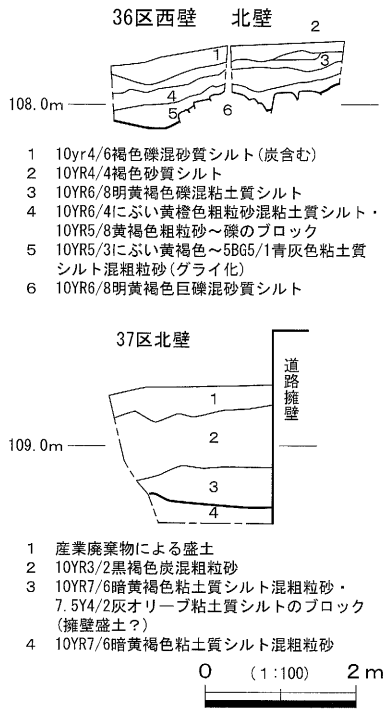
36区は29区から南西10m地点、35区南西端・34区から道路を挟んだ西側に位置する。調査地は道路から1.5m下がった植木畑で、上面の標高は108.5～109m程度である。

検出遺構と出土遺物（第91図、図版二四・三九）

１～４層までが作土・床土等である。４層は含水層で、グライ化している。５層が基盤層で、５層上面は現地表下0.6～0.8m、標高107.8～108.2mで西下がりである。

小結

34区と同様、基盤層直上に含水層が堆積しており、この付近が古墳群の位置する尾根に挟まれた谷間と考えることができる



第91図　36・37区断面図

37区の概要

調査期間：平成18年２月24日～３月８日

調査面積：2.3㎡

37区は36区から南西17m地点、道路西側に位置する。調査地は道路から１mほど下がった荒地で、上面の標高は109.6m前後で、わずかに西が下がっている。

検出遺構と出土遺物（第91・94図、図版二四・三九）

１～３層までが産業廃棄物や道路築造のための盛土などで、４層までを確認したが、基盤層かどうかは不明である。４層上面は現地表下1.6m前後、標高108.3m前後である。

小結

37区の西には墳丘状の小規模な高まりが見られるが、おそらく当調査区同様、盛土であろう。

38区の概要

調査期間：平成18年２月24日～３月24日

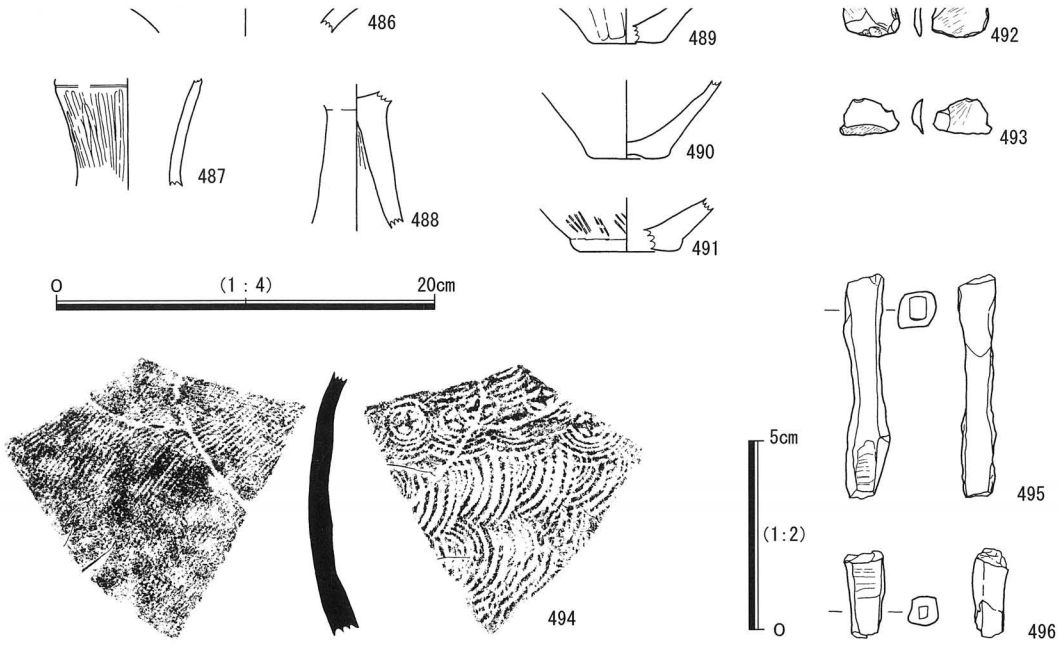
調査面積：7.5㎡

38区は37区の南西25m地点の調査区で、平成17年度（調査Ⅲ）の調査地である。調査地は空地で、東・西の区画とは段をなして高くなっている。上面の標高は111.5～112.2mで西下がりである。調査区付近も南東から北西へのびる尾根にあたっており、数基の古墳が列をなして構築されている。調査区の北西10m付近には、服部川15号墳が位置している。

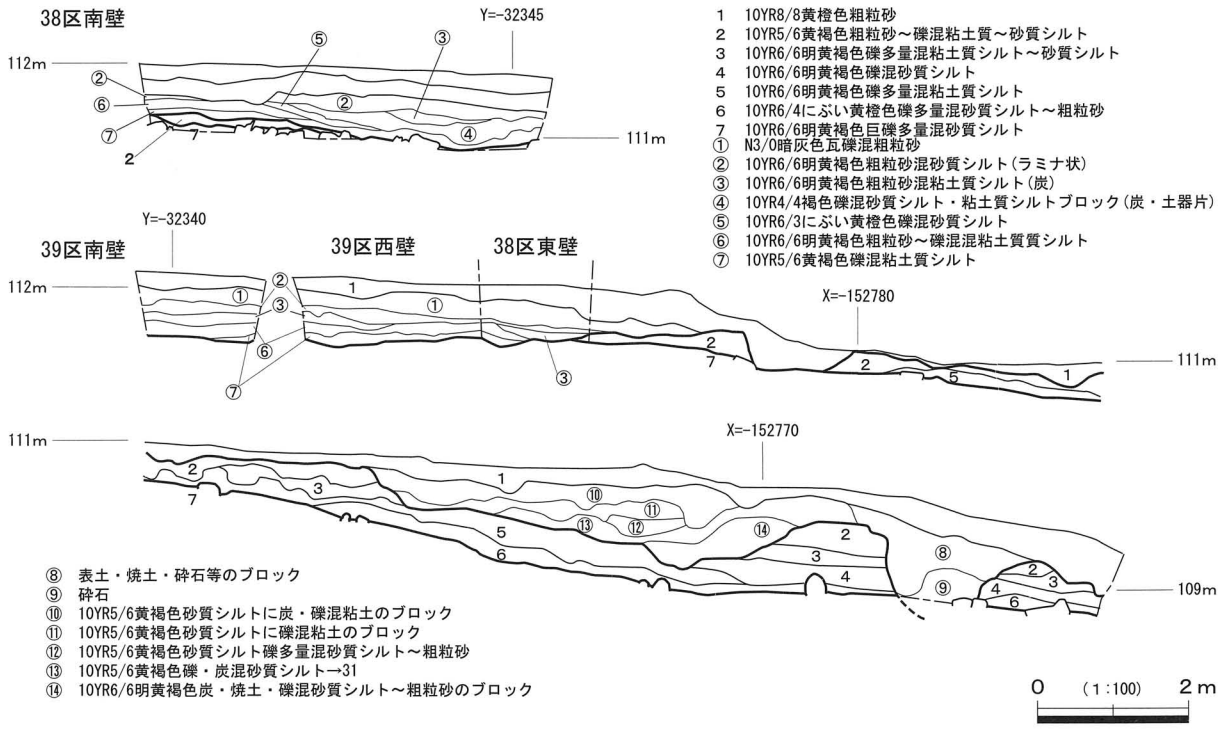
検出遺構と出土遺物（第92～94図、図版二四・三九）

調査区の現地表面の標高は112m程度、１層直下には①～⑦層からなる盛土や河川埋土などがある。その下の２層上面が、①～⑦層の遺構ベースとなる。基盤層は７層で、礫を多量に含んでいる。基盤層上面は現地表下0.6～１m、標高は110.8～111.3mで、南が高い。④層から、弥生土器486～491、サヌカイト剥片492・493、須恵器片494、鉄釘495などが出土した。

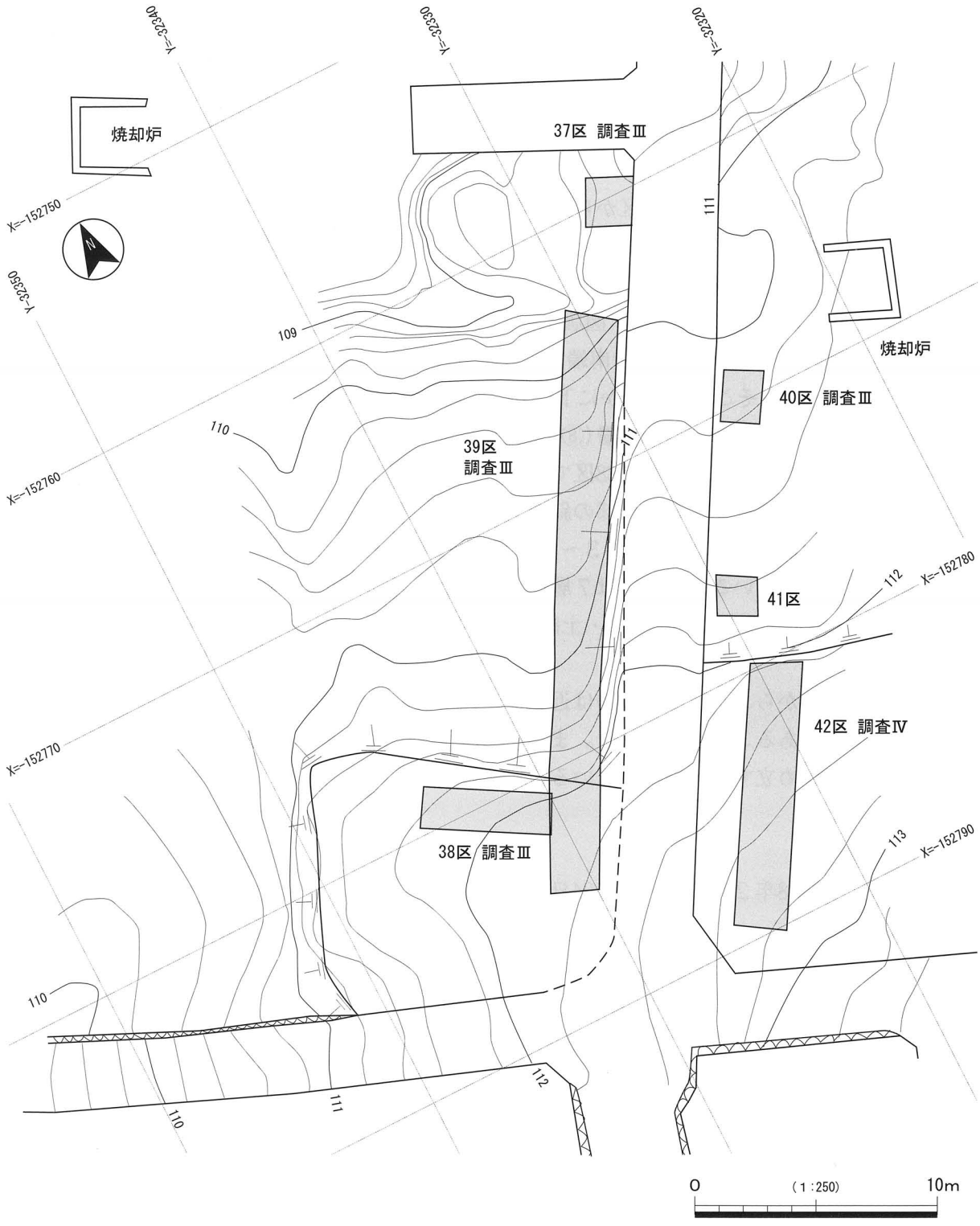
出土遺物：弥生土器は後期のもので、広口壷486、長頸壷487、高杯489、甕489～491である。なかでも長頸壷487は若干新しい様相を持つと考えられる。サヌカイト剥片492・493はともに一辺に剥離がある。須恵器片494は内面に車輪文(丸に十文字)タタキをもつもので、平安時代以降のものかと考えられる。釘495は古墳時代のものかは不明である。



第92図　38区出土遺物実測図



第93図　38～39区断面図



第94図　37～42区周辺地形測量図

小結

④層はブロック層で、人為的に埋め立てられた地層と考えられるが、弥生土器の出土もあり、近隣に当該時期の集落が存在した可能性が高いと思われた。当調査区の調査成果から、翌平成18年度に39区を設定し、広範囲な調査をおこなうことに決定した。

39区の概要

調査期間：平成18年10月６日～11月10日

調査面積：34.5m

39区は38区の東側に位置し、37区から南西３～27m付近の道路脇に位置する。調査地の旧状は荒地で、草木が繁茂していた。調査地上面の標高は109.5～112.2m、南端部は38区の位置する高まりに一致し、そこから段をなして緩やかに北へ下がっている。

検出遺構と出土遺物（第93・94図、図版二四・三九・四〇）

現地表面の標高は南端が112.2mで南端から５m程度で１mほど緩やかに下がり、北端から６m付近まではほぼ水平、そこから緩やかに下がり、北端では109.5mを指す。１層表土以下には、焼土や砕石などを含む現代のブロック層（⑧・⑨層）や炭・焼土混じりのブロック層（⑩～⑭層）による埋め立てがみられる。２層上面は38区でも見られたように、整地・埋め立てなどで改変を受けているが、作土の可能性がある。南部の斜面下では２層を切り込む溝状遺構があり、ここが段畑の境界かと思われる。それ以下には、３～６層粗粒砂・礫混じりの粘土質シルト・砂質シルトなどが北下がりで堆積している。基盤層は７層で、上面は現地表下0.5～1.5m、標高は108.6～111.3mで南が高い。南部の④層から須恵器・土師器などとともに近世～近代の陶磁器が若干出土した。

小結

39区の出土遺物から、38区出土遺物は近世～近代の整地や埋め立てに伴う遺物であることが判明した。また、当調査区では、近年のゴミによる埋め立ても行なわれていることがわかった。

40区の概要

調査期間：平成18年２月17日～２月24日

調査面積：2.3㎡

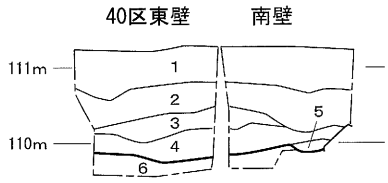
40区は39区北端から道路を隔てた南西５m付近に位置する。調査地付近は空地で、上面の標高は111.3m前後である。

検出遺構と出土遺物（第94・95図、図版二四・四〇）

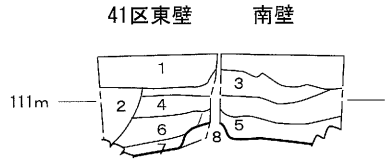
１層表土以下の２層が作土である。以下の３～６層はブロック層で、整地による埋め立てまたは土石流などの可能性がある。６層上面は現地表下1.3～1.5m、標高109.7～110m、北へ下がる。

小結

近年まで耕作されていたことが明らかになった。また、６層以下に基盤層の存在する可能性が高い。



1　10YR4/2灰黄褐色礫混粗粒砂
2　10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
3　10YR6/6明黄褐色粗粒砂混砂質シルト・2.5Y6/2灰オリーブ砂質シルトのブロック
4　7.5Y6/2灰オリーブ粘土質シルト～砂質シルト・10YR6/6明黄褐色砂質シルト・礫のブロック
5　10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～礫
6　10YR7/1灰白色粗粒砂・10YR6/6明黄褐色砂質シルトのブロック



1　10YR4/2灰黄褐色礫混粗粒砂
2　10YR7/6明黄褐色巨礫混粗粒砂
3　10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
4　10YR6/6明黄褐色砂質シルト
5　10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト
6　10YR5/4にぶい黄褐色礫多量混粘土質シルト
7　10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂混粘土質シルト
8　10YR7/1灰白色巨礫混砂質シルト

0　(1:100)　2m

第95図　40・41区断面図

41区の概要

調査期間：平成18年２月17日～２月24日

調査面積：2.3㎡

41区は40区の南８m付近、39区から道路を隔てた東５m付近に位置する。41区同様調査地付近は空地で、上面の標高は111.7m前後である。

検出遺構と出土遺物（第94・95図、図版二四・四〇）

１層表土直下に２層の切込みがあり、以下の３～７層が作土・床土であろう。８層上面は現地表下１～1.5m、標高110.2～110.5m、北西へ下がる。

小結

ここでも近年までの耕作痕跡が確認できた。６・７層は、５層上面から構築された遺構内埋土の可能性がある。

42区の概要

調査期間：平成18年10月４日～11月10日

調査面積：16.5㎡

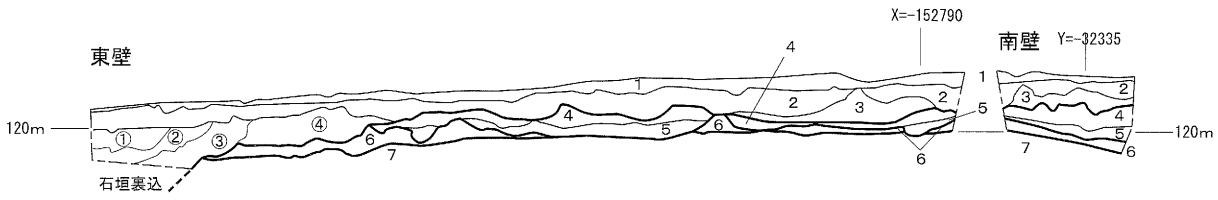
42区は41区の南西３m付近、39区からは道路を挟んだ東側に位置する。38区同様古墳が構築されている尾根上に位置しており、東15m付近の神光寺境内には服部川７号墳が位置している。調査地は放棄された耕地で、多量の巨石が放置されていたた。調査地周辺の標高は112.2～113m程度で道路とほぼ同じで南東が高く北西が低い。北側の土地との境界の区画には、溝状の段が遺存しており、段畑の痕跡が残っている。

検出遺構と出土遺物（第94・96図、図版二四・四〇）

１層表土以下の２～４層が作土・床土にあたる。４層上面では、段畑の境界の石垣の裏込めが確認できた。６層上面でも、遺構の可能性のある窪みなどがみられたが、平面的には明らかにできなかった。基盤層は７層で、現地表下0.8～１m、北西下がりである。

小結

調査地付近は近年まで耕地であったことがわかり、38・39区同様、開墾などに伴う削平や埋め立てなどが行われていたものと考えられる。ここで検出した石垣裏込めは、39区の段畑の境界溝の延長と考えられ、現在に残る段におおむね踏襲されていることがわかる。



1　10YR4/4褐色礫混粗粒砂
2　10YR5/8黄褐色粗粒砂～礫混砂質シルト
3　10YR4/4褐色粗粒砂～礫混砂質シルト（炭含む）
4　10YR5/8黄褐色礫混砂質シルト
5　10YR6/4にぶい黄褐色礫混粘土質シルト
6　10YR6/4にぶい黄褐色礫多量混粘土質シルト
7　10YR6/4にぶい黄褐色粘土質シルト混礫

石垣裏込
①　10YR6/6明黄褐色礫多量混粗粒砂
②　10YR5/8黄褐色礫多量混砂質シルト
③　10YR5/8黄褐色粗粒砂～礫混粘土質シルト
④　10YR5/8黄褐色礫混砂質シルト～粗粒砂

0　(1:100)　2m

第96図　42区断面図

第３章　まとめ

第１節　薗光寺跡について

薗光寺は、玉祖神社の神宮寺で、承和３(836)年の建立と伝えられ、明治時代の廃仏毀釈までその一部が存在していたとされている。『河内名所図会』には、玉祖神社石段の南側の平坦地に江戸時代の寺『竹之坊』の様子が描かれており、この部分が今回調査した１区に対応する。地元の古老から「この付近に蝋燭屋－燈明屋があった」という話も聞いた。

第97図　『河内名所図会』に描かれた玉祖神社
右下に「竹之坊」と記されている

寺域の可能性を想定できる遺構・遺物は玉祖神社石段に通じる道路南側の１区と、さらに南に位置する溜池西側の２区で検出されたが、決定的なものは認められなかった。

１区で検出されたおもな遺構は、14世紀(室町時代－南北朝時代)までと19世紀以降(江戸時代後期～近代)頃に分かれる。

14世紀頃の主な遺構には、南西部で検出した**井戸0101**、**落込み0103**、南東部で検出した**方形盛土**などがある。**落込み0103**出土遺物は13世紀頃におさまるのもので、中では最も古い。次いで**井戸0101**が掘られている。**井戸0101**からは13～14世紀頃の遺物が出土している。**方形盛土**は14世紀頃に構築され、周囲に溝が巡っている。盛土内部は礫～巨礫混じりの砂質シルトで構成されており、叩き締められたように硬い。この上に何らかの構築物があった可能性が高く、寺院建物の基壇と考えることができる。

19世紀以降の主な遺構には**瓦溜り・落込み0101**などがあり、ここからは12世紀頃(平安時代後期)の瓦が出土しており、清原得巖氏の採集資料と一致する。**瓦溜り**を近世後期の遺構と考えているが、明治元(1868)年の廃仏毀釈時の遺構の可能性もある。

２区で検出した**溝0221**には東の肩に石垣状の石の並びがあり、塀の基礎部分の可能性があり、寺院の関連施設と考えることもできる。

第２節　高安古墳群について

今回の調査では、芝塚２号墳・大窪29号墳・服部川132号墳の３基の埋没古墳を検出することができ、既存の古墳である芝塚古墳の周溝や服部川12号墳・同22号墳の墳丘の状況を明確にすることができた。調査方法として、小規模な発掘調査から拡張に次ぐ拡張を重ねたこと、多年度にわたる広範囲な発掘調査によって、石室内のみならず、石室外－墳丘内部および墳丘周囲の状況が明らかにできたことは、多大な成果であるといえる。それらの成果を箇条書きにして、まとめとする。

芝塚２号墳（神立８号墳）

調査区周辺に余地がなかったため、羨道と玄室の一部分を検出したにとどまった。羨門の位置はは不明瞭であるが、東西側壁の南端には小振りの石材が積み上げられていることから、この位置で終息するものと考えられる。ここでは、石室外側を確認できていないが、この最南端の石積みが石室を巡るのであれは、「内護列石」にあたるものかもしれない。調査区西側は崖状に落込んでいることから、その下がりが墳丘に一致するものと考えられる。南10mに位置する大阪府教委２区Ｂトレンチでも南へ下がる尾根を検出しており、この付近の尾根を利用して、当古墳が築造されたことがわかる。

芝塚２号墳出土の滑石製紡錘車（第37図－261　第５表　図版四七）

滑石製紡錘車は、羨道南部の区画、床面より20～30cm上方、多量の石材・平安末期（12世紀中頃）の土器類を除去した後に出土した。よって、元位置は保っていない。これまで、狭い面を上面、広い面を下面として報告される例が多いようであるが、使用時の紡錘車の向きを考えれば、広い面が上、狭い面が下になる。紛らわしいので、広い面をＡ面、狭い面をＢ面とする。法量は、Ａ面径4.4cm・Ｂ面径2.5cm・厚さ2.0cm、Ａ面径：厚さは２：１で江浦のＩＬ類にあたる。大阪府から滋賀県に多く見られるタイプであるが、やや大型であろうか。Ａ面には、沈線の円内に、内向き格子入り鋸歯文を６個配している。側面には、上部に１条・下部に２条の沈線を配し、その間に、内向き格子入り鋸歯文を７個配する。他の出土例と比較すると、雑な施文で、とくにＡ面の鋸歯文は大型で余白が少なく三角形が乱れているのが特徴である。なお、線刻内には赤色顔料が遺存している。太井遺跡（その２）の出土地一覧では、26例が挙げられている。うちＩ類－19例と最も多く、Ｉ´類が１例、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類は２例ずつである。これらのうち、古墳・墓状遺構からの出土は７例で、うちＩ´類の１例（兵庫県見手山古墳－６世紀末葉～７世紀初頭）が含まれ、６例がＩ類である。これらのうち時期の特定できる４例は、三重県河田Ａ－６号墳第２主体部－６世紀後半、滋賀県中山古墳石室内－６世紀末葉、滋賀県湖西線関係遺跡方形周溝墓状遺構－６世紀末葉大阪府大藪古墳羨道部中央－７世紀前半?である。芝塚２号墳出土の紡錘車は、法量から見れば太井遺跡出土（６世紀以降）・滋賀県中山古墳石室内出土の紡錘車に似るが、やや大型である。

芝塚２号墳出土の石製銙帯（第37図－262・263　第５表　図版四七）

石製銙帯（丸鞆）は、玄室部分および羨道北部の⑨層から出土した。後述するように、石材はと

もに石英安山岩質溶結凝灰岩である。前述の滑石製紡錘車261同様、床面より20～30cm上方からの出土である。玄室～羨道北部の⑨層は、礫を極めて多く含んでおり、石製銙帯のほか、９世紀(平安時代前期)の黒色土器や土師器杯（第38図)、13世紀(鎌倉時代)の土師器小皿・中皿・甕・羽釜・瓦器椀（第39図）などが出土している。時期からみれば、石製銙帯と前者の土器類との間には、それほど大きな隔たりはない。また、石室内の最新の土器類が７世紀後半(飛鳥時代中葉)にまで下ることから、古墳と石製銙帯には、直接のつながりはないものと考えられる。

大窪29号墳

石室のみならず、墳丘内部の構造が明らかにできた。石室の外を取り巻く石列は、石室構築時の石材運搬、石材の支え、墳丘の強度を増し土砂の流失を防ぐなどの目的が考えられる。山口県穴観音古墳(６世紀末～７世紀初頭)では、「４段階の築成工程ごとに内護列石が囲繞」されており、大窪29号墳の石列も、そのような施設であったかもしれない。本文でも記したように、この石列が「内護列石」にあたるのかは今後の検討課題となるだろう。石室内からは、釘をはじめとする多量の鉄製品が出土しており、これらの精査も今後の検討課題となろう。また、高安地域では、平安時代から古墳の破壊が始まっているようであるが、当古墳の石材には江戸時代中期以降の矢穴が多数認められることや、石室内出土遺物の時期からも、大窪29号墳の破壊が江戸時代中期以降に当たることが確認できた。

大窪29号墳の石棺材(第98図－497～505・図版五七・五八)

大窪29号墳からはコンテナ箱にして10箱程度の石棺材が出土した。図示したものは、出土状況の明らかなもの、何らかの加工が確認できたもの、赤色顔料の塗布されたものなどである。497～499は、羨道北部でまとまって、釘などとともに出土した。出土地点は床面より20cm程度上である。497は断面台形で、裏面に段が削り込まれており、工具痕が遺存する。蓋の角部分と思われる。498は裏面を欠損しているが、表面は斜面を呈し、一側面に赤色顔料が遺存する。蓋と思われる。499は偏平な材で、溝状の彫り込みが見られ、一側面が遺存する。側板と考えられる。500～502はいずれも蓋と考えられる。500には上面から側面にかけて赤色顔料が塗布されている。501・502には突出部が遺存しており、蓋の縄賭け突起部分の可能性がある。503～505には赤色顔

第12表　16区大窪29号墳出土石棺材一覧表

番号	器種	法量(cm)			出土地点	備考
		残存幅	最大厚	縁辺の高さ		
497	蓋	27.7×26.4	13.6	4.8～8.0	羨道　北端	蓋の隅の部分か？　裏面の段は6～7.4cm内側の位置から斜めに0.8cm内側へ深さ0.9cm掘り込まれている。
498	蓋	18.2×17.8		5.4	羨道　北端	縁辺部に赤色顔料塗布。
499	側板	23.5×15.3	5.2	5.1～5.2	羨道　北端	上面の溝は幅0.9cm・深さ0.6cm、うろこ状に削られている。
500	蓋	24.8×18.5	13.0	10.1	玄室	側面と裏面に点々と赤色顔料付着。
501	?	25.0×24.3	15.7	14.6	羨道	縄掛け突起部か、突起の高さは1cm
502	蓋	41.0×26.8	18.2	—	羨道	
503	蓋	20.7×18.6	6.9	3.0	玄室　中央	側面に赤色顔料付着
504	蓋	20.2×17.9	8.5		玄室	上面に赤色顔料付着
505	?	30.5×16.9	8.5	11.0	玄室	上面に赤色顔料付着

料が塗布されている。503・504は裏面を欠損するが、断面台形を呈するため、蓋の縁辺部と考えられる。503は側面から裏面にかけて、504は上面のごく一部に赤色顔料が見られる。

服部川132号墳

２年にわたり、３か所に分割された調査区－23～25区で古墳を検出することができた。古墳石室の破壊は進んでいたが、石室周囲だけでなく、広範囲の調査によって、周溝の存在を確認できたことは今回の調査の大きな成果であるといえる。服部川132号墳は、地形に沿って尾根上に石室を構築し、尾根外側の谷間を利用して周溝としていることがわかった。そのため、墳丘ベースの形状は、不正円形を呈していることがわかる。また、東側の溝は人口的に開削された可能性が高く、西側は自然地形の谷をそのまま利用した可能性が高い。ここでも、奥壁の外側には巨石が散乱しており、大窪29号墳同様の施設である石列があった可能性が高い。

芝塚古墳（神立７号墳）

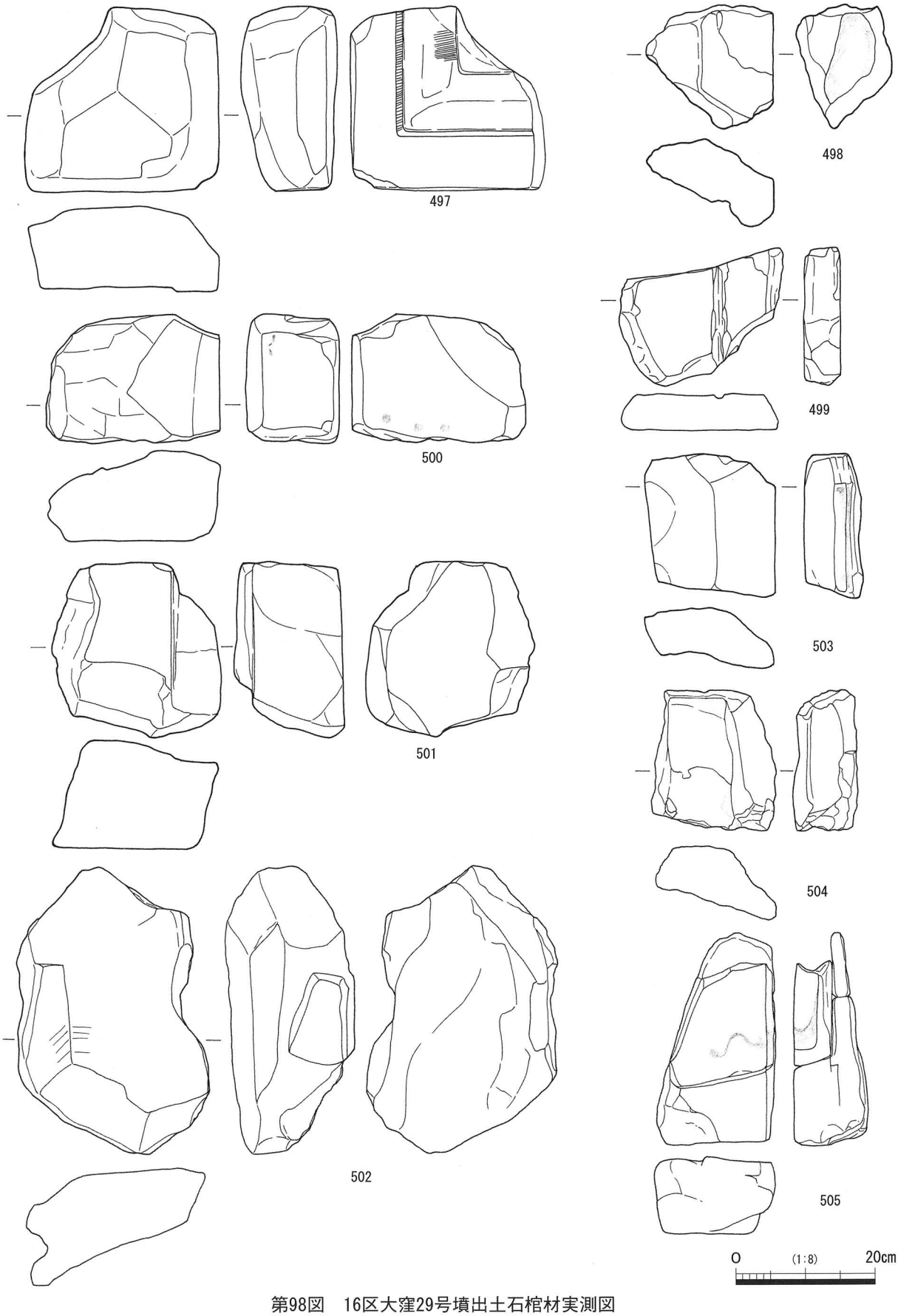
芝塚古墳の東に設定した調査区－６・７区で、周溝に対応すると考えられる溝を検出した。これによって、芝塚古墳の墳丘径は28m程度に復元され巨大なものとなるが、服部川132号墳のように周溝が地形に即して開削されたものであれば、正円になるとは限らない。北側の溝は明らかに人工的に開削されている。南側はごく一部を確認したにすぎず、旧地形の復元もできなかったので想像の域を出ないが、服部川132号墳の周溝同様、墳丘の南側は谷にあたるために明確な掘り込みは無く、谷をそのまま利用したのかもしれない。

服部川12号墳

墳丘裾端部を取り巻く石列「外護列石」を検出した。土留めあるいは化粧の意味もあるかもしれない。南部では北部のような明確な石列を検出できていないが、この付近は段畑の境界となっており、後世の整地の際に破壊されている可能性が高く、本来は北部と同様の石列があった可能性は高い。ただし、羨道入り口に近づくことから、小規模なものであったと考えられる。段畑境界の石垣には、この部分の石が利用されたであろうことは想像に難くない。また、墳丘斜面は階段状に積み上げられており、各段の境界に石材を用いて列をなしていることも確認できた。この各段の境界の石列も、「内護列石」にあたるのかもしれない。

服部川22号墳

ここでも墳丘は階段状に積み上げられており、石室石材の外側に約１m間隔で３重の石列がめぐることが確認でき、大窪29号墳や服部川12号墳同様「内護列石」の存在を想定できる。ここでは、石列を構成する石材は小型であるが、おそらく墳丘上位(石室上部)に位置するためであろう。周溝は平面的には検出できなかったため不明瞭であるが、尾根を横断する位置にあたることから、急角度で掘り込まれていることがわかる。周溝肩と服部川12号墳北部の「外護列石」との間隔は５m程度あり、２基の古墳は裾を接して位置している。



第98図　16区大窪29号墳出土石棺材実測図

第３節　芝塚２号墳出土の石製鈴帯の石材

奥田　尚

石製鈴帯(丸鞆)を裸眼で観察した。262と263の資料は同質の石材で、石種が石英安山岩質溶結凝灰岩である。色は淡灰緑色で、顕著な溶結を示す。構成鉱物は石英・長石・輝石である。石英は無色透明、粒径が0.5～１㎜で、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が石英は0.5～１㎜で、量が僅かである。輝石は黒色・淡柱状・方形で、粒径が0.2～１㎜、量が中である。基質はガラス質である。このような岩相を示す石は国内で見聞していない。韓半島では溶結凝灰岩が産することがない為、中国方面の石であろうか。これと同様の石は近隣では大阪府藤井寺市土師の里遺跡の８～９世紀の木棺墓から、丸鞆７個・巡方２個が出土している。

第４節　大窪29号墳の石材

奥田　尚

石室には壁石と床に敷かれた敷石、石棺の破片と推定される石材が観察される。出土石材を肉眼で観察した。石材の石種は石棺材が流紋岩質凝灰岩、石室および床の敷石がアプライト質黒雲母花崗岩、閃緑岩、片麻状黒雲母花崗岩A、片麻状黒雲母花崗岩Ｂである。これら石種の特徴と推定される採石推定地について述べる。

石棺材について

石棺材は破片のみであるが、岩相的に流紋岩質凝灰岩Ａと流紋岩質凝灰岩Ｂに区分される。

流紋岩質凝灰岩Ａ　色は白色で、層理があり、層理面で割れ目を生じている。構成粒は流紋岩・軽石・火山ガラス・石英・長石である。流紋岩は褐色・茶灰色・淡桃色で、ガラス質である。褐色と茶灰色の流紋岩は、粒形が角～亜円、粒径が１～２㎜、量が僅かである。淡桃色の流紋岩は、粒形が角～亜円、粒径が0.2～３㎜、量が中である。軽石は灰白色、粒形が亜円～円で、粒径が0.1～６㎜、量が多い。繊維状をなすものは細粒のものに多い。火山ガラスは塊状をなすものが多く、無色透明、粒径が0.2～0.5㎜、量が僅かである。石英は無色透明、粒径が0.2～0.4㎜、量が僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は無色透明、短柱状で、粒径が0.5～1.5㎜、量が僅かである。基質は白色、緻密である。

流紋岩質凝灰岩Ｂ　色は灰白色で、層理があり、層理面で割れ目を生じている。構成粒は流紋岩・軽石・火山ガラス・石英・長石・輝石である。流紋岩は白色で、粒形が亜角、粒径が0.2～0.5㎜、量が僅か、石基がガラス質で、石英の斑晶がみられる。軽石は灰白色・無色透明で、粒形が亜円～円、粒径が0.2～0.3㎜、量が中、火山ガラスの塊である。火山ガラスは貝殻状・束状で、無色透明、粒径が0.2～0.7㎜、量が多い。石英は無色透明、粒径が0.2～0.3㎜、量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色透明、短柱状で、粒径が0.1～0.2㎜、量が僅かである。輝石は褐色透明、粒状で、粒径が0.2～0.3㎜、量がごくごく僅かである。基質は白色、緻密である。

このような岩相を示す凝灰岩は神戸市西部付近に広く分布する神戸層群の凝灰岩の岩相の一部に似ている。河内では柏原市の平尾山42支群Ａ－１号墳や八尾市郡川の開山塚古墳から出土している。

石室材について

石室の壁石には、アプライト質黒雲母花崗岩、閃緑岩、片麻状黒雲母花崗岩Ａ、片麻状黒雲母花崗岩Ｂが使用されており、床の敷石にも同様の石が使用されている。長径が１m以上の石種をみれば、アプライト質黒雲母花崗岩が1石、閃緑岩が７石、片麻状黒雲母花崗岩Ａが５石、片麻状黒雲母花崗岩Ｂが３石となる。これら石材の石種と推定される採石地について述べる。

アプライト質黒雲母花崗岩　色は灰白色で、亜角礫である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が２～３㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が２～４㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5㎜、量がごくごく僅かである。

このような岩相を示す石は十三峠から立石峠にかけての付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

閃緑岩　色は灰色で、亜角礫である。長石･黒雲母･角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が２～３㎜、量が多い。黒雲母は黒色、粒状・板状で、粒径が２～４㎜、量が僅かである。角閃石は黒色、粒径が２～５㎜、量が多い。

このような岩相を示す石は立石峠から一元宮にかけての付近に分布する閃緑岩の岩相の一部に似ている。

片麻状黒雲母花崗岩Ａ　色は灰白色で、片麻状を呈する。亜角礫である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が２～３㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が２～３㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～１㎜、量がごく僅かである。集合して細長いレンズ状をなす場合が多い。

このような岩相を示す石は高安山から当古墳付近の山麓にかけて分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

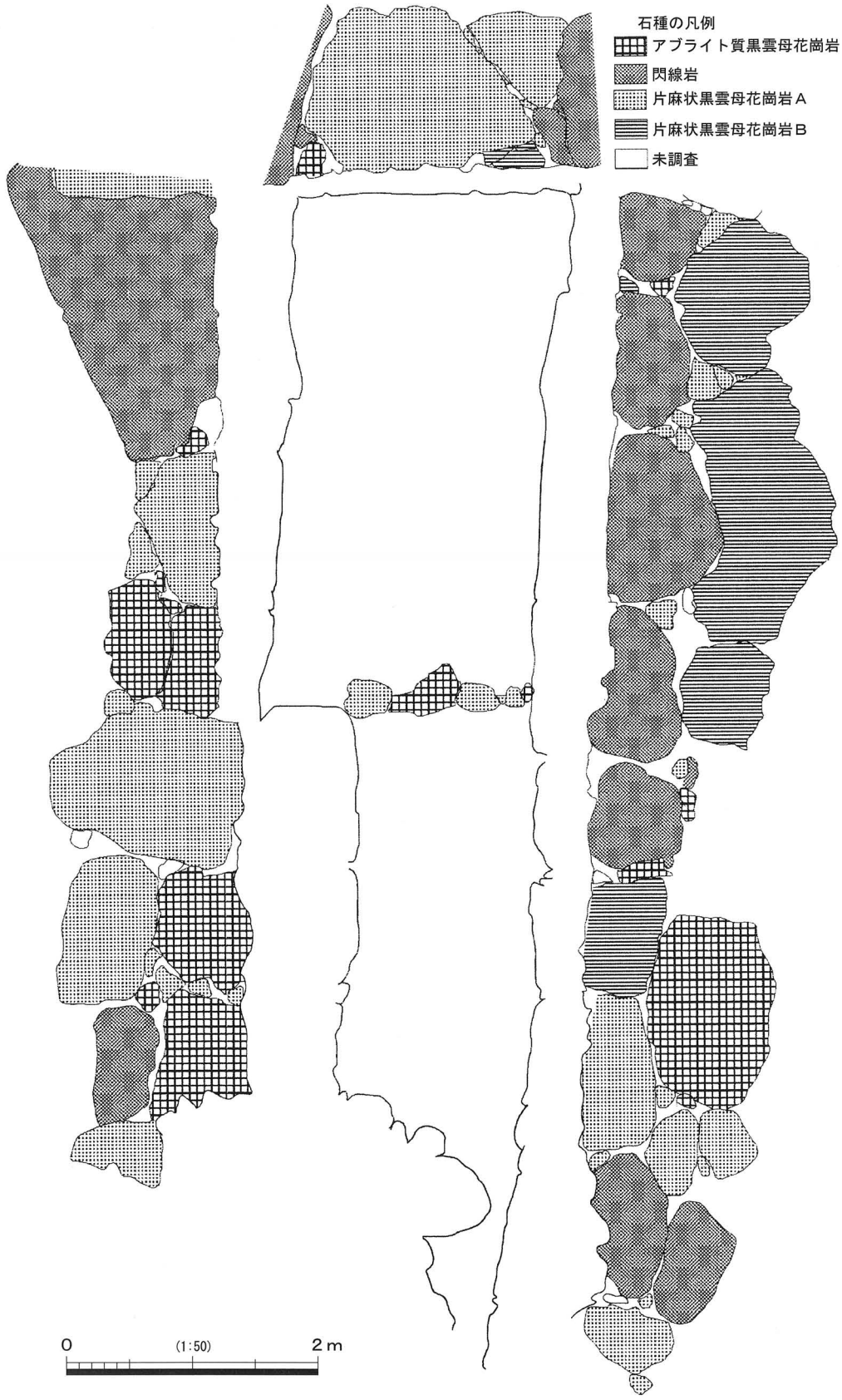
第13表　16区大窪29号墳の石材の石種と粒径

位置	石種名	粒径 (cm) 10～24	25～49	50～74	75～99	100～124	125～149	150～274	合計
東壁	アプライト質黒雲母花崗岩	6	1				1		8
	閃緑岩		1		2	3	2		9
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ａ	12	2	3			2		19
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ｂ	1				1	1	1	4
西壁	アプライト質黒雲母花崗岩	4			1	3			8
	閃緑岩					1		1	2
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ａ	3	3	1	1	1	1	1	11
奥壁	アプライト質黒雲母花崗岩		1						1
	閃緑岩	2		1					3
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ａ	3			1			1	5
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ｂ	2	2						4
敷石	アプライト質黒雲母花崗岩	85							85
	閃緑岩	10							10
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ａ	387	1						388
	片麻状中粒黒雲母花崗岩Ｂ	11							11
合計		527	11	5	5	9	7	4	568

片麻状黒雲母花崗岩Ｂ　色は灰白色で、片麻状を呈する。亜角礫である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が２～３㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が２～６㎜、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～１㎜、量が中である。レンズ状に伸びている場合が多い。

このような岩相を示す石は高安山の中腹から当古墳南方付近にかけて分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

石室の石材には江戸時代中期以降にみられる形状の矢穴を残す石もあるが、築造時の加工を残すものは認められない。使用されている石材は自然石で、当古墳東方の生駒山地に分布する岩石の転石であると推定される。生駒山地のこの付近では立石越えより南側の山地上方から平群町久安寺にかけての付近に閃緑岩が分布し、この裾部に片麻状黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩が分布し、立石越えよりも北側にはアプライト質黒雲母花崗岩が分布する。閃緑岩は東方の谷から、片麻状黒雲母花崗岩Ａ・中粒黒雲母花崗岩Ｂは当古墳の東南方の谷から、アプライト質黒雲母花崗岩は北東方の谷から採石されたと推定される。



第99図　大窪29号墳に使用されている石材の石種

第14表　滑石製紡錘車出土地一覧表(太字は古墳出土)

文献番号	遺跡名	出土遺構	法量(cm)				時期	備考
			下端径(広)	上端径(狭)	厚さ	孔径		
本書	**芝塚２号墳**	**羨道**	4.4	2.5	2		６世紀後半～７世紀	
1	**大藪古墳**	**羨道**	3.2	1.6	1.2	0.6	７世紀前半？	
2	**三田古墳**	**円墳石室内**	4.1		1.9		古墳時代後期	
3	**久宝寺七ッ門古墳**	**横穴式石室外側**	4.1		1.5		古墳時代後期	無文
4	**野々井遺跡**	**円墳墳丘内**	3.5				古墳時代後期	火起し道具の可能性あり
			4.9				古墳時代後期	須恵質　〃
5	太井遺跡	溝	4	2.2	2	0.6	６世紀以降	
6	脇浜遺跡	溝	4.2	2	1.8	0.6	古墳時代後期	
7	溝咋遺跡	ピット	5		1		古墳時代後期	
8	蔵塚古墳	包含層	4.2		1.2		古墳時代後期	
9	大庭寺遺跡	埋没谷包含層	4.1		1.5		古墳時代後期	
10		溝	4.4		2.5		古墳時代後期	須恵質
11	大阪城跡		4.2		1.8		古墳時代後期	
12	池島・福万寺遺跡	集落付近					古墳時代中期	無文２点、線刻２点
13	西岩田遺跡	遺構面ベース	4.0		1.2		古墳時代中期	
14	大和川今池遺跡	中世土坑	4.3		1		古墳時代後期	無文
15	久宝寺遺跡	近世溝	4	2.2	2	0.6	不明	
16	美園遺跡	包含層	5.8		1.7		共伴遺物なし	無文？　端部の一部に刻目あり

文献
1　『脇浜・畠中・石才近義堂遺跡試掘調査報告書』　(財)大阪文化財センター調査報告ＸＸＸⅢ　1980　(財)大阪文化財センター
2　『上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第80輯　1993　(財)大阪府埋蔵文化財協会
3　『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ』2000　(財)大阪府文化財調査研究センター
4　『金山古墳および大藪古墳の調査』　大阪府文化財調査報告書第２輯　1953　大阪府教育委員会
5　『太井遺跡(その１)』　1986　(財)　大阪文化財センター
6　『野々井遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第85輯　1994　(財)大阪府埋蔵文化財協会
7　『溝咋遺跡(その１・その２)』1999　(財)大阪府文化財調査研究センター
8　『蔵塚古墳』1997　(財)大阪府文化財調査研究センター
9　『大庭寺・伏尾遺跡』1998　(財)大阪府文化財調査研究センター
10　『大阪城跡の発掘調査Ⅲ』1993　(財)大阪府文化財センター
11　『池島・福万次遺跡発掘調査概要Ⅷ』1991　(財)大阪府文化財センター
12　『西岩田』1983　(財)大阪文化財センター
13　『大和川今池遺跡(その１・その２)』2000　(財)大阪府文化財調査研究センター
14　『久宝寺北(その１～その３)』　1986　(財)大阪文化財センター
15　『美園』1984　(財)大阪文化財センター

第15表　銙帯出土地一覧表

文献番号	遺跡名	出土遺構	種類	法量(cm) 最大幅	長さ	厚さ	時期	備考	材質
本書	芝塚２号墳	古墳石室	丸鞆	2.8	2.7	5.5	奈良末～平安初頭	潜り孔２孔一対３か(２組残存)	石英安山岩質溶結凝灰岩
			丸鞆	4.15	2.8	6		潜り孔２孔一対３	
1	長原遺跡	平安～中世の建物関連遺構	丸鞆	4.3	2.8	0.8	平安前期	潜り穴２孔一対３	頁岩
			銙尾	5.75	4.2	0.65	平安前期	潜り穴２孔一対３	砂岩
2	太井遺跡	包含層	丸鞆	4.4	2.5		平安前期　９世紀	潜り穴２孔一対３	頁岩
3	大坂城跡	包含層	丸鞆	3.3	2.7		平安前期	潜り穴２孔一対３	
4	土師の里遺跡	墓	丸鞆	3.15	2.88	0.54	奈良末～平安初頭８世紀後葉～９世紀前葉	潜り穴２孔一対３、円形の一辺を切る。	角閃石安山岩質溶結凝灰岩
			丸鞆	3.24	2.85	0.56			
			丸鞆	3.25	2.95	0.60			
			丸鞆	3.15	2.84	0.55			
			丸鞆	3.15	2.86	0.61			
			丸鞆	3.20	2.90	0.55			
			丸鞆	3.15	2.85	0.59			
			巡方	3.75	3.46	0.60		潜り穴２孔一対４	
			巡方	3.75	3.55	0.54		ほぼ正方形	
5	総持寺遺跡	中世溝	巡方	3.65		0.6	平安前期	潜り穴２孔一対４	斑花崗岩
6	丹上遺跡	包含層	巡方	3.7	3.3		平安前期	潜り穴２孔一対４、長方形スカシ	緑色凝灰岩
7	西大路遺跡	包含層	巡方	4.3	4.2		平安前期	潜り穴２孔一対４	
8	池田寺遺跡	包含層	巡方	3.9	3.7		平安前期	潜り穴２孔一対４、表面に漆塗布？	凝灰岩
9	小阪合遺跡	川	巡方	2.8	2.5	0.8	平安前期	表・裏金具・鋲、四隅を鋲留め、長方形スカシ、スカシ付近に漆(烏油腰帯)	銅
10	巨摩遺跡	包含層	銙尾	2	2	0.1～2.5	奈良～平安前期	３か所に鋲足、位階は少初位？	銅
11	船橋遺跡	自然流路	銙尾未成品	2.1	5.9		奈良～平安	３か所に突起、連鋳式(３連以上)	銅
12	志紀遺跡	遺構面直上	丸鞆	2.7	1.7		奈良～平安	潜り穴３孔、長方形スカシ	銅板１板作り
13	萱振遺跡	川	丸鞆	3.9	2.5	1.2	奈良	長方形スカシ	銅

文献
1　『河内平野の動態Ⅷ』　1999　(財)大阪文化財センター
2　『太井遺跡』　1996　大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
3　『大坂城跡Ⅰ』　2002　(財)大阪文化財センター
4　『土師の里遺跡　―土師氏の墓域と集落の調査―』大阪府埋蔵文化財調査報告1998－２　1999　大阪府教育委員会
5　『総持寺遺跡』　1998　(財)大阪府文化財調査研究センター
6　『丹上遺跡』1998　大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
7　『西大路遺跡』1987　(財)大阪府文化財協会
8　『池田寺遺跡Ⅳ』1991　(財)大阪府文化財協会
9　『小阪合遺跡　―都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書―』　2000　(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集
10　『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告―第５次―』　1996
11　『船橋遺跡』　1998　(財)大阪府文化財調査研究センター
12　『志紀遺跡発掘調査概要―府営志紀住宅建替に伴う調査―』　1986　大阪府教育委員会
13　『萱振遺跡』　大阪府文化財調査報告書第39輯　1992　大阪府教育委員会

第16表　列石検出古墳一覧表（弥生墳墓含む）

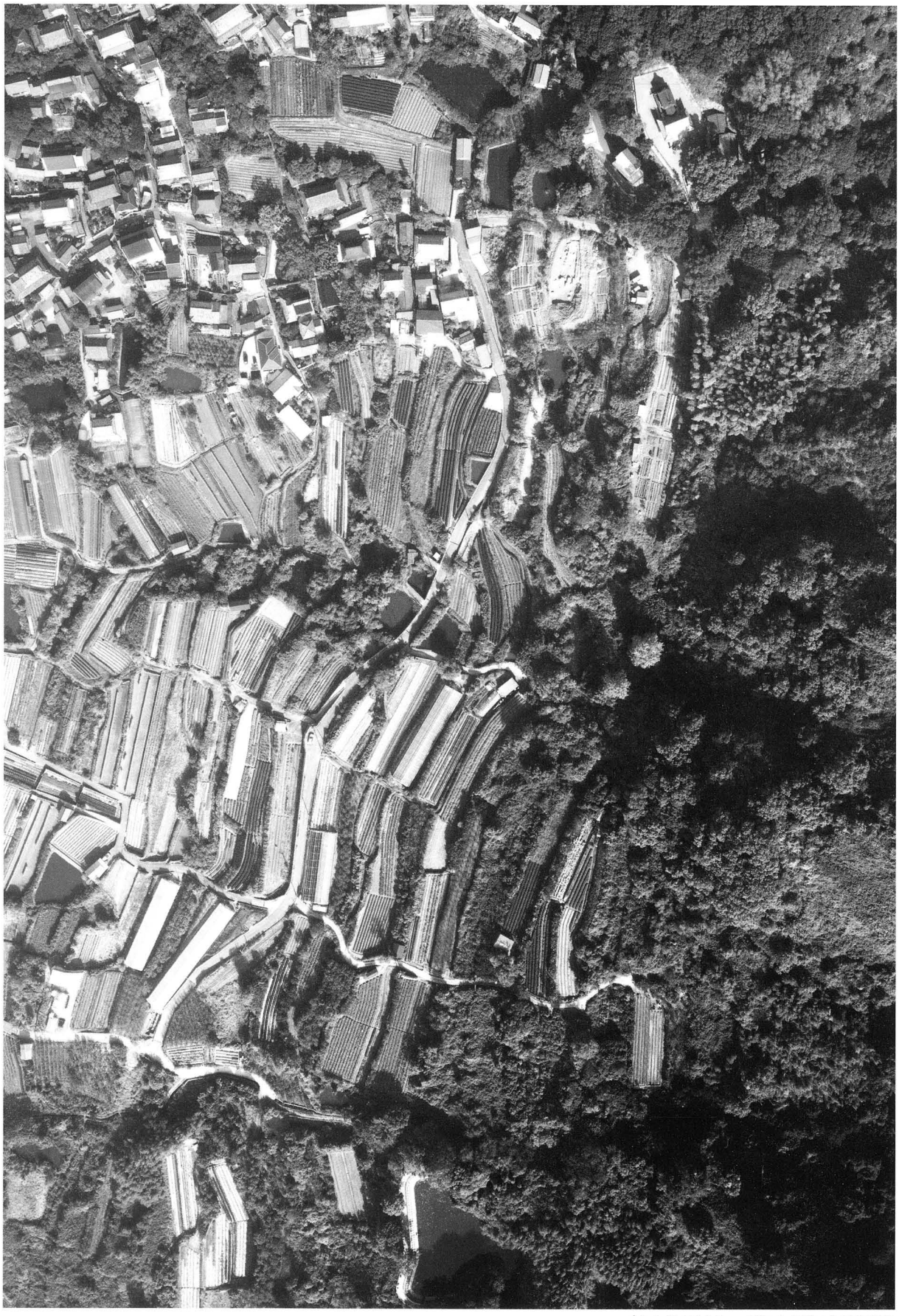
文献	名称	形状	主体部	時期	概要
1	鳥取県順庵原１号墳	四隅突出方形墓		弥生時代後期	墳丘裾から外側10～50cmに棒状列石
2	鳥取県西桂見遺跡	四隅突出形方形墳		弥生時代後半	斜面に貼石、裾に列石
3	兵庫県養久山墳墓群５号墳	中方双方形	方形竪穴石室風	弥生Ｖ様式直後	突出部先端面以外に列石
4	島根県仲仙寺古墳群	四隅突出型方形墳		古墳時代初頭	下段に割り石を貼り、裾部には溝状の列石構造が認められる
5	香川県鶴尾神社４号墳	積石塚前方後円墳		古墳時代前期初頭	前方部先端に塊状列石
6	徳島県萩原墳墓群１号墓	突出部を持つ積石墳		古墳時代前期初頭	地山掘削後列石で墳墓を方形に区画し、岩割板石を小口積み
7	鹿児島県飯盛山古墳	前方後円墳		古式古墳	墳丘裾に高さ１ｍの列石
8	広島県石鎚山古墳群１号墳	円墳	竪穴式石室	古墳時代前期	墳丘裾と中段に花崗岩角礫による列石が巡り、２段築成を思わせる。
9	兵庫県権現山古墳群51号墳	前方後方墳		前期古墳	貼石状列石
10	香川県大川郡丸井古墳			前期古墳	盛土なく列石
11	岡山県備前車塚古墳	前方後方墳		最古の前方後円墳	列石状の葺石が全周する
12	香川県青ノ山古墳群１号墳	横穴式石室		古墳時代後期	基底部に列石
13	徳島県奥谷２号墳	突出部を持つ円墳		４世紀後半以前	基底部に列石
	広島県大迫山古墳	前方後円墳	竪穴式石室	４世紀後半	墳丘裾に２段の列石、斜面には川原石の葺石
14	兵庫県鳥坂古墳群２・３号墳	円墳		４世紀後半	墳丘裾に列石をめぐらす
	岡山県大谷１号墳	切り石造り墳	両袖形横穴石室		上・下段に外護列石、下段上面に板石の敷石、
15	香川県浦山古墳群12号墳	円墳		５～7世紀	墳丘北側下部に円礫の葺石、南側に八の字形の列石
16	奈良県寺口忍海古墳群	大半が円墳		５世紀末～６世紀代	規模の大きな古墳は円筒埴輪と外護列石がめぐる
17	新潟県水科古墳群		横穴式石室	６世紀代	一部の墳丘裾に外護列石
18	山口県穴観音古墳	方墳		６世紀末～７世紀初頭	墳丘は４段階の築成工程があり、工程ごとに内護列石を囲繞
19	広島県迫山１号墳		片袖式横穴式石室	６世紀末	石室前面に列石
20	兵庫県沢の浦古墳群			６世紀末～７世紀初頭	外護列石
21	兵庫県箱塚古墳群４号墳	円墳	横穴式石室	６世紀後半	墳丘裾に外護列石
22	佐賀県潮見古墳	円墳	横穴式石室	６世紀後半	屍床を構成する列石の両端付近に方柱状の石を立てる。玄室と羨道間、羨道中央に仕切り石
23	三重県波敷野古墳群１号墳	方墳		６世紀末～７世紀	裾部に列石を立てるものが半数、１号墳は４辺の裾に２段積みの外護列石をめぐらせ、石室開口部にとりつく
24	新潟県真野古墳群大須1号墳			６世紀末～７世紀	墳丘裾に外護列石状の配石
25	鳥取県石州府古墳群６号墳	方墳		６世紀末～７世紀後半	２段の外護列石
26	大阪府堂山古墳群５号墳	円墳		６～７世紀	外護列石
27	鳥取県晩田31号墳		石棺式石室	7世紀代	２～３段の外護列石
28	兵庫県箕谷古墳群		横穴式石室	７世紀初頭～	一部に外区列石
29	大阪府墓尾古墳群３号墳	方墳		７世紀前半	３段築成、上・中段は石室の形にあわせて長方形で、周囲に列石を配する
30	熊本県仮又古墳	不正円形		７世紀前半	東側と北側に３段の列石が巡る
31	三重県横尾古墳群	方墳（２基）		７世紀中頃	墳丘裾に外護列石が巡る。
32	兵庫県若狭野古墳	方墳		７世紀中頃	３段築成、中段・上段に外護列石
33	奈良県舞谷古墳群２・４号墓	長方形墳	磚槨式石室	７世紀中葉	外護列石
34	福岡県柿原古墳群		主に横穴式石室	７～８世紀	羨道側壁両端より左右に石列が延び、石室後方を囲って墳丘内を一巡する石積みの内護列石
35	兵庫県中山荘園古墳	多角形墳		古墳時代終末期	六角形に外護列石が巡る
36	石川県河田山古墳群12号墳			古墳時代終末期	墳丘裾野一部には外護列石
37	山形県安久津古墳群	円墳	横穴式石室	８世紀初頭～前半	封土流出防止用の外護列石、羨道部入り口に階段状の祭場的施設

文献

1　門脇俊彦「庵原１号墳について」島根県文化財報告７　1971　島根県教育委員会
2　『西桂見遺跡』1981　鳥取市教育委員会
3　近藤義郎ほか『養久山墳墓群』1985 揖保川町教育委員会
4　『史跡仲仙寺古墳群』1977　安来市教育委員会
5　渡辺明夫・藩井雄三『鶴尾神社４号墳調査報告書』1983　高松市歴史民俗協会
6　『荻原墳墓群』1983 徳島県教育委員会
7　上村俊雄「飯盛山古墳とその周辺」九州考古学 39・40　1970
8　『石鎚山古墳群』1981　広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財センター
9　『兵庫県史』１　1974　『竜野市史』１　1978
10　『川上・丸井古墳発掘調査概報』1983　長尾町
11　鎌木義昌『岡山市史』古代編　1962・鎌木義昌・近藤義郎「備前車塚古墳」『考古学研究』14－４　1968
12　新編香川叢書考古編』1983　香川県教育委員会
13　山典「徳島県奥谷２号墳」日本考古学年報 33　1983
14　市村高槻『鳥坂古墳群』1984　竜野市教育委員会
15　『浦山古墳群』1974　浦山古墳発掘調査団　『新編香川叢書考古編』1983 香川県教育委員会
16　千賀　久・古村幾温「奈良県新庄町寺口忍海古墳群の諸問題」日本考古学協会第 53 回総会研究発表要旨　1987
17　金子拓男ほか『水科古墳群発掘調査報告書』1979　三和村教育委員会『新潟県史』資料編・原始古代１　1986　同通史編１　1986
18　むつみ村教育委員会「穴観音古墳」むつみ村埋蔵文化財調査報告１　1985
19　『迫山第１号古墳発掘調査概報』神辺町埋蔵文化財調査報告３　1983・同４　1984　神辺町教育委員会
20　『沢の浦古墳群』1987　兵庫県教育委員会
21　市橋重喜「箱塚古墳群」昭和 60 年度兵庫県埋蔵文化財調査年報　1988
22　木下之治『武雄市潮見古墳』1975　武雄市教育委員会
23　皇学館大学考古学研究会「敷野古墳群測量調査報告」三重考古３　1980
24　中川成夫・本間嘉晴ほか「考古学から見た佐渡」佐渡　1964　九学会連合佐渡調査委員会　平凡社
25　『上福万遺跡』１　1985　鳥取県教育文化財団
26　田代克巳『堂山古墳群発掘調査概要』1973　大阪府教育委員会
27　『淀江町史』1985　淀江町
28　谷本進『箕谷古墳群』1987　八鹿町教育委員会
29　森浩一・上田辞「大阪府枚方市石切町墓尾古墳群の調査」古代学研究 23　1960　原田修『墓尾古墳』埋蔵文化財包蔵地調査概報８　1971　東大阪市教育委員会
30　浜田耕作・梅原末治『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学考古学研究報告３　1919
31　『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財概報』３　1987　三重県教育委員会
32　『若狭野古墳』1988　相生市史編纂室
33　『飛鳥磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告書 39　1982・舞谷第３号墳発掘調査概報」奈良県遺跡調査概報 1980 年度　1982　橿原考古学研究所
34　新原正典ほか「柿原古墳群Ⅰ」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告４　1984・中間研志ほか「柿原古墳群Ⅱ」同６・1986　小池史哲ほか「柿原古墳群Ⅲ」同 12　1987　福岡県教育委員会
35　『中山荘園古墳』1983　宝塚市教育委員会
36　『小松市河田山古墳群の経過と問題点』その１～４　石川考古 173・176～178　1978　石川考古学研究会
37　佐々木洋治・佐藤庄一『安久津古墳群・北目１号墳・鳥居町９号墳発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 95　1985　山形県教育委員会

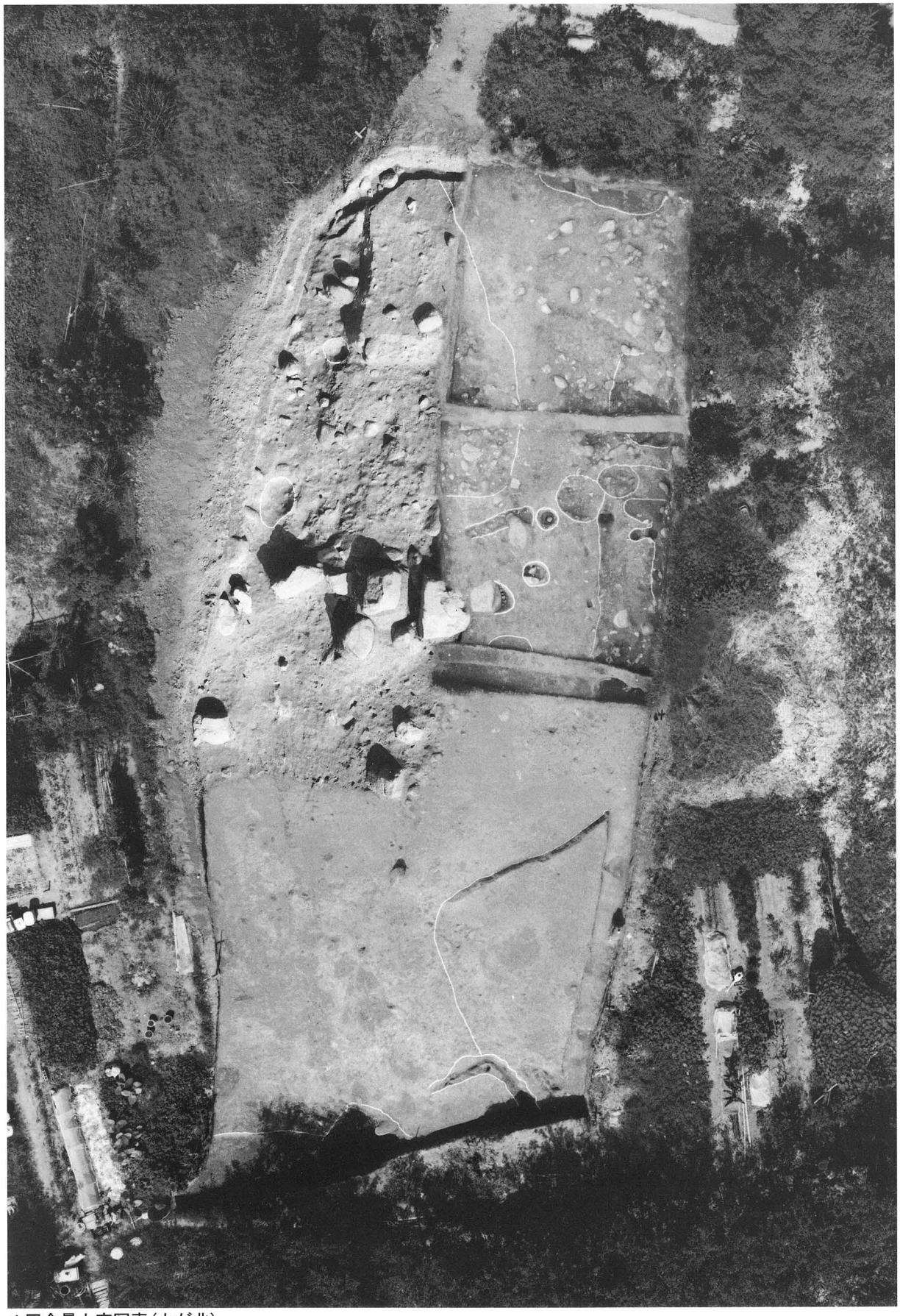
図　　版

図版一　1～10区



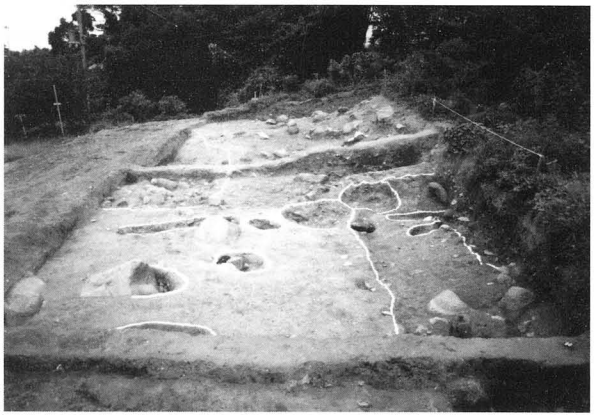
神立地区（１～10区）周辺上空写真

図版二　1区



1区全景上空写真（上が北）

図版三　1区

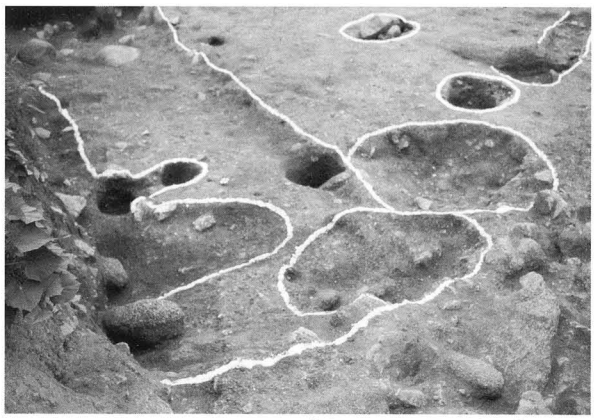


1区Ⅰ全景（南から）

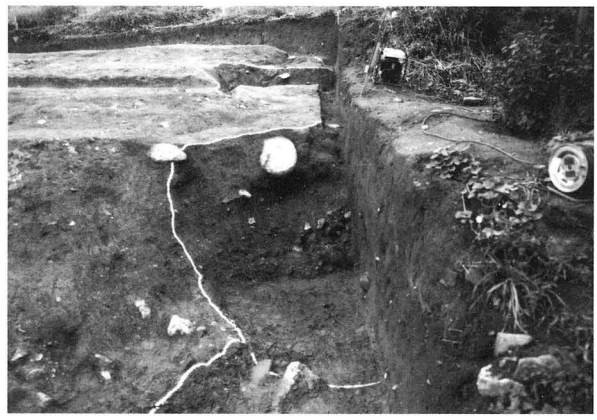
1区Ⅱ全景（北から）

1区Ⅰ全景（北から）

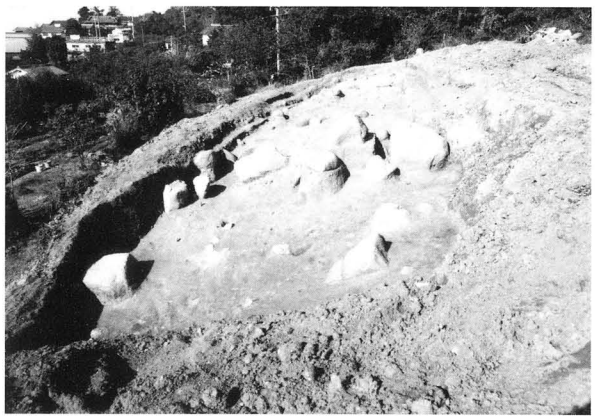
1区Ⅱ南部（東から）



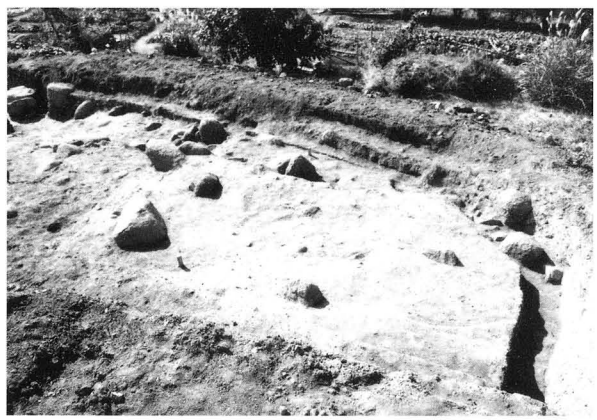
1区Ⅰ落込み0102周辺（北東から）



1区Ⅱ井戸0101周辺（西から）

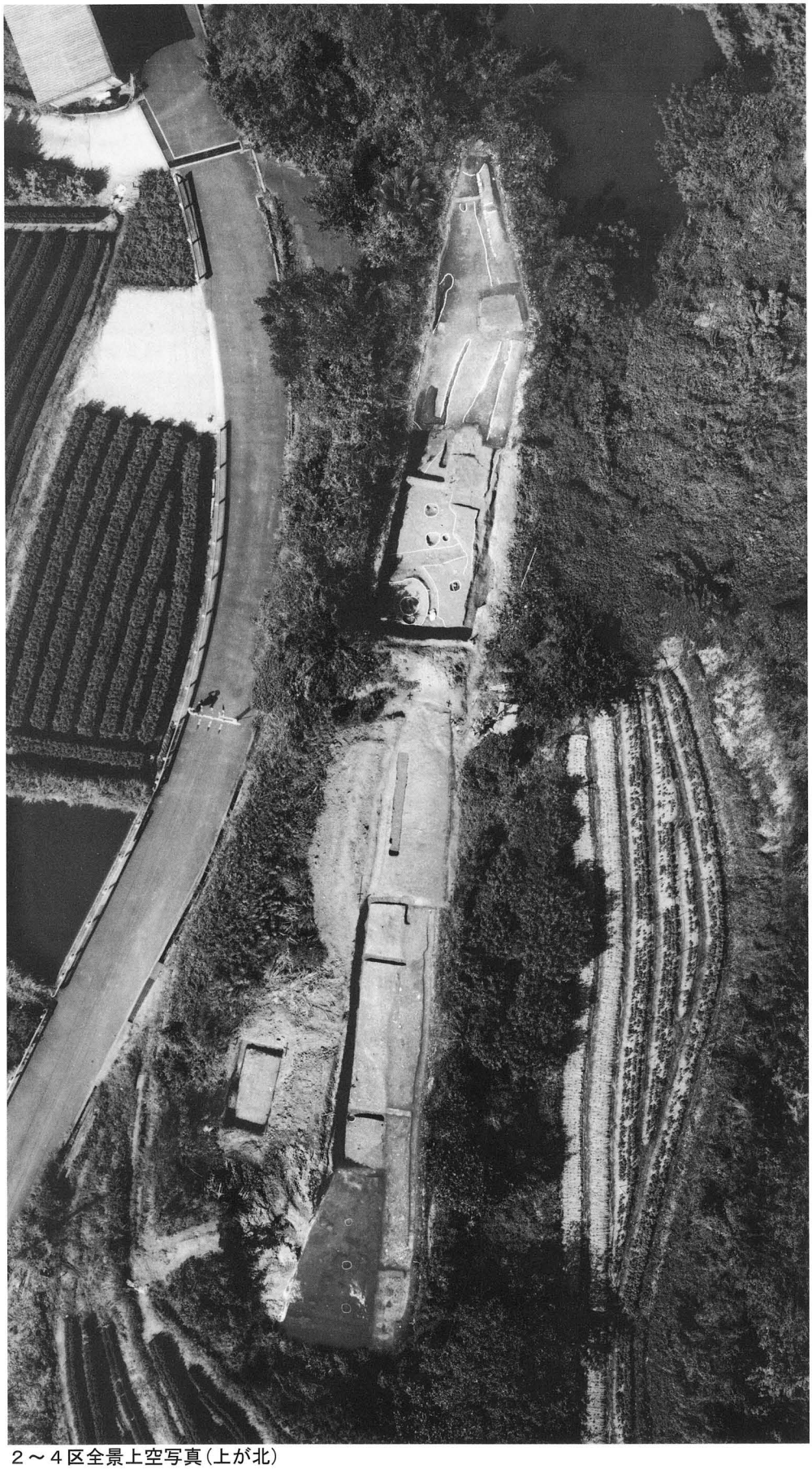


1区Ⅲ全景（南から）



1区Ⅲ全景（東から）

図版四　2～4区

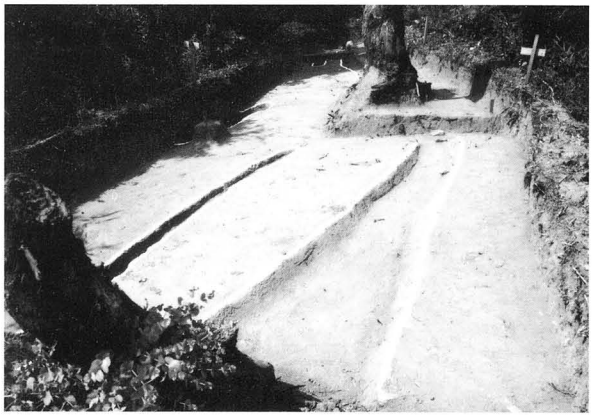


2～4区全景上空写真（上が北）

図版五　2～4区

2区Ⅰ全景（南から）

3区Ⅰ　調査風景（南から）



2区Ⅱ全景（南東から）

3区Ⅱ全景（北から）

2区Ⅲ（北東から）

3区Ⅲ全景（南から）

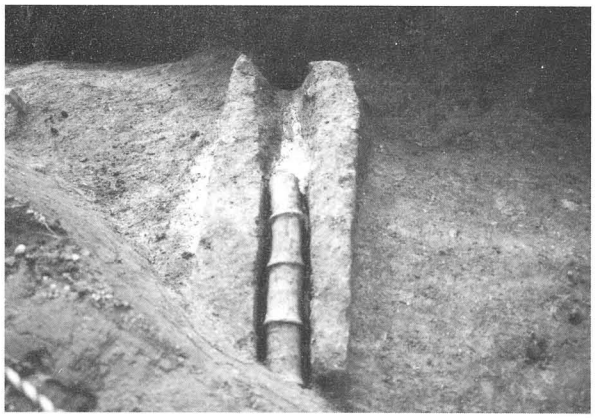
3区Ⅳ全景（北から）

4区全景（南から）

図版六　6・7区

6～7区全景上空写真（上が北）

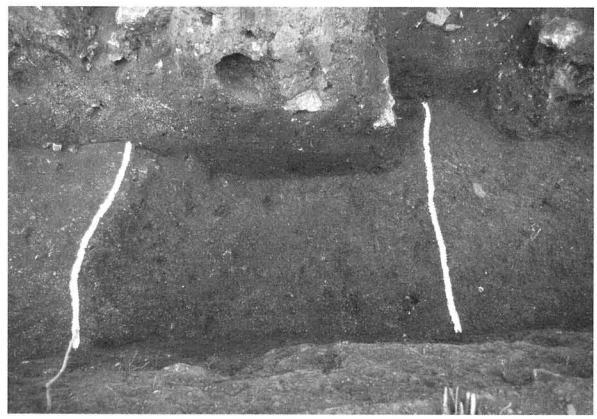
図版七　5～9区



5区１面溝5101（西から）

5区第２面全景（南から）

6区全景（南から）



6区溝0601　芝塚古墳周溝？（北西から）

7区全景（南から）

7区北端　石の集積（北から）

8区全景（南から）

9区全景（北東から）

図版八　10区

10区上空写真１　芝塚２号墳遺物出土時（上が北）

10区上空写真２　芝塚２号墳床面検出時（上が北）

10区上空写真３　芝塚２号墳側石掘形検出時（上が北）

芝塚２号墳石室（北から）

同　床面（北から）

同　完掘（北から）

同　東側壁掘形検出状況（北から）

羨道内遺物出土状況（東から）

同上　耳環出土状況（東から）

玄室内遺物出土状況（北から）

羨道南部床面（東から）

羨道中央部床面（東から）

羨道北部・玄室床面（東から）

図版一四　11～22区

11～22区周辺上空写真（上が北）

図版一五　11～13区

11区全景（南から）

12区全景（南から）

13区全景（北から）

図版一六　14・15区

14区上空写真（上が北）

14区　炭焼窯検出状況（上が北）

同（南東から）

同　内部煙出し（南から）

15区全景（北から）

図版一七　16区

16区拡張前全景（南から）

同（北から）

同　大窪29号墳全景（北から）

16区　大窪29号墳全景（南から）

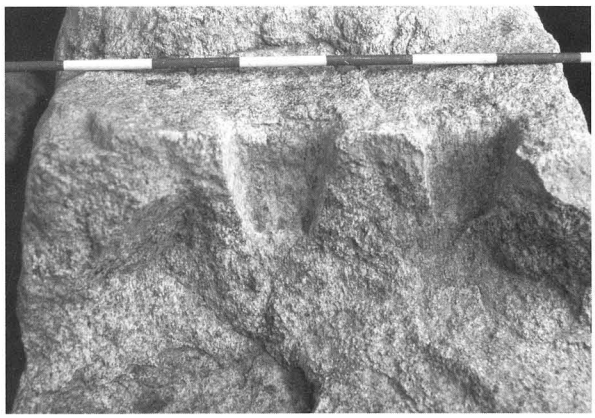
大窪29号墳羨道南部（西から）

同北部（西から）

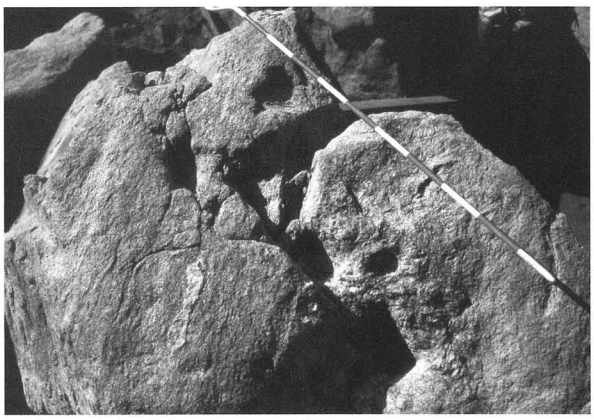
同玄室（西から）

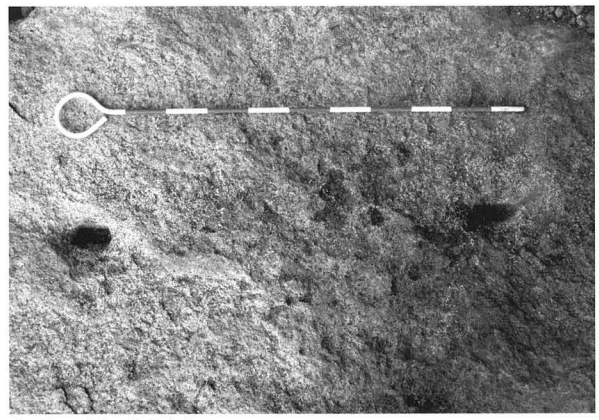
16区拡張前東側壁検出状況（南から）

16区拡張時西側壁検出状況（東から）


矢穴１（奥壁）

矢穴２（東側壁奥から１石め）


矢穴３（東側壁奥から２石め）

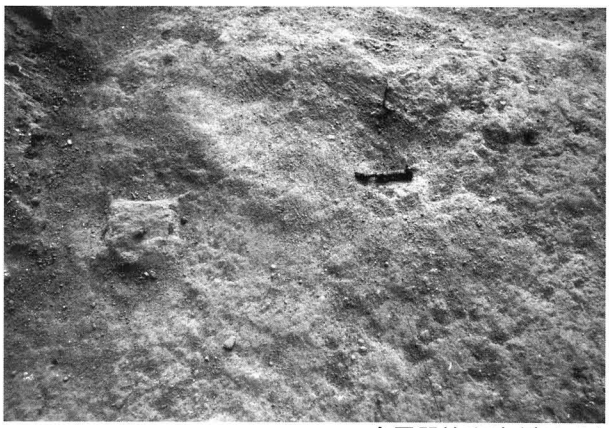

矢穴４（奥壁北側）

現地説明会１

現地説明会２

18区全景（北から）

同　全景（南から）



金属器検出時（南から）

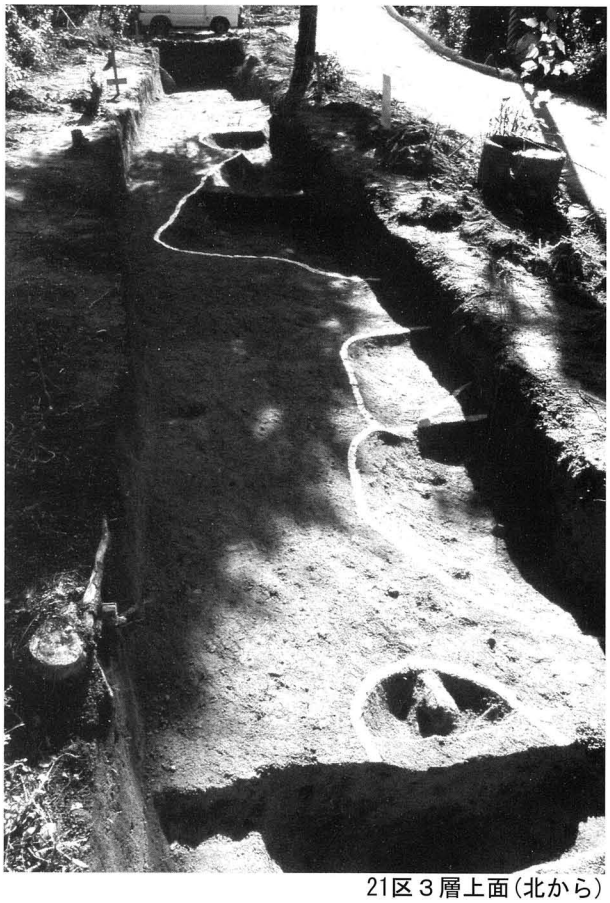
同　出土状況（西から）

19区全景（南から）

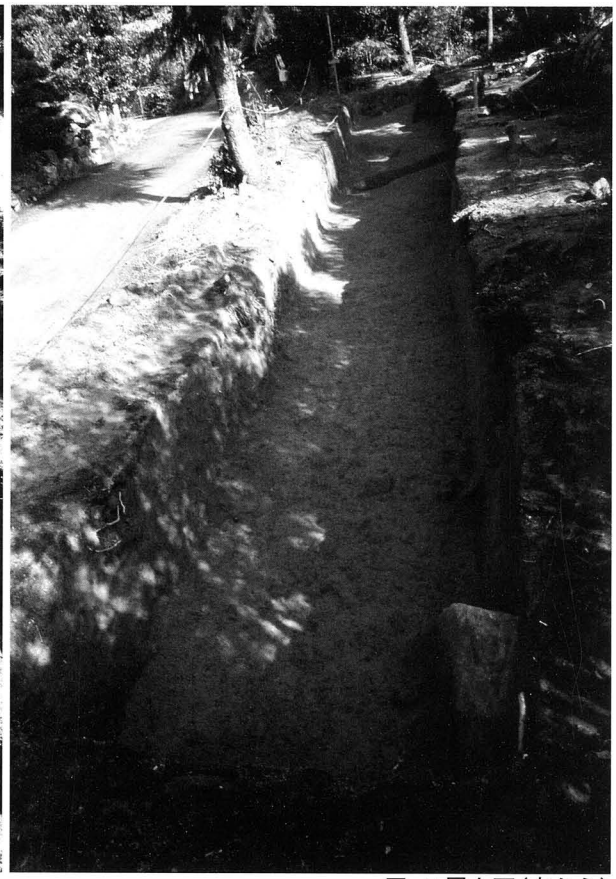
同　北東隅墳丘状の高まり（南西から）

17区全景（南から）

20区全景（北から）



21区３層上面（北から）



同　５層上面（南から）

22区３層上面（北から）

同　５層上面（南から）

図版二四　23～42区

23～42区周辺上空写真（上が北）

図版二五　23・24区

23区近現代の水溜め（西から）

同　近世～現代の井戸・水溜め・落込み（北から）

24区全景（東から）

同　全景（西から）

23区上空写真（左が北）

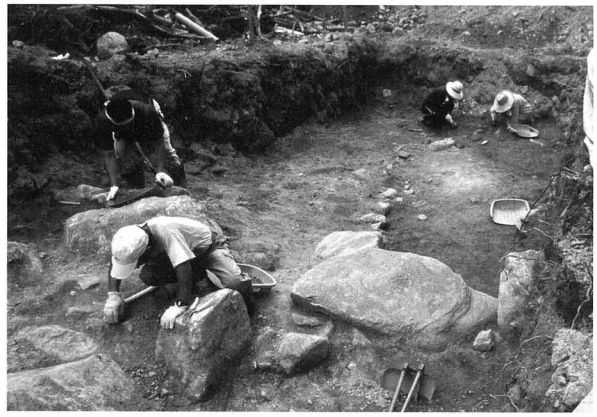
図版二六　23区

23区東端
服部川132号墳東周溝・墳丘
（東から）

同　東部
同　墳丘（西から）

同　中央部
同　西周溝（西から）

25区　服部川132号墳奥壁検出時（北から）



同　平面プラン検出（東から）

同　西周溝付近（南から）

同　玄門付近盗掘坑掘削（西から）

同　拡張前全景（西から）

25区　北部拡張後服部川132号墳北側壁検出時（西から）

同　平面実測（西から）

同　西部拡張後服部川132号墳西周溝検出状況（東から）

同　西周溝（南から）

同　拡張後全景（西から）

26区　調査前の状況（南から）

同　北半調査風景（南から）

同　南半方形土坑掘削（北から）

同　南半方形土坑完掘（西から）

同　北半全景（南から）

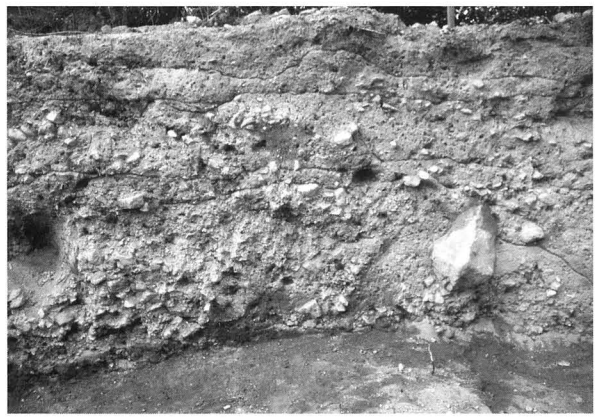
同　南半全景（北から）

図版三〇　26・27区

26区　北半東壁

同　南半東壁

27区　西壁１



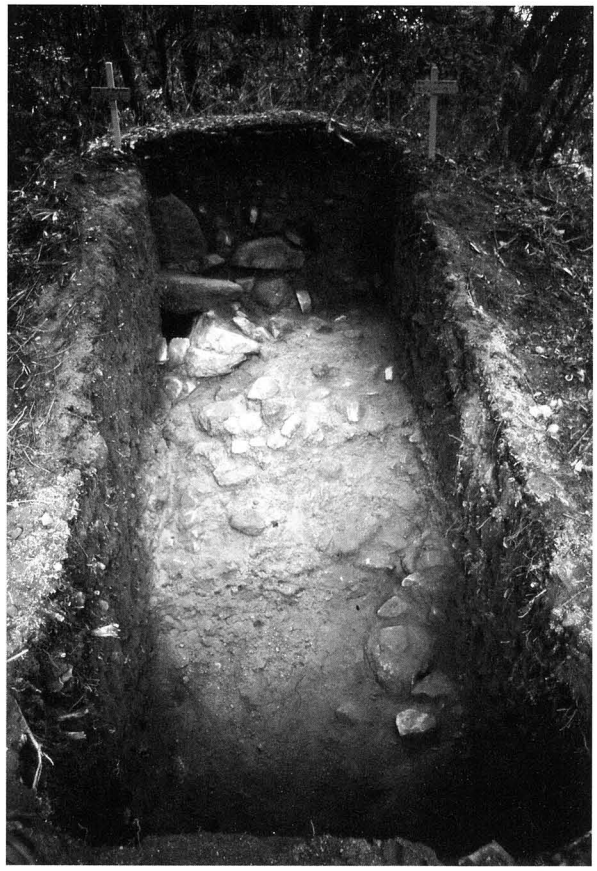
同　西壁２

27区　全景（北東から）

服部川12号・22号墳(28～38区)周辺(南から)　向って左(西)の森が22号墳

22号墳(南東から)

同上　開口部(南から)



28区　服部川22号墳墳丘内石列検出状況(東から)

図版三一　28区

28区
服部川22号墳墳丘細部
石室外側(南から)

同　墳丘斜面(南から)

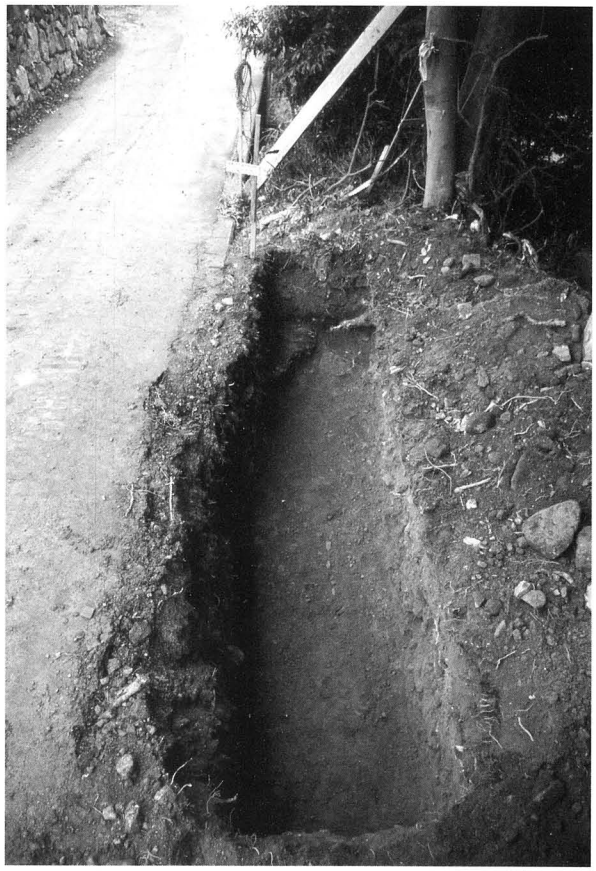
同　裾部(南から)

28区　人力掘削(東から)

同　平面実測(西から)

29区　人力掘削(南から)

30区　機械掘削(北から)



29区　全景(南から)

30区　全景(北から)

服部川12号墳（南から）

31区　人力掘削（北から）

同上　開口部（南から）

同上　全景（南から）

32区　全景　12号墳（墳頂ー東から）

同左　全景　12号墳（裾ー西から）

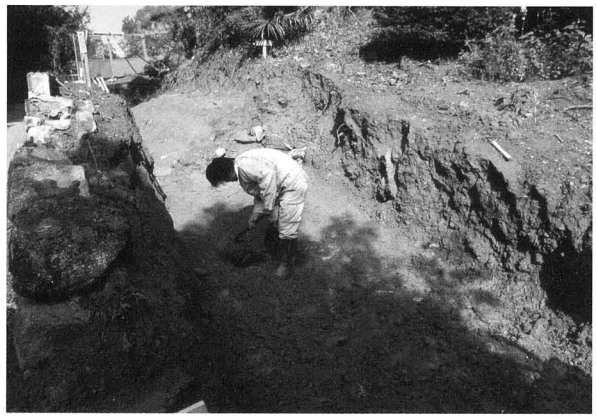
33区 壁面実測(南から)

33区 全景(南東から)

34区 人力掘削(北から)

34区 全景(南から)

35区 北部人力掘削(南から)



同 南部人力掘削(南から)

同 北部石列検出時(北東から)

同 石列精査(北西から)

図版三六　35区

35区　拡張前北部全景（北から）

同　南部（南から）

図版三七　35区

35区 拡張後北部全景（北から）

同 南部全景（南から）

図版三八　35区

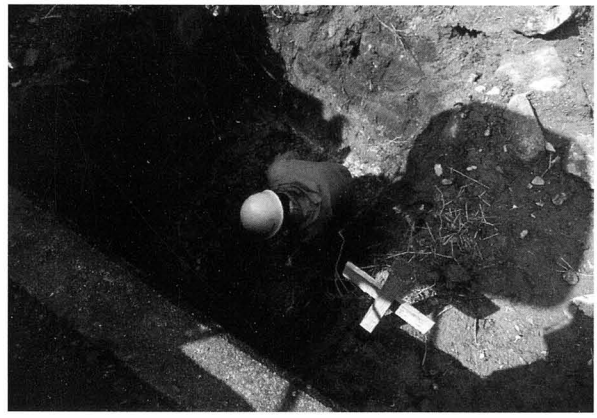
35区 北部石列検出状況
（南西から）

同（北から）

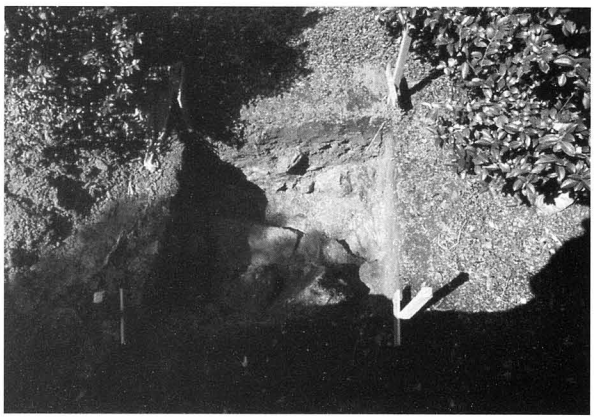
同 南部石列（南から）

図版三九　36～39区

36区　人力掘削（南から）



37区　人力掘削（東から）



同上　全景（南から）

同上　全景（南から）

38区　全景（南から）

39区　全景（東から）

図版四〇　39～42区

39区　人力掘削（東から）

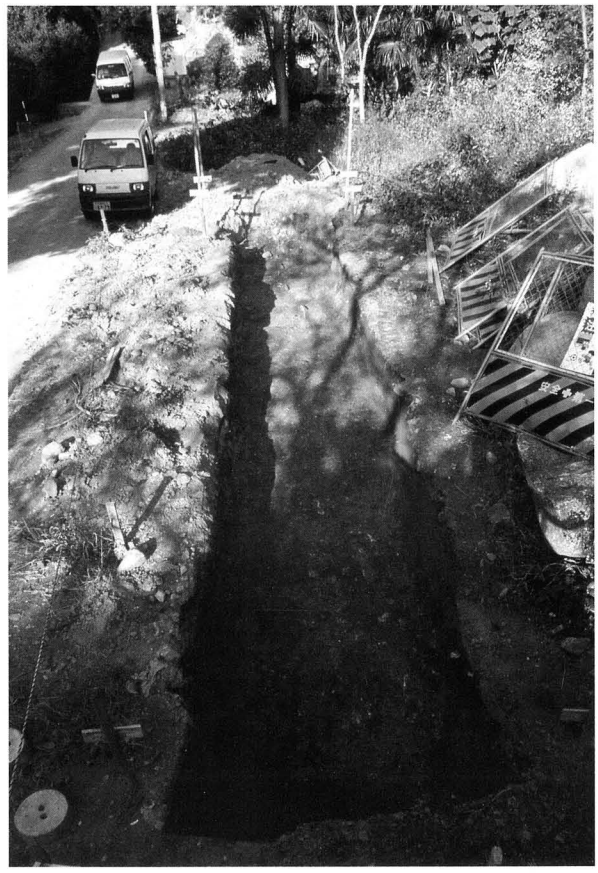
40区　人力掘削（西から）

39区　平面実測（東から）

40区　全景（南から）

41区　人力掘削（南から）

41区　全景（東から）

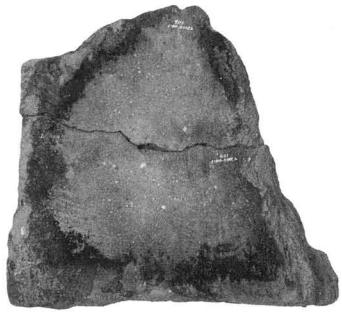


42区　全景（南から）

53

52

102

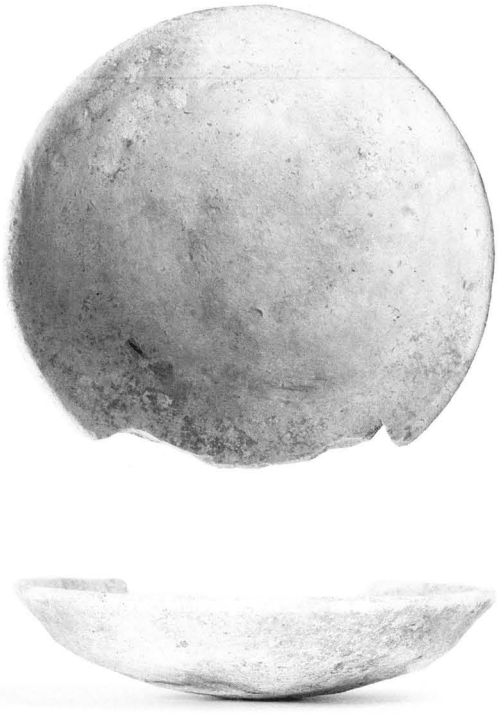


100

101

1区 土坑0111(52・53)、瓦溜り(100～102) 出土遺物

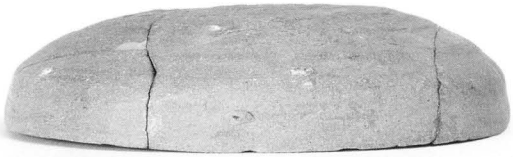
図版四二



138

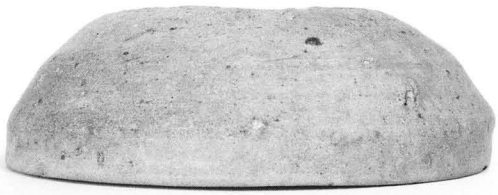
146

181

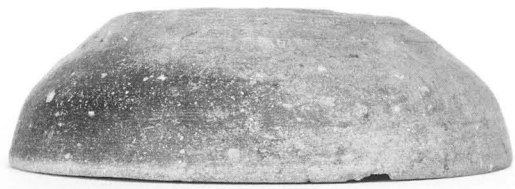


217

218



219

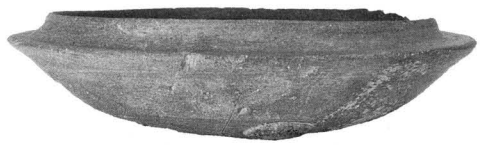


220

1区 溝0101(138)、方形盛土(146)、整地層(181)、10区芝塚２号墳(217～220)出土遺物

213

215

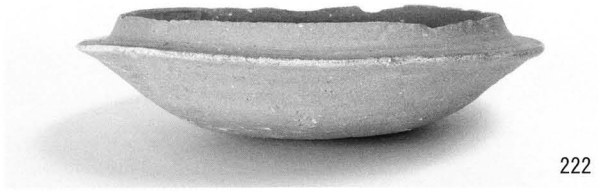


214

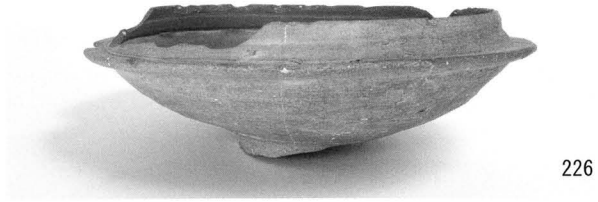
216

10区芝塚２号墳(213～216)出土遺物

221

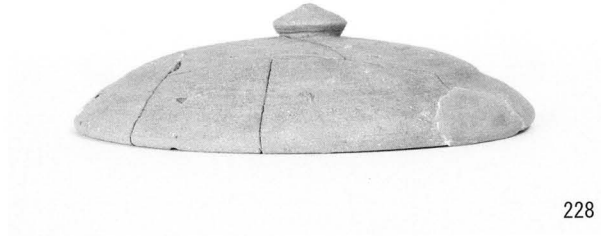

222

224


226

225

227


228

230

229

10区芝塚２号墳(221・222・224～229)出土遺物

231

234

232

235

236

237

10区芝塚２号墳(231・232・234～237)出土遺物

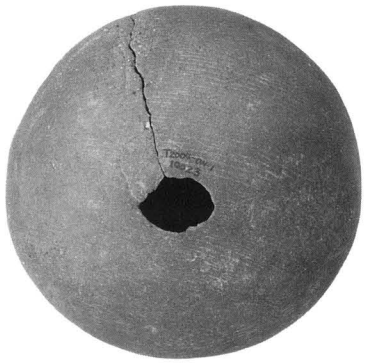
図版四六

238

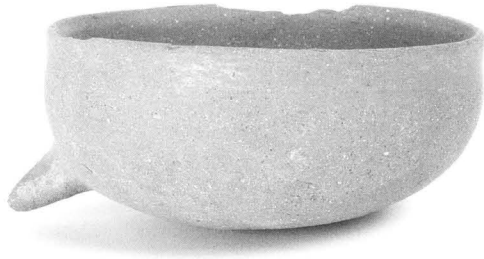
244

246

247



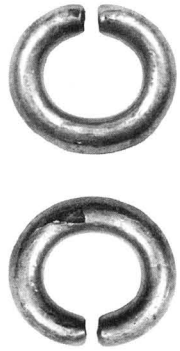
245



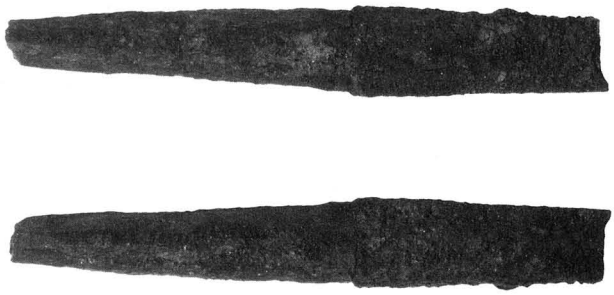
249

10区芝塚２号墳(238・244～247・249)出土遺物

259



260



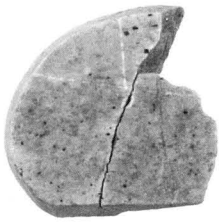
258

255

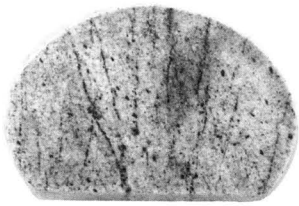
256

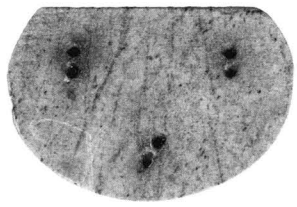
257

261



262



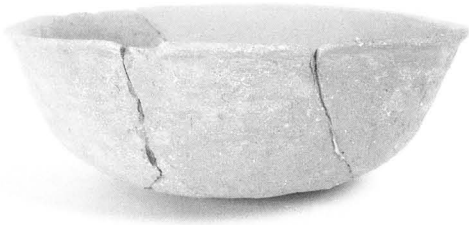


263

10区芝塚２号墳(255～263)出土遺物

図版四八

250


251

252

253

268

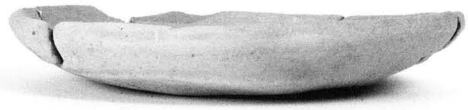
272

276

277

278

279

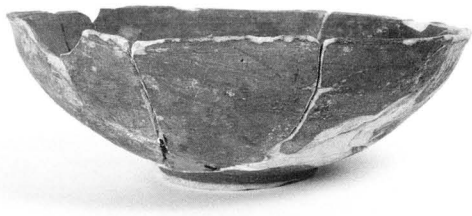

283

283

285

286

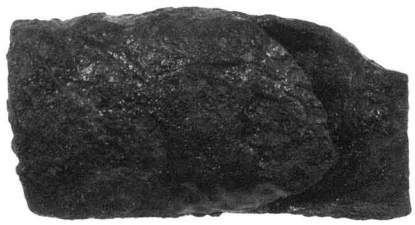
10区芝塚２号墳(250～253・268・272・276～279・282・283・285・286)出土遺物



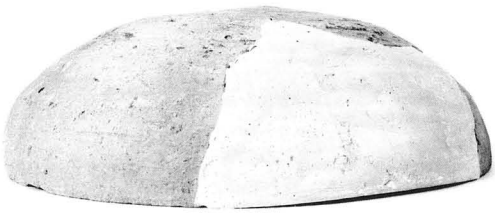
287

288

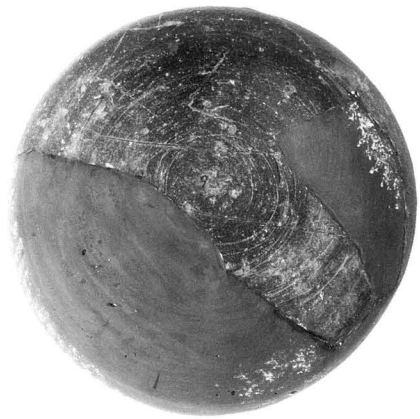
290

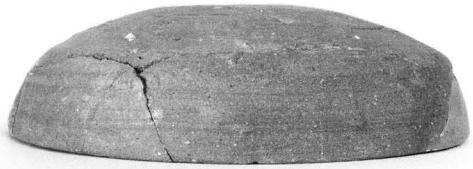


298

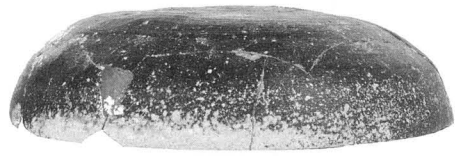


314

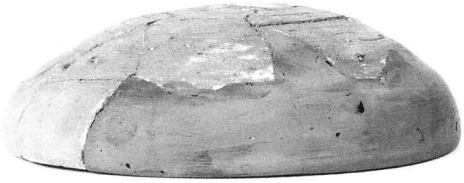




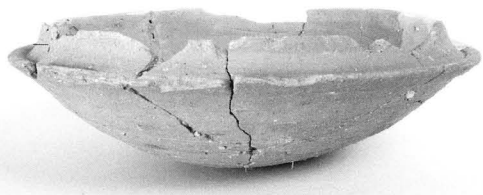
315



316



317



320

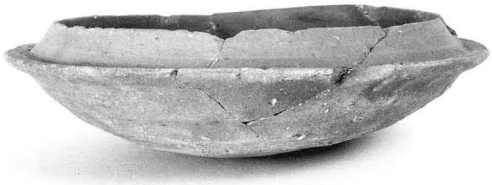
10区芝塚２号墳(287～290)、11区(298)、16区大窪29号墳(314～317・320)出土遺物

図版五〇

321

322

323



324

325

326

327

331. 332

334

335

16区大窪29号墳(321～327・332・334・335)出土遺物

16区大窪29号墳(337～351)出土遺物

図版五二

16区大窪29号墳(352～357・359～363・365～367・369～375・377～380・382～384)出土遺物

385

386

389

387

390

391

392

393

395

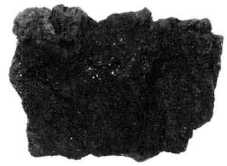
396

405

406

407

410


400

397

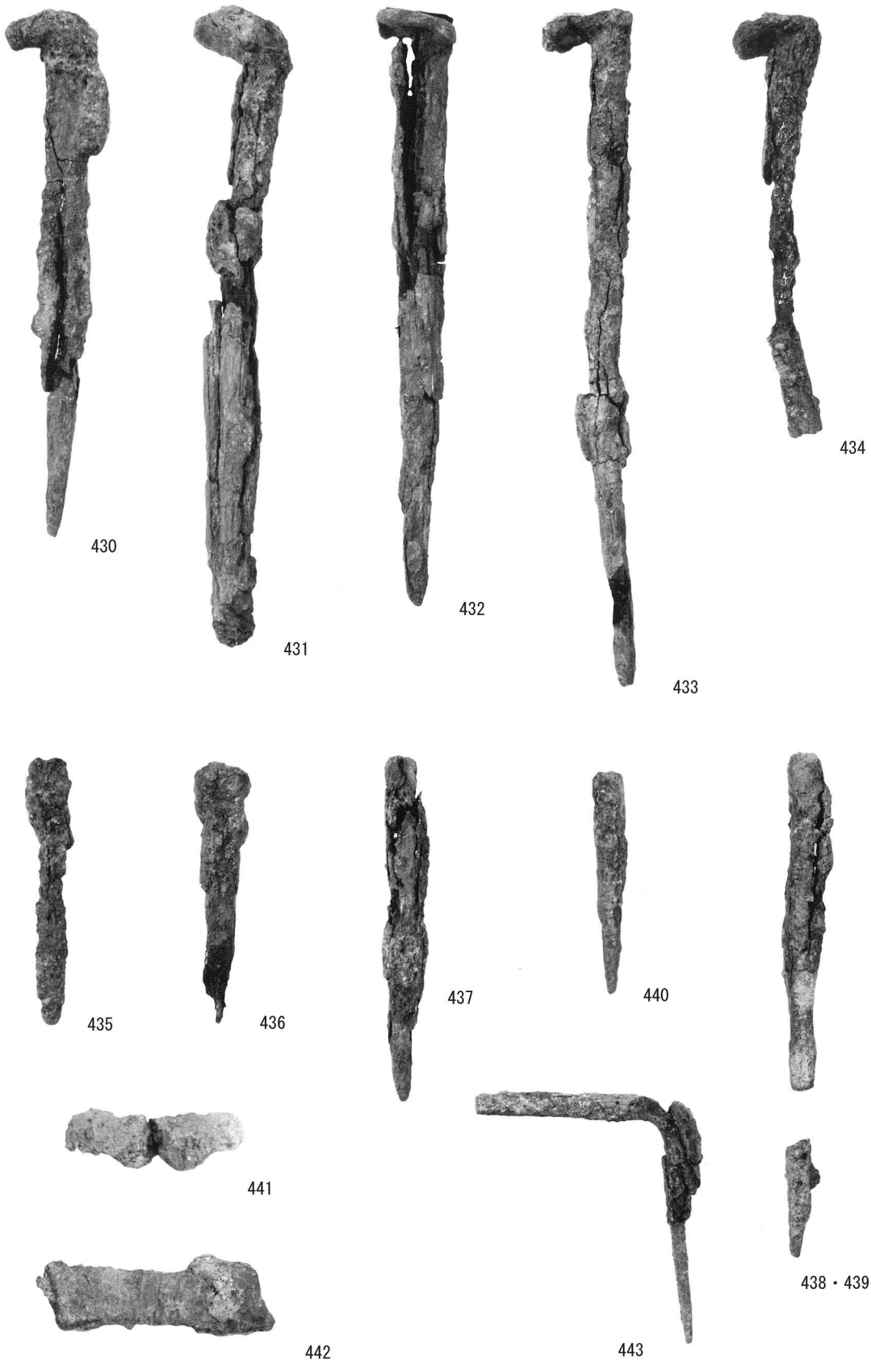
398

403

404

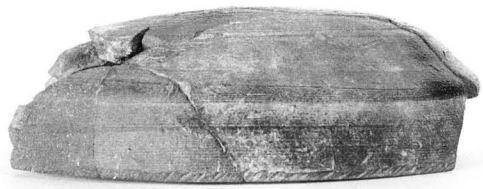
16区大窪29号墳(385～387・389～398・400・403・404・410～413)出土遺物

図版五四

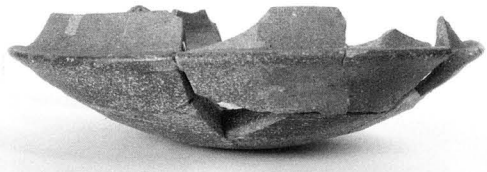


18区(430～443)出土遺物

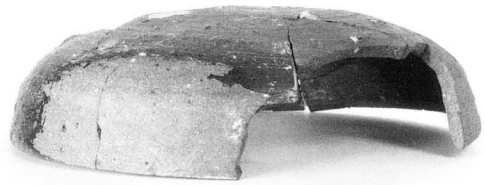
449

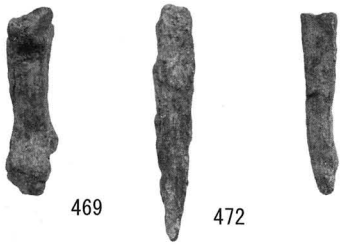

453

451


455

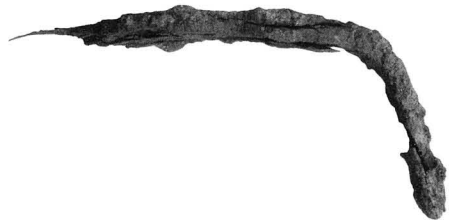
452

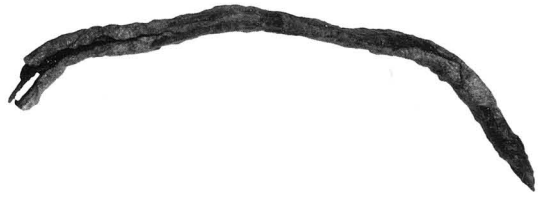

463


469 472 473

468

470 471


475


474

25区服部川132号墳(449・451～453・455・463・468～475)出土遺物

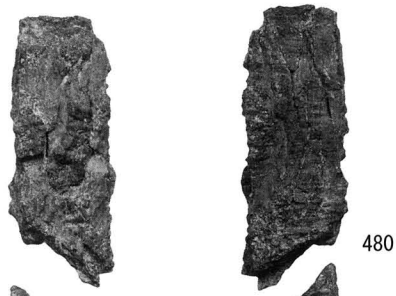
図版五六

476

477

478

479



480

481

483

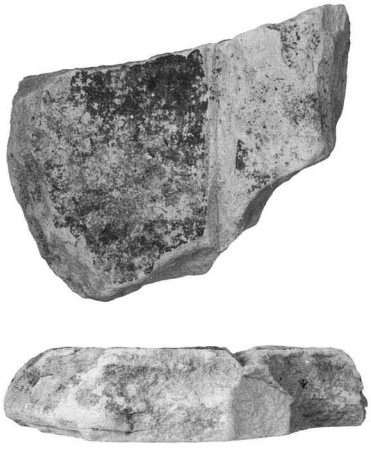
482

25区服部川132号墳(476～481)、27区(482・483)出土遺物

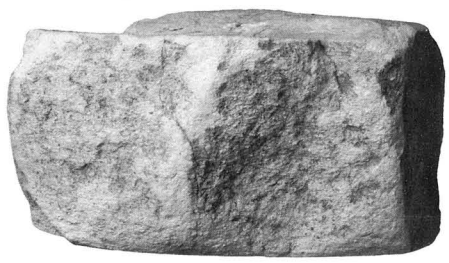
497

500

498



499

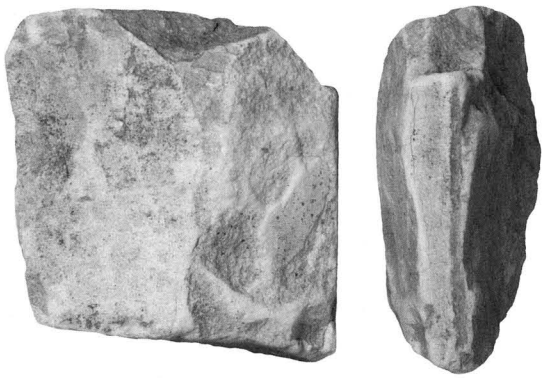


501

16区大窪29号墳石棺材－1

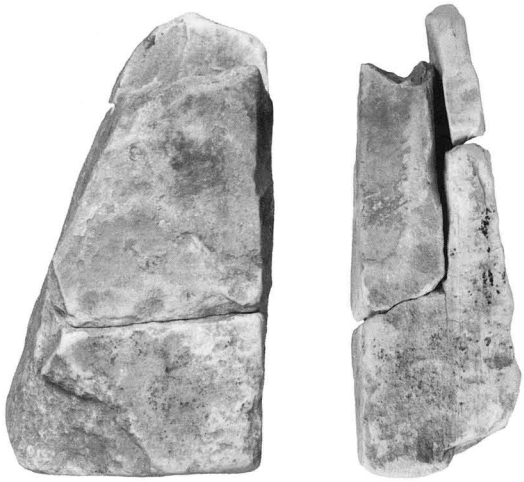
図版五八

502



503

504



505

16区大窪29号墳石棺材－２

報告書抄録

ふりがな	たかやすこふんぐん・おんこうじあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高安古墳群・薗光寺跡発掘調査報告書
副書名	府営農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業(八尾地区)に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	124
編著者名	成海佳子
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－2　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2009年3月27日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
高安古墳群　薗光寺跡(たかやすこふんぐん　おんこうじあと)(第1次調査)	大阪府八尾市(おおさかふやおし)神立(こうだち)・山畑(やまたけ)・大窪(おおくぼ)・服部川(はっとりがわ)	27212	12 59	34度 38分 31秒	135度 39分 07秒	20040628 ～ 20050325	約960	農道整備
高安古墳群(たかやすこふんぐん)(第2次調査)			12	34度 39分 07秒	135度 39分 00秒	20050725 ～ 20060131	約389	
高安古墳群(たかやすこふんぐん)(第5次調査)				34度 37分 22秒	135度 38分 56秒	20051227 ～ 20060324	約161	
高安古墳群(たかやすこふんぐん)(第6次調査)				34度 37分 44秒	135度 38分 56秒	20060711 ～ 20070228	約410	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高安古墳群　薗光寺跡(第1次調査)	寺跡	鎌倉～室町時代	井戸・方形盛土・溝	瓦器・擂鉢・瓦	
	古墳	古墳後期～末期	横穴式石室 芝塚古墳の周溝	須恵器・土師器、耳環・太刀の鐔・刀子・釘・鏃、滑石製紡錘車、石製鈴帯(丸鞆) －	芝塚2号墳
	包含層	縄文早期	－	高山寺土器深鉢	
高安古墳群(第2次調査)	古墳	古墳後期～末期	横穴式石室と裏込めの石列(内護列石)	須恵器・土師器、鏃・鎌・刀子・釘・鏃・火打金・鞘金具等飾り金	大窪29号墳
			古墳痕跡	鞘尻？	
			古墳痕跡	須恵器、釘・鏃	
高安古墳群(第5次調査)	古墳	古墳後期～末期	古墳周溝	－	服部川132号墳
高安古墳群(第6次調査)	古墳	古墳後期～末期	横穴式石室と周溝	土師器・須恵器、耳環・釘・鏃	服部川132号墳
			服部川12号墳(外護列石・内護列石) 服部川22号墳(内護列石・周溝)	－	

要約	3基の新たな古墳(芝塚2号墳・大窪29号墳・服部川132号分)を検出したほか、既存の古墳(芝塚古墳・服部川12号墳・同22号墳)でも、墳丘周辺の状況を明らかにすることができた。 ・大窪29号墳では石室外側の石列(内護列石)を検出した。 ・服部川132号墳については周溝の一部を検出することができ、尾根に伴う谷を利用して、周溝がめぐらされていることを確認した。 ・芝塚古墳の周溝が確認できた。 ・服部川12号墳では、墳丘裾を取り巻く石列(外護列石)と墳丘内部の段築状の石列(内護列石)を検出した。 ・服部川22号墳でも段築状の石列(内護列石)および周溝の存在を確認した。

（財）八尾市文化財調査研究会報告124

高安古墳群　薗光寺跡発掘調査報告書

－府営農林漁業揮発油税財源身替
農道整備事業（八尾地区）に伴う発掘調査－

発　行　　平成21年３月
編　集　　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　　㈱近畿印刷センター
表　紙　　レザック66　　＜260Kg＞
本　文　　ニューエイジ　＜ 70Kg＞
図　版　　マットアート　＜110Kg＞

029